魔法少女リリカルなのはStrikerS〜Till The End Of Time〜

アシェーリト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～Ｔｉｌｌ　Ｔｈｅ　Ｅｎｄ　Ｏｆ　Ｔｉｍｅ～

【Ｎコード】
Ｎ３７８４Ｊ

【作者名】
アシェーリト

【あらすじ】
仮想空間ゲーム《エターナルスフィア》
其処には確かに惑星（ほし）が、人々が生きている。
その世界を消滅させようとする創造主たち《神》に挑む青年と仲間たち。
長い旅を終え、神へと至り、ついに戦いに勝利し世界を救った。
しかし、青年の旅は終わらない。新たな旅の目的地は嘗ての世界に

似て否なる、魔法が存在する世界だった。

プロローグ～旅の終わり　そして新たなる星の海へ～（前書き）

僅かですが、修正を加えました。ロキシ博士は生きている設定にしました。
今後、なのはの世界にＳＯ３を絡ませるためには、必要だろうと判断したためです。
また、ファーウェルの色を少し変更しました。

はじめまして。アシェーリトと言います。今回、始めて小説を書くので、誤字等が目立つと思いますがご容赦下さい。

この作品はなのはＳｔｒｉｋｅｒＳとスターオーシャン３ＤＣとのクロス作品です。

両原作好きな方は気分を害するかもしれません。それでも読んでやるよという方はどうぞ。

指摘等があったら是非お願いします！

それではどうぞ。

プロローグ～旅の終わり　そして新たなる星の海へ～

広大な黒い部屋。そこには、幾つもの惑星（ほし）が映し出されている縦長のモニターのような物があり、部屋の中央には巨大なコンピュータのようなものがあった。
そして星々の輝きとモニターの光が部屋を照らしている。

本来ならそこは《スフィア社》の一部の社員しか入れない空間。
何故なら其処はモニターに映る世界、仮想空間ゲーム《エターナルスフィア》（以降ＥＳ）を管理する為の空間なのだからだ。

しかし、今其処では戦いが行われている。
世界を賭けた《エターナルスフィア》の世界の住人たちと世界を管理する謂わば《神》たる存在との戦いが。

「０と１との集合体ごときが、神である我々に逆らうなど、あってなるものか！！」
スフィア社の社長であるルシファー・ランドベルドは、ＥＳの住人を滅ぼすため、そして新たな世界を創るために目の前のイレギュラーを排除しようとする。

「たとえ神でも命を弄ぶ権利などあるはずがない！」
対するはＥＳの住人、世界を救う為に戦う破壊の特殊紋章遺伝子（ディストラクション）を持つ青年フェイト・ラインゴッド。

彼はルシファーと戦う迄に多くの戦いを経験し、命の尊さを知っている。

そして、その過程でクリフ、ネル、マリア、ソフィアら仲間たちと生き抜いてきた。だからこそ例え自分達の生きる世界がゲームの中だとしても、神の意思というだけで滅ぼされる訳にはいかなかった。

「神が創った物を神が壊して何が悪い！所詮貴様らは偽りの命に過ぎんのだからな！」

戦いの舞台となっている部屋はＥＳの中心部。その為、社長であるルシファーの力は凄まじい。

その力を遺憾なく発揮し、一対多の状況であるにも関わらず互角以上に戦っている。

身の丈以上の巨大な槍に力が集まり、フェイトたちに放たれようとする。

しかしそれにいち早く気付き、食い止める者がいた。

「例え創られた命だろうと命はひとつだ！お前らに左右されてたまるかよ！！」

止めたのはシオン・Ｃ・メザーランス。

フェイト達同様、特殊紋章遺伝子、想像（創造）の紋章（イマジネーション）を持つ。

紋章の力の扱いに最も長けている彼は、その力でルシファーの攻撃を相殺した。

「馬鹿な？！私の攻撃を相殺しただと？！」

「今だ！フェイト！」

「うぉおぉぁ！！」

シオンの影になっていたフェイトはルシファーに迫り、渾身の一撃を叩きこむ。

そして、決着はついた。

「終わったな。フェイト」

「あぁ。やっと終わったんだ。皆の力で」

シオンたちは勝利し、あとはエターナルスフィアの崩壊を止めるだけだ。

喜びに浸っていたためか誰もが気が弛んでいたのだろう。

影で動いている存在に気がつかないでいた。

「さて。さっさとエクスキューショナーどもを消して崩壊をとめようぜ。

こうしている今にも奴等は俺たちの世界を壊してるんだからな」

仲間の一人であり、全員にとって兄貴分であるクリフ・フィッターが皆を促す。

「あぁ。そうだな。そして帰ろう！」

「さてと、じゃあ始めると・・・？！ルシファー！何をしている！？」

シオンたちがコンピュータを見ると何か操作をしているルシファーがいた。

「野郎！まだ生きてやがったのか？！」

クリフが驚愕の表情をあらわにする。

「くくくっ。そうだ、始めからこうしてればよかったのだ・・・。苦労して創ったからと渋っていたのが間違いだった・・・」

「何をしたんだ！」

「エターナルスフィアそのものの消去を始めた。最早止められん！！」

「そんなっ？！・・・ダメッ！止められないっ！！」

ルシファーの妹にして、エターナルスフィア初期化の反対派の一人でもあるブレア・ランドベルドは、何とか崩壊を食い止めようとするが、受け付けず、崩壊は止まらない。

ＦＤ空間の住人であるルシファーとブレアは強制的にログアウトされた。

そして、シオンたちにも影響が出始める。

「っ！体が！」

フェイトの幼馴染であり、ＥＳと神にして創造主たるルシファーたちの住む世界、《ＦＤ空間》を繋げる《コネクション》の能力を持

つ、ソフィア・エスティードが異変に気付いた。
エターナルスフィア消滅に伴い彼等の体が消え初めてきたのだ。
「クソッ！どうにもならないのかよ？！」
「やっぱり、私たちは消える運命にあったのかしらね？」
クリフと改変の能力（アルティネイション）を持つマリア・トレイターが、悔しさから顔をゆがめる。
「いや・・・。僕たちは消えない。消えてたまるか・・・！」
「大丈夫。俺達は消えないよ」
皆が不安に思うなか、シオンがそう言った。
「おいシオン？どういうことだ？」
「忘れたのか？俺たちの能力（ちから）を。ロキシ博士たちがくれた能力の本当の使い道を！」
「そうか！僕とシオン、マリア、ソフィアの力でエターナルスフィアそのものを別の次元に定着させれば・・・！！」
シオン達の特殊紋章遺伝子はエターナルスフィアの法則をＦＤ空間に定着・安定させるもので、その逆も同様に可能とさせる力なのだ。
「でもそれって・・・」

世界を全て別の次元に定着させる行為。それはまるで・・・

「まるで世界の創造だな」

「信じよう。僕達の力を。僕達なら出来る！」

「そうだな。俺達にならきっと・・・！」

シオン達は自身の能力を発動させる。

そしてその空間は光に包まれ、シオン達はその光に呑み込まれていった。

「くっ。・・・ここは？」

シオンが目を覚ますと其処は科学技術の施された部屋だった。

しかもそれは何処か見覚えのあるものだった。

「俺は生きているのか・・・？」

シオンは今の自分たちの能力の出力ではエターナルスフィアを別次元に定着させることが出来ない事を悟り、自分の命を捨てる覚悟で能力を使用したのだ。

その時の事を思い出す。

～Ｓｉｄｅ　ｉｎ～

「ダメだ。このままじゃ世界以前に僕達まで・・・！」

戦闘後の疲労により、能力を十分に発揮できない状況にフェイトは焦りを感じた。

フェイトたちは本能的に今の能力の出力では世界を創り変えることが出来ない事を悟った。

「大丈夫。お前等を消させやしない。」

「シオン？何を言っているんだい？」

未開惑星エリクール２号星出身のネル・ゼルファーは、皆の疑問を代弁するかのように尋ねた。

なぜなら、今の言い方ではまるで自分以外は助かるといっているようだったからだ。

「俺の想像（創造）の能力は、俺のイメージを具現化する能力だ。その能力を限界まで引き出せば、今のままよりも世界を別次元に定着させる事が出来る。
もっとも、能力維持するにはをこちら側から力を使わないといけなくてな」

「それじゃあシオンが？！」

「気にするな。元から俺の能力はこんな時の為にあるんだからな。心配するな。運が良ければ生き残れるさ」

皆の心配を他所に、シオンは笑って答えた。

「それじゃあ始めるぜ？・・・元気でな」

「待ってくれ！シオン！！」

「「「「シオン！！」」」」

皆が呼び止めるが、シオンは自身の能力を限界まで発動させる。

想像（創造）するのは、嘗て自分達が生きてきた世界。

そのイメージを強く想い浮かべながら・・・。

「悪いな皆。これから大変だろうがそっちの事は任せる」

そして、フェイトたちは姿を消した。

真っ黒な空間にシオンは一人になった。

「さて。これからどうなる事やら。少し・・・疲れた・・・な」

シオンは力を使った反動から目を閉じた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　シオン～

「どうやら生き延びることができたようだが」

ここは何処だろうか？と考えていると、部屋のドアが開いた。

「良かった！目を覚ましたのね」

其所にいたのはルシファーを倒す事に協力してくれたブレアであった。

「ブレア？！じゃあ此処はＦＤ空間なのか」

「えぇ。アレから少ししたら最上階の社長室に倒れていたの。他の社員に見つからないように運ぶのは大変だったのよ？」

ブレアは苦笑しながらシオンに説明をした。見つかってから一週間も眠り続けていたこと。

エターナルスフィアがスフィア社の管理から完全に離れたことなど。

「一週間もか・・・。済まなかったな、面倒をかけたみたいで」

「いいのよ。貴方たちは兄を止めてくれたのだから。
それに、友人が倒れていたら助けるのは当然でしょう？」

「そうか。ありがとう」
そういってシオンは微笑んだ。
シオンは中性的で綺麗な顔だちをしているので、その笑顔にブレアの顔が赤くなった。

「？どうかしたのか？顔が赤いぞ？」

「なっ、なんでもないの！気にしないで！」

ブレアは慌てて誤魔化す。

シオンは超が付く程の鈍感でその笑顔の破壊力に気付いていない。

そんなシオンにブレアは溜め息をついた。

「さて、と。問題はこれからだな。
いつまでも此方の世界にいる訳にはいかないからな」

シオンは今後のことを考えていると、ブレアが顔に苦悩を浮かべているのに気付いた。

「どうしたんだブレア？・・・何かあったのか？」

「えぇ・・・。実はエターナルスフィアの一件があってから、他のスフィアでも今回のような事が起こるのでは？という意見がでてきてるの・・・。
そしてその事から危険度の高いとされる世界を消去するべきだという意見がでているの。
実は既に手を出されていると思われる世界があるのよ」

「なんだと？！」

ＥＳ以外にも創っていたのにも驚いたが、それよりも同じ事を繰り返そうとしている者がいる事に怒りを感じた。

「その世界はどんな世界なんだ？」

「ある意味ではＥＳに近い世界よ。紋章術の変わりに魔法が存在していて、その世界の中には様々な次元があり、そのぶん世界の数も多いわ。
多次元世界ということから《ディメンションスフィア》（以降ＤＳ）と名付けられているの」

「多次元世界ディメンションスフィアか・・・。そこでは紋章術は使えるのか？」

「えぇ。ＥＳを構成する際に紋章をプログラム言語として使用していたのだけれど、それをもとにしているから、問題なく使えるはずよ。

でもどうしてそんな事を？・・・まさか！」

「あぁ、そのまさかさ。俺はＤＳに行く。
どうやら元居た世界には返れそうにないからな。
それにこっちに何時までも居られるわけでもない。
なら、ＤＳに行って、ついでにエクスキューショナーどもを片付けるとするさ。」

エクスキューショナーとは、かつてＥＳ内で内部から世界を崩壊させる、謂わばバグフィクスプログラムのような存在だ。その個体の姿や能力は様々で、中には宇宙で戦闘する戦艦クラスのものまで存在する。

「本当にそれでいいの？またゲームの住人として過ごすことになる

のよ？」

「もうこの意思は曲げねえよ。
もうこれ以上見過ごすわけにはいかないからな。
俺に出来る事はやっておきたいんだ。」

シオンの決意は固く、真直ぐな目でブレアを見た。

「分かったわ。ＤＳに入る際のサポートとそちらでの戸籍くらいなら何とか出来るから任せて。
それから、出来る限り消去反対を訴えてみるわ」

ブレアは諦めたような表情でそういった。

彼女自身、命をむやみに奪うことを良しとしていなかったからだ。

「ありがとう。じゃあ早速で悪いんだが、準備を始めてくれないか？
出来るだけ早いほうが被害も減らせるだろうし」

「分かったわ。少し待っていて。
準備が出来たら呼ぶから、それまでくつろいでいて」

ブレアはそういうと部屋を出て行きＤＳに接続できる端末のある部屋へと向かった。

数十分後

「戸籍等必要最低限の準備は出来たから実際に着いてから確認して

みて。
それから、こちらからの直接のサポートは今はあまり期待しないで頂戴。
この中に情報がはいっているわ」

簡単な説明をしたあと、ブレアはシオンに蒼みがかった銀色に、中心に蒼い宝石のようなコアのあるペンダントを渡した（ＳＯ３のロゴの形をイメージしてください）。

「これは？」

「ＤＳで使われているデバイスというものよ。
それは魔法使いの魔法を使用するのをサポートする役目や、他にも色々な使い道があるわ。
その子はインテリジェントデバイスというタイプ。
それから、デバイスには非殺傷設定というものがあるわ」

「非殺傷？なんでそんなもんが？」

「ＤＳでは基本、質量兵器や殺傷行為を厳しく禁止しているの。だからくれぐれも注意してね」

「なるほどね。分かったよ。そういえば、こいつには名前はあるのか？」

シオンは渡されたペンダントを見て尋ねる。

「その子にはまだ名前は無いわ。折角だからあなたがつけてあげて。」

「名前か。そうだな・・・・。ファーウェル、なんてどうだ？」

「確かあなたが持っていた退魔の聖剣の名前よね？。いいんじゃないかしら？」

「あぁ。レヴァンテインはあるがファーウェルはフェイトにあげちまったからな。まぁこれから宜しくな、ファーウェル。」

《Ｙｅｓ，ｍｙ　ｍｕｓｔｅｒ》

ファーウェルはシオンにコアを点滅させ挨拶に答える。

「それじゃあ、そろそろ行くよ。今までありがとうな」

「いいのよ。・・・・気をつけてね？」

「大丈夫だよ。俺はそう簡単には死なないさ。」

シオンは笑いながら端末に近づく。

「それならいいわ。転送を開始して」

「転送、開始します」

ブレアの指示に、社員の一人が答え、転送が始まる。シオンの足元に陣が輝きシオンを包み込む。

やがて光が収まると、そこにはもうシオンは居なかった。

「シオン君。どうか彼らを、世界を救って・・・。」

プロローグ～旅の終わり　そして新たなる星の海へ～（後書き）

読んで頂いてありがとうございます！

アシェーリトです。稚拙な文章で申し訳ありません。

もし指摘等があったら是非お願いします！

タイトルになのは入ってるのになのは出てこなくてすみません。

もう少ししたら原作に絡むので、もし今後も読んでくれる心の広い方はもう少し待っていて下さい。

それでは失礼します。

キャラクター設定（前書き）

若干の修正をしました。

なのは世界に来た当時の魔導師ランクを空戦ＡＡＡランクにしました。

今回はオリジナルキャラクターのシオンの設定を載せました。

今後話が進むにつれて、少しずつ変化していきます。

それではどうぞ。

キャラクター設定

アシェーリトです。
今回は主人公のシオンとデバイスについて説明をします

シオン・Ｃ・メザーランス
ルシファー戦直後
年齢：１８歳

身長：１７２ｃｍ

体重：６０ｋｇ

特殊紋章遺伝子：想像（創造）の紋章（イマジネーション）

紋章術：使用可能

魔導師ランク：空戦ＡＡＡランク

デバイス：インテリジェントデバイス《聖剣ファーウェル》
術式：ミッド、近代ベルカのハイブリットタイプ
カートリッジはバルディッシュと同型
また、紋章術を使うための特殊なカートリッジがある。
１ｓｔフォーム：ソードフォーム（刀）
現時点では最低限の能力しかないので、話が進むにつれて増えていきます。

バリアジャケット（１フォーム）：灼眼の〇ャナ０に出てきた〇ャ

ナのような黒のロングコートに銀色の篭手と足具をしている。また、胸部には、銀色のアーマーを着用。バランス重視となっている。

本作品のオリジナルの主人公。フェイト達同様、遺伝子操作を施されています。中性的な顔立ちをしており、たまに女性に間違われることも。少し長い紅い髪で後ろで結んでいる（ＳｔＳのユーノくらい）。

出生の事情により、幼い頃から戦場に出ていて、右目や体中に傷を負っている。
失明はしていないが、右目が蒼、左目が碧と色が違うことで他人に見られる事を嫌がる事、また、暗闇における戦闘時にすぐに対応できるように眼帯をつけている。
性格は冷静・判断力に優れている。だが、仲間を想う一面も持っている。
自分に向けられる好意には超が付くほどの鈍感。
メガネをかけていて、かけているときは性格が少し荒く口調も悪い。逆に外した時は優しく物腰は柔らかになり、敬語で話す（無意識下の切り替え）。
料理が得意で、エリクールに居たときは、デザートなども作っていた（女性陣に強制的に作らされていた）。
戦闘能力はルシファー戦時のパーティー中最強を誇る。

紋章の能力
相手の技や動きを、ほぼ完全に再現することが出来る（見たものを解析し、紋章によるシュミレーションをするため）。
これはシオンの才能も起因している。
最も、完全に再現出来るのは型だけなので、自身がその技を鍛えない限り、本物の半分程度の力しか出せない。

この能力の本来の使い道は、フェイトの《ディストラクション》が暴走した場合、同質の力で対消滅させることで押さえこむことや、エターナルスフィアをＦＤ人から独立させる為に、世界を強くイメージすることで、世界の存在をより明確化し、他の能力をサポートする為のもの

その為、紋章遺伝子の仕組み等を理解しなければならなかったため、かなり頭はいい。

生い立ち

シオンは特殊紋章遺伝子を作ったロキシ博士たちの研究チームの一人、メザーランス博士夫妻の息子で、他の能力を安定させるために操作を受けた。母親のアカネ博士の家系は、ＳＯ４の西園寺家の血を引いている数少ない存在のため、誕生後、銀河連邦上層部により博士らから引き離され、過酷な訓練や教育を受けてきた。

また、能力の安定化と実用化を図るために、秘密裏に7歳の頃から少年兵として使役されてきた。右目の傷や体中の傷は戦闘中に負ったもの。

１１年後、フェイト達がハイダにバカンスに行っていた頃、影で護衛を勤めており、ハイダ襲撃後フェイト達と別れたロキシ博士らを救出。

その時ロキシ博士らの頼みでフェイトを追う。しかし、脱出ポットの誤作動により、先にエリクールに着き、フェイト達と遭遇。同じ不時着を装い、以後フェイト達と行動をともにする。

昔から戦場に居たことや、連邦上層部の対応から、他人を心から信

じることができなかったが、フェイト達と旅を続ける中で人を信じる心を得た。

連邦は恨んでいるが、ロキシ達研究チームは恨んではいない（理由を知っているため割り切ったから）。

現在はこんなところです。仮に増えるとしても、デバイスの設定くらいだと思います。

紋章の名前は適当なので、本来の意味とかは無視してください。長々とすみませんでした。

キャラクター設定（後書き）

あり得ない程の長さ！
ホントすみません！！

基本変えない為に書き込んだらこんなグダグダに・・・

次回は原作キャラに接触出来る様に頑張ります。

それでは失礼します。

ＳｔｒｉｋｅｒＳ本編突入前　世界観設定（前書き）

若干修正しました。

今回この設定を入れたのは、この作品を読む上で、より理解しやすくするためのものです。

つまり、作者の力量不足が生んだ結果です。

これを読む事で、少しでもこの作品が理解しやすくなった、という方が増えれば幸いです。

それではどうぞ。

ＳｔｒｉｋｅｒＳ本編突入前　世界観設定

これは、この作品の世界観の設定となります。

この設定を読まれたほうが、この作品の本編を理解しやすくなると思います。

その為、独自の設定がいくつか含まれますので、不快感を感じた方は、読まないほうがいいです。

・なのは達の世界は、《仮想空間ゲーム》のなかにある存在。しかし、ゲームと言っても、この世界に住む人々は紛れも無く生きている、《一つの命》として確立しています。

そのため、一人一人が個々のＡＩによって自律した行動をとっています。

簡潔に言えば、「ただ生きている空間が違う」だけというものです。

・なのは達＜魔法文化レベル０＞の世界の住人が、魔力資質を持つ理由

スターオーシャンの世界設定では、紀元前１万２０００年前の地球には、《ムー大陸》が存在していて、その科学技術はＳＯ３の世界（西暦に換算すると２８５８年くらい？）のレベルに匹敵、若しくはそれ以上とされています。そして、彼らは《紋章術》の基礎となったようなものが使えたとされています。

しかし、隕石の衝突により大陸が崩壊、生き延びるためにムーア人達は時空転移を行い、その際に大陸が三つ分裂、様々な世界に散っていったとされています。

紋章術ではなく魔法が使え、隕石衝突時、その魔法を使い空間転移をする。

また、いくつかに小さく分裂した大陸は、それぞれの次元世界辿り着いた。それが、かつての＜ミッドチルダ＞であり、＜ベルカ＞である。その当時のムーア人達の生き残りは、独自の発展を遂げ、今のミッドやベルカとなった。

そして、地球では、転移時に大陸からちょうど離れていたムーア人達がいて、故郷を失った彼らは世界中に散らばった。その為、彼らの血を引くものが世界中に広がっている。

そして、稀に魔法資質に目覚める者がいるのは、＜隔世遺伝＞によるもの、なのはやはやてはこれに該当する、としました。

この設定は、ミッド式のデバイスが英語を使っている、ベルカ式はドイツ語に近いものを使っている、はやての使う呪文の中に、地球の神話にある名前などが度々登場する事から作りました。

・アルハザードについて

《アルハザード》とは、エターナルスフィア内における《惑星ネーデ》の事である。
惑星ネーデは、４６億年前に、宇宙の大半を支配していた勢力のこと。
なのは世界でアルハザードはかなりの技術力を持っていたらしいことから、ネーデを当てはめました。

・ティーダの真相は、捏造されている

この作品では、ティーダの死が独自の設定となっています。また、この時点でなのはの世界の住人達は、《神》の存在や、執行者の存在を知りません。

そこで、事件現場に何一つ証拠がなかった事と、あまりの事件の惨状から、真実を伝える事で、人々に恐怖を与えてしまうことを恐れたための事件を一部捏造。発表された死因は、複数の違法魔導師たちを追っていて、その際に交戦、数人に逃げられた、そして多くの局員が死亡した、というものにします。

ＳｔｒｉｋｅｒＳ本編突入前　世界観設定（後書き）

いかがだったでしょうか？

ドラマＣＤで、誰も地球出身者が魔力資質を持つことに答えられなかったための措置です。

ティーダの死を若干原作よりにしたのは、正体不明の犯人よりも、まだ明確に犯人が存在すると言うことが分かっている事のほうが、人々に与える不安が減るのでは、と思ったためです。

最後に、本編なのですが、もう少し時間がかかってしまうと思います。

本当に申し訳ありません。

なるべく早く更新できるよう、努力しますので、今後も読んでくださる方は、気長に待ってやってください。

それでは失礼します。

ＰＶアクセス１万突破記念　ＰＡ《プライベートアクション》カリム編（前書き）

祝！ＰＶアクセス１万突破！

読んでくださった皆様本当に有難うございます！

何時の間にやらすごいことになってて驚いたアシェーリトです。

さて、原作であるスターオーシャンのゲームには、毎回恒例のＰＡ（プライベートアクション）というものがあります。

これは、ゲームの進行に関わることから、キャラクター達の何気ない一面、果てはエンディングに関わる重要な個人イベントの事を指します。

今回の話は、なのはの原作において、結構重要なポジションにいながら、あまり出番が無かったような＜カリム＞に視点を当ててみました。そのため、シオンは登場しません。

また、この話はカリムの視点から始まりますので、カリムの一人称となります。

更に、この話は今後の本編においても僅かながら関係があります。

それではどうぞ。

PVアクセス1万突破記念　PA《プライベートアクション》カリム編

これは、預言者という原作で結構良いポジションにいながら、余り出番が無いという、そんな彼女の物語。

―聖王教会―

私は今、クロノ提督、はやてと共に、預言を覆す為の部隊の設立について話し合っています。

そに預言とは、一つ目の《管理局の崩壊》の預言のことです。

現在、伝説の三提督等のバックアップのもと、この事態に対応する

為の部隊の案を考えていますが、実現にはまだ少し時間がかかりそうです。

ただでさえ万年人手不足の管理局から優秀な人材を集めるのですから、そう簡単にはいきません。

他にも、クリアしなければならない問題が山積みなので、こればかりは仕方がありませんね。

上手く行かないのも当然かもしれません。

また、この二人には、例の新しい預言についてはまだ伝えていません。

余りの事の大きさから、現在知っているのは、解読に関わった者達とシャッハ、そしてかの三提督のみ。

管理局システムの崩壊ですら、危機的問題だというのに、次は世界存亡の危機・・・。

どうにかして食い止めなければ・・・。

「カリム、大丈夫？少し疲れてるんやない？
無理はアカンよ。」

私がそんな事を思っていると、はやてに声をかけられた。
提督も、声には出していませんが、心配そうな表情でこちらを見ています。

どうやら私は顔に出ていたようで、二人に心配をかけてしまったようです。

「ありがとう。でも大丈夫よ、心配しないで？
クロノ提督も、私は大丈夫ですから。」

そう言ってその場は誤魔化した。これからはもう少し注意しなければ・・・。

そんな事を考えていると、部屋の扉をノックする音がした。

シャッハがお茶を持って来てくれたのでしょう。

話を始めてから、それなりに時間が経ったようですし丁度いいですね。

「失礼します。お茶とケーキをお持ちしました。
皆さん、一度休まれてはどうですか？」

そういってシャッハはお茶とお茶請けのケーキの用意をしてくれた。

「あれ？いつものとちゃうね。お店変えたん？」

そう言われて見ると確かにいつもの物とは違う。

いつもは同じ物を用意しているので、僅かだが違いに気付いた。

「あぁ。それは僕が持ってきたものだ。友人から貰ったものでね。」

そう言ったのは、提督でした。そういえば、今日来た時に、シャッハに何か渡していましたね。

あれは、どうやらこれのようだったのですね。

「へぇ～、珍しいやん。クロノ君がケーキなんて貰ってくるなんて。
・・・・まさかそのケーキ、食べた事無いんと違う？」

はやてが横目で見ると、提督は目線を逸らした。

どうやらそのようだ。

「い、いやっ。なんていうか、見栄えも良いし、一人で食べるのは勿体無い気がしてね。

日ごろ世話になっている君達にも是非と思っｔ「ようするに、一人で食べる勇気が無かったんやろ？」・・・仰る通りで・・・。」

「まぁまぁ、はやてもその辺で。クロノ提督も悪気があったわけではないのだから。」

「はぁ～。まぁカリムがそういうなら構わへんけど。

・・・・不味かったら恨むで？クロノ君。」

「あ、あぁ。」

そんなやり取りをしている内に、それぞれにケーキが配られた。

確かに見た目は悪くないのですが、問題は味ですね・・・。

話し合いの結果、全員同時に食べる事になりました。

そして一斉に口にした瞬間。

私達は言葉を失いました。

それから我にかえったはやてが言いました。

「な、なんやこれ・・・。めっちゃおいしいやんっ！！」

はやての言葉は、その場にいた私達全員の気持ちを代弁したものでした。

義弟であるロッサ－ヴェロッサ・アコース－もよく趣味でお菓子作りをして食べさせてくれるけれど、正直これはその比じゃないと言えるほどにおいしい・・・。

貰った提督自身も驚いている。

本来、甘い物が苦手な彼があれほどの表情をしているのだから、そんな彼でも食べられるほどに、「かなりおいしい」という部類に入るものなのでしょう。

実際、私もこれ程のものは食べた事はありません。

「ちょっとクロノ君！

これをくれたって言う友達って誰なん？！

紹介してっ！！」

余程気に入ったのか、はやてはすごい剣幕で提督に迫っている。

あまりの剣幕に、思わずたじろぐ提督でしたが、それを断った。

「い、いや。済まないがそれは出来ないんだ。

彼にも都合があるから、そう何度も貰える訳ではないんだ。」

「な、ならせめてこのケーキを売ってる店教えて貰えへん？

これほどの物を作るんやから、店でも開いて無いと逆におかしいで？！」

はやては尚も食いついていた。

正直、今のはやては目もあてられないほどに、豹変している。

けれど、もしはやてが言い出していなかったら私が言い出していたかも。

・・・・そう考えると少し恥ずかしくなりました。

「悪いがそれも出来ないんだ。

その友人から止められていてね。

彼自身も、店のほうから止められているんだろう。」

その言葉を聞いたはやては、床に手をついて見るからに落ちこんでしまいました。

よほどショックだったのですね。

が、すぐに顔を上げると、

「クロノ君！もしまた貰う機会があったら、その時は絶対に私を呼んで！

もし呼ばんかったら、ラグナロクブチかますから覚悟して！！」

それを聞いた提督は青ざめ、壊れた玩具のように何度も首を振っていました。

その光景に思わず私は笑いを堪えていた。

気付いたら何時の間にか、さっきまで私の中にあった不安や疲れは何処かに吹き飛んでいた。

これもこのケーキの御蔭でしょうか。

・・・・こんな光景を失いたくない。

私は今一度決意を改め、事態に取り組む事にした。

でも、今この時だけでも、忘れていてもいいですよね・・・？

PVアクセス1万突破記念　PA《プライベートアクション》カリム編（後書き）

如何だったでしょうか？

誰も頼んでないのに始まった今回の話。

彼女には預言者という立場故の苦悩があると思ったので、思わず書いてしまいました。

この話の反響次第では、彼女もヒロイン候補にのるかも・・・？

もちろん、他のキャラクターとのエンディングの希望があれば、是非教えていただきたいです。今後の話を作る上での参考にさせていただきたいと思っています。

ですので、感想・意見・指摘・要望等があったら是非お願いします！

ここでお知らせなのですが、私生活の影響のため、今後暫くの間、更新が遅くなってしまうと思います。この場を借りて、お詫び申し上げます。

最後に、読んでくださった皆様、有難うございました！

それでは失礼します。

ＰＶアクセス５万突破記念　ＰＡ《プライベートアクション》　クロノ編（態）

連続投稿です。

これで、手持ちの品は全て無くなってしまった・・・！

これから今まで以上に更新が遅くなるんじゃ？と何故か逆に不安なアシェーリトです。

今回の話は、クロノのＰＡです。

これは、かなりやっちまった感がある内容ですので、嫌悪感を感じるかも知れ無いので、十分に注意してください。

それではどうぞ。

ＰＶアクセス５万突破記念　ＰＡ《プライベートアクション》　クロノ編（態）

これは、クロノが過去を振り返っている話です。
時期は、シオンにリニアレールの任務の援護に向かうように頼む数分前です。

―管理局本局―

僕は今、久しぶりに艦を降りて、今は管理局本部にいる。
此処に来る度、今でも彼の事を思い出す。

将来有望にして、数少ない同士であり、盟友であった彼のことを。

始めて彼と会ったのは、6年前のことだった。

久しぶりに本局に戻ってきていた僕は、同士の一人から、地上本部に優秀な執務官希望の局員がいる事を聞いた。

その経歴や働き振り、そして、日常の行動から、彼がどれほど優秀で貴重な存在であるかを知った。

また、彼は執務官の意見を参考にしたいと常々思っていたそうだ。

これは僕にとって願ってもない話だった。

それから僕は僅かな時間の合間を縫って、彼との話し合いの場を設定した。

さて、ティーダ・ランスター。

君が本物かどうか、見極めさせてもらうよ・・・。

それから１０日後、僕は執務官の経験談を彼に話している。

彼は真剣に僕の話に聞き入っている。

だが僕には分かる。

その心の奥底では、まったく別の事を考えている事を。

そして、それを見極めるためにも、僕は彼との話し合いの場をつくったのだから。

話が一区切りついたところで、僕はついに切り出した。

「さて、そろそろ本題にはいろうか」

「本題、ですか・・・・・？」

それを聞いた彼は訝しげに僕を見ていた。

「あぁ。これは執務官の話よりもよほど重要な話だよ。

・・・そう、これから君に聞く事はとても重大な事なんだ。」

そう言って僕は一度息を整えてからこう言った。

さぁ、見極めさせてもらうぞ・・・！

「これからする質問には正直に、嘘偽りなく答えてくれ。

ティーダ・ランスター一等陸士。

君は・・・・・、

姉と従姉のどちらが好きかな？」
瞬間、部屋の空気に重圧が増した。

暫くの間、彼は無言のまま目を瞑って何か考えているようだった。

漸く口を開くと、彼はこういった。

「お言葉ですが、ハラオウン提督。

妹を忘れていますよ？」

そう言った彼は据わった目で僕を見ていた。

その目を、その声を聞いた瞬間、僕は歓喜に震えた。

そして、同時に推測は確信へと変わった。

あぁ。やはり僕の予想は当たっていた。

彼は正真正銘の、

同士（シスコン）だ。

僕は歓喜の雄叫びを挙げたい衝動を必死に押さえつけ、努めて冷静に振る舞う。

彼の資質は十分に理解した。

後は彼が僕らの真の同士としてこちら側に引き込めるかどうかだ。

「ランスター一等陸士。

君は期待以上の人物のようだ。

そこで、そんな君を見込んで一つ提案があるのだが・・・。」

「・・・聞かせて頂きます。」

こちらの表情を見て、彼にも真剣さは伝わったようだ。

「以前より、管理局本局と地上本部の関係があまり良く無いのは君

も知っているだろう。

だが、何時までもそんな事を続けていては、もしこれまでに類を見ない程の事件が起こった場合、対処が困難となる。

では、そんな関係をどうすれば修復できるのか、と考えているときにある一つの考えが浮かんだんだ。」

「考え・・・、っ!!まさかっ!!」

「そう。管理局はもともと《法と正義を守る》ことを目的としている。

つまり、局員には程度の差こそあれ、同じ《思想・理念》のもとで繋がっている。

だが、それでは足りないからこそ、いがみ合いが生まれるのだと僕は考えた。

なら、それすらも超えるより強力な《思想・理念》の持ち主を集め、そして内部から意識改革をするしか無いのだと。」

「つまり提督は、我々《姉や妹を愛する思想》を持つ同士を集め、そして少しずつでも現状を改善しようと考えていらっしゃるのですか?!」

「その通りだ。僕等ならきっと出来る、いや、やらなければならないんだ・・・!!」

「提督・・・。分かりました。ティーダ・ランスター一等陸士、是

非とも提督の計画に賛同させてください！！」

「有難う、ランスター一等陸士！

僕達が変えていかなければならないんだ。より良い明日を手に入れる為にも。

そして、証明するんだ。僕達の《姉や妹に対する愛》は何物にも勝ると言う事を！！」

「はいっ！！」

こうして、彼も僕等《姉妹を愛でる会》の一員となり、計画が動き出した。

―数ヶ月後　とある居酒屋―

僕とティーダは、ミッドにある居酒屋に来ていた。

もうそろそろあと一人も来るだろう、と思っていたときだ。

「悪ぃ、待たせたなっ！」

そういって来たのはヴァイス・グランセニック。
彼もまた、貴重な戦力であり数少ない同士の一人だ。
「いや、それほど待った訳でも無い。気にしないでくれ。」
ティーダもそういって彼を快く受け入れる。
僕達同士は、その思想から結束力が強く、こうして仕事が無い時や、会議で無い私的な場では、階級を無しにして付き合いをしている。
これもまた、結束を高めるために必要なことだ。
「最近になって、地上本部でもやっと同士が増えてきたよ。
だが、同士を集めるのは苦労するぜ。
なにぶん、世間からは冷たい目で見られてしまう傾向があるからな・・・。」
ティーダは、近況を話してくれた。
隣に座るヴァイスも、どうやら状況は同じらしく、首を縦に振っている。
「本局のほうでも同じようなものさ。
誰が言い出したのかは分からないが、僕達の思想を不純なものというイメージで固めた輩がいたせいで、中々本性を表してくれる同士候補もみつから無いから・・・。

だがそれも、君達二人が加入してからは以前よりも格段に候補も増えている。

まったく、君達の人脈と手腕には恐れ入るよ。」

そう、彼等二人が入ってからというもの、以前より会員が増えているのだ。

今では僕等同士の間では《双璧》とさえ呼ばれている。

この二人には感謝してもし足りないよ。

「よしてくれよクロノ。・・・そもそも、お前が誘ってくれなかったら、俺達は本当の気持ちを押し殺して生きていくところだった。

そんな俺達に救いの手を差し出してくれたのはクロノ、お前なんだぜ？」

そういってヴァイスは僕に向かって「有難う」と言ってくれた。

ティーダも言葉には出さないが、その微笑が全てを物語っていた。

・・・例を言うのはこちらも同じだ。

彼等が居なければ、今こうして語り合うことすら出来なかった。

「さて！それじゃあしんみりしたのはここまでだ！」

・・・そうだったな。

「ああ！今日は久しぶりの休暇だからな、思う存分語り合おうじゃないか！！」

「「おうっ！！」」

こうして僕等は暫くの間、自分の妹がどれだけ素晴らしいか、どんな話をしたかなど、時間の許す限り語り合い、友情を深め合った。

話し込んでいる途中に、ティーダの端末に連絡が入った。

どうやら、事件の情報を掴んだらしく、数日後には出動することになったらしい。

・・・そしてこの時が僕等が彼と話した最後だった。

彼の死を知った同士たちは、悲しみに暮れた。

彼ほど優秀で妹想いの兄は、そうは居ない。

僕等は、これまでの彼の功績から、彼を名誉会員として、未来へ語

り継ぐことにした。

「そういえば、初めてシオンに会ったのもあの時だったな・・・。」

過去を振り返っていて思いだすのは、度々《護り屋》として協力してもらっている親友の一人の事。

ティーダの死を知った僕が彼等犠牲者の墓前に行ったときに、彼はいた。

ティーダの妹であるティアナを見守るその背中には、深い悲しみと後悔を感じた。

墓前に来る前に神父様に挨拶に行くと、葬式であった事を話してくれた。

・・・本当、彼には感謝してもし足りないな。

そんな事を考えながら墓前につき、手をあわせた。

あのときの悲しみは今でも忘れられはしない。

それから、シオンはティーダ達を殺したと思われる犯人について教えてくれた。

そして同時に、この世界の真実を聞いた。

初めは信じられなかったが、事件の状況と彼の目を見た時に本当のことだと理解した。

僕は、仕事が残っていることと、この事を三提督に知らせるために、本局へ戻った。

それからは彼と協力関係になり、今も独自の調査を続けている。

昔の事を思い出して、改めて誓いをたてた。

奴等執行者（エクスキューショナー）を倒し、この世界を救ってみせると。

だから頼む。

「ティーダ。僕達を見守っていてくれ。」

今は亡き親友に、僕は一人、祈るように呟いた。

ＰＶアクセス５万突破記念　ＰＡ《プライベートアクション》　クロノ編（態）

反省はしている。しかし後悔はしていない。

この言葉はとても素晴らしいと痛感したアシェーリトです。

いや、自分の中じゃクロノ、ティーダ、ヴァイス＝シスコンの図が成り立っていたんですよ。

そんでもってつい出来心で・・・。

十六夜さん。クロノのＰＡ、如何でしたか？

かなり期待はずれでしたでしょうが、これが作者の限界なんです・・・！！

他の方々も、如何だったでしょうか？

毎回の如く言いますが、質問等ございましたら是非お願いします！

それでは失礼します。

ＰＶアクセス１０万突破記念　ＰＡ《プライベートアクション》　ギンガ編（前）

祝！ＰＶアクセス１０万突破！

これまでアクセスしてくださった皆さん！有難うございます！！

さて、今回はギンガに視点をあててみました。

ここで注意なのですが、ギンガが好きな方は、イメージが崩れるかもしれないので注意してください。

それではどうぞ。

ＰＶアクセス１０万突破記念　ＰＡ《プライベートアクション》　ギンガ編

これは、ギンガのとある日の出来事。

―陸士１０８部隊―

「はぁ・・・。」

私は今日何度目になるだろう溜め息をついた。

「どうしたんだ、ギンガ？最近溜め息ついてばっかじゃねぇか。」

そんな私の様子を見かねてか、父さんが声をかけてくれた。

「ううん。何でも無いの。」

無理やりに笑顔を作って答える。

「・・・そうか。何か困った事があったら遠慮するなよ？」

「うん、ありがとう。」

父さんはそう言ってくれるけど、これは相談出来る内容じゃない。

「それじゃあ、まだデスクワークが残ってるから。」

「おう、頑張れよ。」

部隊長室を出た私は、報告書の作成にとりかかっている。

その内容は、この前のロストロギアの密輸『未遂』事件の件。

なぜ未遂で終わったかのか。

それは、最近ミッドチルダを中心に現れる、《護り屋・隠者（ハーミット）》が現れたからだ。

彼（？）は、依頼成功率１００％と云われるほどの凄腕で、度々管理局の局員に目撃されるほど出現する。

今回の事件で彼が現れたことで、私は彼の事を調べていると、不可

解な点が浮かび上がった。

彼は、一度引き受けた依頼は必ずこなすが、決して人殺しなどの依頼は受けない。

あくまで、依頼対象を《護る》事を目的としている。

これまで彼が関わった事件で、一人も死者が出ていない。

これは、殺し屋等とはまるで正反対のケースだった。

だからこそ、裏の社会では、彼は管理局よりも恐れられている。

また、誰が依頼しているのか、管理局が手を出し損ねている事件を彼が解決してしまうのだ。

当然、この事態に上層部が黙っているわけも無いのだが、そう簡単には手出しが出来ない。

理由は、管理局に資金援助する組織の重役の警備などを彼がした事があることだ。

その手際の良さと確実性から、彼等は隠者に信頼をおいている。

本来なら手配書の一つでも出されても良い様な事態なのに、彼等重役が圧力をかけるため、それが出来ない。

だが、管理局が手を出せない理由がもう一つある。

それは、ロストロギアの密輸等の事件が発生した時、現場に管理局が到着すると、どういうわけか彼はそのロストロギアを管理局にあっさり引き渡すのだ。

今回、私達が取引現場に行った時も、彼はレリックのケースを簡単に引き渡した。

彼の行動は、謎を呼ぶばかりで、何の為に依頼を引き受けているのかが理解出来ない。

「っと、いけないいけない。」

無意識の内に、私は彼の事ばかりを書いていた。

「・・・やっぱりあの人。あの時私を助けてくれた人だよね？」

そう。これが私の悩みの理由の一つ。

４年前の空港火災で私を助けてくれたのは、間違いなく彼だった。

命の恩人とも言える人が捜査対象だなんて。

「はぁ・・・・・。」

私は、また溜め息をついてしまった。

―数日後―

「休暇、ですか・・・・・？」

部隊長室に呼ばれた私が聞いた言葉は、休暇を貰えるとのことだった。

「あぁ。最近のお前の調子も悪いみたいだしな。」

「そ、そんなこと・・・・・。」

「報告書やその他書類で連続ミスしているのにか？」

「うっ・・・。」

その言葉に思わず唸ってしまう。

確かに、ちょっとミスが目立っているかもしれないけど・・・。

「それにだ。お前の様子が変だって他の奴等からも言われててな。

だから、ここらでいっぺん休んで気持ちを切り替えたらどうだ？」

・・・そっか。皆にも迷惑をかけてたんだ。

「じ、じゃあお言葉に甘えて。」

「おぅ、明日は確り休んでこいよ。」

―翌日―

休暇を貰った私は、クラナガンに遊びに来ている。

と言っても、他の人達は仕事だし、スバルは部隊のほうで時間が取れないから、一人で来てるんだけど。

その途中、たまたま立ち寄った本屋で見た本に、気になる記事を見つけた。

「隠れた名店特集・・・？」

その記事の中で一番目を惹かれたのが。

「その店に行ったお客さんが、誰一人としてその店の場所を教えてくれなかった、正体不明の喫茶店。

しかし、評判が悪い訳では無い様だ。その名も『喫茶　アクアエリー』・・・。」

何だろう?評判は良いのに誰も場所を教えてくれないお店って?

気になった私は、その店があるだろう場所の書かれた所へ足を向けた。

「たぶん、この辺りにあると思うんだけど・・・。」

記事に書かれたおおよその場所に来たけど、そこは大通りから少し外れた、人気の少ない場所だった。

「・・・本当にこんなところに喫茶店なんてあるのかな?」

そう思いつつ、此処まで来た以上、諦めるのは悔しかった私は、それから暫くの間探し回った。

「はぁ・・・。やっぱり、あの記事って嘘だったのかな?」

あれから数十分探し回ったけど、結局見つからなかった。

近くの人に聞いてみても、誰も知らないとと答えるばかり。

休むどころかかえって疲れてしまった私は、いい加減帰ろうとしたその時。

「こんな所で如何したんですか?ギンガさん?」

「えっ・・・？」

突然後ろから声をかけられた私が振り返ると、そこには右目に眼帯をした肩より少し長く伸ばした紅い髪の人がいた。

手には大きな紙袋を持っている。

この人どこかで・・・・・？

「あぁ。そういえば、この間は眼鏡をかけていましたからね。改めまして。シオンです。」

「え？・・・ええぇぇぇぇぇぇっ？！」

うそ？！あのシオンさん？！この間と雰囲気が全然違う・・・。

唖然としている私に、少し可笑しそうにシオンさんが笑う。

それを見て、私は恥ずかしくなった。

「も、もうっ！笑わないで下さい！！」

「ふふっ、すみません。」

絶対顔は赤くなってるよ～。

一人悶えていると、漸く笑うのを止めたシオンさんが尋ねてきた。

「それで？どうしてこんな場所に？

此処は人通りが少ないから、暗くなると危ないですよ？」

先ほどとはうって変わって、私を心配してくれた。

その顔にまた顔が熱くなるのを感じる。

・・・この人、自分がやってる事分かってないのかな？

って、あれっ？

「あの、シオンさんってこの辺りに詳しいんですか？」

「えぇ。この近くに住んでいますから。それが何か？」

これはチャンスかも！

「実は私、たまたま雑誌で見かけたお店に来ようと思って此処まで来たんです。

『喫茶　アクアエリー』って言うんですけど、ご存知ですか？」

もし、シオンさんが知らないなら、今日は諦めて帰ろう。

そう思いながら尋ねると、キョトンとした顔をした後、すぐに微笑んだ。

「えぇ。その店なら知っていますよ。ご案内しましょうか？」

「本当ですか？！」

やった！目的の場所に行けるだけでなく、気になってる男性（ひと）と行けるなんて！！

「是非お願いしますっ！！」

「分かりました。それでは、ついてきて下さい。」

シオンさんに案内されて暫く歩くと、目の前にお店が見えた。

見た感じ、一階が喫茶店で二階が家になってるみたいね。

「あれ？」

お店の前に近づくと、そこには「Ｃｌｏｓｅ」の札がかかっていた。

「そんなぁ～。折角ここまで来たのに開いてないなんて・・・。」

うぅ～。ちゃんとお店やってる日を確認すれば良かった。

「すみません。折角案内して頂いたのに・・・。」

「いいえ。大丈夫ですよ?」

「えっ・・・・・?」

シオンさんは入り口に近づくと、その扉を開けた。

ってえぇ?!なんで?!

そんな私の様子が可笑しかったのか、微笑みながらこう言った。

「ようこそ、『喫茶　アクアエリー』へ。」

ー店内ー

「もうっ、酷いですよっ!どうして教えてくれなかったんですか?

！」

席に着きながら、料理の準備をするシオンさんに、思わず怒る。

先ほどのお詫びと言う事で、料理を振舞ってくれることになった。

「すみません。ちょっとした出来心というやつです。」

「はぁ・・・。まぁいいです。目的の場所には着けましたから。」

少し落ち着いた私は、店内を見渡す。

店内は落ち着いた雰囲気で、大人の人が来るのにはいいお店だと思う。

少しすると、シオンさんが料理を持ってきてくれた。

「これなら、大抵の人が食べられると思ったのですが・・・。」

そう言って私の前に出されたのは、カルボナーラ。

確かにこれなら私は食べられる。もっとも、食べられない料理の方が少ないけど。

「いただきます。」

フォークを使って一口。

「・・・・おいしい。」

あれ?普通のカルボナーラだよね?何でこんなにおいしいの?!

今までの疲労もあって、私はどんどん食べていく。

「・・・・・はっ!!」

恐る恐る顔を上げると、少し驚いた顔で私を見るシオンさん。

ど、どうしようっ!!はしたない女の子って思われたかもっ!!

恥ずかしさから赤面していると、シオンさんが笑いかけてくれた。

「良かった、お口に合ったみたいですね。もしそれで足りなかったら言ってくださいね?」

・・・・なんでお客さんがお店の場所を言わないのか分かった気がする。

ダメだ、この笑顔は破壊力が強すぎるっ!!

「あ、有難うございます。・・・あの、私人よりも多く食べるんですけど、大丈夫ですか?

あっ、勿論その分のお金はちゃんと払いますからっ!!」

「もちろん。それから、これは私のお詫びですから、御代はいりませんよ?」

そう言ってシオンさんは、それから色々な料理を出してくれた。

「ごちそうさまでした。」

「おそまつさま。」

あれからついつい食べ過ぎちゃったけど、それもシオンさんの料理がおいしいせいね。

流石の私も、もう食べられないかも。

「そういえば、新作のデザートがあるんですけど、良かったら試食してくれませんか？」

「喜んでっ！！」

勿論です！デザートは別腹ですから問題ないですっ！！

「ムース・オ・ショコラっていうんですけど、こっちの世界には無いみたいですから。」

小さなカップの中には、半分から下はチョコのムース、上半分が生クリームのムースになっていて、更にその上にココアパウダーと細かく刻んだチョコが乗っている。

あぁ、見てるだけで涎が・・・・・。

「頂きます。」

そのあと、おいしく頂きました。

「あの！今日は有難うございました！」

デザートもおいしく頂いた私はシオンさんにお礼を言う。

「いえいえ。此方こそ、見事な食べっぷりを見せて頂きましたから。」

「も、もうっ！からかわないで下さいっ！！」

そう言ってむくれる私だけど、本当はちょっと嬉しかったりもする。

「女性の夜道の一人歩きは危険ですからね。

送って行きましょう。」

「だ、大丈夫ですよ！私だって局員なんですし、それなりに鍛えてますから！！」

料理までご馳走になったのに、これ以上迷惑かけられないよ。

「駄目です。いくら鍛えているからと言って、何が起こるか分からないんですから。」

今までと違って真剣な表情で見つめるシオンさんに、思わず見惚れてしまう。

・・・どうしよう。完全に好きになっちゃったみたい。

「じ、じゃあ、お願いします。」

シオンさんのバイクに乗って、私達は駅まで向かっている。

私はバイクの運転なんて出来ないから、当然後ろから抱きつく形になる。

抱きついたシオンさんの体に、私は驚いた。

（スタイルは良いと思ってたけど、かなり鍛えられてる。

・・・・凄く頼りになる背中。）

シオンさんの背中はとても大きく感じられ、私は安心と気恥ずかしさから、顔をうずめた。

「今日は有難うございました！お料理、とってもおいしかったです！今度はお客としてお伺いさせていただきます。」

駅に着いた私は、ヘルメットを返したあと、シオンさんにお礼を言った。

・・・なんだか、ドラマのワンシーンみたい。

「えぇ。その時を楽しみにしています。それではお気をつけて。」

「あっ！シオンさん！！」

別れの挨拶をして帰ろうとするシオンさんを呼びとめ、私は一つのお願い事をする。

―おまけ１―

ギンガを送り届けたシオンは、厨房へと足を踏み入れる。

「さて。・・・・どうしますかね。」

厨房には、大量の食器や調理道具が置かれている。

これらの片付けと明日の仕込みにかかる時間を瞬時に計算する。

「・・・・・今日、まともに寝られるかな？」

- おまけ2 -

「うふ、うふふふっ。」

前回の休暇から、ギンガはご機嫌だった。

それはもう、誰が如何見ても分かるくらいに。

実はあの時、シオンに連絡先を聞いていたのだ。

その為、ギンガはシオンと度々連絡を取り合っている。

そんなギンガの様子を影から見ている人物が居た。

「おいカルタス、ギンガのやつはどうしちまったんだ?」

「詳しくは分かりませんが、あの休暇から機嫌が良いのは確かですね。」

もう何度目になるだろうゲンヤの質問に、うんざりしながらもカルタスは答える。

「またシオンさんの料理食べたいなぁ～。
あ、でも料理だけじゃなくてシオンさんにも会いたいけど。」
ギンガは独り言を言いながら、作業を続ける。
（シオンさんのお陰で悩みも吹き飛んだし♪・・・あれ？そういえば何で悩んでたんだっけ？
確か、この前の密輸の件について調べていて、そうしたら４年前に私を助けてくれたかもしれない隠者（ハーミット）さんが関係しているかもしれないってことになって・・・。）
そこで、漸く悩んでいた理由を思い出す。
だが、なぜ悩んでいたのかが疑問になった。
（あの人は私を助けてくれたかもしれない人で、それで私にとっては命の恩人で、憧れに近いような感覚で・・・。ってあれ?!何であの人の事を考えると顔が熱くなるの？私が好きなのはシオンさんで・・・・・。）
はっ、となったギンガは、一つの憶測が浮かび上がる。
（もしかして、私は二人の事が好きになっちゃった・・・?!）
その事でギンガは再び頭を悩ませるのだった。

それを見ていたゲンヤは・・・。

「何だ?さっきまで、顔を赤くしていたと思ったら、今度は頭かかえはじめて・・・。

まさか男かっ?!そうなのかギンガ!!俺は、お父さんは認めんからなぁーー?!」

「ちょ、部隊長!落ち着いて下さい!!」

勝手に暴走していた。

PVアクセス10万突破記念　PA《プライベートアクション》　ギンガ編（後

如何だったでしょうか？

なぜでしょう。僕が好きなキャラは、ほとんどがサブキャラというこの事実。

というか、今までのPAの比ではないこの長さ！

さて、世間では《バレンタインデー》なるものが近づいておりますが。

そこで今回、「粛（祝）！バレンタインデー特別企画」なる無謀なことを考えております。

もし、「このキャラとの絡みを！」「このキャラからチョコを貰う話を作れ！」という意見がありましたら、可能な限り実現出来る様努力しようと思っています。

逆に、「チョコを貰えずに苦しんでいる野郎どもが見たい！」という場合も当然ありです！

また、他のキャラクターのPAの希望があれば是非御意見をお寄せ下さい！

質問、感想等もお待ちしております！

それでは失礼します。

バレンタインデー特別企画～彼女達の戦い～（前書き）

更新遅くなってしまってすみません。

今回は世間で話題になっている『バレンタインデー』の話です。

尚、この話は本編との直接の関係はありませんので、ご理解下さい。

それではどうぞ。

バレンタインデー特別企画～彼女達の戦い～

それは、とある一日の出来事。

「ふぅ。とりあえず直ぐに終わらせなアカン書類は片付いたみたいやな。」

「疲れたですぅ～。」

彼女達は今日も書類整理やらをしていた。

漸く一段落つけた二人は、少しだけ休憩を挟む。

「失礼します。」

そんな時に部屋に入って来たのは、はやての副官でもあるグリフィスだ。

「どうやら、ある程度仕事は終わったようですね。お疲れ様です。」

「ありがとう。」

「そういえばグリフィスは何か御用ですか～？」

その言葉でグリフィスは部隊長室に来た理由を話し始める。

「あ、はい。実は、昨日辺りから部隊のほぼ全体である話で持ちきりになっているんです。

別に、悪い事では無いようなのですが・・・。」

「その話って言うのは？」

はやての言葉にグリフィスは若干困った様な表情をする。

「なんでも、『ばれんたいんでー』とかいう何かのイベントの話らしいのですが。

その話題で女性局員達の仕事に若干支障が出ているのです。

ですが、僕はその『ばれんたいんでー』というものが何なのか分からないので手の打ちようが無くて。

そこで部隊長に相談に来たのですが・・・。あの、八神部隊長？」

「グリフィス君。今、バレンタインデーって言った・・・？」

「え、えぇ。確かに言いましたが・・・。部隊長はご存知なのですか？」

突然はやての纏う空気が変わった事に驚きながらも、グリフィスは返事をする。

その返事を聞いたはやては、モニターを操作してカレンダーを出す。

本日の日付は2月13日。

それを確認したはやては物凄い勢いで立ち上がる。

「こ、こうしちゃおられへん・・・！！」

小さく呟いたはやては、もの凄い形相で部屋を出て行った。

「ま、待って下さいですはやてちゃ～ん！！」

慌ててリィンもその後を追い、部隊長室にはグリフィスだけが残された。

「結局なんだったんだ・・・？」

はやての形相に怯んでいたグリフィスは、訳が分からないといった表情をして立ちすくしていた。

「失礼します。・・・あれ、グリフィス君？はやて部隊長は？」

はやてが出て行って少しした後に入ってきたのはクルツだった。」

「クルツさん。それが・・・。」

グリフィスが先ほどの説明をクルツにする。

「バレンタインデー・・・。それって確か地球のイベントの一つだったはずだよ。」

「地球の、ですか？」

クルツはグリフィスに、自分が知っている情報を話した。

一方此方は訓練スペース

「はい！午前の訓練はここまで。皆お疲れ様！」

「しっかり体ほぐしておけよー。」

「午後からの訓練に備えて、しっかりお昼を食べるようにね。」

「「「「「はいっ！！」」」」」

陸士１０８部隊にいたギンガも加わった六課前線メンバーは、今日もハードな訓練を行っていた。

今は丁度午前中の訓練が終わったところだ。

「あー、お腹減った！早く食堂に行こう～。」

「ホント、アンタはそればっかりよね。」

「でも、僕もお腹ペコペコです。」

「今日の訓練もキツかったですからね。」

「確かに。私は最近始めたばかりだから余計にキツイわ。」

五人はそれぞれが訓練後の感想をもらしながらストレッチをしていると、ザフィーラがヴィヴィオを背に乗せてやってきた。

「なのはママ！フェイトママ！」

ザフィーラから降りたヴィヴィオは二人のもとへと駆け寄る。

ストレッチの終わった彼女達が食堂へ向かう途中で、スバルが何かを思い出したようだ。

「あ！そういえば！あの、隊長達に聞きたい事があるんですけど。

『ばれんたいんでー』って知っていますか？」

「バレンタインデー？」

「うん、一応知ってるけど・・・。」

「なんでスバルが知ってんだ？」

問いかけられた三人は、その質問の内容に一瞬答えに詰まる。

「たしか、六課の女性の間で話題に出てたやつよね？」

ギンガがスバルに尋ねた。

「うん。でもそれが何のことだか分からなくて、隊長達なら知ってるかな～って思ったんです。」

「へぇ～、そうだったんだ。」

三人は意外といった表情をする。

だがそれも無理も無い。

彼女達三人は、新人達の訓練につきっきりだったり、それぞれが重要な役職についているために、他の女性局員との交流の場が自然と少ないのだ。

「ママー、『ばれんたいんでー』って？」

ヴィヴィオも興味が出たのか、二人の顔を見る。

「えっとね。バレンタインデーっていうのは地球にあるイベントの一つで、２月１４日に女性が好きな男性にチョコを贈って『好きです』って気持ちを伝える日なの。」

「他にも、自分にとって大切な人にその気持ちを伝えるって日でもあるんだ。」

なのはとフェイトの説明にスバルは納得したようだ。

「なるほど！だから話題にあがってるんですね～。」

「あれ？じゃあそれって明日ですよね？

今日は確か２月１３日ですし・・・。」

ふと思い出したエリオの言葉に、なのはとフェイト、ティアナとギンガは険しい表情になる。

キャロは少し赤くなりながらエリオをチラチラと見ている。

そのな中、隊長二人は念話でやり取りをしていた。

《どうしよう？！すっかり忘れてたよ～！！》

《お、落ち着いてなのは！と、兎に角準備しないと！！》

《そうだねっ！それじゃあ午後の訓練はお休みってことで！》

《流石なのは！よしっ！そうと決まったら・・・！！》

「そ、そういえば皆に言っておかないといけない事があるんだけど。」

「午後の訓練なんだけど、私達の都合がちょっと合わないので急遽お休みになります。」

「はぁ？！」

「え？そうなんですか？」

「それで用事って一体・・・？」

突然の事体にヴィータ、スバル、エリオが質問をすると。

「「兎に角！私達は用事があるの。」」

「「「は、はいっ！！」」」

目が笑っていない二人の笑顔の気迫にびびった三人は反射的に返事をする。

その横では、残る三人が必死に考えを巡らせていた。

（迂闊だった！まさかそんなイベントがあったなんて・・・！）

（兎に角、まずはチョコを用意しないといけないけど・・・。）

（でも、チョコなんてもう六課の売店じゃ残って無さそうだし・・・。）

ティアナ、ギンガ、キャロは、それぞれが意中の相手にチョコを渡すべく考えるが、中々良い案が浮かばない。

「あ、あのっ！その間は少しだけ街に出てもいいんでしょうか？」

（（流石ティア（さん）！！））

「う、うん。そうだね。でも、部隊長の許可が降りてからじゃ無いと何とも言えないけど・・・。」

ティアナの質問に、正直駄目だと答えたかった三人だったが、自分達も材料を買いに行く為に外に出る為、拒否は出来なかった。

すぐになのはは部隊長室に通信を繋ぐが、そこにいたのはグリフィスとクルツだった。

「あれ？グリフィス君にクルツ君？」

「はやては何処に行ったの？」

いち早く許可を取りたかった彼女達は途轍もなく焦っていた。

《それが、何処かに出かけてしまったようでして・・・。》

（（（（（（やられたっ！！））））））

「あ、あのグリフィス君！私達ちょっと急用で午後の訓練を休みにしたいんだけど。

それから、少しの間だけでもフォワード陣の外出許可を出してほしいんだけど。」

《え？流石に僕の独断では・・・《えぇ！構いませんよ！その代わり１９時までには帰ってくるようにしてくださいね！》っちょ！クルツさん？！何を言ってｒ《それじゃあ失礼します！！》

通信を終え外出許可をとった彼女達は、すぐに行動に出た。

「「ヴィヴィオ、少しお留守番しててね?ヴィータ（ちゃん）、ザフィーラ、ヴィヴィオと六課をお願いね?」」

あまりの気迫に二人と一匹は首がとれるのではと言わんばかりに縦に振った。

「「スバル!私はちょっと出かけてくるから!!」」

「エリオ君!私も出かけてくるね!」

「えぇ?!ってはやっ!!待ってよ~!ギン姉、ティア~!!」

「う、うん。気を付けてね。」

スバルはダッシュで隊舎に戻る三人を追いかけ、エリオは笑顔が妙に怖かったキャロを見送るしかなかった。

再び部隊長室へ

「クルツさん！何を勝手に許可を出しているんですか?！」

外出許可を出したクルツに、グリフィスは信じられないっといった表情で問い詰める。

だがクルツはと言うと、至って冷静であった。

「いいかい、グリフィス君。先ほど言った通りバレンタインデーは女性が男性に想いと一緒にチョコを渡す日だ。」

「それと外出許可に何のかんｋ「もしあそこで君が許可を出さなかったら。・・・今頃隊長達と『お話』をしていたかもしれないよ?」・・・っ!!」

漸く事体を呑みこんだグリフィスは、その事を想像して身を震わせた。

「それに、はやて部隊長もこの件で出かけてるだろうしね・・・。」

「クルツさん・・・・・。」

「ん?」

「有難う・・・御座います・・・。」

「・・・・・うん。」

暫くの間、グリフィスは涙を滲ませ、クルツはそんな彼を慈愛に満ちた表情で彼の肩に手を置いていた。

さて、なぜ彼女達が此処まで必死なのか。

それは、当然意中の相手がいるからだ。

キャロの場合はエリオだが、他の四人は共通していた。

その相手の名はシオン。

隠者（ハーミット）として六課を影でサポートしていた人物にして、今では民間協力者として共に戦う仲間だ。

そんな彼の何気ない気配りやその笑顔などから、彼女達は彼に想いを寄せている。

当然ライバルは多いので、いち早く彼にチョコを贈りたいと思った彼女達は、今回の行動に出たのだ。

無論、一番最初に六課を抜け出したはやても例外では無い。

もっとも、当の本人は自分に向けられている好意に全くと言っていいほど気付いていないが。

クルツは、戻ってきた隊長達がこれ以上暴走しないようにシオンに連絡をとる。

《クルツ？どうしたんですか？》

彼はクラナガンで喫茶店を営んでいる為、常に部隊にいる訳では無い。

その為クルツは、明日部隊に来られるかの確認をする。

「え、えぇ。ちょっとシオンさんの手が必要なんですよ。」

《ちょっと待って下さい。・・・・・えぇ、１６時からなら何とか時間が取れますけど。》

「本当ですか？それじゃあ出来るだけ遅れないようにしてください。」

《分かりました。それじゃあまた。》

通信を切った後、二人は安堵の溜め息を吐く。

とりあえず隊長達が部隊を抜け出さずにすんだ、と。

その日の夜、彼女達は各々がチョコを作っていた。

～Ｓｉｄｅ　なのは・フェイト～

（シオンさんは鈍感だから、ストレートに思いを伝えないと！）

（シオン、喜んでくれるかな・・・？）

チョコを渡して受け取ってくれる場面を想像しながら、決意を固める。

「フェイトちゃん、抜け駆けは無しだよ。」

「うん。正々堂々勝負しよう。」

互いにライバルであることを認め合う二人は、共にチョコを作り続ける。

～Ｓｉｄｅ　ティアナ・スバル・ギンガ・キャロ・ヴィヴィオ～

そこは混沌としていた。

『大切な人』に贈るという言葉から、スバルは家族と部隊の仲間へ、キャロはエリオへ、ヴィヴィオはなのはとフェイトへチョコを贈る

為に仲良く作っていた。

「ヴィヴィオ、ママ達喜んでくれるといいね～？
それに、キャロも頑張らないとね～？」

「うん！」

「は、はい。頑張ります！」

スバルの言葉にヴィヴィオは笑顔で答え、キャロははにかみながら答えた。

「スバルお姉さん、ティアナお姉さん達は？」

少し離れたところにいる二人を見ようとするヴィヴィオだったが、スバルとキャロに止められる。

「だ、ダメだよヴィヴィオ？」

「そうそう！あのお姉さん達はちょっと忙しいから、こっちにいようね～？」

「はーい。」

なんとか聞き入れてくれた事に安堵した二人は、そっと二人のほうを見る。

一方、ティアナとギンガは。

（兄さんは鈍感だから、渡すときにはしっかり言葉に出して言わないと・・・。）

（今度こそ、今度こそちゃんと伝えるのよ。ギンガ！）

二人は自身を鼓舞しながら、チョコを作り続ける。

その様子は、まさに鬼気迫るものだった。

しかしそんな二人でも、やはり不安にはなる。

だが、それを振り払うように、シオンが自分のチョコを受け取ってくれる場面を想像する。

数秒後、ティアナは普段からは想像も出来ないほどニヤけた顔になり、ギンガは赤面しながら体をくねらせて悶えていた。

（（でも、その為には・・・。））

気合を入れなおした二人は互いに睨み合い火花を散らす。

（（絶対に負けないっ！！））

再び鬼気迫る迫力をもって二人はチョコを作り続けた。

（（ひいっ！！））

それ以降、二人はそちらを見る事はなかった。

～Ｓｉｄｅ　はやて～

いち早く材料を揃えたはやては、もうチョコを固める段階に入っていた。

彼女はその間、一番早くチョコを渡す計画を立てていた。

クルツとグリフィスにより、事前にシオンが来る時間は彼女達に知らされていたからだ。

（シオンさんに一番にチョコを渡す為には、入り口付近で陣取ってる必要がある。

せやけど、当然これはなのはちゃん達も考えているはずや。

となると、いかになのはちゃん達を入り口に辿り付けないようにするかや。）

ふふふ、と黒い笑みを浮かべながら、はやては作戦を練っていた。

「「主・・・。」」

「「「はやて（ちゃん）」」」

その様子を影から見ていたヴォルケンズは、ガタガタ震えながら見ているしかなかった。

翌日

その日の六課はとても賑わっていた。

もっとも、その間に一悶着あったのだが、それもなのは達の『お話』によって解決した。

そのせいで、はやてが仕掛けていたトラップやらは全てダメになり、彼女達も『お話』により疲労したため、状況はフリだしに戻った。

そんな彼女達は今、ロビーにいる。

そして、１６時を少し過ぎた時。

「すみません、遅くなりました。」

苦笑しながらロビーにシオンが入ってきたのだ。

（（（（（来たっ！！））））））

我こそは先にと駆け出そうとする彼女達だったが、ここで思わぬ伏兵がいた。

「シオンお兄さん。」

「ん？何ですか、ヴィヴィオ？」

シオンの前に現れたのはヴィヴィオだった。

そんなヴィヴィオに、シオンは目線を合わせて優しく問いかける。

「いつもありがとう！」

「これを、私に・・・？」

「うん！がんばってつくったの！」

差し出されたチョコを見て一瞬呆けてしまったが、すぐに笑顔になって受け取った。

「有難うヴィヴィオ。おいしく頂きます。」

「えへへ～♪」

チョコを受け取ったシオンはヴィヴィオの頭を撫でた後、抱き上げる。

その様子を、彼女達は呆然と見ていた。

「あの。どうかしたんですか？」

その様子を心配そうに尋ねられ、漸く我に返った。

「「「「「あ、あのっ！！これ、受け取って下さいっ！！」」」」」

ヴィヴィオの思わぬ登場で気持ちを伝え切ることが出来なかった彼女達だが、それでもなんとかチョコを差し出すことは出来た。

「私に、ですか・・・？でも、どうして私に？」

「「「「「「そ、それは・・・・・。」」」」」」

まさか彼女達からも貰えるとは思えなかったシオンが問いかけると、彼女達は一瞬答えに詰まる。

だが、遂に覚悟を決めその想いを伝える。

「「「「「「貴方が好きだからです（一人の異性として）！！」」」」」」

顔を真っ赤にしながらも、彼女達はその言葉を口にした。

先ほどよりも呆然とするシオンだったが、

「有難う御座います。私も貴女方の事が好きです。」

一斉に差し出されたそれを見て、シオンは笑顔で受け取った。

受け取ってくれた事に喜ぶ五人だったが・・・・・。

「それにしても嬉しいですねぇ～。義理とはいえ貴女方から貰えるなんて。」

その瞬間、六課の空気が凍りついた。

その様子に気付かずシオンは喋り続ける。

「それにしても羨ましいですね。皆さんに本命を貰える人は。」

（（（（（（（ここまで言われて気付いて無いっ?!）））））））

回りで見ていた一同は、有り得ないシオンの鈍感さに度肝を抜かれた。

笑いながら話すシオンだが、周りの局員達は彼女達の変化に気付き、徐々に距離をとる。

《シオンさん！ま、前を見てくださいっ！！》

《クルツ？前っていった、い・・・・・。》

クルツからの念話で、漸く目の前の修羅に気付いた。

もっとも、ここまできても自分の一言が原因だとは気付いていないが。

「ヴィヴィオちゃんはこっちにいようねー！！」

クルツがヴィヴィオを抱きかかえて離脱した瞬間、シグナムが叫ぶ。

「総員退避ーーーーー！！！」

その声を聞いて、局員達は一斉に逃げ出した。

ロビーにはチョコを渡した彼女達と、バインドで縛られたシオンのみが残された。

何時の間にか、彼女達はバリアジャケットを纏っていた。

「え？あ、あの・・・。これは・・・・？」

目の前の存在に圧倒されたシオンは、滝のように汗を流していた。

「スターライト・・・。」

「雷光一閃・・・。」

「響け終焉の笛・・・。」

「ファントム・・・。」

「リボルバー・・・。」

「私、何か悪い事してしまいましたか・・・・？」

その直後、極大の閃光が六課を破壊した。

おまけ1

「シオンさん・・・。」

キャロや他の隊員達となんとか逃げたエリオは、その光を見つめて悲しそうに呟く。

「あ、あのエリオ君！」

「な、なに？キャロ？」

そんなエリオにキャロは真っ赤になりながら声をかける。

シオンとは違い、段々と自分の気持ちに気付き始めているエリオは、キャロの様子を見て緊張する。

「あ、あのね？・・・こ、これっ！受け取って下さいっ！！」

「キャロ・・・。うん、ありがとう。」

キャロが差し出されたチョコを見てエリオは優し笑顔で受け取った。

それを見たキャロは満面の笑みを浮かべた。

それから二人は互いに顔を赤くしながらも仲良話をしていた。

「ふふふ、エリオとキャロは上手くいったみたいね。」

「良かったね！キャロ！」

通路の角からその様子をマリエル、スバルがニヤニヤしながら見ていた。

おまけ2

「ちくしょう・・・。結局何も貰えなかった・・・・・。」

「まぁまぁ。そんなに落ち込まないで。」

「というか、ヴァイス陸曹の場合は自業自得でしょう？」

「う、うるせいっ！！くそっ！自分はモテるからってよ！」

「べ、別にそういうわけでは・・・。」

「二人とも落ち着いて。」

シオンが来る前に『とある騒動』を起こした主犯であるヴァイスは酷く落ち込んでいた。

それを見たクルツは彼を宥め、彼の被害にあったグリフィスは彼を貶していた。

「どうしたんですか？」

するとそこへ、シャーリー、アルト、ルキノがやってきた。

「いや、それが今日の事でね・・・。」

クルツの視線を辿ると、すっかり意気消沈したヴァイスがいた。

それを見た三人は「あぁ～。」と納得した。

「それじゃあ、そんなヴァイス陸曹とクルツさん、グリフィスにプレゼントです♪」

「「「え？」」」

突然のシャーリーの言葉にそちらを見ると、三人の目の前にはチョコがあった。

「一応義理ですけど。」

「よ、良かったら受け取って下さい。」

三人からの思いがけないプレゼントに、彼等はテレながらも受け取った。

おまけ3

「うっ・・・。」

「！シオン殿、無事か？！」

「シャマル、来てくれっ！」

「シオンさん、目を覚ました？」

あの後光に呑まれたシオンをなんとか救出したヴォルケンズは、医務室で彼を見ていた。

するとシオンが呻き声を上げたので、彼女達はシオンに近づく。

「あれ、ティーダ・・・？ちょっと待ってて。今そっちに・・・・・・。」

「おいっ！行くなっ！そっちはちげぇよ！！

・・・シオン？シオーーーン！！」

バレンタインデー特別企画～彼女達の戦い～（後書き）

如何だったでしょうか？

何で本編並みの長さになったんだろう・・・？

しかも中身が微妙になってしまった・・・。

まぁ楽しんで頂けたら幸いです。

それから、シオンにチョコを渡す前にあったことは、別に書きますので其方も楽しんで頂ければ幸いです。

それでは失礼します。

粛！バレンタインデー特別企画～漢（バカ）達の魂の叫び～（前書き）

連続投稿です。

この話は、シオンが六課に到着する少し前まで続いた『お話』、その原因を作った漢（バカ）達の話です。

それではどうぞ。

粛！バレンタインデー特別企画～漢（バカ）達の魂の叫び～

※この話は、『バレンタイン特別企画』の話である行動を起こした男性局員達の話です。

―機動六課　某所―

そこには、六課内における数少ない男性局員達の一部が集まっていた。

その集団の中心に、一人の漢（おとこ）が立っている。

彼の名はヴァイス・グランセニック。

クロノと同じく『姉妹を愛でる会』の会員にして、嘗てティーダと共に畏怖と敬称の念から『双璧』と呼ばれた漢だ。

「今日ここに集まってもらったのは理由(わけ)がある。」

今まで黙っていたヴァイスは、おもむろに口を開く。

「お前達は最近六課の間で流れている話は覚えているよな・・・？」

その言葉に、一同は頷く。

そんな中、一人の男性局員が挙手をする。

「それで？俺達は何をすればいい？」

何の為に集まったかなど最早聞くまでも無い、と言った表情で一同はヴァイスの言葉を待つ。

「俺達がやるべき事はただ一つ。

それは此処に居ない奴等がチョコを貰うことを断固阻止する事だ。」

「だがそんな事が可能なのか？」

先ほどとは別の局員が、ヴァイスの言葉に異議を唱える。

「バカヤローーーーッ！！最初から弱気になってどうするんだよ？

！」

目を見開いたヴァイスは渇を入れる。

「いいか?！もしこのまま何もしないで黙っていたら、俺達はチョコを貰えないんだぞ?！

つまり、チョコを貰えなかった＝モテない奴のレッテルを貼られるのも同然だ！

少しでも貰える確率を上げるためにはこうするしか無いんだよ！！」

ヴァイスの必死の形相に、一同は若干引き気味になる。

「し、しかし俺達にもプライドってもんが・・・。」

「そのプライドが邪魔をした結果がこれまでだろうが！

この際プライドなんて犬（ザフィーラの旦那）にでも喰わせちまえっ！

今俺達に必要とされているのは決断力だ！」

ヴァイスの暑苦しい言葉に、一同は感化されていく。

「そ、そうだよな。」

「このままあのレッテルを貼られ続けるなんて真っ平御免だ・・・！」

次第にボルテージが上がり、野郎達は口々に喋りだす。

「覚悟は決まったようだな・・・。」

その言葉に場は静まり返り、一同は静かに、しかし力強く頷く。

「今年こそ証明してやろうぜ！

俺達は決してモテ無いわけじゃ無いってことを！！

そして制裁を加えてやろう！

憎きモテる奴等を！！」

「「「「「「「おうっ！！！」」」」」」」

男達は漢（おとこ）となり、復讐と野望の為に動き出す。

翌日

六課は何時もより賑やかになっていた。

そんな中、女性達は自分がチョコを渡そうとする相手をしきりに探したり、目を向けたりしていた。

そんな六課の状況を、一部の男達は冷静に分析していた。

《こちらα、配置完了。》

《こちらβ、こっちも大丈夫だ。何時でもいける。》

《こちらγ、俺達も問題ない。》

六課のある一室にいたヴァイスと数名の男性局員は、次々と入って

くる連絡に頷く。

「了解だ。それではこれより作戦を開始する。

・・・健闘を祈る。」

通信を切ったヴァイスの言葉を切欠に、モテない男達の復讐が始まる。

《こちらＨＱ。α１、その先でレベッカとアレックスが遭遇する。

数名先回りさせて妨害を。》

「こちらα１、了解。」

α部隊の局員は、その内の一人をチョコを渡そうとする女性の後ろ側に回らせようとする。

これまでの調査から、彼女がその局員に好意を持っているのは分かっていたからだ。

「自分一人だけ幸せになれると思うなよ・・・！」

そういったα部隊の隊長は、指示をだした。

レベッカという女性局員が、意中の相手である男性の背中が通路を曲がったのを見つけたので、声をかけようとする。

「あ！アレッ「おーいレベッカ！ちょっといいか？」えっ？う、うん。」

呼び止められた彼女が振り返ると、そこには妨害の任務を受けた局員がいた。

「？誰かに呼ばれたような・・・。」

一方アレックスはというと、誰かに声をかけられたような気がして立ち止まり、通路を戻ろうとする。

すると彼がいる通路の一室から、何かが音も無く出てきた。

そして彼の口を押さえ、部屋に引きずり込む！

「っ？！～～～？！」

彼は訳も分からないまま部屋に引きずり込まれ、数人の局員に縛り上げられた。

《こちらα2。任務完了。》

「こちらα3。了解。」

「えっ？何？」

彼女と話していた妨害役は通信に答え、彼女の言葉を誤魔化した。

「いや、なんでも無いよ。それより悪かったな、急に呼びとめて。」

「ううん。それじゃあね。」

「あぁ。」

彼女が走り去ったのを見て、彼はほくそ笑む。

「こちらα3。任務完了。次の指示をくれ。」

「・・・あれ？何処にもいない。・・・見間違いだったのかな？」

彼女は首を傾げながらも彼を探すために部隊を歩き回る。

《こちらＨＱ。β１、そちらにシャーリーが向かっている。目的はグリフィス准尉と思われる。

至急対処せよ。》

「こちらβ１、了解。これより作戦行動を開始する。」

シャーリーはチョコを大事そうに抱え、通路を歩いていた。

彼女もまた、目的の相手を探していたのだ。

そして彼女も、これまでの女性局員達と同じように、相手の姿を見つけて声をかけようとするが。

「おーい、シャーリー！ちょっといいかぁ？」

「え？うん、いいけど・・・。」

一度通路を見たシャーリーだったが、直ぐに声をかけてきた局員に目と話し始めた。

「グリフィス准尉。少しよろしいでしょうか？」

一方、グリフィスには彼等の魔の手が忍び寄っていた。

「えぇ。どうかしたんですか？」

そういって彼が近づくと、その局員は小さく笑う。

「えぇ、少し。ですが直ぐに終わる事です。」

「？」

グリフィスは彼の態度を不審に思った瞬間、後ろから何者かに口を塞がれた。

そしてグリフィスを呼びとめた局員も、彼を運ぶのを手伝った。

「こちらβ4。任務完了。」

ヴァイス達がとった作戦は、事前に部隊にサーチャーを設置して部隊中を監視。

そして、チョコを渡そうとする女性がターゲットの近くにいる時を見計らっての妨害工作だった。

この時、誰か一人位サーチャーに気付くのでは?と思うだろうが、そこは気にしないで頂きたい。

さて、そんなこんなで三つの部隊に別れた彼等は着実に成果を上げている。

それはもうプロの暗殺者も顔負けの腕前でターゲットの男性局員を捕らえている。

だが彼等は気付いていなかった。

一時の気の迷いによって起こしたこの事態が、どれだけ欠陥があったのかを。

「あれ？どうしたの？」

結局、グリフィスを見つけられなかったシャーリーは休憩室に来ていた。

するとそこには、少し落ち込んでいる女性局員がいた。

「あ、シャーリー。実は彼にチョコを渡そうと思ったんだけど何処にも見当たらなくて・・・。」

そう答えたのは先ほど被害にあったレベッカ。

彼女の言葉にシャーリーは驚いた。

「えぇ？！レベッカもなの・・・？」

「『も』って。シャーリーも・・・？」

二人は顔を見合わせ、驚愕する。

するとそこへ他の女性局員がやってきた。

彼女もまた、何処か沈んだ表情をしている。

「ど、どうかしたの・・・？」

シャーリーが恐る恐る聞くと、彼女は答えた。

「私、気になっている男性（ひと）がいて、声をかけようとしたんだけど、その人の姿を見失っちゃって・・・。」

その答えを聞いた瞬間、二人は再び驚愕する。

「ね、ねぇ！もしかしてその時、誰かに呼び止められなかった？」

「え・・・？うん、そうだけど。なんで知ってるの・・・？」

その言葉を聞いて確信した二人は、自分達も同じ状況にあった事を話す。

「これは絶対に何かあるわね・・・。」

シャーリーはすぐさまはやて達に連絡を入れた。

～Ｓｉｄｅ　はやて～

《八神部隊長、宜しいでしょうか？って、何してるんですか・・・？》

「シャーリー？悪いんやけど後にしてくれへん？」

こっちは対なのはちゃん達用の罠をしかけるのに忙しいんや。

《それがそうもいかないんです！これは部隊長にも関係のある事なんですよ？》

随分と切羽詰まっとるなぁ。

「一体何があったんや？」

《それが・・・。》

シャーリーの説明を聞いて私は怒りが込み上げてきた。

女の子の気持ちを何やと思ってんねん・・・！

これは確かにこんなことをしとる場合や無いな。

下手したら私もチョコを渡せへんかもしれんし。

・・・仕方ないけど、この罠を使うか。

「シャーリー、直ぐに他の隊長達にも連絡を。反撃に出るよ！」

さ～て。人の恋路を邪魔するアホンダラは粛清せななぁ。

《り、了解っ！！》

私は黒い笑みを浮かべて作戦を練り上げる。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　αチーム～

ある程度の男共を沈黙させた俺達は、次の標的を捉えていた。

そして、これまで通り標的を捕らえようとしたが。

「！！すり抜けた？！」

まさかこれは幻影？！・・・まさか！

「こちらα！αチーム各自散開しろっ！！」

通信をつなげるが誰一人として返事がこない。

まさか・・・。

「そのまさかや。」

後ろから聞こえてきた声に俺は振り返らず、一目散に逃げ出した。

「逃がさへんで！」

俺は懸命に走り続け、気付いたら隊舎の入り口の方まで来ていた。

「ここから外に出れば・・・！！」

そう思い扉を目指し更に一歩踏み出した瞬間。

「っぶ！！」

俺は何かに足をとられ、勢い良く顔面からフロアにダイブした。

それでも何とか立ち上がろうとするが、体が動かない。

「これは！」

見ると体がバインドで束縛されていた。それでも這って逃げようとすると、今度は上から水が降ってきた。

その直後に俺のいる場所に魔法陣が現れ、辺りが凍りつく。

「ってちょっと待ってくれ！！このままだと凍りつくんですけどー？！」

「当たり前や。なんせその為に作ったんやからな。

それにしても良く此処まで逃げられたなぁ。お陰で余計な体力使わされてもうたわ。」

なんとか首を後ろに向けると、そこには少し息をきらせ、目を妖しく光らせた我等が部隊長様がおられた。

そこで俺の意識は途絶えた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　ヴァイス～

はっ！良い気味だなモテる男共め！そこで暫くの間もがいてな！！

順調に妨害工作が進んだ事に俺は満足していた。

そうしている間にも、次々にモテる男共は消えていく。

「？これは・・・！指令！！」

「どうした？遂に全滅したのか？」

「いえ、それが・・・。どういう訳か部隊との通信が取れないんです。」

「なに？・・・サーチャーで映像を確認しろっ！」

「それが、先ほどからサーチャーも不調のようで何も映らないんです！」

なんだと・・・？！どういうことだ？

「・・・・まさかっ！！ヤバい！全員下がらせろ！それから直ぐに此処を離れるぞっ！！」

くそっ！！冷静に考えて見ればこの作戦ってあからさまに不審に思われるじゃねぇーか！！

慌てて部屋から出ようとした一人の同士が扉の前に立つ。すると・・・。

「ぎゃあああああ！！」

悲鳴を上げながら桃色の砲撃に扉ごと吹き飛ばされた。

だが、誰一人として同士の心配をしない、いや出来なかった。

なぜなら扉があった場所には、『白い悪魔』が立っていたのだから。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

ヴァイスを筆頭に妨害工作をした男性局員たちは、全員ボコボコにされてバインドと紐で縛りあげられていた。

だがこれは被害者組の男性達によるものでは無い。

これらは主にはやて達によって行われた『軽いお話』によるものだ。

因みに

αチーム→はやて、ティアナによる凍結及びクロスファイアの滅多撃ち。

βチーム→なのは、キャロによるバインドと強化版バスターの雨。

γチーム→フェイト、ギンガによる瞬殺及びそのまま引き摺られることによる全身打撲。

この惨劇を見た彼等被害者組は、流石に同情したのかそれとも恐怖からか、何もしなかった。

そして処刑を行った彼女達を含む女性達はというと。

まるで汚物を見るかのような目つきでヴァイス達を見下ろしていた。

「さて。何か言い残す事は？」

全員を代表してはやてが口を開く。

一瞬その声を聞いた瞬間に彼等はビクリと体を震わせるが、それでもその目は強い光を放っていた。

最早覚悟すら決めたようだった。

そして彼等は口々に声を出す。

「俺達だってチョコがほしかったんだ！」

「恥ずかしがる女の子の表情を見たかったんだ！」

「それを見て『ありがとう』って言いたかったんだ！」

そして最後に口を揃えて魂の叫びを放つ。

「「「「「俺達だってモテたかったんだよーー！！」」」」」

「「「「「そう。それじゃあ、『お話』しようか・・・？」」」」」

この後、シオンが来る少し前までの間、語る事すら憚れるほどの『お話』がされたそうだ。

粛！バレンタインデー特別企画～漢（バカ）達の魂の叫び～（後書き）

如何だったでしょうか？

彼等もチョコがほしくて必死だったんです。

そしてそれ故にはやまった結果が『軽いお話』と『お話』ですｗ

『お話』の内容ですが・・・・想像にお任せします。

さて、本編ですが、もう少しお待ち下さい。

遅くなって申し訳無いです。　それでは失礼します。

特別出演！ＰＡ《プライベートアクション》　ハヤト＝ロックウェル編（前書き）

漸く完成しました！
ラモン先生。お待たせしました！

時間かかったうえに内容がアレですし、誤字脱字等目立つと思いますがご容赦を。
時間軸については後書きにて説明します。

ここで一つ注意なのですが、今回の話は文才が無いにも関わらず、先生の許可を頂き書かせていただいたものですので、先生の作品を汚されたくない方は読まないことをお勧めします。

それではどうぞ。

――――――――――――――――――――――――――――――

此処は、ミッドチルダ某所にある酒場。
首都クラナガンからは、少し距離が離れている。
ただの酒場であるなら何ら問題は無いのだが、此処は俗に言う『裏の人間』がよく集まる場所だった。
彼等は管理局の目を盗んでは、そこで情報交換等を行っている。
魔法と科学が発達した管理局において、電子機器を利用しないほうが案外足がつかない。
もっとも、これらの取引が行われているのは店内のみにおける暗黙の了解となっている。
今日も大勢の無法者達が集まり、店は賑わいを見せる。
そんな店に、金髪の一人の少年が現れた。
彼は悠然と店の中に入って行き、カウンター席に座ると水を頼んむ。
「よぉ兄ちゃん。此処はお前みたいな坊やが来る場所じゃねぇぜ？」
厳つい風貌の男が少年に近づき、厭らしい笑みを浮かべる。
だが、その目は全く笑っていない。寧ろ少年を睨み付けるようにしている。

男は暗に言っているのだ。
『痛い目を見たくなければさっさと帰れ』と。

だが当の少年は臆することなく、逆に生ゴミを見るような目で男をチラリと一瞥する。
が、興味を無くしたのか、直ぐに視線を逸らし男を無視する。

「この餓鬼、ちょうしに乗るんじゃ「そのくらいにしといたほうがえぇで?」っ、テメェは?!」

無視された男は怒りに任せ少年を殴ろうとするが、突如声をかけてきた男を見て驚愕する。

そこにいたのは、中肉中背の中年の男だ。
一見何処にでもいそうな彼だが、此処にいるものは彼の正体を知らない者はいない。

男の名は＜惨太＞。
この場に限らず、裏社会においてかなりの情報通として有名な男だ。

そんな男に声をかけられたのだ。
男が驚くのも無理はないだろう。

渋々ながらも少年につっかかるのを止めた男は、少しだけ距離をとる。
そんな男に満足したのか、ニヤリと笑った惨太は少年に声をかける。

「全く。お前さんもハッキリと名乗らんから悪いんやで?
＜ハヤト＝ロックウェル＞君?」

その名が出たとたん、一瞬にして店内のざわつきがおさまる。
が、次の瞬間には先ほど以上の喧騒が店を包む。

――おい、聞いたか？

――『あの』ハヤト＝ロックウェル・・・？！

――マジかよ・・・。この場に『二つ名』持ってる二人が集まってるのか。

さて、何故彼等はこんなにも驚いているのか？
それは現在、裏社会では四人の人物が有名と成っている為だ。

一人は情報通である『二つの顔を持つ男』こと惨太。
一人は傭兵に近い存在の、『黒い彗星』ことモンジャラゴラの＜スティーブン＞。
一人は『護り屋』である『最強の楯』こと隠者（ハーミット）。そして最後の一人が、此処にいる少年―ハヤト＝ロックウェル―なのだ。

この四人の実力は他の人間のソレを遥かに超えている。
その事から、彼等は何時しかその能力・風貌を表す『二つ名』がつけられた。

中でも、隠者とハヤトの二人は特に有名で、そいつに目を付けられれば逃げる事は出来ない、といわれるほどだ。

その為、ある者は好奇の目を、またある者は信じられないといった目をハヤトに向ける。
様々な視線を受けたハヤトは、大きく溜め息を付いた後、苦笑しな

がら惨太と話し始める。

「惨太さん。此処で俺の名前を出さないで下さいよ。」

「いやぁ、スマンスマン。
ところで、本題に入ろうか。」

その言葉に先ほどまでの笑顔は消え、二人は念話で会話を始めた。
ある程度の話をした二人は、店をあとにした。

――――――――――――――――――――――――

惨太さんと一旦別れた俺は、クラナガンの路上裏の一角に入っていった。

其処には既に三人（？）の人影があった。
あれ、俺が最後か。

「すんません。遅くなったみたいで。」

「いえ、構いませんよ。それほど時間は経っていませんから。」

微笑みそういってくれたのは、『護り屋』隠者ことシオンさん。

あぁ、この人が女の人だったらどれ程癒されるだろう。
それくらい中性的な顔だちをしている。
だが悲しいかな、この人は男だ。いや、寧ろ男の娘か？

「何か言いましたか？」

「い、いえ何も！」

俺の心を読んだかのように、シオンさんが笑いながら尋ねる。
目は全然笑ってないから、かえって怖いんです。いやホント。

毎回の事とはいえ気を付けなければ。

さて、何故俺達がこんな人目に付かない所で集まっているかというと、簡単に言うと『俺達』はお尋ね者だからだ。
では何故管理局員である俺までが目を付けられているのか？

理由は『この世界』が『俺の居た世界』とは全く異なる世界だからだ。
『この世界』は所謂『平行世界』と呼ばれるもの。
次元世界のそれとは全く異なる成り立ちをしている。

正直俺がゲーマーじゃなきゃ理解なんて到底出来なかっただろうし、理解しようとも思わなかっただろうな。

と、少し話が逸れたな。

次に俺がこの世界に来てしまった理由だが、それについてはどうにも思い出せない。
数ヶ月前、気付いたら遺跡で倒れていて、そこを偶然シオンさん達に助けてもらったんだ。

俺は彼等と話をして、この世界が俺の居た世界とは異なる事を知った。

更には俺の局員ＩＤが『存在』しなかった。

最初は愕然としたけど、『存在しないはずの人間』である俺は、当然管理局にはいけない。

更には、『この世界』にもスバルやティアナ、六課の皆がいること、そして『この世界』が滅びようとしている事を知った。

ならば俺は『今の俺に出来る事』をやろうと思い、シオンさん達に協力することにした。

でも、その事を話したお陰で、俺はシオンさんを筆頭に過酷な訓練を受ける事になった。

あぁ、思い出すだけで涙が出てくる。

まぁその訓練によって俺は飛躍的に強くなったけどな。

今じゃ陸戦Ａランクくらいは余裕であるんじゃないか？

ついでに俺の中に眠る『レアスキル』が目覚める切欠になったし。

因みに俺の『二つ名』は、このレアスキルに由来している。

と、まぁこんな感じで俺は彼等と協力して『この世界』を守るために影で戦っているってわけだ。

・・・なんか本編よりも良いポジションな気がするな。

影で戦い平和を守る主人公。いいじゃあないかっ！！

ついに俺の時代が！！

《マスターハヤト。先ほどから誰と話しているのですか？

それと、そろそろ戻ってきてください。》

俺が過去を皆に説明しているとブレイブハートに注意された。

さーせん。

それよか、皆って誰だ？
それに本編って・・・まぁいいか。

過去を振り返っていた俺は、改めて今回の依頼についての説明を聞く。

なんでも、どっかの研究所で『作られた』人造魔導師の子供が脱走したらしい。
更にはレリックを二つも持って。

この依頼は、俺が『この世界』に来る前の任務と成る事件だ。
大体の場所は掴めている。

こっちの世界の高町隊長達に引き渡すにしても、それまでを万全にしておかないといけねぇ。
結構責任重大だなこりゃ。

俺達は、俺の記憶をもとに作戦をたてた。
実行は明日の昼頃。少女とレリック確保を影で支えること。
場合によっては戦闘も許可される事になった。

さて、とりあえず今は明日に備えて帰って寝るとするか。

各々解散した俺達は、明日の大一番に備えるため、その場をあとにした。

ーーーー翌日　昼頃ーーーー

ついにその時が来た。

俺は今、隠者ー シオンさん ー と共に下水道の中を走っている。
俺はバリアジャケットの上に、シオンさんと同じフード付きのマントのようなものを着ている。
因みに惨太さんもコレを着ている。

最初コレで戦隊ものみたいにしたらどうかと提案したら、頭をぶん殴られた。
戦隊もの、カッコいいのになぁ。

「ハヤト気を抜くな。『奴等』が来る可能性も否定出来んからな。」

つい気を抜いたらシオンさんに注意された。
確かに気をつけねぇと。

そんなやり取りをしていると、広い空間に出た。

《マスターハヤト。この付近にレリックの反応があるようです。》

お、さっそく当たりか。

「シオンさん。」

「あぁ。手分けして探そう。」

恐らくスバル達もそのうち来るだろうから、それまでに確保しておかないとな。

スカリエッティ、だったか？
あの一味に渡すわけにはいかねぇし。

「！シオンさん！」

漸く見つけた。
・・・どうやら中身は本物みたいだな。

「さて、後は「そこの二人！ゆっくり此方を向きなさい！」・・・丁度いいじゃん。」

この声はギンガだな。

それにしても、何て言うか、この若干悪役っぽいたちまわり。
これはこれでいいかもな。

言われたとおり振り返ると、案の定六課前線メンバーとギンガがいた。

「アナタは・・・！」

「隠者（ハーミット）？！」

エリオとスバルが驚愕に満ちた様子で、俺達を見ている。
ってあれ？！俺は無視？！

「おいおい、俺の事も忘れてもらっちゃあ「うっさい！アンタは黙ってなさい！」えぇ？！ちょ、おま「そうよ！私達が話を聞いてるのは隠者のほうなの。少し黙っててくれる？」ってお前もかよっ？！」

くそ！お前等酷くない？！

いい加減ムカついた俺は文句を言おうとしたとき、俺はある一点を見て動けなくなった。

その視線の先にはティアナがいる。

俺はレアスキルを発動。

コレは真実を確かめないといけねぇ！！

「＜白日の元に晒される乳（ニュータイプ）＞！！」

そう。これが俺のレアスキル。

俺が見た相手はどれだけ服を着ていようとも、そのサイズがバレるのだ！！

本当は相手の動きから次の行動を予測する目を鍛えるための訓練をしていたんだが。

いやぁ偶然って素晴らしい！！

そしてこの素晴らしい力から、俺は裏社会（特に野郎共）では『神眼』と呼ばれている。

ん？こんな能力でなんで恐れられてるのかって？
ふ。言っただろ？『誰も逃げられない（女性限定）』って。

さぁ。お前のサイズを数えよう！！

・・・・な、なんだコレは？！
７０・・７３・・７８・・８０・・８２・・・まだ上がるだと？！

「ガハァッ！！」

あまりの光景に俺は耐え切れず思わず片膝を着く。
馬鹿な、アレは・・・！

「バスト８６だとぉぉぁい？！」

ティアナのバストサイズを言い当てた瞬間、大量の魔力弾が。
てちょっと！いくらなんでも問答無用すぎません？！

「とりあえずアンタは死になさい！
ケースはその後でゆっくりと回収させて貰うわ！！」

羞恥からか顔を赤く染めたティアナは、怒りの形相で俺にデバイスを向ける。

良く見るとエリオは顔を赤くし、残りの三人は親の仇を見るような目で俺を睨み付ける。
あれ？もしかしなくても、地雷踏んだ？

《マスターハヤト。今ほど貴方をマスターに持った私の運命を呪います。》

そんな！お前まで見捨てないで？！
そ、そうだ！こういう時こそプロの力を・・・。

「って何で貴方まで俺にデバイス構えてんの！？」

《悪いな。お前と仲間扱いされると殺されそうでな。
とりあえずケースは任せて、心置きなく殺られてこい。》

俺だって死にたくないよ！！

「・・・なぁ少年。彼女達を宥めてくれないか？
暴力はいけないと思うんだ。」

此処は最後の良心であり、同じ男であるエリオ！お前に期待する！

「・・・すみません。流石に僕ではどうにも出来ません。」

目を逸らさないで！お願い！！
あぁ！しかも今の一言で「こっちは何時でもいけるぜ。」みたいな空気になっちゃったし！！

こうなれば最後の手段！

「逃げたもんがｔ「不味い！散開しろ！」？！ちぃ！！」

突然のシオンさんの言葉でその場を飛びのくと、紅い魔法陣が展開。

執行者が出てきた。その数約５０。
雑魚のモンスタータイプ。それにデーモン級が三体か・・・。

さて、こっちにだけ出てくるとは考えられない。
恐らくヘリの方にも出てるだろうな。

と、なると。

「先ほどの事は謝る。いやマジで。
此処は一つ、共同戦線といかないか？」

洒落にならない状況に、俺は少し冷や汗をかきながら五人に尋ねる。

「「「「「いや（です）。」」」」」

エリオ以外即答かよっ！

「先ほどはコイツが馬鹿な事をして済まないと思っている。
だがお前達自身のためでもある。協力してくれないか？」

「「「「「分かりました！」」」」」

またしても即答！しかもエリオ、お前もか！！
俺の扱いがドンドン酷くなっていく！

あまりの扱いにキレそうになるが、俺とシオンさんはティアナ達のサポートをする為、遊撃を始める。
だが如何せん数が多い。
それにエリオやキャロは若干動きが硬くなっている。

これは少しよくない流れだな。

《ハヤト。一気にきめるぞ。》

当然シオンさんも気付いたみたいで、俺達は手札を切る事にした。

《了解！ブレイブハート！必殺技2、いくぜ！》

《弾道計算、反動計算、プロテクト準備、誤差修正、減衰魔法準備、多重魔力弾準備及び外殻準備。
・・・完了。何時でもいけます、マスター。》

必殺技2は1に改良を加えたもの。
コイツは1の性能をまた別の形で作り出したものだ。

正直前の俺だったら出来ない芸当だが、度重なる訓練（シゴキ）と実戦により、俺はより複雑な魔力制御が可能になった。

俺の目の前にソフトボールより少し大きいくらいの魔力弾と、小指の爪くらいの魔力弾が現れる。
俺は大きい弾丸をデーモン級に向けて発射！
その速度はあまり速くない。
だがそれでいいんだ！！

「必殺！俺の必殺技パート2！！」

《マスター、それは完全にパクリというものです。》

そこは気にしないお約束だ！

俺は残るもう一つの弾丸を『先ほどの弾丸』目掛けて発射する！

「くらっとけ！『アヴァランチ・シューター』！！」

二発目が当たった瞬間、最初の弾丸が弾け、中から無数の極小の魔力弾が弾け飛ぶ！

無数の弾丸は、デーモン級と周囲の執行者（１０体ほど）を容赦なく貫く。

勿論、ティアナ達には当たらないようにしてあるさ。

さて、この必殺技２について説明しよう。

これは、１発目の中に閉じ込めていた加速処理を施した大量の弾丸に２発目が接触することで、加速を開始。

つまり、２発目は加速処理の拘束を解除する謂わば『鍵』のような役目だ。

拘束が無くなった事により、中の魔力弾は狙い通りの方向に高速で飛んでいくってわけだ。

この時、１ほどの加速は必要ない。

なぜなら、１よりも更に『小さい点』で捉えるため、貫通力が半端じゃなくなるってわけよ。

まぁその代わり、そう何度も使える技じゃないんだよな。

しかも俺の場合、分割して情報処理をしないといけなかったから２発の弾丸に分けるハメになったし。

おい。才能無いとか言ったヤツ。後でシバく。

《マスター。誰に突っ込んでいるのですか？》

ブレイブハートの呆れたような声に、俺は現実に戻る。
ふぅ、危うく気が狂いそうになっちまった。

少し冷静に成った俺は辺りを見渡す。
すると既に残るのはデーモン級一体と6体の雑魚。

って、シオンさんアンタ今のやり取りの間に何体潰したんですか?!
ほら!スバル達が呆然としながらシオンさんを見てるし!
ねぇ、俺だって結構凄い事したほうだよ?!

くそっ、最後くらい見せ場を作らねば!止めは俺がやってやる!

「さてそんじゃあ終わりにしまs「ドゴォォォンッ!!」うおっ?!」

いざ仕上げに取りかかろうとすると、下水道の天井がぶち抜かれたように崩れる。
ヤベェ、なんかコレをやりそうな人に心当たりがあるんですけど!!

《!馬鹿やろう!逃げろハヤト!!》

「は?って、なんじゃコリャァ?!」

呆気にとられていると、足元に魔法陣が展開。
俺はそのまま氷の檻に囚われた。

てかさむっ!メッチャさむっ!
急いで出ないと凍え死ぬって!

俺はブレイブハートを構えた直後。

「ぶち抜けぇぇぇぇぇ！！」

少女の叫び声と共に俺の視界に入ってきたのは、氷を破り全力で振りぬかれた、先端の尖った金槌だった。

――――――――――――――――――――――――――――――

「ぎゃあぁぁぁぁぁっ！！」

「「ハヤト？！」」

「「「ハヤトさん（君）？！」」」

いやぁぁぁぁ？！

ハンマーが、赤いロリのハンマーがぁぁ！！

「頭が！俺の頭がブチ撒けられて頑固な汚れにーー！！」

「ちょ、落ち着きなさい！」

「ハヤト！しっかりしてっ！」

「はっ！！」

スバルとティアナの声に何とか我に返った俺は、直ぐに頭の様子を確かめる。
良かった！ちゃんと形を保ってる！！
ホっと一安心した俺は辺りを見回す。って此処は。
「下水道・・・・・？」
なんで俺はこんな所に。てかなんで俺は寝起きみたいなポーズになってんだ？
う～ん、思いだせん。
「ハヤト。大丈夫？」
スバルとティアナが心配そうに俺を覗き込む。
あれ？なんか違和感が・・・。
「俺は一体何をしていたんだ？」
「え、えーと。が、ガジェットが攻撃をしてきた時に飛んできた壁の破片がハヤト君に当たったのよ。
それから今まで気を失ってたの！」
必死に先ほどまでの光景を思い出そうとしていると、ギンガが説明してくれた。
くそっ、鉄くずの分際で生意気な・・・って！
「騙されるか！お前が壁をぶち抜いたのが原因だろうがっ！」

何故か唐突に思い出したよコンチクショウ！
ん？そういやぁ、何を思いだそうとしてたんだ？

「まぁ無事でなによりだわ。
アンタ、夢を見てたみたいね。
というか、よく夢まで見る事が出来たわね。」

若干呆れたようにティアナが言う。
くそぅ、俺のせいじゃねぇってのに。

と、そこでふと、違和感の正体に気が付いた。
そう。原因はティアナにあった。あぁ、なるほど。

「ティアナのボリュームが少ない。」

「もう一度寝てなさい。」

直後、俺の頭に凄まじい衝撃が奔った。
そして俺は再び（？）意識を手放した。
あれ？なんかデジャブ。

ーーーーＳｉｄｅ　？？？ーーーー

「どうやら実験は成功したみたいね。」

無事に彼ーハヤトーの意識が戻った事に、私は笑みを浮かべる。

「それにしても、随分思いきった事をするね。
まさか、彼の『精神のみ』を『あちら』に飛ばすとは。」

そんな私に呆れたのか、『彼女』が私に声をかけてくる。

「まぁ、彼には『この世界』ではまだ発現していないけれど、『ギャグ補正』のステータスがあるもの。万が一、世界の境界に飛んでもなんとかなるでしょうし。」

そうじゃなきゃ彼を実験台になんかしないし。

「さて。もう『此処』にはもう用は無いわ。次の世界に行きましょう？『イセリア・クイーン』」

「はぁ。相変わらず自由というかなんというか・・・。分かったわよ『フレイ』。」

私達は空間を接続して、別の世界への道を作り出す。

「ハヤト＝ロックウェル。もしかしたらまた今度、協力してもらうかもしれないから。覚悟しておいてね？」

去り際に一言呟いて、私は次元の穴を潜り『この世界』から姿を消した。

ーーーーSide Outーーーー

特別出演！ＰＡ《プライベートアクション》　ハヤト＝ロックウェル編（後書き）

如何だったでしょうか？
ラモン先生、こんな下手くそな内容になってしまって申し訳ありません！！

更には必殺技の改良型。かなり無理やりの設定になってしまいました。

くそぅ、文才の無さがマジで悔しい。

そして人様のキャラクターを扱うことの大変さを知りました。

シオン「それにしても、グダグダとした長い話になりましたね。」

メガシオン（仮）「ホントだよ。先生と先生のファンの方々に謝れ。」

本当に申し訳ありませんでした！
いやでも、これでもいくつかカットしたんだよ？

シオン「あなたはどれだけ長い話を作る気だったんですか・・・。」

メガシオン（仮）「いや。単に文才が無いから纏める事が出来なかっただけだろう。」

全くその通りで。

シオン「因みに、この話は先生の作品及び原作ではどのあたりなんですか？」

この話は、原作で下水道でティアナたちがギンガと合流するところ。

先生の作品でいえば、ハヤト君がギンガの登場のよって気絶している最中のはなしだね。

こっちが書いている話の設定上、こんな強引な形でないと登場してもらうことができないから。

ハヤト（精神体）「ちょっと待て！それじゃあ俺のレアスキルはもう使えないのか？！」

それについては何とも言えない。

まぁ君がこっちに来ているときの記憶は、『彼女』達によって消されてるから。　運がよければ使えるかも？

ハヤト（精神体）「神よ！どうか俺にチャンスを！！」

兎にも角にも、先生。

ハヤト君の出演許可有難う御座いました！

特別出演！ＰＡ《プライベートアクション》　リオス＝コーネルド編（前書き）

まず初めに。
こんなにも更新が遅くなってしまい申し訳ありません。
そして神崎先生。特別ＰＡ承諾からあまりにも時間が経ちすぎてしまい、本当に申し訳ありませんでした。

さて、今回の話はタイトルの通り、神崎ハヤテ先生の作品。
【魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～氷翼の天使～】の主人公、リオス＝コーネルド君の話です。

神崎先生の作品を穢されたくない方は、読まないほうがいいです。
なんせ私、アシェーリトは駄目駄目ですので。

ですので、誤字・脱字・批判等御座いましたら何でもお願いします。
それではどうぞ。

特別出演！ＰＡ《プライベートアクション》　リオス＝コーネルド編

～Ｓｉｄｅ　リオス～

「い、いらっしゃいませ！『お嬢様』！」

僕は今、クラナガンの一画にある喫茶店＜アクアエリー＞で臨時のバイトをしている。

たった今も、新たに来店して来たお客様に対して、営業スマイルで迎え入れたところだ。だけどその笑顔は若干引き攣ったものになっていると同時に、羞恥心から顔が真っ赤になっているのが自覚出来る。

お客様を席までご案内し注文を取った僕は、注文された品を準備する為に厨房へ戻ろうとする。すると、先ほどのお客様達と、そのお客様達と仲の良いウェルチさん（執事の服装）の話し声が聞こえてきた。

「ね、ねぇ！今の男の『娘』、すっごく可愛かった！！」

「だから言ったでしょ？あのこ、最近入ってきた子で、『リオスちゃん』っていうのよ！あぁ、今日という日にこのお店に来れて良かったわぁ～♪」

「ふっふっふ。どうですかい、お嬢さん方。うちの秘蔵っ子、リオスちゃんは！」

「最高ですっ！」

「ウェルチ！良い仕事するわね！」

小声で話しているつもりなんだろうけどバッチリと聞こえてくるその言葉に、僕は足早に厨房へと向かった。きっと、さっきよりも顔が赤くなっているだろう。

さて。何故僕が羞恥心を感じながら、そして何故リオス『ちゃん』と呼ばれていたのか・・・。それにはちゃんとした・・・といえるのだろうか。ま、まぁ理由がある。それは一緒にこの店で働いている女性店員のウェルチさんの発案したイベントによるものだ。度々行われるらしいこの企画だが、今回初めてにして、最悪の企画にあたってしまった。その企画とは――――

『男女逆転デー（メイド・執事ｖｅｒ）』

そう。つまり今の僕は女性の格好。しかもどこから調達してきたのか、メイド服を来て仕事をしているのだ。漸く仕事に慣れてきたというのに、何故こんな事になってしまったのか。いや、そもそも何故僕が喫茶店でアルバイトをしているのか。それは約二週間ほど前に遡る――――

最近になって僅かな記憶と共に新たな能力（ちから）、【ストライクフォーム】を使えるようになった僕は、その能力を使いこなせるようになるための訓練を始めた。
その際に、最早一種の病気といえるだろう、シグナムさんとの模擬戦をしていた時に【それ】は起こった。

シグナムさんとの模擬戦の最中に、僕は一度距離をとってからストライクフォームへ移行。そこからスピードを活かした戦法に切り替えようとしたまさにその時だった。突然目の前に【何か】が現れ、視界が暗転。そして気が付いた時には、僕は全く見覚えの無い森の中にいた。

グロリアスと状況を把握しようとした時、背後から全身黒尽くめの黒衣の男が突如現れた。僕は黒衣の男と戦闘になる事を覚悟で話しかけると、どうも僕達の間で情報に食い違いがある事が分かった。そこで、僕は詳しく話を聞こうとした時。僕達を囲むように赤い未確認の魔法陣が出現。そこから大量の異形の化け物が現れた。
お互い聞きたい事もあった僕達は、一時的な共同戦線をはり。そして――――

と、いうのが始まりで、現在に至る。
如何やら『この世界』は『僕のいた世界』とは違う、所謂『平行世界』というやつらしい。限りなく近いけれど違う世界。当然、僕は『この世界』で身分を証明出来るものもなければ、満足に生活出来る場所すらない。そんな僕に救いの手を差し伸べてくれたのが、件の黒衣の男であり、この店のマスターであるシオンさんだった。
裏社会にも通じている彼は、『元の世界に』戻るための手がかりを見つけるのを手伝ってくれるだけでなく住む場所も提供してくれた。
彼のお陰で『この世界』でもなんとかやっていけてるようになり、

後は手がかりを掴むだけ。ならばその間に、少しでも恩を返そうとして思い付いたのが、この店の手伝いだった。

元々お菓子作りの趣味があった僕は、直ぐに採用となった。あとは接客の対応だったのだけれど、そこはシオンさんとウェルチさんが丁寧に教えてくれた。その甲斐もあって、今では厨房だけでなく実際にお客様の対応もするようになったのだけれど、今この瞬間だけは、その事を少しだけ後悔している。

そんな僕の所へ、先ほどのお客様達と談笑していたウェルチさんがやってくる。その姿は心なしか生き生きしているように見えた。

「こら！駄目じゃない、そんなに溜め息なんてついちゃ！折角の可愛い顔が台無しじゃない！
もっと笑顔でご主人様、お嬢様方を癒して差し上げないと！ね、リオスちゃん♪」

「誰のせいでこんなにも辛い想いをしていると思ってるんですか！それからその呼び方はヤメてくださいってば！！」

「えぇ～。いいじゃない、可愛いんだから。お客様のうけもいいんだし～」

「僕はイヤですよ、こんな格好！だいたい、なんで性別を逆転する必要なんかないでしょう？！
しかもメイドに執事とか、訳が分かりません！！」

「何を言っているんだい、リオスくん！いや、リオスちゃん！！
こういったインパクトのある演出でこそ、常連のお客様が飽きてしまわないようになるし！更には、新しくきたお客様にも絶大な印象を――――」

「ウェルチ！何時までおしゃべりをしているのですか？早く手伝ってください！」

口を尖らせながらそんな事をおっしゃりやがるウェルチさんと口論を続けていると、痺れを切らせたのか、シオンさんがやってきた。腰に手を当てて如何にも『怒っています』とアピールするようにしている彼もまたメイド服を着ているが、何故かその威厳は保たれたままだった。

しかし、この人は男であるのに何故こうも堂々とメイド服を着ていられるのだろう？あれかな、これも『職人魂』ってやつなのかな？だとしたら、シオンさんはもの凄い人なのかもしれない。色んな意味で。

「は、はいっ！只今っ！！」

シオンさんの一喝を受けたウェルチさんは、慌てて厨房を出ていった。それでも確りとたくさんの注文の品を間違えずに持っていったのは、流石といえるのかもしれない。

「ふぅ。全く、ウェルチは・・・。リオス君、余り気にしないで下さい。彼女も、まぁ悪気があった訳ではありませんので」

「そうでしょうか？悪意というか、かなりの悪戯心はあるみたいですけど」

ジト目でシオンさんを見ると、目を泳がせる。何だかんだ言っても、シオンさんもウェルチさんの行動が若干、というか行き過ぎていることは分かっているようだ。

「ま、まぁ！今は辛いかもしれませんが、このイベントは今日だけですから。あと少しの辛抱ですので頑張ってくれませんか？」

「そ、それはそうかもしれませんけど・・・」

《大丈夫ですよ、マスター！マスターのその御姿はとても似合っています！自身を持ってください！》

「・・・・・・」

「あ、あはは・・・・。そ、それでは私は先に持ち場に戻りますので！」

グロリアスのとんでもない発言に、僕は絶句。シオンさんは乾いた笑みを浮かべたあと、厨房を出て行った。

・・・なんだろう。グロリアスは何処か壊れてしまったのだろうか？『この世界』に来てから、どうも発言がおかしくなっている気が・・・。それに、若干発言がウェルチさんのように感化されている気がする。

ちょっとした不安を感じながらも、仕事を途中で放り出す訳にもいかないと自分に言い聞かせる。一度深呼吸をして気持ちを切り替えた僕は、再び戦場へと足を向けた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

「リオスちゃん、注文お願い！」

「はい、ただいまっ！！」

「リオスちゃん！一緒に写真撮ろ～♪」

「ぇえ？！そ、それは「お嬢様方。申し訳御座いませんが、メイドとの写真撮影には別料金が発生しますが宜しいでしょうか？」ちょ、ウェルチさん？！」

「「もちろんっ！！」」（素晴らしいサムズアップ）

「お、落ち着いてくださいお嬢様方！とりあえず鼻血をどうにかしてください！！」

男女問わず、様々な客の（欲望にまみれた）対応をしているリオス。その様子を、常連客である中年男性とシオンは温かく見守っていた。

「いやぁ、リオスちゃんも大分慣れてきたみたいだね～。あ、シオンさん。コーヒーのおかわり、お願い」

「有難うございます。そうですね、リオスさんは努力家ですから。このまま正社員として雇いたいくらいですよ。どうぞ」

男性と談笑しながらも、シオンはおかわりを注ぐ。

忘れてはいけないが、この男もまたリオス同様メイド服を着ているのだが、全く動じていない。しかもこれまたリオス同様、完璧に着こなしている。

唯一違う点があるとすれば、リオスが可愛いと表現でき、シオンが綺麗と表現出来るところだろうか。どっちにしろ、二人は客の目を惹いている事にかわりは無いのだが。

少しだけ男性と話をしたシオンは、その場を離れ他の客の対応へ向かった。

そんなこんなで、この日のアクアエリー店内は色んな意味で賑やかになっていた。その熱気はこの日の営業終了まで続いたという。そして余談だが、この日の売り上げはアクアエリー史上最高の売り上げを記録した日になり、それを知ったリオスとシオンは複雑な気持ちとなるのだった。

ーーーー数日後ーーーーー

～Ｓｉｄｅ　リオス～

「さて、と。・・・うん、必要な物はこれで大丈夫かな」

「リオス君」

「あ、シオンさん！」

出かける準備をしていた僕のところへシオンさんがやってきた。

「今日の休暇、楽しんできてくださいね。あぁ、ウェルチでしたらこちらでなんとかしますのでご心配なく」

「有難うございます！」

《嬉しそうですね、マスター》

グロリアスの声に、僕は素直に頷く。
というのも、今日の僕は丸一日のお休みを貰えたからだ。今まで殆ど休みなんてとれない状況（主に先日のイベントの影響で）だったため、かなり嬉しかったのは事実だ。もっとも、理由はそれだけじゃないけど。

「まぁね。丸一日の休みなんて、滅多にないからね。
・・・それにウェルチさんの着せ替え人形になる心配もなくなるしね」

そう！今日という日はウェルチさんの魔の手から完全に逃れられるんだ。これが嬉しくない筈がない！今日は変な格好をさせられずに済むんだっ！

《そうですか、それは良かったですね。・・・残念、マスターの素晴らしい姿が見られると思ったのに（ボソリ》

「・・・・・え？」

《いえ、なんでもありません。それでは行きましょう》

「ちょ、えぇ？！グロリアス？！」

今かなり聞き捨てなら無い言葉を聞いた気がするんだけどっ？！てか、何度もいうようだけど最近のグロリアスは発言がかなりおかしい。なんせメイド服を着せられた時なんか、《キターーー！！》とか叫びだしたし……。
ま、まさか知らない間にウェルチさんに改造でもされているんじゃぁ・・・？！

僕の不安を他所に空中に浮かび上がったグロリアスは、僕の手を離れて店の裏口へと向かっていく。

「そ、それじゃあシオンさん！行って来ます！」

「え、えぇ。いってらっしゃい」

呆然としていた僕達だったけど、なんとか正気に戻った僕はグロリアスを追いかけ、店の外へと出た。その後ろ姿を見送ってくれたシオンさんは、きっと乾いた笑みを浮かべていただろう。

「ね、ねぇグロリアス？もしかしてウェルチさんに変な改造とかされてないよね・・・？」

裏路地を歩きながら、今は僕の手の中に納まっているグロリアスに恐る恐る尋ねる。するとグロリアスは――

《いえ、ウェルチさん『では』ありません》

「――え？」

――意味深な返事を返してきた。

ウェルチさん『では』ない。つまり、何らかの改造をされた事は認めるけど、それはウェルチさんではない人物。しかし、それはありえない。シオンさんに限ってそんな事をする筈はないし、あの人達もそんな事をする筈が無い。となると、グロリアスに手を加えたのは別の『誰か』――

「い、いやっ。それこそ有り得ない！グロリアス！一体誰が――――！」

「その機にちょっと手を加えたのは・・・私達」

「――――え？」

突然背後から聞こえてきた声に振り返ると、そこには銀色の髪にネコミミを生やした、見る人全てが美少女だと答えるだろう少女がいた。背丈とその見た目から、恐らく１３～１４歳くらいだろうその少女の言葉に、僕は一瞬思考が止まる。

この子は今何て言った？『グロリアスに手を加えたのは私達』？

「ちょ、ちょっとキミ！どういうことか詳しく――――」

聞かせて、と言葉を続けようとした僕だったけど、ドンッという強い衝撃に体が揺さぶられ、言葉が詰ってしまった。何事かと目線を下に向けると、そこには僕の胸部を貫く巨大な槍があった。

「・・・・・え？」

その槍の出所は、目の前の少女だった。だけど胸部を貫かれているというのに、僕は何故か「この娘が持つには随分大きいなぁ」なんて事をボンヤリとしてきた頭で考えていた。

すると、少女は小さな口を開いて僕に語りかけてきた。

「大丈夫。貴方は死ぬわけじゃない。だって――――」

ただ、『元の世界』に戻るだけだから――――

その言葉を聞き終える頃には、既に僕の意識は闇に引き込まれていた――――

「――――ぅわあ！！」

僕は先ほどの光景で弾かれるように起き上がった。すると視界に飛び込んできたのは色で統一された部屋だった。この部屋には見覚えがある。そう、此処はたしか――――

「六課の医務室・・・？僕は確かあの店を出た後に女の子に刺されて――――ってそうだ！！」

慌てて僕は刺された胸を確認するが、そこには傷跡一つ残されてはいなかった。

「傷が無い？これってどういう・・・。それに何時の間に僕はこの服に・・・？」

そう。僕の記憶が正しければ先ほどまで着ていたのは私服であったはずだ。なのに今は最近着ることがなかったはずの六課の制服を着ていた。――――――――いや、違う。僕は確かシグナムさんと模擬戦をしていてその時に・・・。

「くっ！駄目だ、頭の中がうまく整理できない・・・」

どうにも状況が理解できず混乱していると、医務室の扉が開く音が聞こえた。僕はその音のしたほうへ目を向ける。するとそこには・・・。

「――――――！リオス君！」

「みんな・・・」

六課の面々が揃っていた。しかも、皆が凄く心配そうな、それでいて嬉しそうな顔をしていた。皆の顔を見た僕は、『何故だか分からない』けど、ついさっきまで一緒にいたはずなのに何故だか久しぶりに皆の顔を見たような気がした。

それから僕は、皆と少し話をした後、シャマルさんの診察を受けたのだった。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　？？？～

「ただいま・・・」

リオスを『元の世界』へ戻し終えた私は、真っ白な何も無い空間にいる二人に声をかけた。

するとその内の一人―フレイ―が口を開いた。

「おかえりなさい。ちゃんとリオスの記憶の修正とグロリアスの修理はしてきたわよね？」

「ん・・・。でも、ちょっと心配」

「あら、どうして？」

「リオス、少しだけど『あっち』に居たときの事を覚えてたみたい・・・。やっぱり、リオスには特別な『何か』がある・・・」

私がそう答えると、フレイは怒るどころか寧ろ嬉しそうな表情を浮かべ、「流石私が見込んだ男ね」と笑う。確かに、フレイの言うとおり、リオスには『何か』があるみたい・・・。

私達が一度話を終わらせると、今まで黙っていたもう一人が口を開いた。

「何にせよ、これで『ハヤト』に続きリオスによる『平行世界』の住人を転移させる実験は成功した。ともなれば、次の目標を探して更にデータをとらねば」

「そうね。それが『彼』と『あの世界』のためでもあるし、私の野望のためでもあるものね・・・。さて、それじゃあ任せたわよ、【ガブリエ・セレスタ】」

「心得た。しかし、【レナス】はどうするのだ？」

「何を言ってるの？私と【レナス】はこれからグロリアスが記録していたリオスのお宝映像を鑑賞するのに忙しいの！それに、アンタ

は女の子をこき使うつもり？」

フレイの言葉に少し逡巡したガブリエはしかし、「心得た」と言って何処かの世界へと向かった。
ガブリエなら、一人でも大丈夫、だよね。

「さぁレナス！早速お宝映像を鑑賞するわよっ！！」

「おー・・・」

とりあえず、今はこっちの方が大事。
・・・あっ。ティッシュ用意しておかないと・・・。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

特別出演！ＰＡ《プライベートアクション》　リオス＝コーネルド編（後書き）

やっぱり他の方のキャラクターを書くのって難しいよね。アシェーリトです。

リ「あれ？ここ何処ですか？リオスです」

シ「確かにその通りでしょうが、それでも更新が遅くなった理由にはならないと思います。シオンです」

ハ「そして他作者様のキャラクターの持ち味を出し切れない作者の駄文っぷり。首吊ってこいよと思います。ハイドです」

あぁリオス君。此処はちょっとした特殊空間だけど余り気にしないでね。

リ「は、はぁ・・・」

と、いうか。もう何かすみません。ホント、更新が全然出来ないよ。どうしよう・・・。

シ「泣かないで下さい、作者。気持ち悪いですから」

酷いっ！！

ハ「それにしても、なんというか。もう言葉がみつからねぇよ。てか、リオスになにしてるんだよ、お前は？！」

（映像上映中

リ「え?・・・うわぁ!何で僕がこんな格好を?!」

いや、確かリオス君は【氷翼の天使】の中で『可愛い』ってシャ○にいわれてたからつい・・・。

リ「それだけですか?!」

シ「ついって。あなたは・・・」

ハ「駄目だコイツ。まぁその事はもういい。それじゃあ、何でグロリアスに手を加えた事になってるんだ?」

それは彼女達があとで鑑賞するために、記録を残しておく必要があったからだよ。ちなみに、最後に某ロリ戦乙女がティッシュを用意しようとしたのは、確実に鼻血が出る事を予想していたからです。

シ・ハ「うわぁ・・・」

リ「そ、そんな理由でグロリアスが・・・」

まぁまぁ、そんなに気にしちゃ駄目だよリオス君。元気出して!!

シ・ハ「お前が言うな!」

さ、さて!それじゃあそろそろ時間も無くなってきたので、最後にリオス君!番宣どうぞ!!

リ「あ、はい。

闇の書事件から１０年。管理局のエースであるなのは、フェイト、はやての３人は、部隊?機動六課?を創設する。
一方、六課への入隊を前に研修として任務に訪れていたスバル＝ナカジマとティアナ＝ランスターの二人は、記憶喪失の青年を保護するが……。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳのストーリーをベースに、オリジナルキャラクターである僕、リオス＝コーネルドを交えた２次創作ストーリーです！」

今回作者の実力不足でリオス君の魅力を引き出しきれなかったので、皆さん是非読んで見てください！！

シ「お疲れ様です、リオス君」

ハ「作者。ちゃんとお土産用意してるよな?」

当然！今回は此方です！！

【ウェルチ特製　メイド服】

リ「えええ?!ちょっとこんなの渡されても『それじゃあリオス君、お元気で！転送！』ってうわぁぁ！！」

シ「作者・・・。今回は最後までふざけた事をしてくれましたね・・・」

ハ「何か逆に突っ込むのがつかれてきたわ」

そうかい。それじゃ今回はこのへんで失礼します！

神崎先生、如何だったでしょうか？
何か気になる点があったら連絡ください。それから、投稿までに時間がかかってしまい、本当に申し訳ありませんでした。

超・番外編！続・ＰＡ《プライベートアクション》　リオス＝コーネルド編（前）

今回の話を読んで下さる皆様に、最初にご説明させて頂きます。

今回の【超・番外編！】についてですが、この話は前回私、アシェーリトが投稿しました【特別出演！ＰＡ（プライベートアクション）　リオス＝コーネルド編】の続編を神崎先生が書いて下さったものです。

そのため、物語が分からなくなってしまう事を防ぐために、元となった話が投稿されている私の所へ投稿させていただく形となりました。

ですので、今回の話における感想は、是非神崎先生へ送ってください。

それではどうぞ。

～Ｓｉｄｅ　フェイト～

「う～～～ん……」

「なのは、どうしたの？」

部屋で、モニターを凝視しているなのは。

それを不思議に思い、私はコーヒーを淹れつつ訊ねる。

ずっとそうだ。

リオスがこの前シグナムとの模擬戦中不意に消え、不意に現れた時からなのははずっとこのような様子で唸っている。

果ては、食事の際や仕事の際にまでこうなるので、私だけでなく他の六課の人々も気になっていた。

悩み事でもあるのか、と。

返事がないので、改めて私は訊ねた。

「ねえなのは。何か悩んでいるなら私にも話して？　友達でしょ？」

そう言うと、なのははは漸く私へ顔を向けて、

「あ、うん。私は平気だよ。ただ……」

「ただ？」

「これ……」

示された映像に、私はどれどれ、と言って、コーヒーを啜りながら目をやる。

すると。

「ぶっ！」

あまりの映像に、私は口に含んでいたコーヒーを吹きそうになってしまった。

否、実際少し吹いてしまったかも。

「ゲホ、ゴホ……な、何これ！？」

なのはが見ていた映像。

それは、リオスが喫茶店にて接客をしている映像だった。

しかも、あろうことか本来女性が着る代物であるはずの、メイド服なるものを着て、死ぬほど恥ずかしそうに顔を真っ赤に染めて。

「グロリアスに残ってた映像だよ。でも、おかしいよね？　リオス君、喫茶店でバイトしてたなんて話、聞いたことないし……」

「そうだね、確かにおかしいよね」

それには、私も同意した。

リオスはあまり六課の外へ出ようとはしない。

迷子になったりするのを防ぐためかと思っていたが、本人曰く、ここが一番居心地がいいからなのだという。

それでも外のことを知っているのは、時々はやてが有休を使って連れ出しているからなんだけど……。

「それにしても……」

ちら、と私はその映像を横目に見やる。

自分でも、顔がみるみる赤くなっていくのが解る。

「うん……」

なのはもまた、紅潮した顔でモニターに目をやり。

「「可愛過ぎる……」」

私達は同時に、そう声を漏らした。

「何で？　リオスって男の子だよね？　なんでこんなに可愛いの？」

「確かに、リオス君童顔だし、中性的だし、背も標準に比べて少し低いくらいだけど、これは……」

「破壊力ありすぎだよね……」

「うん……」

私達が言うこと、見てみれば解るけど決して大げさじゃない。

映像の中のリオスは顔の赤みや恥ずかしそうなもじもじとした様子も手伝ってか、かなりの破壊力を有していた。

おそらく、映像を見せられて「この子、女の子です！」と事情を知らない第3者に見せれば、十中八九信じてしまうだろうと思う。

「ふっふっふ～♪　ええもん見てるやないか、お2人さん？」

「……はやてちゃん？　どこから入ってきたのかな？」

おかしい。ドアにはちゃんとロックがしてあったはずなのに。

そう考える私達の思考を嘲笑うかのように、どこぞやの怪盗のように密室に侵入し、私達の後ろに音もなく忍び寄ったはやてはちっ、ちっ、ちっと指を振る。

「ふふん、細かいことは気にしたら負けやで。なのはちゃん」

細かいこと……なのかな？

そう思うけど声には出さない。

すると、はやてがずいっ、と身を乗り出して、私達が見ていた映像を凝視した。

――――――それはもう、恐いくらい鼻息を荒くして。

「ほほう、これがリオス君か？　全然見えへんやん。……あかん、可愛すぎや。お持ち帰りしたい……」

「は、はやて。何だか目が恐いよ……」

「そや。ちょうどいいものがあったんやった。ちょっと待っててくれるか、２人共？」

そう言い残し、部屋を出て行ったはやてを待つこと数分。

「じゃじゃーん！」

大きな声と共に部屋に入ってきたはやての手にあったのは――――。

「「ええっ！？」」

映像の中でリオスが着ているのと同じ、メイド服だった。

「そ、それどうしたのはやて！？」

「いや、この前部隊長室整理してたら何故か出てきてな」

なんで部隊長室にそんなものがあるんだろう？　いろいろ突っ込みたいけど、今はこの服をどうするのかだよね。まさか……。

「ま、まさかはやてちゃん……」

なのはも、はやての意図に気付いたみたい。

「そのまさかや、なのはちゃん。これより、リオス君にこれを着せに行こうと思います！」

「「えええええぇぇぇぇぇ！？」」

「2人だって、リオス君が実際に着ているとこ、見たいやろ？」

「う……」

「それは……」

図星を突かれ、押し黙る。

そして、そのままコクリ、と頷いてしまった。

「じゃ、決まりやな。しゅっぱぁーつ！」

こうして、リオスにメイド服を着せよう大作戦（はやて監修）が開始されてしまいました。

……止めないのかって？

こうなったら、はやてはもう誰にも止められないよ……はぁ。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　ヴァイス～

「うっ、何か悪寒が……」

俺のガレージでもくもくと趣味の機械弄りに耽っていたリオスが、そう言って身を震わせている。

あいつは現在、ここで自作メカの製作にあたっている。

今作っているのは、前回隊長たちに好評だったマッサージ器。その改良型だ。

その側で、俺はバイクの点検と修理を行っている。

「どうした、風邪か？」

「う～ん、解らない。具合はいいはずなんだけどね」

「無理すんなよ。今日のところは、部屋に戻ってゆっくり休んだらどうだ？」

「そうだね。じゃ、そうしようかな。ごめん、整備はまた今度手伝うよ」

「おう。じゃ、またな」

そうして、リオスが去っていったちょうどその直後、その場に隊長

達がやってきた。
何かあったのか？
「ヴァイス君！」
「おお、隊長さん方じゃないっすか。どうしました？」
「ここに、リオス来なかった！？」
「え、ええ。さっきまでここにいましたけど……」
3人のいつにない勢いと迫力に、押され気味になり、俺は数歩後ずさる。
「と、なると行き違いかぁ。あ～、惜しい！」
「え～と、話が見えないんすけど？」
「実はね……かくかくしかじかっていうわけなんだよ」
なのはさんの説明に、なるほど、と俺は相槌を打つ。
しかし面白そうな話だ。
あいつの女装か……やべえ、見てみたい。
「そや、ヴァイス君ならリオス君の行き先に何か心当たりあるんやないか？　仲ええし」
「ええ、リオスならたぶん自分の部屋にいると思いますよ。……よ

し、それなら俺も協力しますよ」

こんな面白そうな話、乗らない手があるか！

俺がそう悪どい顔で提案すると、部隊長も乗ってきた。

「そういうことなら、六課全員で対処せなあかんなぁ。こんな面白いこと、私らだけで独占したら罰が当たるで」

「おお、いいですね！　よし、それなら俺はフォワードの連中に声かけます！」

「そんなら私は、ロングアーチにでも……。しかし、ヴァイス君も悪やなぁ」

「いえいえ、部隊長ほどじゃないっすよ」

「フフフフフ……」

「ハハハハハハ……」

「……2人共、すっかり悪者の顔になってるの」

なのはさんの突っ込みは、俺達2人の含み笑いにかき消されて消えた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　リオス～

「おおう！？　また一層強い悪寒が……」

自室に帰ってきた僕は、机についてグロリアスのデータの改良を行っていた。

ストライクフォームの超高速は確かに強力だが、その強力さ故に使いすぎると命を削る諸刃の剣である。

それならばと、グロリアスにストライクフォーム起動時のプロテクトをかけることにした。

つまり、限界時間が訪れた場合、自動的にグロリアスがその発動を強制終了させる、というものだ。

これさえあれば、使いすぎて自滅することもなくなるだろう。

『Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？（大丈夫ですか？）』

「ああ、うん。平気だよ、グロリアス」

そうは言っても、こう何度も悪寒が続くとあれば、調子が悪いのだろうかと考えてしまう。

僕は一旦作業を中断すると、スバルも絶賛したふかふかのベッドに

重力に身を任せ勢いよく倒れこんだ。
途端に、どうしようもない睡魔が襲ってくる。
「ふう、ちょっと、休……憩……むにゃむにゃ」
よほど疲れが溜まっていたのかな。僕は、そのまま一気に眠りに落ちてしまった。
しかし、その時の僕は知らない。
その油断が命取りだったのだということを。
部屋のドアの僅かな隙間から、見ている者がいることを。
～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～
「ふふふ、寝てる寝てる……」
リオスの寝ている部屋の外で、数人の男女がドアの隙間からベッドに突っ伏すリオスを見つめている。
「ちょっと、本当にやるの？」
「当たり前やろ。さあ、作戦開始や！」
子狸の野望が、今動き出した。

――――数分後。

～Ｓｉｄｅ　リオス～

「う……ん……」

何も見えないほどの真っ暗闇の中、僕は目を覚ました。

寝ぼけ眼で状況を確認する。

確か、自室のベッドでそのまま眠ったはずだよね。

けど、それなら体が縦に重力を受けているのはおかしい。

さらに言えばカーテンを開けておいたし、たとえ閉めきっていたとしても、いくらか明かりは入ってくるはずだから、ここまで真っ暗なのは有り得ない。

それが示すのは、ここが自室ではないということ。

確認した方がいいよね。

そう思って、動こうとする。でも……。

――――ジャラッ。

「？じゃら？？」

見ると、自分の体は鉄の棒のようなものに、鎖で完全に拘束されていた。

「え？　え？　何、この状況！？」

突然のことにパニックになる。

当然でしょう。

誰だって起きたら監禁されてました、なんて状況になったらパニックになるに決まってます。

そこへ、タイミングを図ったようにドアが開いて、数人の人が入ってきた。

同時に、照明がついて部屋の様子が見える。

その人達の顔ぶれに、僕はさらに驚くことになります。

「えぇ！？　なんで皆が！？」

そう。

目の前に現れたのは他ならない、なのは達隊長陣だった。

何故か、後ろにヴァイスの姿も見える。

「ふっふっふ、リオス君を捕まえた理由は他でもあらへん。これや！」

ばっ、とはやてが手を振りかざした先にあったのは――――――。

「あ、あれは！」

記憶にはないけど、あれは確かグロリアスの中に何故かあった映像記録の中の僕が着ていたメイド服。

……なんだろう。果てしなく嫌な予感しかしない。

「ふふっ。さ、これ着てみて♪」

「やっぱりかあああぁぁぁぁぁぁぁぁ！　嫌に決まってるでしょ！　何考えてんの！？」

「おおっと、これは部隊長命令や。意義は認めへんで」

「それ職権乱用！……ていうか寝てたんだから、無理矢理着替えさせることも出来るじゃないか。どうしてやんなかったの？」

「え？　だって、男の子の服を脱がせるだなんて……」

「変なとこで乙女だね……」

そう言って、途端に顔を紅くしてもじもじとし出すはやてに突っ込む。

というか、ヴァイスにやってもらえば済む話では？　とも思ったが口には出さない。

わざわざ敵に塩を送るような真似は避けるべきだ。

「ええい！　ずべこべ言わずさっさと着替えんかい！」

「お断りします！　グロリアス！……って、あれ？」

いつもならＡｌｌ　ｒｉｇｈｔ．と言って即座にバリアジャケットを展開してくれるはずのグロリアスの声がしない。

「無駄やで。グロリアスならここや」

そう言って、はやてがポケットから取り出したのは、待機モードのグロリアス。

『Ｍａ，Ｍａｓｔｅｒ……（ま、マスター……）』

「グロリアスぅ～～～～～……」

最後の望みも絶たれる。

が、そこであることを思いついた。

僕の記憶が正しければ、このポケットにアレがあるはず！

「さぁて、観念しよか……リオス君？」

はやてがじりよって来る。

でもっ！

「それっ！」

僕はポケットの中に入っていたそれの力を、発動した。

次の瞬間、僕の手元で小爆発が起こり、手を拘束していた鎖を破壊する。

「な、何や！？」

まさか抵抗されるとは思ってもみなかったらしいはやてが驚いたような眼差しでそう言う。

「ふふふ、これこそグロリアスがもし万が一使えなくなった時のためにとっておいた予備のストレージデバイス！　グロリアスほど強くないけど、似たような機能を発現できるのだ！　では、さよなら」

そう言い放ち、グロリアスのより少し簡素になった騎士甲冑をストライクフォームに変化させ、僕はその場を離脱した。

「追って！　なんとしてもこれを着せるんや！」

そう叫ぶはやての声が徐々に遠ざかっていく。

……このくらい仕事にも情熱を注いでいただけるとありがたいんだけど。はぁ。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　ヴォルケンズ～

「何、主はやてと連絡が繋がらない？」

そう言葉を発したのは、シグナムだった。

現在ヴォルケンリッター達はとある任務により、ばらばらに別世界へと任務へ出ていた。

今シグナムは、モニター越しにシャマルと話しているところである。

仕事が終わったところで、同じく別の世界で仕事が終わったらしいシャマルから突然の連絡が入ったのだ。

《そうなのよ。他の皆にも繋ごうとしたんだけど、誰も出ないの》

「何かあったのだろうか……」

補助のエキスパートであるシャマルでも通信をつなげないのだ。

そう思うのが妥当だろう。

そこへ。

《邪魔するぜ～》

「ヴィータか。そちらも主はやてたちと連絡がつかないのか？」

《いいや、話したぜ。で、シグナム達にはやてから伝言。今六課総出で狩りをやってるから、通信されても出られない、だとよ》

伝言のないように、シグナムとシャマルはげっそりしたように項垂れた。

またあの主は何か始めたのか、と。

《狩りって……何かしら》

「知るか」

シャマルの呟きは、脱力したシグナムの言葉に、文字通りばっさりときられた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　リオス～

「「待あてえええええぇぇぇぇ！」」

「待ちませえええええぇぇぇぇん！」

ストライクフォームでなんとか窮地を脱した僕は、物陰に隠れながら必死に逃げ続けていた。

今追われているのは、アルトとルキノ。どうやらはやては、ロングアーチの方にも声をかけたらしい。

途中、こちらに熱っぽい視線を浴びせてくるグリフィスに行き会ったが……何もしてくる様子はないのでスルーした。

「そっち！」

「よし！」

なかなかの連係プレーで左右から捕まえに掛かる2人。いい加減しつこいです。

というわけで、少し反撃します。

「アクセルシューター」

空色の魔力弾がアルトとルキノへ向かっていく。

今まで追う側だった2人は、突然の得物からの反撃に、回避行動を取る。

……というか、この2人はこれほどまでに身体能力が高かったか？

兎にも角にも、2人が魔力弾に気を取られた一瞬のうちに、通路の脇道に逃げ込み身を隠した！

「えっ！？」

「どこいったの？」

2人のそんな声が遠ざかっていくのを確認して、僕は漸く一息つくことが出来た。

「ふぅ、危なかった……」

緊張が解け、完全に油断する。

すると。

「……リオス？」

横からそう声が聞こえ、びくっ、と僕は身を震わせる。

おそるおそる目をやると、そこには――――――。

「……あ、スバル」

「どうしたの？　こんなところに座り込んで」

「実は……」

僕は事情を、スバルに説明した。

「なるほど、部隊長がねぇ……。解った。私についてきて。匿ってあげる」

「本当!?」。

願ってもないことだ。

数少ない味方に出会え、僕はほっと胸を撫で下ろす。

「うん。じゃ、着いて来てね」

「うん!」

これで助かった!

そう思った僕だった。

しかし、それも全て間違いであったことに間もなく気付くこととなる。

しばらくしてとある部屋に入り、そこへ来てスバルに続いて僕も中へ入る。

「ここ? スバル達の部屋でもなんでもないけど……本当にここでだいじょ……」

僕の言葉は、最後まで紡がれることはなかった。

何故なら、僕の後ろから、スバルが見事な羽交い絞めを決めていたから。

完全に信じきっていた僕は、突然の事態に思考が追いつかない。

「す、スバル！？」

「……ごめんね、リオス。仕方ないよね。部隊長が今度アイス奢ってくれるって言うんだもん。なら従うしかないよね？」

「買収されてるうぅぅぅぅぅぅぅぅぅーーーーーーーーー！？」

思わず僕は絶叫した。

完全にはめられたのだ。

「それにこれは、ティアも了承してくれたんだよ？」

「ティアナが！？」

信じられなかった。

一番こういったことに興味がなさそうだというのに。

「うん。なんかね、なのはさんから送られてきた映像見て、顔赤くして『ありかも……』って呟いてたよ？」

「ティアナぁ……」

ということは、この事態は間違いなくティアナの入れ知恵だ。

しかし、今はものを考えている場合ではない。

この状況を何とかしなければ……。

そうだ。

一か八かだが、スバルなら――――――。

「ねえスバル、今度僕が思う存分アイス作ってあげるよ。だからさ、放してくれないかな？」

僕の提案に、ぴくっ、とスバルが反応する。

もう一息か。

そう考えていると、スバルは、

「……いくらでも？」

「いくらでも」

「何でも？」

「何でも」

「好きなだけ？」

「もう、大盤振る舞い」

それを聞き、スバルは無言で拘束を放し。

「頑張って！」

とてもいい笑顔でサムズアップした。

何かとんでもない約束をしてしまったような気がするが、逃げられるなら今はどうでもよかった。

スバルに礼を言って部屋を出ると――――――。

「あ、いた！」

早速見つかった。

廊下にいたのはフェイト。

――――――1番厄介な人に遭ってしまった。早すぎるんだもの。

そう思うがもう今となっては仕方ない。

すかさず、ストライクフォームを起動させて逃げおおせる。

「逃がさないよ！」

フェイトもまた、ソニックムーブを発動させて高速で追ってきた。

（なんだかんだで、フェイトも乗り気じゃん……）

そう思うも、僕が今使っているデバイスは所詮はグロリアスではない模造品なので、普段は不可視の高速行動を可能にするストライクフォームも、速度が大幅にダウンしてしまう。油断は出来ない。

そうして、ぎりぎりの鬼ごっこを演じたまま外へ出ると――――――。

「待ってました！」

なのはが、既に収束を終えた砲撃を今まさに放たんとしていた。

「えええええぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

あんなに大きな集束砲を喰らったら、僕自身は兎も角六課の隊舎がとんでもないことなっちゃうよ！？　なのはは住んでいる場所を更地にする気か！？

本当にそうなっては困るので、僕はそれを庇うべく、なのはの射線上へ無理矢理入る。

だが、それがいけなかった。

というより、集束砲の照準が僕よりも幾分逸れていることに疑問を抱くべきだった。

「なっ……これは、バインド！？」

用意周到に設置されていたらしいバインドが、僕の動きを拘束する。

しまった、と思うがもう遅かった。

「さあ、これでもう逃げられへんで！」

騎士甲冑を纏ったはやてが、そういいながら僕の目の前に舞い降りてくる。

幾重にも綿密に体を縛り上げられている。

破るのは至難だろう。

「こんなのぉっ……！」

僕はもがくが、上手く体に力が入らず、破るには至らない。

さらには隊舎から追いかけてきたフェイトと、砲撃を放とうとしていたなのはすらもそれを中断し、新たなバインドを仕掛ける。

これで、抜け出すのはほぼ不可能となった。

「く、くそぉ……」

「今度こそ、着てくれるな！？」

「うっ……」

はやてが、そうキラキラとした目で期待の眼差しを向けてくる。

いかにも「やったよ、褒めて♪」とでも言いたげな。

周りを見ると、なのはとフェイトもはやてほどではないにせよ、どこか期待するようにちらちらとこっちを見ていた。

生憎僕は、この3方向からの熱い視線に耐えられるほど無感動ではない。

「……解ったよ」

「ほんまか！」

「ただし！　一回だけだからね！？　写真とか撮らないでよ！？」

「解った！　ありがとうな、リオス君！」

そう言って、嬉しそうに抱きついてくるはやて。

「ちょ、ちょっとはやて！」

「さ、そうと決まれば早速行くで～～～～！」

そうして、リオスにとってはとてつもなく長かった鬼ごっこは幕を閉じた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

――――――そして、数時間後。

「さあ！　いよいよリオス君のお披露目やで！　皆！　心の準備はええか！？」

「いつでもいいよ、はやて」

「私も」

「どうして私まで……」

上から順に、はやて、フェイト、なのは、ティアナの順である。

無論彼女らだけでなく、捕獲に協力したロングアーチや、多くの同志を集めるため尽力したヴァイスの姿もある。

そして、はやてはいつの間にやら用意したステージのカーテンの前で、バラエティー番組の司会者の如く仕切っていた。

「リオス君、準備の方はどないや？」

訊くと、リオスの顔だけがカーテンの合間から姿を現す。

その顔は、羞恥の朱に染まっていた。

それでも、カチューシャをつけているのでそれだけでもう十分女の子である。

「お、終わったけど……。はやてぇ～、やっぱり止めようよぉ……」

「ええい、往生際が悪いでリオス君！　そぉれっ！」

「へっ……？　わああぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

はやての手でカーテンが一気に引かれ、リオスが前のめりにステージへ転がった。

「！！！！」

その姿を見て、その場にいる誰もが息を呑んだ。
比喩的表現に留まらず、本当にそんな音が聞こえてきそうである。

童顔で中世的な顔立ち。
さらさらとした髪は、カチューシャに纏められ一層華やかに。
細く白い腕や足。

どこをどう見ても、今その場にいるのは、女の子そのものであった。

「うぅ……そんなにじっと見ないでよ」

そう言って恥ずかしげに身を隠そうとするリオスの頬は紅い。
そればかりか僅かに涙ぐんでおり、その様子がさらに破壊力を増強させていく。

1人、また1人と、局員が鼻血を噴出して倒れていった。

脇の方では、ヴァイスが「なんでだ……なんであれが女じゃないんだ……」とうわ言のように呟いているのが聞こえる。

（もう死にたい……）

リオスの顔は、今にも沸騰しそうなほどに真っ赤だった。

その日、リオスの公開処刑は、ヴォルケンリッターが帰還し事態を収拾するまで続いたのだという。

――――――後日。

「リオスく～～ん、今度はこれや！　これ着てみて～～～～～！」

「もう勘弁してぇーーーーーーーー！」

セーラー服を手に、そう叫んでリオスを追い掛け回すはやての姿が、目撃されたとかされなかったとか。

超・番外編！続・ＰＡ《プライベートアクション》　リオス＝コーネルド編（後

神崎先生！とても素晴らしい番外編を有難う御座います！

とても楽しめました！

後ほど感想を書きに寄らせていただきます。

【今回の話を読んでくださった皆様へ】

前書きでも書いたように、今回の話は神崎先生が書いて下さったものです。

ですので、感想は神崎先生の元へお送りください。

ＰＶアクセス２０万突破記念！　ＰＡ《プライベートアクション》　ナンバーズ

はい、今更ながらのＰＶアクセス２０万突破記念のＰＡです。

もっと早いうちに投稿する予定だったのですが、結局出来ないままズルズルと今日まで引っ張ってしまいました。

今回のＰＡですが、今後の物語において結構重要なものでもあるんです。

それなら、もっと早く投稿しろよと思うかもしれません。申し訳ないです。

まぁ幸い、まだ収集がつく段階だったので、何とか修正を加えていき、投稿したということです。

若干、クアットロの口調や言動がおかしいかもしれませんが、それは私の書くこの作品において、彼女はほんの少しだけ性格が柔らかくなってしまうためです。

まぁ、『ちょっとだけきれいなクアットロ』程度に思ってください。

そこまでも無いかもしれませんが……。

それではどうぞ。

ＰＶアクセス２０万突破記念！　ＰＡ《プライベートアクション》　ナンバーズ

其処は一言で言えば、巨大な空間。

通路も、一つ一つの部屋の大きさも。かなりの広大さを誇る。

だが其処に太陽の光が届く事は無い。

代わりに無機質な人工の光が照らしているだけの、温かみの無い空間。

機械により作られたその場所こそ、現在六課が捜査対象としている広域次元犯罪者『ジェイル・スカリエッティ』のアジトなのだ。

そんなアジトの中で、現在彼等は各々活動していた――――――

――――トレーニングルーム――――

「はぁ、はぁ、はぁ……」

「トーレ、一度休憩を……しよう。無理な訓練は……逆に動きを鈍らせる……」

「あぁ。そうだな……」

全身に大量の汗をかきながら、ナンバーズ３＜トーレ＞とナンバーズ５＜チンク＞は、乱れた呼吸を整える。
その尋常ではない疲労具合から、先ほどまで過酷な訓練をしていた事が分かる。
息も絶え絶えになりながら、漸く彼女達は休憩を挟んだ。

「いやぁ～。それにしてもトーレ姉もチンク姉もよくやるよねぇ～」

「たしかに。アタシから見ても少しヤリすぎだと思うよ。
はい、コレ。あとタオル。流石に汗拭いたほうがいいよ」

床に座りこむ二人に声をかけたのは、彼女達の『妹』にあたるナンバーズ９＜ノーヴェ＞とナンバーズ６＜セイン＞だ。
ノーヴェは少し心配そうに、セインは呆れたように二人に声をかけた。
二人は手に持ったドリンクとタオルをチンクとトーレに渡す。

「すまないな。だが、このくらいしないと、『奴』には追いつけない。そんな気がしてな」

「だからこそ、多少は無茶をせねばならん。
下手に外に出れない以上、こうして訓練する事で経験を積むか、ガジェットが集めてきたデータを蓄積させていくしかないのだ。」

二人はノーヴェたちから受け取ったドリンクを飲みながら、苦々しく語る。
実際、その感情は表情として出ている上に、ドリンクを持つ手に無意識の内に力を込めていた。

「で、でもっ！アタシ達はまだ最高の状態じゃないじゃんか！あと少ししたらぜってぇあんなヤツに遅れはとらねぇよ！」

思い詰める二人を励ますかのように、ノーヴェは語る。
しかし、その内容は＜相手にとっても＞同じことであった。

「姉達を励ましてくれるのだなノーヴェ。有難う」

「い、いや、その……。べ、別にそんなんじゃないよ、チンク姉！」

「だがノーヴェよ。あの男……隠者（ハーミット）もまた全力では無かった。前回は僅かだがその力を引き出すことが出来たが、恐らくアレもまだ全力ではないだろう……」

ノーヴェとチンクのやり取りに、少しだけ落ち着いたトーレは、自身に言い聞かせるように忠告する。驚愕する二人の表情を見たチンクは少しだけ笑い、トーレの言葉を引き継ぐ。

「ヤツの底知れぬ力は、実際に対峙せねば分からんさ。なに。何れ接触する時はこよう。その時はノーヴェ、セイン。共に戦ってくれるな？」

チンクの言葉にノーヴェは意気込んで頷く。セインもまた、「まぁ、アタシはサポートくらいしか出来ないけど、一応頑張るよ」と

言葉を返す。
そう言った直後セインは「そういえば……」と、何かを思い出したような素振りをする。

「ん？どうしたのか、セイン？」

「いやぁ。そういえば最近、クア姉を見てないような気がしてさぁ。チンク姉達の話からするとさ。隠者ってかなり面倒な相手なんでしょ？それにあのアンノウンも。だから、な～にしてんのかなぁって。やっぱ何時もみたいに余裕だから訓練もしてないのかな？」

うんうんと唸っているセインの言葉に、僅かに逡巡したチンクは、その答えに直ぐに行きついた。
そして笑いを堪えるように口元に手を当てる。セインはチンクの様子に首を傾げる。
そんな彼女の疑問に答えるように、チンクは優しく語る。

「なに。さきほどいった通りだと言うことだ。『ヤツの底知れぬ力は、実際に対峙せねば分からん』とな。つまりはそういうことだ。」

「ん～、えっと……。つまりどういうこと……？」

チンクの答えは、更にセインの頭を悩ませるばかりだった。
セインの先ほどの言葉で考え込んでいたトーレは、すっと立ち上がると部屋を出て行こうとする。

「ん？トーレ、もう訓練はいいのか？」

チンクの呼びかけに一度立ち止まったトーレは、少しだけ振り向いた後、「前回の戦闘データの確認をしてくる」と言って部屋を後にする。その様子を見ていたチンクは、柔らかな笑みを浮かべて彼女の背中を見送った。

――――第二メンテナンスルーム――――

トーレが向かった先は、第二メンテナンスルームだった。
其処は、彼女達が重傷を負ったときに使う生体ポッドがある空間とは別で、主に各人の武装をチェックしたり、簡易的に肉体の状態を調べたりするときに使う部屋だ。
そんな部屋に一人。黙々と何かをしているクアットロの姿があった。
彼女はトーレが入ってきたのにも気付かないのか、その手を止めずに淡々と目の前に浮かぶパネルを叩き続ける。しかしその表情は、普段の他人を見下すようなものではなく、真剣そのものであった。

（普段からこうであってくれればいいのだがな・・・）

滅多に見られない彼女の姿に、トーレは苦笑する。
だが彼女が特に其の事を指摘しないのは、彼女（クアットロ）が其処まで真剣になる理由を知っているからに他ならない。
声をかけるまでは終わらないだろうな、と思ったトーレは、尚もパネルを叩き続けるクアットロの背に向けて話かけた。

「ＩＳや武装の強化は進んでいるか、クアットロ？」

「！と、トーレお姉さま？！ま、まさか！この私がそ～んな面倒な

事するはずないじゃないですかぁ～？」

突然声をかけられた事に驚いたのか、ビクリと反応したクアットロはゆっくりと後ろを振り返り、声の主であるトーレの姿を確認した。そして彼女は、トーレの質問に対して普段通りに答えたつもりだったが、長い付き合いであるトーレは彼女が嘘をついていることを見抜いていたが、敢えてその事を指摘しなかった。

「ふっ、そうか」

「ほ、本当ですわよ?!ただちょっとだけ以前の戦闘データを確認していただけですもの！」

微笑をたたえるトーレの様子に、クアットロは尚も反論するが、トーレはそれをのらりくらりとかわす。そんな彼女の様子にこれ以上の反論は無駄と悟ったのか、溜め息を一つ付いた後、クアットロは話題を切り替えた。

「そういえばトーレお姉さまは如何して此処へ？
確かチンクちゃんと訓練をしていた筈ですよね？」

「あぁ。先ほどまではな。だが、少し気に掛かる事があってだな……あぁ。安心しろ。別にお前の様子を見に来たわけではないからな。

……私も、前回の戦闘での事が気になってな。その時の事をもう一度確認しようと思っていたのだ。恐らくクアットロも同じ事を考えていると思ってな。それで此処に来たと言う訳だ」

先ほどまでからかう様な口調だった彼女だが、すぐにその表情は真剣なものへと変わった。その様子を見たクアットロもまた、無言

のままパネルを捜査し、前回の戦闘データをモニターに映し出す。
空中に現れた巨大なモニターに映っているのは、彼女達が前回の任務（ミッション）において遭遇した敵。隠者。そしてその途中に突如出現した異形。神の執行者（エクスキューショナー）。
その映像を見る二人は、僅かだが悔しそうな表情を浮かべる。
が、悟られまいとしたのか。クアットロは直ぐにいつもの他人を飄々とした態度になり、「全てはドクターと私達の『夢』のため」と言い、彼等に対抗すべく武装の強化や作戦を彼女なりに考えていた。

（まさか、たった一度の戦闘でこうまで変わるとはな……）

その様子を横目で見ながら、トーレは今までどんな状況であろうと自分達以外の他者を見下していた妹の、僅かではあるがその変化を確かに感じていた。

それは恐らく、隠者が放った威圧感や。あの異形の存在の異常性を肌で感じ取ったからだろう、とトーレは考えている。

確かに、彼女は今までの任務（ミッション）で大なり小なり【命の危険】を感じ取ってきた筈だ。だがそれでも、彼女のその性格は一向に変わらない。それどころか、難易度の高いモノをクリアしていくことから来た自信故か……。その性格には拍車が掛かっていたと言っても過言では無いだろう。

そんなところで現れた異常な存在たち《イレギュラー》。そこで今までに経験した事の無いほどの恐怖や威圧感（プレッシャー）が、彼女に警鐘を鳴らすこととなったのだろう。現に、表面上これまでと同じような態度をしているが、そこから彼女の本心が見え隠れしている事に気付かないトーレでは無かった。

（恐怖を知り、それでも尚目的の為に何かをしようと考える……。まるで人間のようだが、私達も成長する事は変わり無い。この経験による成長がきっと、クアットロにとって。そして我々にとってきっと良い結果を残すだろう）

横目でクアットロの様子を確認した彼女は、再度モニターへと目を移した。
こうして、映像で研究することも、成長には欠かせない事なのだ。

しかしふと、彼女は最近気に掛かっていた事があることを思い出した。
その疑問を解消すべく、隣のクアットロに声をかける。

「そういえば、最近ドクターは以前にも増して部屋から出ていないようなのだが……。
クアットロ、何か心当たりはあるか？」

問いかけられたクアットロもまた、その質問に答えを出しあぐねていた。

「それが……私にも分かりませんの。
トーレお姉さまなら知っていると思ったのですが、如何やらお姉さまも知らないようですわね」
それに、ウーノお姉さまは心配ないとしか言いませんし、と続けたクアットロの言葉に、トーレは無言になる。

（今までも自室に篭って研究をすることはあったが、何の連絡も無い、と言うことは無かったはずだ。）

そこでふと、彼女の中である一つの可能性が浮かんできた。

（たしか、ドクターが今の状態になったのは前回のレリック回収の任務の映像を見たときだ。

……いや、私などが考えても無駄、か。）

思考の海に陥りそうになった彼女だったが、そこで考えることを止めた。

何も考えることを放棄した訳ではない。ただ、スカリエッティ（彼女たちの生みの親）には、自分たちの考えの及ばないことまで考えていると。そして自分は考える者ではなく、【戦う者】であるということ。

そう思い至り、彼女は彼から話があるまで待つことを選択したのだった。

――――――スカリエッティ専用ラボ――――――

『――――以上が、前回の戦闘時の詳細です』

スカリエッティは、自身専用のラボにて、ナンバーズＮｏ．１『ウーノ』から通信越しに報告を聞いていた。その表情は何時ものような狂喜に歪んでいた。

「ふむ……。ご苦労、ウーノ。私は個人的に気になることがあるのでね。

今回のデータを此方に送ったら、暫くの間は通信を控えてくれたま

え」

『……畏まりました。あまり御無理をなさらいように』

「分かっているさ」

最近、今まで以上に一人で研究する姿に不安を覚えるウーノだったが、何も言えず渋々といった表情で引き下がった。

そして通信が切れた直後――――――

「……はっ……はぁ、はぁ……」

先ほどとは違う表情で顔を歪めたスカリエッティは、あまりの苦しみに思わず片膝をついた。

呼吸は荒く、全身から滝のような汗を噴出しながら、彼は必死に意識を保とうとした。

「……また、か」

暫くして、漸く落ち着いてきた彼は、自嘲気味に笑う。

なぜこんな笑みを浮かべるのか。それは科学者でもあり自身のことを一番知っているはずの存在にもかかわらず、先ほど襲ってきた痛みの原因が【一切分からない】からだ。

ただ一つ、可能性があるとするならばそれは――――――

「【神の執行者】、いや。正確にはあの解析不能な【魔方陣のようなもの】か……」

未だに続く頭痛も気にせずに、スカリエッティは目の前のモニターに映し出された魔方陣のようなものを見つめる。

「これが何であるかなど、現状私には分かるはずもないのだがね。……ならば何故――――」

――――『コレ』を見て何処か懐かしいと感じたのか？

結局彼には、その疑問を解くことは出来なかった。

ＰＶアクセス２０万突破記念！　ＰＡ《プライベートアクション》　ナンバーズ

如何だったでしょうか？

今回は長々と語ることはしません。

調子にのってネタバレ発言したら大変ですから（笑）

前書きに書いたほど、クアットロはきれいではないかもしれません
が、それでも原作よりは少しまとも（？）かもしれません。

理由は、本編が進むにつれて明らかになる、としかいえません。

スカさんにしても、同様です。

またきりの良いところでＰＡをやるかもしれません。

その時は誰をスポットにあてようかな？

それでは失礼します。

Ｐｈａｓｅ-１　～新たな預言と出会い～（前書き）

更新が遅くなってしまって申し訳ありません。

アシェーリトです。

今回はやっと原作キャラが出てきます。

時間軸は原作本編開始の約６年前から始まります。

よって、自称凡人の兄はまだ生きています。

またもやグダグダした内容となってしまったかもしれませんが、最後まで読んで下さると有難いです。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ-１　～新たな預言と出会い～

―聖王教会―

此処は聖王教会

かつて栄えた古代ベルカ時代の王、《聖王》を信仰する団体にして、古代ベルカ式の研究を行っている機関だ。

その一室に一人の女性がいた。

彼女の名はカリム・グラシア。預言者の著書（プロフェーティン・シュリフテン）という、札のような物を使っての預言のレアスキルを保持している。

その預言はカリム曰く「割りと良く当たる占い程度」らしい。

そんな彼女は今、先日顕れた預言の解釈を再び眺めていた。

「管理局の崩壊・・・。本当にそんなことが起きなければいいのだけれど」

彼女はそう呟き溜め息をついた。

その内容は、《ロストロギア》を用いての管理局システムの崩壊を示していた。

《ロストロギア》とは、何らかの理由で滅びた高度な文明世界の遺産であり、一つ一つが危険な力をもっている。

そして、その《ロストロギア》を管理し、次元世界の平和を護るのが、管理局だ。

この組織は、謂わば警察のような物で犯罪者の取締り等も行なっている。

広大な次元世界を全てで無いとはいえ、管理下に置くほどの組織の崩壊など、この世界の住人にとっては現実味が無いのだ。

彼女は、この預言を回避する為の策を管理局上層部と考えてはいるが、まだ実現には至っていない。

どうしたものかと頭を悩ませていると、ノックの音が聞こえてきた。

「失礼します、騎士カリム。お茶をお持ちしました。少し休まれてはいかがですか？」

そう言って苦笑しながら入って来たのはシャッハ・ヌエラ。ベルカの騎士にして、カリムの補佐等も務める優秀な女性だ。

「ありがとう、シャッハ。そうさせてもらうわ。」

そう言ってカリムが一息いれようとした時、突然、預言者の著書が発動した。

「そんなっ?!また預言が?!いくら何でも早すぎる・・・!」

「これは一体・・・?!」

カリムとシャッハはその顔に驚愕の色を浮かべた。

この預言は特定条件下でのみ発動するもの。

それに、つい先日預言が出たばかりだというのに、新たな預言が出たのだ。

これは、今までに無い事態だった。

やがて発動が終わると、そこには新たな預言が記されていた。

カリムは新たな預言に嫌な予感を感じ、直ぐに人を集めるよう指示し、預言の解読の準備を始めた。

彼女達がまだ見ぬ預言にはこう記されていた。

《次元の海に浮かぶ数多の世界は紅き焔に包まれる

法の守護者を乗せし船、その悉くが虚しく消え去る

神の執行者により、世界に嘆きと悲しみが木霊する

神の使徒を討つは境界を越えし者達

彼の者達は神殺し

その身に紋章を刻みし者達》

この世界の人々はまだ知らない。これから始まる悪夢を・・・

―クラナガン付近の森―

「此処がディメンションスフィア（以降ＤＳ）か。俺達の世界と余り変わらないな。」

聖王教会での新たな預言の出現と時を同じくして、ブレア達によりＤＳに入ることの出来たシオンは今、ミッドチルダから少し離れた森の中にいる。

「さて。まずは街に行かないとな。幸い、ブレアが住居やらを用意してくれたみたいだしな。ファーウェル、家は何処にあるんだ？」

《この森を北東に抜けて２ｋｍ程先にこの世界・ミッドチルダの首都、クラナガンがあります。マスターの御自宅はその一画にありま

す。≫

ファーウェルの答えに頷いたシオンは、クラナガンに向かう事を決めた。

シオンは説明を聞きながらクラナガンを目指した。

―首都　クラナガン―

森を出て暫くして、シオンはクラナガンにある自宅に着いたのだが・・・

「家があるのは有難いが、何で一階が喫茶店になってるんだよ・・・」

ブレアが用意した家は二階建てで、一階が喫茶店になっていた。

≪恐らく衣食を手に入れる為にも職を付けてくれたのでしょう。

今はある程度与えられたお金が有るからいいですが、いずれは働か

なければなりませんし。》

ファーウェルはシオンの呟きに冷静に答えた。

「まぁそんなことだろうとは思っていたけどよ。」

愚痴をこぼしながらシオンは新しい住居へと入った。

―二週間後　クラナガン中央部―

生活や魔法に少し慣れてきたシオンは、クラナガンにいる。

紺のジーパンに白のシャツ、その上に黒のジャッケトといったラフな格好をしている。

《すぐに必要そうな物は買ったし、後は店を始める為の道具とかを揃えないとな。それにしても、念話ってのは便利だな》

シオンは喫茶店をはじめるために必要な物を揃えるため、ショッピングモールへ向かっているのだ。　もっとも、その顔には少し不快な表情を浮かべているが。

《さっきからやたらと視線を感じるんだが何だ?》

シオンの容姿は目を惹くため、男女問わず道行く何人かは自然と目で追ってしまう。

最も、右目の眼帯も目を惹く原因の一つではあるが。

《相変わらずですね・・・》

シオンと過ごした時間はまだ僅かだが、鈍感であることに気付いたファーウェルは、呆れ気味だった。

《何の事だ?》

と聞くシオンに、何でもありません、と答え溜め息をついた。

そんな話をしながら目的地のショッピングモールに着いたのだが、ある一画に人が集まっていた。

不審に思ったシオンは人だかりに近づき、その中の一人の男性に声をかけた。

「すまない。何かあったのか?」

「あぁ。なんでも、強盗が女の子を人質にとっているようでな。

犯人はデバイスを持っているみたいだし、管理局もまだ来てないんだよ。」

声をかけられた男性は心配そうに答え、犯人を見た。

つられて見ると強盗は壁を背に、１０歳位になるだろう、オレンジの髪をツインテールにした少女を人質に、杖型のデバイスを突きつけていた。

その近くに、一人の私服の男性がいた。

「待っていろ、直ぐに助けてあげるからな！！」

男性―ティーダ・ランスター―は、少女に向かって安心させるように言った。

しかし、その顔は強盗に対する怒りと、迂闊に手が出せない事に対する悔しさと焦りが浮かんでいた。

「私は管理局だ！いずれ他の局員も来る！諦めて投降しろ！」

ティーダは時間稼ぎのため説得を試みるも、男は聞こうとしない。

「お兄ちゃん！！」少女はティーダに向かって助けを求めた。

それを聞いた男は不気味に笑った。

「なるほど、お前はあの局員の妹なのか。

おいっ！大事な妹を傷つけたくないなら、デバイスを床に置いて下がれ！」

そう言うと、少女に突き付けたデバイスに、魔力を込める。

それに気付いたティーダはやむなくデバイスを床に置いて離れた。

男は置かれたデバイスめがけて魔力弾を放ち、デバイスを破壊した。

これで打つ手が無くなってしまった。

それを見たシオンは少女を助ける為の考えをまとめる。

《ファーウェル、確かミッド式の魔法に高速移動が出来るのがあったよな？》

シオンが何をするつもりか理解したファーウェルは

《はい。

使うのでしたら、あの男のデバイスを少女から離す必要があります。

少女を傷つけないように救出するなら、それは絶対条件でしょう。

》

ファーウェルはそう言うと、ソニックムーヴの発動準備にはいる。

《となると問題はデバイスを別の方向に向ける必要があるな。》

男はティーダのデバイスを破壊したことで、油断が生まれていた。

それを逆手に取る作戦を考えた。

実行に移すため、シオンは一度その場を離れた。

少しして戻ってきたシオンの手には空き缶が握られていた。

人混みの一番前まで行ったシオンは男の行動を注意深く観察する。

男は説得を続けるティーダはもう脅威とならないとみたのか、完全に油断していた。

シオンはそれを確認すると、手に持っていた缶を強盗より少し離れた場所に投げて走り出した！

コーン！

「なっ、なんだ?!」

突然の物音に驚いた男は思わず音の方向にデバイスを向けた。

《Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ！》

その隙を逃すはずも無く、男に接近したシオンは男とデバイスを蹴り飛ばし、少女を救出した。

突然の事に驚いたティーダだったが、すぐに我にもどり、丸腰の男を取り押さえる事に成功した。

管理局が到着したのは、それからすぐだった。

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

私は今起きていることが理解出来なかった。

私は歳の離れた兄と二人暮らしで、兄は働きに出ているのでよく一人になる。

でも今日はそんな兄と久しぶりに買い物に出かけに来ていた。

嬉しくてはしゃぎすぎたのだろう、私は兄から少し離れてしまった。

そして、後ろから近づいてくる人影に気付かなかった。

気付いたときには、知らない男の人に捕まっていた。

私達から他の人達がはなれていくのと、突き付けられたデバイスを見て、やっと今の状況に気付いた。

私は人質にとられたのだ。

急に怖くなってきて思わず「お兄ちゃん！！」と助けを求めていた。

それを聞いた男の人は兄のデバイスを壊してしまった。

私は自分だけでなく、兄をも危険に晒してしまったのだ。

私は男の人に対する恐怖と兄が傷つくかもしれないと言う恐怖で涙が溢れそうになっていた。

今にも泣き出しそうになったそのとき、少し離れたところで音がした。

男の人は、私に向けていたデバイスを慌てて音の方向に向けた。

それからは一瞬の出来事だった。

突然誰かが現れて、男の人とデバイスを蹴り飛ばし、私を抱きかかえてそこから離れた。

急に抱きかかえられた私は思わず目を瞑ってしまった。

呻き声のようなものが聴こえてきてそちらを見ると、兄が男の人を取り押さえていた。

「どうやら、終わったようだな」

頭の上で声が聞こえて、そちらに顔を向けると、思わず私はその顔に見惚れてしまった。

そこには右目に眼帯をしてメガネをかけた、紅い髪のキレイな女の人がいた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　シオン～

「どうやら、終わったみたいだな」

少女を抱えた俺は、犯人を取り押さえている状況をみて呟いた。

とりあえずは、被害はなかったみたいだし、良しとしよう。

胸元から視線を感じたのでそちらを見ると、俺を見上げる少女がいる。

少し顔が赤いのは、怖かったためだろう。

目元には涙が浮かんでいるしな。

俺は安心させるために、この子の頭を撫でてやった。

この子の兄が男を取り押さえてすぐに管理局がきた。

正直対応の遅さに文句の一つでも付けたかったが、まぁ今は我慢しよう。

他の局員に男を引き渡したこの子の兄がこっちに来た。

「ティアナ！！」

「お兄ちゃん！！」

少女は兄の声に気付き、そちらに向かって走り、抱きついた。

やはりよほど怖かったのか、少しの間少女は声をあげて泣いていた。

少しすると少女とその兄が俺のほうに来た。

「妹を助けてくださって、ありがとうございます！　なんとお礼を言ったらいいか・・・」

「別に気にするほどのことじゃねえよ。
俺が勝手にやっただけなんだしな。
デバイスが壊れされたのは災難だったな。
だがその御蔭で油断ができて、隙もつくりやすくったのも事実だ」

あれだけ余裕こいてれば、突然の事には対応できないし、パニックになるしな。

そんな事を考えていると服を引っ張られる感覚を感じた。

下を見るとさっきの少女が俺の服を摘まんでいて、俺を見上げながら言った。

「助けてくれてありがとう、おねえちゃん・・・」

・・・・・・・・・。

ちょっと待て。　ちゃんと礼を言えるのはいいことだが、これは不味い。

これは誤解を解かねばなるまい。

「ちょっと待ってくれ嬢ちゃん。　俺はお姉ちゃんじゃ「うわぁぁ

ぁ！！」・・・？！」

叫び声のほうを見ると捕まったはずの男がデバイスを持っていた。

どうやら予備を持っていたようだが、何してんだよあの局員どもは。

男は怒りに顔を歪め、俺達を睨み付けた。

「テメェら、許さねぇぞ！死にやがれ！！」

デバイスを壊した時と同じ魔法だが数も込められた魔力もさっきとは段違いだ。

１５程の魔力弾のうち、５個を近くの局員たちに、残りを全て俺達に向けて放ってきた。

確かに先ほどとは段違いだが、それでも脅威にはならない。

俺は静かにファーウェルに告げた。

「ファーウェル　Ｓｅｔ　Ｕｐ」

「Ｙｅｓ，ｍｕｓｔｅｒ．　Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ，　Ｓｅｔ　ｕｐ．　」

機動したファーウェルは、刀とバリアジャケットを形成する。

刀は黒い柄と鍔に、銀色の刀身をして、鍔の近くに紅く光るコアが

ある。

バリアジャケットは黒のインナーに黒のパンツ、その上に黒のロングコート。
手足と胸部に銀色の篭手と足具、アーマーを装備したものだ。
俺は刀に闘氣（ファーウェル）を纏わせ、振りぬいた。

その技は魔法ではない、純粋な鍛錬による賜物。

仲間の一人が使っていた、遥か古より伝わる剣技。

「空破斬！！」

放たれた闘氣は真空の刃となり、魔力弾を切り裂き、そのまま男をも吹き飛ばした。

手加減はしてあるので死ぬ事はないだろう。第一、本気を出すほどの相手でも無かったしな。

それより先にやらなければならない事がある。

ファーウェルを待機状態に戻し振り返った俺は、唖然としている兄妹を、いや妹のほうを見た。

この子には言わなければならないことがある。

「嬢ちゃん、とりあえず言わなきゃならないことがあるんだが。

俺は男だ。」

それを聞いた時の二人の顔は暫くは忘れられそうに無い。

Ｐｈａｓｅ-１　～新たな預言と出会い～（後書き）

長々とした文章の上に読みにくい文章ですみません。

今回はカリム・シャッハ・ティアナ・ティーダを出してみました。

喫茶店に必要な物がショッピングモールに売ってんのか？と思った方々、申し訳ありません。

原作キャラと絡ませる為のものと言うことで勘弁してください。

今回ティーダのデバイスが壊されたのには、今後の話に関わるそれなりに重要な設定となります。

シオンが使った技は歴代ＳＯではお馴染みの技です。

ＳＯ３では腹出しプリンが使う技ですね

次回は遂に奴等が動き出します。

それにより運命が大きく動きます。

これ以上はネタバレになるので今回はこの辺で。

読んで下さった方々、ありがとうございました。

それでは失礼します。

Ｐｈａｓｅ－２　～悲劇　そして崩壊の序曲～（前書き）

どうも。

アシェーリトです。

始めに、今回の話を読むにあたっての注意点があります。

・原作とは違う進行

・オリキャラ、オリジナル設定の登場

などが、今回の話には出てきます。

なのはの原作を穢されたくない、という方は読まないほうが良いかも知れません。

それでもいいという方は、どうぞ読んでください。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ－２　～悲劇　そして崩壊の序曲～

―クラナガン　シオン宅―

ショッピングモールでの一件後、シオンはティーダの友人となり、今では親友と呼べるほどの仲になった。

仕事が忙しい時などはティーダに代わりティアナの面倒をみたりするのも、最早見馴れた光景だった。

ただ一つ問題があるとすれば・・・

「シオン。幾らティアナが可愛いからって手を出すなよ?手を出したら・・・分かってるよな?」

ティーダは重度のシスコンだった。

手なんか出すかよ、という答えると、

「俺のティアナは手を出す価値もねぇってのか?!」と、キレる始末である。

最早末期である。

そんな日常の中シオンは、漸く店をオープンした。店の名前は《アクアエリー》

それは、嘗てＦＤ空間に乗り込む際に、ＦＤ空間へと続く唯一のゲート、《タイムゲート》のある《惑星ストリーム》に行くために、大量の執行者を惹き付け、そして散っていった戦艦の名前だ。

アクアエリーのクルーは死を覚悟でシオン達を送り届けてくれた。

その事に対する感謝と敬意から、そして彼等の事を忘れない為に、その名前を付けた。

店を開店してからもう１ヶ月が経ち、少しずつ客も増えてきた、ある日のこと。

閉店後の片付けを始めていると、店の扉が開いた。

「ティアナ！今帰ったよ！」そう言いながら入ってきたのは笑顔のティーダだった。

相変わらずシスコンぶりは健在だ。
「お邪魔します」
その後ろから入ってきたのは15~16歳くらいのメガネをかけた少年だった。
「お帰りなさい、お兄ちゃん」
ティアナはショッピングモールの一件以来、シスコンに更に磨きのかかってきた兄を、最近は少しうっとうしく感じながらも、やはり嬉しそうに、笑顔で迎えた。
「お疲れ様です、ティーダ。・・・そちらのかたは？」
そう言ったのは、シオンである。
営業中は普段の口調では不味いので、メガネを外している。
その為、無意識のうちに敬語を使っている。
「あぁ、コイツは俺の後輩でメカニックマイスターのクルツ。俺の新しいデバイスの製作を手伝ってくれてる。クルツ、こっちが妹のティアナに親友のシオンだ」

「はじめまして。メカニックマイスターのクルツ・アテンザ一等陸士です。」

少年―クルツ―はシオンとティアナに挨拶をした。

以前の事件でデバイスを破壊されたティーダは、今は支給品のデバイスを使っている。

クルツはデバイスマイスターの資格も持っている為、新たなデバイスの製作を頼まれているのだ。

「ティアナ・ランスターです。」

「なるほど。私はシオン・C・メザーランスです。
この店のマスターをしています。
それからこの子はパートナーのファーウェルです。」

《はじめまして、クルツさん。ファーウェルと言います。》

ティアナとシオン、ファーウェルは挨拶を返した。

ファーウェルを見た瞬間、クルツは驚愕し目を見開いた。

「すっ、すみませんっ！そのデバイスを良く見させてもらえませんか？！」

クルツはそう言ってシオンに迫った。

「え、えぇ。構いませんよ」

クルツの迫力に少したじろきながらも、ファーウェルを渡す。

手にとったクルツは、まるで新しい玩具を手に入れた子供のように目を輝かせ、興奮していた。

「凄い、こんなに精巧なデバイスは始めて見る・・・！
これは誰が作ったんですか？！」

「私の友人が此方に来るときに作ってくれたんです。
今は訳あって彼女とは会えませんが」

「そうですか、残念です。」
余程残念だったのかクルツはかなり沈んでいた。

それを見たシオンは少しの間考え、あることを思いついた。

「クルツ君。生憎私はデバイスに詳しくなくて、ファーウェルのことをまだ良く知らないんです。
もし良かったら、その子を調べながらデバイスについて教えてくれませんか？」

聞いた途端、クルツは弾かれたように顔をあげた。

「い、いいんですかっ？！」

途端に元気になったクルツに苦笑しながら、肯定した。

「えぇ。その子には最低限の機能しかついてないので、こちらとしては是非とも。
引き受けてくれますか？」

「はいっ！喜んでお受けします。
むしろやらせて下さい！！」

《宜しくお願いします、クルツさん。》

「こちらこそ！隅々まで調べて完璧に仕上げてみせるよ！」

「いえ、そこまでしなくても・・・」

クルツの少し危ない発言にシオンは若干危険を感じた。
ひと通り話が決まった所でティーダが言う。
「なら管理局本局に行くか？あっちなら色々と設備も揃ってるし。」
丁度俺も用があるしな、とティーダが勧める。

「と言うことは、執務官関係のことですね。」

ティーダが執務官を志望していることを聞いていたシオンは直ぐに思いついた。「あぁ。クロノ・ハラオウン提督の貴重な意見を聞けるから、是が非でも行きたくてな」

クロノ・ハラオウンとは、《P・T事件》や《闇の書事件》解決に貢献したことから、まだ若いながらも英雄と称される程の実力の持ち主だ。
年の近い彼の存在はいい刺激になるだろう。

「十日後に行くことになってるんだが、どうだ？」

とシオン達に尋ねた。

「僕は大丈夫です。」

「私も大丈夫です。一日位なら休んでも問題ありませんし」

「私も一緒に行く！」

それから四人は当日の予定を話し合い、その日は解散した。

―十日後　管理局本局―

ティーダを除いたシオン達は今、本局にあるデバイスのメンテナンスルームにいる。

其処でファーウェルのメンテをしているのだが、クルツは驚愕した。

《見た目からして精巧な作りをしているのは分かったけど、まさかこれ程とは・・！

現存するどのデバイスよりも安定している。

それにこのシステムはいったい？こんなものは見たことがない・・・。》

ファーウェルを調べる中でクルツが付けた評価は、現存するどのデバイスよりも高性能で、謎のシステムを積んだ未知のデバイスというものだ。

そして、管理局ですらもちえないこれ程の物をもつシオンは何者なのか？

意を決して聞こうとしたそのとき。

《すみません。此処では話せないので、後で家に来てくれませんか？

その時に全てを話します》

シオンは、クルツに念話を送った。

彼はファーウェルを調べられる際に、こうなる事を覚悟していた。

簡易的に作られたとはいえ、作ったのはこの世界を創った謂わば神たる存在。

その技術力の異常さに気が付くだろう。

そのうえでシオンは、二人の友人に話す事を決意したのだ。

《・・・分かりました。調べたデータも完全に消去します。》

わざわざ念話で話してきたということは、他人に聞かれては困るからだろう。

事態を重くみたクルツは、ファーウェルのデータを保護することを約束した。

それから検査を終えたシオンはティーダに念話で話があることを伝えた。

暫くして戻ってきたティーだと合流した一同は、クラナガンのシオンの家に向かった。

―クラナガン　シオン宅―

ティアナが寝たことを確認した彼らは、一階の喫茶店に集まっている。

そこでシオンは二人に自分が話せる全てを話した。

この世界のこと

自分がこの世界ので住人はないこと

自分の出生の秘密

嘗て自分の世界で起こった事、次の標的がこの次元世界になりつつあること

そして自分は少しでもそれを食い止める為に来たこと

魔法とは違う、気や紋章術といった存在があること

また、執行者（エクスキューショナー）たちがどれ程の脅威であるかを伝えた。

話を聞き終わった二人はあまりのことに言葉が出ない

漸くティーダが口を開いた。

「今の話は本当なのか・・・？」

「えぇ。残念ながら全て真実です。」

「そんな・・・」

二人はあまりのことに言葉を失った。

無理もない。

自分たちの世界がゲームの中の存在などと言われて、信じろと言うほうが無理な話だ。

更にはその世界が消滅するかもしれない事態にあるということに愕然とした。

「何とかならないのか？」

「・・・正直、現状では何とも言えません。今はＦＤ世界での協力者が食い止めてくれる事を祈るしかありません。」

シオンは悔しそうに言った。

その言葉を聞いた二人の顔は、すでに先の事を考えるため、真剣だった。

「いずれこの世界にも執行者は現れるでしょう。
その時のために、私も最善を尽くします。」
その為にも、協力してほしいことがある、と続けようとしたが、ティーダの言葉に遮られた。

～Ｓｉｄｅ　シオン～

私は二人に今話せる全てを話した。
二人は半信半疑といった表情から、次第に驚愕や絶望に変わっていった。
まぁ当然と言えば当然ですね。
それでも二人には知っていてほしかった。

管理局の技術力や局員の実力がどの程度かは把握仕切れていませんが、
説明した後の二人の顔を見る限り、余り期待は出来そうにない。

モンスタークラスならまだしも、もし奴等が出てきたら大変な事になる。

その為、直ぐに行動出来る立場にいなければならない。

裏社会にも入り込み、情報を集める必要がある。

だが、私一人では集める情報に限界がある。

だからこそ、各世界を管理し、情報が集まる管理局、その局員である二人の協力は必要不可欠となる。

二人を利用するようで良い気はしないが、被害を最小限にするためだ。割り切るしかない。

「近い将来、この世界にも執行者は現れるかもしれません。その時のために、私も最善を尽くします。」

覚悟を決めて、いざ協力を申し出ようとしたが、それはティーダにより遮られた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

シオンが続けて口を開こうとしたが、ティーダはそれを遮った。

「それじゃあ俺達は何をすればいい？」

まるで心を読んだかのようなティーダの発言に、シオンは唖然とした。

「シオン、何を驚いているんだ？」

「な、何で・・・？」

「オイオイ。これでも執務官を目指してるんだ。このくらいは先読み出来ないとな。」

ティーダは心外だと言うように顔をしかめながら言った。

「メガネを取ったシオンさんは分かりやすいですから。　それに友達を助けるのは当然でしょう？」

続けてクルツは、さも当然であるかのように言った。

そんな二人の様子を見たシオンは、二人に感謝しながら、改めて尋ねた。

「ティーダ、クルツ、手伝ってくれますか？」

それを聞いた二人は声を揃えて頷いた。

それから三人はある程度の今後の方針を決めた。

ティーダは情報収拾を中心に。

シオンとクルツは、ファーウェルのデータの一部と、紋章技術を利用したティーダの新たなデバイスの作成、及びファーウェルのカスタマイズ。

そして、紋章術を応用出来る特殊なカートリッジの作成を最優先とした。

紋章技術の転用は時間がかかりつつも、着実に進んだ。

一方、ティーダのほうでは特に目ぼしい情報は見当たらなかった。逆をいえば、今はなんとかブレア達が問題の先延ばしが出来ているということだ。

それから数ヵ月が経ち、ティーダのデバイスやファーウェルの完成間近になったある日のこと。

仕事も一段落ついてあとは帰る準備をするだけだったティーダのも

とに、事件の情報が入った。

内容は、違法魔導師たちが数人集まって、ロストロギアの密輸取引を計画するものだった。

指揮を任されたティーダは、他の隊員たちと現場に急行した。

―密輸取引現場―

～Ｓｉｄｅ　ティーダ～

俺は今物陰で息を整えている。

辺りを見渡すと、そこには違法魔導師たちと隊員たちだったものが転がっている。

何故こんなことになったのか。

俺は目の前の惨状が起こる少し前の事を思い返した。

現場に急行した俺達は、魔導師たちを取り押さえる事に成功した。

幸い誰一人怪我を負わずに済み、密輸品のロストロギアも無事に確保できた。

後は犯人達を護送して任務は終了だ。

早く帰ってティアナを安心させてやらないと、そんなことを思っていたときだった。

隊員の一人が異変に気付いた。

「これは・・・?!隊長、周辺に転送反応を感知!」

「何っ?!おい、他に仲間がいたのか!」

俺は犯人の一人に尋ねた。

正直、この状況に助けが来るとは思えなかったが、そうでなければ説明がつかない。

「し、知らねぇよ!　集まったのはここに居る奴らだけだし、もし他に仲間がいるなら捕まるようなヘマするかよ!」

他の犯人たちも本当に知らないのか、口を揃えた。

謎の転送反応に、俺達に緊張が奔る。

俺はすぐに対応出来るように転送される座標を取り囲むように、念話で指示する。

「反応増大！　来ますっ！！」

配置が完了したのとほぼ同時に何かが転送されてきた。

転送されてきたそれを見て、俺達は凍りついた。

そして誰かが呟いた。

「天、使・・・・・？」

白い修道女のような姿に、白い六枚の羽を生やした存在がそこにいた。

目を閉じ、少し宙に浮いているその存在は、異様な存在感を放ち、底の見えない恐怖を感じさせた。

見た目は天使の様だが、俺はその存在が何であるかを知っている。

もし、そいつらが現れたら、まともに戦うなと言われたほどの存在。

誰もが恐怖に支配されるなか、そいつは口を開き一正確には開いていないが一、男と女の声が重なったような声でこういった。

《神に近づき過ぎた愚か者ども。貴様らの存在は世界を汚染する。

神の決断により貴様らの断罪と、世界の浄化が決定した。

我は神の執行者の代弁者。

貴様らに捌きを下すもの也。

滅びよ。　世界の汚物ども。≫

「ーーー！！総員退避ぃ！！」

俺は恐怖を振り払うように指示を飛ばし、奴ー代弁者ーに向かって渾身の魔力弾を叩き込んだ！

しかし、俺以外は恐怖に呑まれたのか、未だに動けずにいた。

「何をしてるっ！！早く逃げろっ！！」

「っ！！」

もう一度叫んだ俺の声に漸く反応した隊員たちは撤退しようとするが、その時には既に遅かった。

「ぎゃあああああああ！！」

叫び声の聞こえたほうを見ると、そこには更に二体の代弁者がいた。内一体は、犯人の一人の胸を貫いていた。

もう一体の代弁者の足元には既に、首を捻子切られたもの、上半身が吹き飛んでいるものなど、惨い殺され方をされた犯人達が転がっていた。

《クソッ！他にもいやがったのか？！！》

その光景に再び恐怖に包まれ、足が竦みそうになったがなんとか耐えた。

しかし、耐え切れなかった他の隊員たちは、狂ったように代弁者達に向かって一斉攻撃をしかけた。

奴らは爆発に巻き込まれた。

「ど、どうだっ、流石にこれなら・・・、っ！！」

隊員の一人の呟きは、煙が晴れた先にいた奴らを見て、最後まで続かなかった。

奴らは全くの無傷だった。

直後、悪寒を感じた俺は、物陰に隠れた。

一体の代弁者を中心に魔法陣のようなものが広がっていったと思ったら、それに触れた奴らは一瞬で殺された。

奴らは、地獄絵図と化したその場にたっていた。

さっきの出来事を思い返していると、奴らが近づいてくるのを感じた。

どうやら生き残ったのは俺だけらしい。

俺はシオンとクルツに素早くメッセージを送信し、覚悟を決めた。

「ごめんな、ティアナ。兄ちゃん、帰れそうに無いよ。

シオン、クルツ、ティアナを頼む・・・・」

視界が涙で滲みながらも、俺は雄たけびをあげて奴らに向かっていった。

「うおおおおおおおおっ！！」

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

―数日後　教会・墓地―

雨が降るなか、隊員達の葬儀が行われていた。

連絡の途絶えたティーダたちを不審に思った上司は、現場に局員数名を派遣した。

そこで局員達が見たのはまさしく地獄絵図といえた。
まともな形を残して死んでいる死体を探すのが難しいほどだった。

ティーダもまた、例外ではなかった。

同時にそれは相手は人間ではなかったのではないか、と噂された。

寧ろそうであって欲しいと誰もが思った。

あの惨状を人間が作ったとしたら明らかにソイツは狂っている。

そう思わされる程だった。

シオン達も、他の隊員の遺族らと共に、葬儀に参列している。

誰もが哀しみに呉れるなか、参列する局員の一人が亡くなった彼等を侮辱した。

「まったく、不様に死におって。管理局局員としてあるまじき失態

だ。

せめて相討ち位は出来なかったのか。

そうすれば、少しは事件に進展があるというものを。

指揮官も隊員も、揃いも揃って無能ばかりだな！

責任を問われる私の身にもなれというものだ・・・」

それは、彼等の上司だった。

元々、この世界はゲームの中の世界だ。

そして本来、執行者達（エクスキューショナー）は存在しないもの。まして、強力であるが故に情報量の多い奴等は、倒されて暫くすると、自動的に消滅する仕組みになっている。

証拠はそう簡単には残りはしない。

その事をこの世界の住人は知らないが、問題は其処では無い。

必死に戦い、それでも散っていった彼等に対する言葉ではない。

局員の言葉を聞いた遺族達が、殴りかかろうとしたその時、誰よりも早く動いた者がいた。

シオンだった。

その顔は烈火の如く怒りに震え、その目は彼等の死を侮辱した浅はかな男に向けられていた。

近づいたシオンは男の肩に手を起き、振り向いた瞬間、拳を打ち抜く！！

骨の砕けるような音と共に、男は面白い様に吹っ飛んだ。

「失意の内に死んでいった彼等を侮辱する権利など、貴様には無い・・・！
此処から失せろっ！！」

他の局員達が唖然とするなか、聞こえていないであろう男に向けてシオンはいった。

そして、シオンの鋭い視線を受けた彼等は、気絶した男をかかえ、

逃げる様にその場を後にした。

シオンは振り返り、遺族達に頭を下げた。

「自分だけ彼等を殴ってしまって、申し訳ありません。

ですが、あんな奴等の為にあなた方の手を汚させる訳にはいきません。

あなた方の手は、亡くなっていった彼等の冥福を祈る為にあるのだから。」

それを聞いた遺族達は、少しだけ彼等が報われる様な気持ちになった。

それからシオンは神父にも謝罪したが、

「はて？何かあったのですかな？最近は年のせいか目が悪くてね」

そう言って、自分は何も見ていないと言ってくれた。シオンにとっては有難い事だった。

それから葬儀は静かに執り行われ、やがてその場にいるのはシオン達だけとなった。

ティアナはずっと沈黙を守っている。

「シオンさん、あの人を殴ってくれて有難うございます。

もしシオンさんが行かなかったら、きっと僕らは怒り狂ってたでしょうから。」

そう言ったクルツは、苦笑しながらシオンに感謝した。

「本来はこんな事をいうのは不味いんだが、幸いにも今は人がいない。

僕からも礼を言わせて下さい。」

後ろから声を　かけられた二人が振り返ると、そこにはクロノがいた。

慌てて敬礼するクルツを手で制し、彼等の墓前に立った彼は祈りを捧げた。

何故クロノが此処にいるのか尋ねると、

「彼とは意見が合ってね。数ヵ月前に意見を求められたときから、僕達は私的な友人でね。

本当に残念だよ・・・」

そう言って彼は口を閉じた。

暫く沈黙が漂ったが、シオンがそれを破った。

今回の件に執行者が関わっていると考えたシオンは、自分が目を付けられるのを覚悟で、クロノに話した。

最初は半信半疑だったが、現場に痕跡が残って無いこと、そして惨状から推測すると辻褄が合うことから、クロノはシオンを信用した。

だが、事が事なだけに、クロノはシオンの了承のもと、伝説の三提督に進言した。

話を聞いた彼等は、情報提供を惜しまない事、他の人には口外しないこと、そして監視は付けない事を約束した。

それから直ぐに、クロノとクルツは仕事があるため、その場を後にした。

今まで沈黙を守ってきたティアナは、決意を宿した瞳でシオンに言った。

「私がお兄ちゃんの夢を継ぐ。そして証明してみせる。ランスターの銃はどんな敵でも打ち抜けるって。

だからお願い。

シオンお兄ちゃん、私に戦い方を教えて・・・！！」

Ｐｈａｓｅ－２　～悲劇　そして崩壊の序曲～（後書き）

読んでくださった方々、有難うございます。

アシェーリトです。

今回の話はどうだったでしょうか？

原作との相違点は、

新しいオリキャラの登場、ティーダとクロノの邂逅、ティーダの殉職するときの描写などです。

ティーダの殉職は、ティアナを今後活用するためには無くてはならないイベントでした。内容は原作とだいぶ違いますが。

私の中では、ティーダ＝シスコンのイメージが強かったので、書いてみました。

また、クロノと会ったのは、原作ではやてが本局に行くときに、ティアナを連れていってクロノと会ったことから、ティーダが他の執務官に会って意見を参考にする場面があってもいいかなと思ったためです。

また、シオンがクロノと知り合うことで、管理局内の情報をより知るための情報源を確保するための役割を果たすためでもあったからです。

そして、今回登場したオリキャラ第二号、クルツ・アテンザ。

彼は、本局のマリエル・アテンザの弟というポジションで、ティーダのデバイス作成及びファーウェル完成にシオンと共に取り組みます。

また、彼の存在は今後の展開に関わるそれなりに重要な人物です。

さて、ロールアウト寸前でありながら登場しなかった件のデバイス。

ティーダ死んだのに意味なくね？と思われた方もいると思います。

が、これも実は結構意味があるんです。

これ以上はネタばれになってしまうので、気になる方は気長に待ってください。

とまあ長々となってしまいましたが、今回はこれで失礼します。

それではまた。

Ｐｈａｓｅ-３～廻り始める歯車～（前書き）

どうも。

アシェーリトです。

今回、視点があちこち移動するので、今まで以上に読みにくいかもしれません。
その為、キャラを活かしきれてないと感じるでしょう。

もうホントすみません！

まぁそんな感じで始まります。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ-３～廻り始める歯車～

ティーダの墓前でのティアナの誓いから二年後

新暦７１年　４月２９日

―陸士１０８部隊　―

～Ｓｉｄｅ　ゲンヤ・ナカジマ～

今日は娘のギンガとスバルが、部隊に遊びに来る予定だ。

妻のクイントが死んでからだいぶ経ち、今では以前と同じ様に笑顔を浮かべるようになった。

当時は俺も娘達もかなり参っちまってたが、なんとか乗り越えられた。

かと思えば、ギンガは母と同じ捜査官を目指して管理局に入局。

今では陸士候補生だ。

何れはスバルも管理局を目指すかもしれん。

父親としては、誇らしくもあるが複雑だ。

だが、アイツらが本気になるんだったら、こっちも出来る限りのことはしねぇとな。

・・・・こうやって親離れしていって、いつかは男も作るんだろうな。

最も、軟弱な奴には娘はやらんがな。

そういや、そろそろ空港に着く頃だな。

何も無ければいいんだが・・・

コーヒーを飲みながらそんな事を考えていると、事件発生の連絡を聞いた。

―事件発生現場：ミッド臨海第８空港―

俺は血の気が引くのを感じた。

手からカップが落ちたのにも気付かないほどに、俺は動揺していた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　クルツ～

僕は今、陸士１０８部隊にいる。

この部隊のデバイスの調整のため、一時的に出向したためだ。

本来は姉さんが来る予定だったけど、都合が合わなく、代わりに僕が来る事となった。

それに僕も個人的に用があったから、特に断る理由もなかった。

別世界を飛びまわっていたシオンさんとティアナちゃんたちと会う約束をしていたのだ。

予てから開発していたものの試作品が出来たので、それを見てもらうためだ。

二人は空港を出たところらしく、こちらに向かっているという。

僕は二人が来る迄の間、二人が別世界を飛びまわる事になった原因を思い返していた。

ティーダ先輩が亡くなった事件から、各世界では度々奇妙な事件が発生している。

それは、高度な技術を持つ無人世界、その遺跡があちこちで破壊されているというものだ。

そう、破壊だけされて、なにかが盗られている訳ではないのだ。

いずれも、管理局の調査対象となるほどの技術がある世界だ。

最近では、人ではない、なにか別の生物によるものとされる痕跡が見つかっている。

シオンさんは、モンスタータイプの執行者（エクスキューショナー）の可能性が高いと言っていた。

各世界が被害にあっているのは、創造主たちがこの世界にある《ＩＤ》を探しているからだそうだ。

創造主は、緊急時に僕らの世界を管理するための特殊な空間を持っていて、その入り口がこの世界の何処かにあるらしい。

《ＩＤ》は、その空間に入るための鍵の役割をしているらしい。

更に言うと、この《ＩＤ》は所謂（オーパーツ）、此方でいうロストロギアのことをいうらしい。

それを探し、破壊する為に、奴等はしらみ潰しに各世界を襲撃している、というのがシオンさんの見解だ。

それなら、多数のロストロギアを所持している管理局を先に狙われるのではと思ったが、今はまだ大丈夫だろうと言っていた。

何故そんな事が分かるのか聞いてみると、恐らく今送り込まれている執行者は、ＦＤ世界の協力者であるブレアさんという人達の目を

盗んみながら、送り込まれたものらしい。

余裕があるならば、知能の高いものを使って、目的の物だけを破壊すればいい。そうすれば発見は遅れるからだ。

しかし、遺跡ごと破壊をしているということは、それだけ監視の目が行き届いている何よりの証拠だ。

彼等が本気になれば瞬く間に《ＩＤ》は世界ごと消されているらしい。

シオンさんの世界では実際にそうなったらしく、《ＩＤ》がまだ残っている世界を検索している間にも、世界が次々と消滅していったという。

偶然にも該当する《ＩＤ》の存在を知っていたから難を逃れたと笑っていたが、洒落にならない。

そんなことを思い返していると、事件発生の報せが入った。

場所はミッド臨海第８空港。火災が発生したらしい。

そこは、シオンさんたちが出発した空港だった。

その報せの直後シオンさんから連絡が入った。

念のため、空港に戻るそうだ。

ついでに消化も手伝うと言っている。

ならば僕もまた、出来る事をやらなければ。

通信制御や情報処理くらいは手伝えることを伝えた僕は、応援部隊として出向となった１０８部隊に同行した。

誰も犠牲にならなければいいけど・・・・・。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　シオン～

ティアナをタクシーに乗せ、先に帰らせた私は今、空港に逆走している。

突如、空港が炎に包まれたらしい。

よほどの事がない限り、そんな所で火災など起きるはずがない。

万が一、奴らが関係してるとしたら面倒だ。

クルツに連絡を入れると、応援の部隊を手伝うために来るらしい。

そうこうしているうちに、空港に到着した。

消化活動を行っている人達がいるが、あまり効果はなさそうだ。

私は、別世界を旅するときに使っていたフード付きのマントを羽織り、隙を見て炎に包まれる空港に飛び込んだ。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

悔しい。

それが、今の私の感情だ。

私もシオン兄さんと一緒に行くと言ったが断られ、今はタクシーの中にいる。

この二年間で、私は以前よりも強くなった。

それなのに、一緒に行けないのは私が弱いからだろうか？

それとも、私がまだ子どもだから？

きっとそうなのだろう。

だから私は、何よりも今の自分が悔しかった。

守られてばかりなのはもう嫌だ。早く強くなりたい。

早く大人になりたい。

そうすればきっと、兄さんの隣で戦えるから。

そうすればきっと、兄さんの夢に届くから。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

シオンが空港内に飛び込んでから暫くすると、一台の車が到着し、一人の少女が出てきた。

彼女はまだ若いながらも、現場の指揮を取り始めた。

そしてその上空には、桃色と金色の軌跡が、空港に向かって伸びていた。

～Ｓｉｄｅ　？？？～

部隊の指揮官演習をしていた私一八神はやて一は、空港火災を聞きつけ、そこでの臨時の指揮官となった。

正直、うまく指揮がとれるか心配だが、今はそんな事を気にしてる場合やない。

すぐに、消化のために指示を飛ばし、現場の混乱をまとめるために動き出した。

本局の魔導師部隊が来るまでなんとしてでも持ち堪えなあかん。

幸いにも、親友の高町なのはちゃんと、フェイト・T・ハラオウンちゃんが遊びに来ていて、一緒に救助活動に協力してくれることになった。

暫く指揮していると、ユニゾンデバイスのリィン―リィンフォース？―が応援の部隊が到着を知らせてくれた。

内心少しばかり気が楽になりながらも、すぐに切り替え、挨拶と指揮権譲渡のために部隊の方に会いにいった。

そこで、一通り挨拶を済ませていると、親友の一人にして、今回の救助活動を手伝ってくれているなのはちゃんから連絡が入った。

要救助者の少女を無事に保護したらしい。また、その子にはお姉ちゃんが居るらしく、その子はまだ見つかっていない。

救助者の名前にリィンが疑問に思っていると、応援に来てくれたナカジマさんの娘さんである事が分かった。

目の前の炎の中に、自分の子どもがいるとしたら、それはどれほど不安だろうか。

私は、一刻も早く火を食い止めるため、空にあがった。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

―空港内　通路ー―

～Ｓｉｄｅ　ギンガ～

私はスバルと一緒にお父さんの部隊に遊びに行くために、空港に居た。

いざ空港を出ようとしたその時に、火災発生の報せが流れた。

「スバルっ！！」

人混みに流されてしまった私は、スバルとはぐれてしまった。

私は怖くなったが、怯えているスバルを思うと、気合を入れなおして、空港内を探し回った。

途中、民間人の人達が逃げ遅れていたので、バリアを張って更に先へと進んだ。

きっと救助に来てくれる局員が気付いてくれるだろう。

それから暫く探し続けるがスバルは見つからず、段々と建物自体が危なくなってきた。

「スバル、返事して？お姉ちゃんがすぐに助けに行くから・・・！」

私は足が竦みそうになるのを堪え、自分自身を励ますように呼びかけ続ける。

が、ついに通路が崩壊し、巻き込まれた私は落ちていった。

「きゃあああぁぁぁっ！！」

もうダメかと思い、目を瞑ってしまった。

しかし、何時まで経っても衝撃がこない。

目を開くと、私はフードで顔を隠した人に抱きかかえられていた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

空港内に突入したシオンは、生体反応を感知した通路へ向かう。

「ファーウェル、あとどのくらいですか?!」

焦りからシオンは、声を荒げながら聞いた。

《あと７００ｍほどで到着します!》

ファーウェルは瞬時に距離を割り出し、伝えた。

シオンが通路に到着し、辺りを見渡すと、少女が居るのを見つけた。

安心したのも束の間、少女は崩壊した通路と共に落ちていった。

《Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ!》

ソニックムーブを発動し、少女を救出することに成功した。

見たところ少女は、幸いにもかすり傷程度ですんでいた。

それからすぐ後に、局員らしき女性がやってきた。

「管理局執務官。　フェイト・Ｔ・ハラオウンです。

そこのあなた、こんなところで何をしているんですか！！」

女性ーフェイトーは、シオンにデバイスーバルディッシューを向けた。

火災現場にフードを被った素性の知れない人物がいたら、当然の判断だろう。

「この子を頼みます。幸い大きな怪我はないようです。」

デバイスを突き付けられたにもかかわらず、シオンはフェイトにギンガを預けた。

「あ、あのっ！この人が私を助けてくれたんですっ！！」

命の恩人であるシオンを庇うため、ギンガは必死になって訴えた。

ギンガを渡されたフェイトは僅かに驚き、だがギンガを抱えながらも、警戒を緩めない。

「要救助者を救助してくれた事は感謝します。ですがそちらの素性を明かしてください。

それになぜこんなところにいるのですか？」

「今はまだ、私が何者であるかはお答え出来ません。

ここにいる理由ですが、一つは救助の手伝いです。

もう一つは、この火災の原因の調査、と言ったところでしょうか」

フェイトの質問に、シオンは曖昧な答えかたをした。

「調査・・・？　あなたはこの火災の原因に心当た「そんなことより、早くその子を連れて行ったほうが良いのでは？」・・・っ！！」

尚も問い詰めようとしたフェイトだったが、シオンに言葉を遮られた。確かに、ギンガを何時までも抱えている訳にもいかない。

納得がいかないといった表情を浮かべながらも、フェイトはギンガを連れてその場を後にした。

その後、一人残ったシオンは、火災の中心部と思われる場所に行った。

「アレは・・・」

するとそこには、全身がマグマのような高熱の体をした全長３ｍ程

のモンスター、《マグマックス》がいた。

このタイプのモンスターは、コアを破壊しない限り倒せない。

が、シオンにとっては大した障害にはならない。

《どうやらここでロストロギアの密輸でも行われていたみたいですね。

大方、この火災はロストロギアの暴走によるもの。アレがいるのは、暴走による強力な反応を感知したからでしょう。》

状況を冷静に判断したシオンは、これ以上の被害拡大を防ぐため、ファーウェルを構えた。

シオンに気付いたマグマックスは、炎のブレスを放つ。

シオンはそれを軽々とかわし、一気に勝負を仕掛けた！

《鋭利なる氷刃、ここへ！　アイシクル・エッジ！》

ファーウェルに凍気を纏わせ、氷の刃を形成する。

これは、紋章術を応用したものだ。

ソニックムーブで死角をつき、次々に斬撃を叩き込む！

斬られた箇所は瞬時に凍結し、動きを封じた。

身動きの出来ないうちに、コアを体ごと両断した。

マグマックスを倒した後、少しでも被害を食い止めるために、シオンは紋章術を使用した。

《銀の三日月（アバス）に導かれし、水を制す水界王アリトン
自然界を支配するそなたの加護のもと
触れるもの、その悉くを凍てつかせる戒めを創れ
冷厳なる氷結の大地を此処に
＜ディープフリーズ＞！！》

ディープフリーズは広域の凍結呪文で、炎を沈静化し、辺りを凍りつかせた。

「今回はこの程度の相手で済みましたが、これから先はそうもいっ

てられないでしょう・・・。」

《ですが、私達のやることには変わりはありませんよ》

ファーウェルの言葉を頼もしく感じるとともに、これから先、今まで以上に気を引き締めなければと、改めて思った。

やがてシオンはその場を後にした。

―指揮車内―

～Ｓｉｄｅ　クルツ～

ナカジマ三佐の二人の娘さん達は、どうやら無事に救出されたらしい。

安心したのだろう、少し気が緩んだようだがそこは流石はベテラン、すぐに切り替えた。

妹さんは、高町二等空尉に。お姉さんのほうは、マントを着た謎の人物によって助けられ、そこにハラオウン執務官が着いたらしい。

謎の人物は明らかにシオンさんだよね・・・。

そんな事を考えていると、シオンさんから念話がきた。

火災現場の中心地に、モンスタータイプの執行者がいたらしい。

ソイツがいたことから、火災の原因は密輸されたロストロギアか何かの暴走だろうと言っていた。

執行者を倒したあと、炎の沈静化を行ったシオンさんは、後は管理局に調査を任せるそうだ。

それにしても・・・・・。

今回は大した敵じゃなかったから良かったけど、これからはそうも言ってられないだろう。

急いでアレを完成させないと・・・・。

それから暫くすると、本局の魔導師たちがやっと到着した。

「やっと着いたか。」

ナカジマ三佐が呟いたが、まさに其の通りだろう。

これから先、こんな対応では後手に回り続けてしまう。

そんなことを考えながらも、僕達は暫く情報処理におわれた。

こうして、夜は更けていった。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

今回の事件で、あまりにも遅い管理局の対応に、はやては自分の部隊を持つことを決意する。

そして、其の手伝いをなのは・フェイトに頼んだ。

彼女達は快くそれを受け入れた。

それから4年後、彼女達の夢の部隊は動き出す。

Ｐｈａｓｅ-３～廻り始める歯車～（後書き）

読んでくれた方々、ありがとうございます！

はい、ＮＡＮＯＨＡ様出てきてませんね。

なんか、スバルを助けて序でにＮＡＮＯＨＡ様と出会う話とかは、結構見かけると思ったので、ギンガの方に行きました。

後は、雑魚モンスターなら「お話」で一撃で仕留めそうだからです。

ティアナを連れて行かなかったのは、まだ連れて行くには早いかなというのと、空戦が出来ないからです。

もう少ししたら活躍しますので、待っていて下さい。

スターオーシャンにはＰＡ（プライベートアクション）という、他のキャラクターとのイベントがあります。
ソコで、もし「あのキャラとのイベントを！」と言う意見があれば是非教えて下さい！

その内出せるように頑張ります。

それでは今回はこの辺で失礼します。

Ｐｈａｓｅ-４　～昇格試験と再会～（前書き）

更新遅くなって申し訳ありませんでしたっ！！

もうね、私生活でちょっと今大変なんですよ。

急いで書いたので、誤字脱字等あると思いますが、ご容赦下さい。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ-４　～昇格試験と再会～

―新暦００７５　４月　第８空港近隣　廃墟都市街―

其処には無数の廃虚が立ち並んでいる。
その中のビルの一つ、その屋上に二人の少女がいた。

一人はボーイッシュな短い青い髪に白い鉢巻きを巻き、白の半袖に青いインナー、半ズボンといった、見るからに活発そうな少女。
右手には重量感あふれるグローブを付け、ローラーブーツを履いている。

もう一人は、オレンジの髪をツインテールにしてリボンで止め、白の半袖に赤のインナー、ミニスカートといった服装。手には銃を持ち、少し大人びた雰囲気をしている。

青い髪の少女は、落ち着かないのか、シャドーボクシングの様に動きを確かめている。

「スバル。あんまり暴れてると、試験中にそのオンボロローラーが逝っちゃうわよ？」

一方オレンジの髪の少女は、　銃を入念にチェックしながら、青い髪の少女―スバル―に注意を促す。

「えぇ～？！

ティア、ヤな事言わないで～。

ちゃんと油も注してきた～。」

スバルと呼ばれた少女は注意した少女―ティアナ―に、万全であることを伝えた。

そんな話をしていると、二人の前に通信画面が開いた。

其処にはまだ幼いと言える少女が写っていた。

「おはようございます！

魔導師試験受験者さん二名、揃ってますか？」

「「はいっ！」」

「所有する魔導師ランクは陸戦Ｃランク。
今回受験するのは、陸戦魔導師Ｂランクへの昇格試験で間違いないですか？」
二人は肯定する。
「本日の試験官を務めますのは、私リィンフォース？空曹長です。宜しくですよ～。」
「「宜しくお願いします！」」
二人が試験の確認をしているとき、その上空ではヘリに乗ったはやて、フェイトがいた。
一方そのころ・・・・・。
～Ｓｉｄｅ　なのは＆ａｍｐ；クルツ～
《範囲内に生命反応、危険物の反応はありません。》

試験場の最終チェックをしているなのはにデバイスの《レイジングハート》はスキャンの結果を伝える。

「コースのチェック、完了です。なのはさん。」

そしてもう一人、共に試験場のチェックをしていたクルツも、安全を確認する。

「うん。ありがとう、レイジングハート、クルツ君。」

「観察用のサーチャーの障害要のオートスフィアも設置完了。

私達は、全体を見てよっか?」

《Ｙｅｓ，ｍｙ　ｍｕｓｔｅｒ.》

「そうですね。」

なのはの問いに、二人は短く答えた。

その目は既に、モニターに釘付けになっている。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

「　試験内容は、制限時間内にターゲットを全て破壊し、ゴールを目指してくださいです。

但し、中には破壊してはいけないダミーも混ざっているので注意し

て下さい。

何か質問はありますか～？」

試験官の少女―リィンフォース？は、二人に確認をとる。

「ありません！」

「ありません！」

ティアナが先に答え、続けてスバルが答えた。

「では、スタートまで後少し！

ゴール地点で会いましょう、ですよ♪」

可愛らしくウィンクしたリィンは、通信を切った。

二人の前にスタートのグリッドが現れる。

「「Ｇｏ！！」」

グリッドは消え、ついに試験が始まった。

ティアナはアンカーガンのアンカーをビルへ飛ばし、スバルを抱き寄せ、そのままビルへと接近。

スバルは、窓を突き破り中へ侵入、スフィアの攻撃かわしながら、次々に破壊。
一方ティアナは、屋上に登り、そこからスフィアを破壊していく。

その後、二人は予め決めていた合流ポイントへと向かい、合流。
試験は順調に進んでいく。

その様子を見ていたはやて、フェイトの評価もなかなかいいようだ。

試験は進み、スバルとティアナは持てる魔法を駆使し、次々にスフィアを破壊。

しかし、そこで油断したのか、スバルの背後をスフィアが狙う！
それに気付いたティアナはスバルを突き飛ばし、難を逃れる。
そのままスフィアを破壊しようとするが・・・。

「うぁっ！！」

ティアナは窪みに足をとられ転びながらも、スフィアをなんとか破壊。

その際に、サーチャーに流れ弾が当たってしまった。

～Ｓｉｄｅ　なのは＆ａｍｐ；クルツ～

「トラブルかな？リイン、一応様子を見に行くね？」

「はいです、お願いします。」

《私もセットアップしますか？》

「そうだね、念のためお願い。」

「それじゃあ僕は、こちらでもう少し原因を探ってみます。特に分からなかった場合は、すぐにそちらに向かいます。」

「うん、お願いね。」

（二人とも、何も無ければ良いんだけど・・・）

突然の事体に、クルツに少し不安がよぎる。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

「ティア！大丈夫？！」

「騒がない、何でもないわよ。」

そう言って立ち上がろうとするも、痛みに座り込んでしまう。

どうやら足を挫いた様だ。

（これは流石に不味いかも・・・）

そう思いながらも、顔には出さず、スバルに一人で行くように言う。

「っ！！ティアッ！！」

「うっさい！次の試験の時は、私一人で受けるって言ってんでしょ！！」

その言葉にスバルは愕然とする。

「次って、半年後だよ・・・？！」

（この子のチャンスまで、無駄にはできない）

「迷惑な足手まといが居なくなれば、私はそのほうが気楽なのよ。分かったらさっさと・・・っつ！！」

無理やり立ち上がるが、やはりよろけてしまう。

「ほら早くっ！！」

その様子に、スバルは自分の胸のうちをあかす。

そして伝える。ティアナが共に居なければ意味が無いと。自分は納得できないと。

それは、ティアナのこれまでの努力を知っているからこその言葉だった。

その想いは、確かにティアナに届いた。そしてだからこそ、現状ではそれがどれだけ難しいかを痛感している。

「じゃあどうするつもりなのよ?!」

ティアナの問いにスバルは自分の考えを伝える。

それはある種の賭けであった。

～Ｓｉｄｅ　はやて・フェイト～

「あ、出てきた。」

「うん。・・・あれ、だけど？」

二人が目にしたのは、フィールドを走っているティアナだった。

ティアナに気付いたスフィアが攻撃をしかけ、それは吸い込まれるようにティアナへと当たり爆発！

「あっ、直撃？！」

その光景に思わずはやては言葉を漏らす。しかし。

「ううん、違う。」

フェイトの目は、真実を捉えていた。

それから次々とティアナが現れてくる。

そう、これは。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

「フェイクシルエット。これ無茶苦茶魔力喰うのよ、一撃でしとめなさい！でないと、二人して落第なんだから・・・！」

そう、これはティアナによる幻術。

スバルの作戦とは、他のスフィアの注意を惹きつけている間に、スバルが本命を撃破。

残りのスフィアを破壊しながらゴールするというものだった。

屋上に立ったスバルは、気合を入れなおし、＜ウィングロード＞という魔法で道を作る。これで準備は整った。

「・・・行って！！」

「いっくぞおおおお！！」

一気に速度をあげ、ビルを破壊しながら一気に目標へと吶喊！！

直前で気付いた大型スフィアはバリアを形成、その一撃を防ぐ。

しかし、それすらも狙いだった。

あまりの威力に、スフィアは反撃ができない。

「うおおおおおぁぁぁ！！」

カートリッジを二発使用し、バリアを破壊する。

直後、反撃がくるも、何とか防ぐ。

一度距離を取り、更にカートリッジを二発使用。

一撃必殺の構えに出る。

「一撃」

―それは、嘗て自身の命を救ってくれた、憧れの人が使った魔法。

―独学の末に編み出した、自身の持てる最強の一撃！！

「必倒ぉ！！」

スピナーが唸りをあげ、高速で回転。

一目の前に魔力球を形成。

「ディバイーン」

一その魔力球目がけ、拳を叩き込む！！

「バスタァァァーーー！！」

その一撃は大型スフィアをいとも容易く破壊、そのままビルをも突き破った。

一試験場　ゴール前一

そこでは、試験官であるリィンが二人を待っていた。

「あっ、来たですね♪」

そしてついに二人がやってきた。

スバルに背負われたティアナは、そのまま残るスフィアを破壊。

「はい。ターゲットオールクリアです♪」

これで全てのターゲットは破壊された。

「魔力、全開っ！！」

残りの時間が僅かなため、スバルは一気に加速！！

しかし

「ちょっとスバル！ちゃんと止まる時のこと考えてるんでしょうね？！」

「・・・え？」

どうやら何も考えて無かったようだ。

「あっ・・・！！」

「うそっ！！」

それを見ていたリィンは「あ、なんかチョイヤバですぅ」と思わず呟く。

二人は案の定ゴールするも、予想どうり止まれない。そのまま、奥の瓦礫へ向かう。

「「うわぁぁぁぁぁ！！」」

あわや激突というその時。

「アクティブガード。それからホールディングネットもかな？」

一人の女性が魔法を発動した。

そのまま瓦礫へ突っ込み、辺りを煙が覆う。

そして、煙が晴れると、二人は魔法によって大事には至らなかった。

「むぅ～！二人とも！危険行為で減点ですぅ！！」

そんな二人の前に現れたのは試験官のリィンだったが、その小ささに二人は唖然としていた。

説教をしていたが、二人の耳にはちっとも入ってこなかった。

「ちっさ・・・」

思わずティアナが呟いた。

そんなやり取りを続けていると、空から白いバリアジャケットを着た女性が降りてきた。

少女と呼ぶには些か無理がありそうだが。

「ちょっと吃驚したけど、無事で良かった。」

「なのはさん！」

リィンは、嬉しそうにその女性―高町なのは―に近づく。

「リィンもお疲れ様。ちゃんと試験官出来てたよ。」

「えへへ～」

なのはに誉められたリィンは、とても嬉しそうだ。

「ケガした足見せてくれる？治療するから」

「それならリィンに任せて下さいです！」

そう言ってリィンは、ティアナの元へ向かう。

「なのはさん・・・。」

一方スバルは、突然現れたなのはに驚き、やっとの思いでなのはの名前を呼んだ。

それに気付いたなのはは、スバルに近づく。

「し、失礼しました！高町一等空尉！」

「なのはさんで良いよ。それにしても驚いたなぁ。バスター使うんだもん。」

「す、すみませんっ！勝手に・・・」

「ううん。嬉しかったなぁ。・・・大きくなったね、スバル。」

「あっ・・・」

空港火災の時の事を覚えてくれていた事に、そして憧れの人と出会えた事の嬉しさにスバルは泣き出してしまった。

そんな様子をティアナ達は優しい目で見ていた。

それから少しの間話をしてから、彼女達はその場をあとにした。

～Ｓｉｄｅ　クルツ～

「どうやら、僕の出番は無さそうだね。

ともかく、何も無くて良かった。」

クルツは、彼女達の様子を見ながら一人呟いた。

出るタイミングを無くしたらしい。

その為、やることの無くなった彼は、試験のデータをまとめながら局へ戻りはじめた。

「ティアナちゃんに最後に会ったのは、訓練校に入る前だったなぁ。あの頃からまた一段と強くなったみたいだね。

・・・このまま強くなっていけば、何時か《君》を使いこなせるようになるかな。

ねぇ、《ファントム》？」

彼の言葉に、答える者はいない。

〈Side Out〉

Ｐｈａｓｅ-４　～昇格試験と再会～（後書き）

いかがだったでしょうか？

やっとこさ本編突入ですね。

これからまた更新遅くなってしまうと思いますが、勘弁して下さい。

それでは失礼します。

Ｐｈａｓｅ-５　～試験結果　夢の始まり～（前書き）

更新遅くなってすみません。

今回の話は、ティアナ達の試験結果の話です。

アニメの二話位の話となります。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ-５　～試験結果　夢の始まり～

―とある管理世界―

そこは、管理局により管理指定されているとある世界。

嘗てはある程度の文明が栄えた様だが、それも今では廃れてしまった、無人の世界。

そんな、本来人間がいないはずのその世界にフードの付いた黒い外套を纏った一人の男がいる。

そのまわりに楕円状の機械の兵器らしき物の残骸や、異形の生物の残骸を大量に撒き散らして。

「ファーウェル、他に反応は？」

《反応無し。全て片付きました。
後は遺跡内の調査だけです、マスター・シオン》
男―シオン―の問に、デバイスのファーウェルは簡潔に答える。

今回この世界に来たのは、この世界の嘗ての文明、その遺産を護る為だ。

ミッドやベルカ、他世界に比べて文明は余り栄えなかった世界の遺産など、あまり期待は出来ないはずだった。

しかし、ここで一つ問題がある。

大して栄えなかったはずの世界、そのはずなのにある一つの遺跡だけが異常に文明レベルが高かった。

その為、調査は難航、手付かずの状態だった。

そんな世界に最近手を出す者がいるらしい。機械の兵器も、ソイツの仕業だろうと言われた。

そこで、裏稼業として依頼された人、若しくは物を《護る》ことを専門にした《護り屋》のシオンに、クロノが極秘調査を頼み、この世界に到着。

いざ、遺跡に入ろうとしたところで先程の機械と異形―執行者―と交戦、現在に至るという訳だ。
しかし、執行者達は連携を取っている訳ではなかった。

やっと遺跡に入れたシオンは、その内部に驚愕する。

それは、自分達の世界にあった《試練の遺跡》と呼ばれる場所に酷似していた。

トラップや魔物を倒しながら最深部へ向かう。

嘗ての世界の《試練の遺跡》に比べて、此方は其処までは難しくはなかった。

作り自体は似ていても、その中身は似ても似つかない。

それでも、一人で攻略しに行こうとは思えないが。

遺跡侵入から3時間程したあと、遂にシオンは最深部へたどり着いた。

扉を開け、中に入ると、目の前に6～7m程の竜がいた。

「《試練の遺跡》に似てるから何かしら居るとは思ってたが、よりによって竜か。

何でこんな所に居るんだよ。

まぁこれも仕事だしやるしか無い、か。」

―管理局―

一方、シオンが戦闘を始めた頃、管理局のある一室。

其処には、はやて、フェイト、スバル、ティアナとリィンがいた。

はやて達は、二人の合格発表の前に、新設される部隊《機動六課》へのスカウトをしている。

説明の途中、スバルがロストロギアについてティアナに念話で聞いたりするなどしている。

「もしかして、今取り込み中かな？」

暫く説明を続けていると、なのはとクルツが試験結果を持ってきた。

ちなみに、今のクルツの階級は陸曹長となっている。

「クルツさん？！」

クルツが居るとは思わなかったティアナは驚いた。

「なんや、二人とも知り合いなん？」

「はい。僕の先輩がティアナちゃんのお兄さんだったので、その繋がりで。」

なるほど、と頷いたはやて達はスペースをあけ、二人が座れる様にしたが、少し狭いためクルツは立ったままとなった。

「とりあえず試験の結果ね。試験官のリィンやクルツ君と話した結果、技術面は問題無しの合格点。

でも、危険行為や報告不良は、見過ごせるレベルを越えています。

だから、残念ながら二人とも不合格。」

結果を聞いた二人は、目に見えて落ち込んでいた。

「ただ、二人の魔力値や能力から言うと、このままCランクにしておくのはかえって危険だと言う判断から、特例措置を取りました。」

落ち込む二人励ます様にクルツが言った。

当の二人は何の事だか分からず、首をかしげる。

そんな二人の前になのはは書類を出す。

「これ、特別講習への申請用紙と推薦状ね。

そこで3日間講習を受ければ、4日目に再試験を受けられるから。
本局の人達にしっかり揉まれながら、安全とルールについて確り学んだ、Bランクなんて楽勝だよ！」
再試験。
その言葉を聞いた二人は、目を輝かせた。
「「ありがとうございます！」」
「あぁ、それから入隊の件の返事は、試験が終わってからでええから。
じっくり考えて、答えを出してな」
「あの、クルツさんも機動六課に？」
「うん。この部隊でないと出来ないこともあるしね。
それにエース級の人達のデバイスを調べられるしね。」
「こっちとしても、優秀な人材がいるのは有難い事やし」
「クルツさんもスカウトされたんですか？」
スバルがクルツに質問する。

「うん。４年前の空港火災の時に、１０８部隊に寄っていてね。その時、現場の情報処理とかを手伝ってたんだ。それがきっかけで部隊長の目に留まった、てところかな。」

「そうだったんですか?!」

クルツの言葉にスバルは驚いた。

「そういえば、此処にいる皆ってティアナを除いて、全員あの空港に繋がりがあるよね。」

今まで話を聞いていたフェイトがそういう。

「実はティアナちゃんも無関係とは言い難いんですよ?」

「?それってどういう・・・?」

皆が疑問に思っていると、ティアナが説明を始めた。

「実はあの日、私も空港に居たんです。

もっとも、火災が発生したのは私が空港を離れてからなんですけどね。」

「なるほど。それにしても、えらい偶然やな。」

そんな話をしているなか、フェイトは一人難しい顔をしている。

「フェイトちゃん、どうしたの？」

疑問に思ったなのはが聞くと、フェイトは何か言いづらそうに話始めた。

「えっと、空港火災で思い出したんだけど。

あの時、私はスバルのお姉ちゃんを助けたんだけど、その時にね。」

それを聞いたなのはとはやては納得がいったようだ。

「？それってどういうことなんですか？

ギン姉は無事でしたし。」

ギン姉、というのは彼女の姉である《ギンガ・ナカジマ》のことだ。

「あの時、あの場所には私よりも早く来ていた人がいたんだ。

局員じゃなかったみたいだし、それに、顔も分からなかったんだけど。」

「あっ！！そういえばギン姉もそんな事言ってました！

黒い服の人に助けられたって。」

その話を聞いているティアナとクルツは、シオンの事だと分かっていたので冷や汗をかいていた。

それから暫く話をした後、その場は解散となった。

解散後、中庭にいるスバル達の様子を見ていたはやてとなのはは、もう一組のフォワード部隊の話をした。

「そういえば、フォワードに加えるのって後二人だっけ。そっちは？」

「二人とも別世界。今はシグナムが迎えに行ってるよ。」

そこにフェイトとリィンも加わり、少し話をした後、彼女達もそれぞれの持ち場に戻って行った。

―空港―

シオンは無事竜を倒し、その部屋の中を探すと、隠し通路が地下へと伸びていた。

その通路を通っていくと、中央に台座がある部屋があった。台座には、ソフトボール大の銀色の球体があった。

どうやらこれが今回の依頼の品らしい。

封印処理をしたそれを持って、現在はクロノの使いとの合流場所へ向かうため、空港にいる。

中を歩いていると、エスカレーターから落ちそうになっている少女を助ける少年の姿を見かけた。

（へぇ。なかなか良い動きをする。将来伸びそうだな。）

そんな事を考えながら歩いていると、桃色の髪の女性とすれ違った。

「「っ！！」」

お互い振り向きはしなかったが、お互いに相当の実力者である事を理解していた。

（コートの下から制服が見えたから、恐らく局員だな。

・・・出来れば相手にしたくないタイプだな）

少しの不安を胸に、シオンはその場を去った。

～Ｓｉｄｅ　シグナム～

機動六課に入ってくる新人を迎えにきたが、今は二人が揃うのを待っている。

・・・主の、そして私達の新しい部隊。

際先の良いスタートを切れると良いが。

そんな事を考えていると、黒いコートを着た紅い髪の男とすれ違った。

「っ！！」

すれ違った瞬間、その男の実力が並外れていることに気付いた。

どうやら相手も、振り向いてはいないが、こちらに気付いたようだ。

「今の男。出来るな・・・。」

「遅れてしまってすみません!!」

「すみませんでした!」

どうやら新人がやってきたようだ。だが私を見ると何とも不思議そうな顔をしている。

「どうした。私の顔に何かついているか?」

「い、いえっ!そういう訳では無く。」

「何というか、嬉しそうだったので何か良い事があったのかと・・・」

そう言われて、私は驚いた。・・・どうやら顔に出ていたようだな。

「いや、何でもない。それでは行こうか」

「「はいっ!!」」

それから私達は六課へと向かった。

願わくば先ほどの男と一度手合わせをしてみたいな。

・・・敵ではなく、味方として。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

あれからクロノと連絡を取り、使いの人物に例の品を渡したシオンは、今はクラナガンにある自宅にいる。

今回の事で、店を休みにしてしまったので、明日はその分を取りかえさなければ。

そのため、明日の仕込をしている時にクルツからメールが来た。

ティアナがＢランク昇格試験に落ちたが、十分受かる素質はあること。

新しい部隊、機動六課へのスカウトと、恐らくそれを受けるだろうこと。

「そっか。やっとスタートラインに立てるんだね。」

嬉しそうに笑った後、お礼の返事を送信したシオンは再び仕込みを続ける。

Ｐｈａｓｅ-５　～試験結果　夢の始まり～（後書き）

いかがだったでしょうか？

シグナム程の騎士ともなると、相手の雰囲気だけで強さを計れるような気がしてついやってしまいました・・・。

さて、次回はいよいよ訓練開始です。

原作とはまた少しだけ違います。

それでは失礼します。

Ｐｈａｓｅ-６　～機動六課～（前書き）

どうも。

アシェーリトです。

今回からティアナの原作との違いが目立つ様になってきます。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ-６　～機動六課～

―喫茶店　アクアエリー―

依頼のロストロギアの回収から数日後、喫茶店アクアエリーではシオンが孤軍奮闘している。

何故一人なのか。

それは、人通りが余り多くなく、店事体があまり大きくない事から、シオンは一人で店を切り盛りし始めたからだ。

それに、ティアナも時々手伝っていたので、他に従業員を雇わなかった。

しかし、次第に噂が噂を呼ぶようになり、客足が大幅に増えたのだ。

その状況に、そろそろアルバイトでも募集しようかと本気で考え始めるシオンに休む暇は無い。

それでも手抜き料理など一切しようとはしない。

「お待たせ致しました。こちら、モーニングセットで御座います。」

それは、知らない人が自分の料理を食べてくれることの喜びを知ったからだ。

その為、シオンは心からの笑顔で接客をする。

「あ、ありがとうございます！」

「ごゆっくりどうぞ」

元々綺麗な顔のため、眼帯を付けていても逆にそれが神秘的な雰囲気を醸し出し、プラスの要素に働いている。

そんなシオンの笑顔を向けられた客は、男女問わず赤面する。

常連の中には、その笑顔を一日の活力としている者さえいる。

味だけではなく、シオン自身にも客足増加の原因があるのだが、そんなことを全く知らないシオンは接客を続けながらも、ティアナの事を考える。

（そういえば今日からでしたね。新しい部隊が動き出すのは。）

心の中で応援しつつ、今日もシオンは接客を続ける。

―０７５年　４月　機動六課―

新部隊始動の挨拶を終えたティアナ達は、訓練が始まる前に互いに自己紹介をする。

フォワード人はなのは達隊長陣を除く全員が新人で、特にフェイトの受け持つライトニング分隊は、まだ１０歳程度の《エリオ・モンディアル》と《キャロ・ル・ルシエ》からなる。

自己紹介がちょうど終わった彼女達は訓練場へと向かう。

―機動六課訓練スペース―

着いた場所は、海が良く見える見晴らしの良い場所だった。

既にそこには、なのはとクルツ、そして眼鏡をかけた女性がいた。

「今返したデバイスには、データ記録用のチップが入ってるからちょっとだけ大切に扱ってね？」

予め預かっていたデバイスを新人達に返したなのはは、隣の女性とクルツに自己紹介を促す。

「メカニックデザイナー兼、機動六課通信主任のクルツ・アテンザ陸曹長です。

どうぞクルツと呼んで下さい。

僕らは皆のデバイスの改良や調整を務めます。

デバイスについての相談とかがあったら、気軽に声をかけてください。

それから、あんまり僕ばかりが喋ると彼女が喋れなくなってしまう

のでこの辺で。

シャーリー、後をお願いします。」

「ホント、喋る事無くなるんじゃないかと思いましたよ。

はじめまして！

クルツさんと同じく、メカニックマイスター兼、機動六課通信副主任の《シャリオ・フィニーノ》です。

皆は＜シャーリー＞って呼ぶので、そう呼んでね。

もちろん、デバイスの事で困ったら私にも相談してね？

それから、デバイスのデータを集めたりするのに、時々クルツさんと一緒に訓練を見せてもらったりします。

宜しくね♪」

「「「「はいっ！！」」」」

「それじゃあ、訓練を始めようか？」

一通りの自己紹介も終わったところで訓練に入る事に。
しかしそこで疑問が残る。

「はい・・・。」

「あの、此処でですか・・・？」

彼女達の疑問も当然だ。
なんせ目の前には海しか広がっていないのだから。

その様子を見たなのははクルツとシャーリーに呼びかける。

二人は目の前に出したパネルを操作。すると海上のプレートにステージが現れた。

「うわぁ・・・」

「すごい・・・」

彼女達はその光景に思わず言葉を失う。

それからすぐに、ステージへと向かう。

―六課隊舎　屋上―

そこには、オレンジの髪の一人の少女が訓練スペースを見下ろしている。

「ヴィータ。此処にいたか。」

すると後ろから桃色の髪の女性がやってきて少女―ヴィータ―に声をかける。

「シグナム」

ヴィータは横に並んだ女性―シグナム―のよびかけに答える。

「新人達は早速やっているようだな」

「あぁ。」

「・・・お前は参加しないのか？」

するとヴィータは、彼女達ひよっこ相手には、まだ自分の出る幕ではないと言う。

「そうか。」

「それに、自分の訓練もしたいしさ。同じ分隊だからな、私は空でなのはを守ってやんなきゃならねえ」

そう言った彼女の顔には、決意が漲っていると同時に、ほんの僅かな後悔の念が見て取れる。

「そうか。」

そんな彼女の心情を察してか、シグナムはそれ以上は言わなかった。

互いに無言となったが、ヴィータが一つ疑問をぶつける。

「そういえば、《シャマル》は？」

「あぁ。アイツなら自分の《城》だ。」

少し呆れた様に、シグナムは短く答えた。

その時当の本人、《シャマル》はメディカルルームで終始ご満悦といった表情を浮かべていたとか。

そう言ったあと、シグナムは新人達に視線を戻す。

（ひよっこ、か。果たしてそうだろうか・・・？）

その視線は、キャロと話しているティアナを捕らえていた。

―海上訓練スペース―

彼女達新人の前には楕円状の機械が現れる。
その機械の名は《ガジェットドローン》。

初の模擬戦、その訓練内容は逃走するターゲットを１５分以内に８体全てを破壊、若しくは捕獲。

そして遂に訓練が始まる。

「なにこれ、動きはやっ！」

「ふわふわしてて捕らえにくい・・・！」

前衛であるスバルとエリオは、思いのほか素早い動きをするガジェットに手こずっていた。

先行しすぎる二人を諫めながらも、ティアナは冷静に状況の分析に入る。

（どんな能力があるか分からない以上、まずはそれを確認しないと）

「チビッ子。威力強化お願い」

「はいっ！ケリュケイオン！」

《Ｂｏｏｓｔ　ｕｐ.　Ｂｕｌｌｅｔ　ｐｏｗｅｒ.》

キャロはティアナに強化魔法をかける。

確認したティアナはそれをガジェット目掛け放つが、直前で消滅する。

「バリアッ？！」

「いえ、違います。フィールド系！」

（フィールド系で魔力弾を無効化・・・。まさか！）

「ＡＭＦ《アンチマギリングフィールド》？！」

いち早く気付いたのはティアナだった。

《その通り。攻撃魔法を無力化する、通称ＡＭＦ。通常射撃は効かないし》

スバルは逃げたガジェットを追うためにウィングロードを使う。

「バカッ！スバル危ないっ！！」

《ＡＭＦを全開にされると、飛翔や足場作り、移動系魔法の発動も困難になる。スバル、大丈夫？》

話を最後まで聞かなかったスバルは、足場を消され、そのままビルへ突っ込んだ。

大した怪我は無いらしいが。

その説明を聞きながら、ティアナの中では既にいくつかプランが浮かんでいた。

「チビッ子、名前何て言ったっけ？」

「キャロであります。」

「キャロ。手持ちの魔法とそのチビ竜の技で何とか出来そうなのある？」

ティアナのその問いは、寧ろある事を確信しているかのようだ。

「・・・試してみたいのが、いくつか。」

「私もよ。」

キャロの答えに、ティアナは満足そうに笑う。

そして、作戦を実行するために、スバルとエリオへ念話をとばす。

「へぇ。皆良く走りますね～。」

シャーリーは新人達の動きに感心している。

しかし、なのはやクルツにとってはこれは想定内。

「危なっかしくてドキドキだけどねぇ。

デバイスのデータは取れそう？」

「問題ありませんよ。良いデータが取れてます。」

「四機とも良い子に仕上げますよ～？レイジングハートさんも、協力お願いしますね？」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．》

（それにしても、たった一度の攻撃でＡＭＦを見抜いたり、すぐに作戦を立て直すなんて。

ティアナ、思ってたよりもずっと冷静だな・・・。まるで、場馴れしてるみたいに・・・。）

彼女達の動きを見ながら、なのははそんな事を考えていた。

足止め役のエリオは橋を落として一機破壊。続くスバルは、残りを誘導しながらも、一機に取り付いてゼロ距離から破壊する。

キャロは竜の《フリードリヒ》の炎と召喚による無機物操作でガジェットの動きを止める。

そして、残るは二機となる。

（私がやることは変わらない。私はただ、この銃で打ち抜くだけっ！）

「魔力弾？ＡＭＦがあるのに？」

シャーリーは先ほど掻き消されたことから、魔力弾での攻略法はな

いものと思っていた。

《いいえ。通用する方法があります。》

しかしそれをレイジングハートが否定する。

（今必要なのは集中すること。

一秒でも早く、正確に魔法を作り出す！！）

ティアナは多重殻弾での攻撃にでる。

その形成速度は、恐ろしいほどに速く、そして正確だ。

「フィールド系防御を突きぬける多重弾殻射撃。
本当は、ＡＡランク魔導師のスキルなんですけどねぇ。」

「ＡＡランク？！」

クルツの説明にシャーリーは驚愕する。
ついこの間Ｂランクに昇格したばかりの子が、ＡＡランクのスキルを使うのだ。驚くのは当然だった。

（暫く見ない内に、随分と腕を上げたみたいだね。）

そんなティアナの成長に、ティーダの後輩であったクルツは嬉しく思う。

なのはも、ティアナの様子に期待を寄せている。

（固まれっ、固まれっ！固まれっ！！）

「はぁぁぁぁあ！！
ヴァリアブルシュートッ！！」

放たれた魔力弾は、二機のガジェットを破壊。そのままビルへと突っ込んだ。

《ナイスッ、ナイスだよティア！！》

「スバル・・・、うっさい。この位、当然よっ・・・。」

かなりの疲労思わず仰向けに倒れこみ、大声で聞こえてくるスバルの念話を少し鬱陶しく思いながらも、ティアナは成功した喜びと確かな成長を感じていた。

それから暫く訓練は続き、終わった頃には全員が疲れ果てていた。

―食堂―

食堂では、はやての騎士《ヴォルケンリッター》であるシグナム、ヴィータ、シャマルと狼の姿をした《ザフィーラ》が、主の帰りを待っていた。

「あっ！はやて！！」

そこへ、はやてが帰ってきた。

「はやて、ご飯食べた？」

「お昼抜いたからなぁ。お腹ペコペコや。」

「それは、大変です。すぐに何か注文してきましょう。」

「お茶、貰ってきま～す。」

それから彼女は、自分が居ない間の部隊の様子を尋ねる。

「新人達は今頃グロッキーだろうな。まぁ、全員ヤル気と負けん気だけはあるみたいだし、付いて来れると思うよ。」

「中でも、ティアナ。彼女はどこか場馴れしているような感じさえ見受けられました。」

「ティアナが？」

シグナムの言葉に、はやては喰い付く。

「えぇ。ＡＭＦの存在にいち早く気付き、尚且つ、即座に作戦を立て直した。

まだ粗いところは多々ありますが、それでも他の新人達に比べれば、明らかに冷静でした。

中々期待できそうです。」

「シグナムがそこまで褒めるなんて珍しいな。

そんならそれは良い事なんやし、伸ばしていけるようにせなあかんな。」

「うん。」「「はい」」

それから少しした後、今まで寝ていたリインも加わり、食事をしながら彼女達の会話は続いた。

―寝室―

はやてと共に外の部隊に行っていたフェイトは、なのはと今日あっ

たことを話している。

「新人達、手ごたえはどう？」

「皆元気で良い感じ。中でも、ティアナは結構良かったよ。」

「ティアナが？」

フェイトはその時の事を詳しく聞く。

「うん。模擬戦でガジェットを相手にした時なんだけど、ＡＭＦで通常弾が効かないときの切り替えと、作戦を立て直す速さがあって良かったよ。」

「へぇ。すごいね。」

「うん。まるで実戦慣れしてるみたい。

そう思えるくらい、切り替えが早かった。」

「流石にそれは無いんじゃないかな？

でも、なにはともあれ、立派に育ってくれるといいんだけどね。」

「育てるよ。あの子達がちゃんと、自分達の道を戦って行ける様に。」

そう言ったフェイトになのはは微笑みながら、しかしその瞳には確かな決意を宿して答えた。

その頃、ロビーで寝てしまっていたフォワード陣は、やっとの思いで隊舎に戻っていた。

―喫茶店　アクアエリー―

閉店時間も過ぎ、片付けと明日の仕込をしていたシオンに通信が入る。

《こんばんは、シオンさん。ファーウェル。》

「クルツか。」

《こんばんは、クルツさん。》

通信の相手はクルツだった。
クルツは今日の新人達の様子や、部隊の雰囲気などを話した。

「へぇ。どうやら、局に入ったのは正解みたいだな。」

《流石はお嬢様です。
この調子で頑張っていってほしいものですね。》

ティアナの活躍にシオンとファーウェルは感嘆する。

暫くそんな話をした後、シオンが切り出した。

「ところで、あの子達のデバイスなんだが。」

《えぇ。順調に製作中です。じきに完成しますよ。》

「そうか。何とか間に合ってくれると良いんだがな・・・。」

シオン達に浮かぶのは、嘗て自分達が渡す作ったデバイスを渡すことが叶わずに逝ってしまった友人のこと。

《・・・大丈夫です。あの機能はまだ完全じゃないとしても、それでも彼女達を護れるだけの力はあります。

もう、あんなことは絶対に起こさせません。》

当時の事を思い出したのか、クルツの表情は悔しそうな、辛そうな表情になった。

「・・・そうだな。頼んだぞ、クルツ。

何れ俺が彼女達に関わるまで、彼女達を護ってくれ。」

《はい、必ず・・・！》

通信を切ったシオンは、疲れた様に椅子に座り込む。

《マスター、心配いりません。あの部隊は強い。なにより、お嬢様もあの頃よりもずっと強くなっています。》

そんなシオンを励ますようにファーウェルは言った。

「・・・あぁ、そうだな。だが、何時何が起きてもおかしくは無い。あの子達を護るためにも、一刻も早くアレを完成させなければ。その為にも、頼むぞ、ファーウェル？」

《勿論です。　必ず彼女達を護ってみせましょう！》

ファーウェルの力強い言葉に、シオンの不安は少しだけ軽くなった。

やがて、仕込みを終わらせたシオンは、眠りについた。

Ｐｈａｓｅ-６　～機動六課～（後書き）

いかがだったでしょうか？

訓練校に入る2年前、つまり、ティーダの死から少し後に、ティアナはシオンと共にちょくちょく異世界に行っていたので、

多少実戦経験があります。

その為、原作よりも少しだけ頭が柔軟に働くのです。

今回はこの辺で失礼します。

指摘等あったら是非教えて下さい！

Ｐｈａｓｅ-７　～ファースト・アラート　新たなる力～（前書き）

またまた更新遅くなってしまってすみません（汗）

今回は六課初出動の話です。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ-７　～ファースト・アラート　新たなる力～

《兄さんへ。お元気ですか？

機動六課に所属してから、既に二週間が経ちます。

同期の陸上フォワードとはそれなりに良好な関係です。

ただ、やはり実戦を知らない為か、甘い行動が目立つ気がします。

もっとも、私自身まだまだなので、偉そうな事は言えないけど。

訓練のほうは、教導官が厳しく教えてくれるので、かなり充実しています。

このまま訓練を続けていけば、いつかは兄さんの隣で戦えるようになれるでしょうか？

それから、クルツさんから《護り屋》として度々異世界に行っていると聞きました。

大丈夫だとは思うけど、あまり無茶はしないでください。

当分の間は、２４時間勤務なので、今まで以上にそちらに顔を出せ

なくなってしまうと思いますが、ティーダ兄さんの命日には休みをもらって、帰ろうと思います。

それじゃあ、またメールします。

ティアナより》

―六課訓練スペース―

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

「はい、整列！」

高町教導官の掛け声に、私達はいったん集まった。

皆の様子を見ると、全身汚れだらけで、肩で息を切らしている。

私も似たようなものだけど、訓練校に入る前の経験があるから、そ

こまで酷くはない。

「じゃあ、本日の早朝訓練ラスト一本！皆、まだ頑張れる？」

「「「「はいっ！！」」」」

当然だ。この位でギブアップじゃとてもアイツ等には勝てない。

ラストはシュートイベーションで、教導官の攻撃を誰一人非弾せずに5分間逃げ切るか、一撃を加えるか。

兄さんに近いレベルの人相手に5分間も逃げ切る自信なんて、少なくとも私には無い。

「このボロボロの状態で、教導官の攻撃を捌き切る自信、ある？」

「無いっ！！」「同じくです。」

それに答えたのはスバルとエリオだ。

ここまでくると、いっそ清々しい。

「じゃあ、なんとか一発入れよう！」

「はいっ！」

兎に角、これでやるべき事は決まった。

あとは、作戦を考えてそれを実行するだけ。

「準備はいいみたいだね？それじゃあ、レディ・・・ゴー！！」

教導官の初撃を回避した私達はそれぞれが配置につく。

《スバル、ウィングロードを展開して！シルエットとオプティックハイドで隙を作るから！》

《了解っ！！》

《エリオとキャロは指定のポイントで一旦待機っ！意識を逸らせている間に、強化魔法で一気に勝負に出てっ！！》

《《はいっ！！》》

案の定、幻影の私とスバルに向かって攻撃をしかけた。

これで、ほんの僅かだけど隙が出来る。

「うおぉぉぉぉぉ！！」

不可視の魔法で姿を消していたスバルが、教導官に迫る。

でも、それもあっさり防がれる。

分かってはいても、やっぱりレベルの差を感じてしまう。

「はっ？！」

逆にスバルは隙が出来てしまい、攻撃されるも、何とか回避。が。

回避後の動きが甘い。そのせいで魔力弾に追尾されてるし。

「スバル馬鹿っ、危ないでしょ？！」

「ご、ゴメン～！」

ったく、作戦の第一段階はクリア出来たとはいえ、アレじゃ意味が無いじゃない！

《待ってなさい、今射ち落とすから・・・。》

狙いを追尾弾に絞り、トリガーを引く！

パシュンッ！！

「えっ？！」

ちょっ、ここにきて不発？！

「わぁ～、ティア援護～！！」

「このっ、肝心な時に・・・！！」

急いでカートリッジを入れ替えた私は、今度こそ追尾弾を射ち落とした。

あとは、あの二人に任せるしかないわね・・・。

私は教導官を牽制しながら、その時を待つ。

私とフリードの攻撃をかわした教導官は、エリオ達に気付いた。

ここでやらなきゃもう後が無いっ！！

「エリオッ、今っ！！」

「ストラーダッ！！」

《メッサーアングリフ！》

教導官と接触したエリオは、反動で飛ばされた。

「外した・・・？！」

もしそうだとしたら、万事休すね・・・。

煙が晴れると、そこには変わらず教導官が飛んでいた。

やっぱりだめだった・・・？

《Ｍｉｓｓｉｏｎ　Ｃｏｍｐｌｅｔｅ．》

「お見事！ミッション・コンプリート！」

教導官とレイジングハートがそう告げた。

「本当ですか？！」

思わずエリオが聞くと、胸の少し上の辺りを指差した。
そこには確かに、バリアを抜いてジャケットまで届いた証拠があった。

「「わぁ・・・！！」」

エリオとキャロが嬉しそうに笑う。

まぁ、今回の大手柄が自分達なんだから当然よね。

そうして、一旦訓練は終わった。

バリアジャケットを解いた教導官に、お褒めの言葉を貰った私達。

「ティアナの指揮も、だいぶ筋が通ってきたみたいだね。

指揮官訓練、受けてみる？」

これだけの訓練をしておきながら、更に訓練を勧めるとは・・・。

流石は《管理局の白い悪魔》。容赦が無い。

そう思った事を悟られないように、今は訓練だけで手一杯である事

を告げ、断った。

スバルが隣で笑うが冗談じゃない。こっちは死活問題だ。

そんな事をしていると、キャロ達が何か焦げ臭いと言う。

匂いの発生源を探すと、それはすぐに見つかった。

「ちょっとスバル、あんたのローラー。」

「え・・・？うわぁ、ヤバッ！！」

見ると、ローラーから煙が出ていた。酷使し過ぎたのだろう。

それは私のアンカーガンも同じだけど・・・。

その事を教導官に伝えると。

「皆だいぶ慣れてきたみたいだし。・・・そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかな？」

「新、デバイス・・・？」

私達には、何の事だか良く分からなかった。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

－隊舎前－

訓練を終えたなのはとフォワード陣は、その後の説明をしながら歩いていた。

「じゃあ、一旦寮に戻ってシャワーを使って、着替えてロビーに集まろっか。」

「「「「はいっ！」」」」

「？あの車って・・・？」

そんな話をしていると、前方から黒い車が走ってきた。

彼女達の前に停まった車の中にいたのははやてとフェイトだ。

聞くと、その車はフェイトの物らしい。

「皆、訓練のほうはどないや?」

「あ～・・・、あはは・・・。」

「頑張ってます。」

はやての問いに、スバルとティアナが答えた。

「ゴメンね、エリオ、キャロ。私は二人の隊長なのにあんまり見てあげられなくて・・・。」

フェイトは二人に申し訳なさそうに言う。

「あ、いえ、そんな・・・。」

「大丈夫です。」

二人は笑って返事をするが、やはりフェイトは心配そうだ。

「四人とも良い感じで慣れてきたよ。いつ出動しても大丈夫!」

そんなフェイトの不安を払うようになのはは続けて言った。

「そうかぁ。それは頼もしいなぁ。」

四人を見ながら、励ましも込めてはやては言う。

四人とも、まんざらでもなさそうだ。

それから、フェイト達はそれぞれが向かうべき場所に行くために、その場を後にした。

―シャワールーム―

「スバルさんのローラーブーツとティアさんの銃って、御自分で組まれたんですよね？」

スバルに頭を洗って貰いながら、キャロが二人に尋ねる。

「私はね。でもティアは確か、訓練校に来る前に、お兄さんと一緒に作ったんだよね？」

「そうよ。クルツさんから訓練校には杖しか無いのを聞いていたからそれでね。

クルツさんに作り方を教わりながら、組み立てたってわけ。」

「私はベルカ式な上に、戦闘スタイルがあんなだし。」

「そのせいで訓練校じゃ目立っちゃってね。」

当時の事を思い出しながら二人は語った。

「あ、もしかしてそれでスバルさんとティアさんは友達になったんですか？」

「腐れ縁と私の苦悩の日々の始まりって言って。」

「えへへ～。」

それから二人を残して先にあがったティアナは、髪を乾かしている。

その首筋の裏には、小さな紋章が刻まれている。

一方、その頃エリオはというと。

「はぁ。皆、まだかなぁ？」

「キュクルー」

エリオとフリードが黄昏ていた。

ーミッド北部　ベルカ自治領「聖王教会」大聖堂ー

大聖堂の一室、カリムの部屋にはやては来ていた。

今回、カリムの依頼でこちらに呼ばれたらしい。

「カリム！久しぶりやなぁ。」

「はやて！いらっしゃい。」

二人は少しの雑談の後、本題に入る。

部屋をカーテンで覆い、外から覗かれないようにした後、カリムはスクリーンを出す。

「これって・・・、ガジェット？」

そこには新型のガジェットと、ケースの画像が写っていた。

「今までの？型に加えて、新しいのが二種類。

戦闘性能はまだ不明だけど、これ。

？型はわりと大型ね。」

彼女は、本局にはまだ伝えておらず、監査役であるクロノに触りだけ伝えている事を話す。

その中で、はやての目はある一つの画像に留まる。

「それが今回の本題。一昨日付けでミッドに運びこまれた不審貨物。」

「・・・レリック、やね？」

はやての問いにカリムは答える。

「その可能性は高いわね。新型が発見されたのも、昨日のことだし・

・・。」

カリムはかなり不安に思っているようだ。

無理も無い。

最初の預言に出ていた《古き結晶》とはレリックで間違いなく、それがこんなにも早い時期に出てきたのだ。

それだけでは無く、その後に出た世界崩壊の預言。

そんなものを知ってしまえば、嫌でも不安になる。

失敗など、許されるはずもないのだから・・・。

そんな様子を見ていたはやては、部屋のカーテンを開ける。

「はやて・・・？」

突然の行動に驚くカリム。そんな彼女にはやては言う。

自分達はどんな緊急時でも対応できる。

その為の即戦力も、そして成長してきているフォワードもいるから大丈夫だと。

励ますようにはやては言う。

その時、二人に緊急連絡が入った。

一六課　デバイスルーム一

教会に緊急連絡が入る少し前。

フォワード陣は、デバイスルームで自分達の新しいデバイスの説明を受けていた。

「設計主任は僕、補佐にシャーリーさん。」

「協力。なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんにリイン曹長！」

「はあ・・・。」

突然の事体に、皆頭がついていかないようだ。

だが、ティアナは自分の前に浮かぶデバイスを見て気付く。

《クルツさん。もしかしてデバイスの製作に兄さんが関わってたりします？》

《そうだよ。良く分かったね。》

クルツはティアナの念話に答える。

（確かに、他の人が見たら、ちょっと変わった装飾位にしか思わないだろうけど・・・。

この表面に描いてあるのって、紋章、よね・・・？）

そう。ティアナのデバイスの表面には、紋章が刻まれている。

紋章術は、使用者の体に紋章を刻むことで使用することが可能となる。

また、術発動の為の触媒に紋章を刻む事で、より制御を安定させる事が出来る。

デバイスにその紋章が刻まれているということは、緊急時での紋章術の使用が可能となるということだ。

それから、暫く話を聞いていると、アラームが鳴り響く。

「グリフィス君！」

「はい。教会本部から緊急要請です！」

なのはの呼びかけに答えたのは、はやてが六課を空けている際に指揮権を任されている《グリフィス・ロウラン》。

次に現れた画面に映ったはやてから、任務の内容が伝えられる。

これが、彼女達《機動六課》の初出動となる事件となった。

―???―

～Ｓｉｄｅ　シオン～

「毎度の事とはいえ、クロノも突然ですね。」

私は今、バイクを走らせ、指定された現場へ向かっている。

今日は店が休みだから、街に出て買い物をしていたというのに、いきなり《依頼》とは。

しかも、その内容が＜緊急時における機動六課の護衛とレリックの守護＞とは・・・。

なかなか無茶を言ってくれる。

《仕方がありませんよ。万が一、奴等が出てきた場合、新人達を護りながらでは隊長陣も満足に戦え無いでしょうし。》

思わず愚痴を零す私を諭すようにファーウェルが言う。

「それはそうですけど。・・・まぁ良いでしょう。
今回はティアナの成長と六課の実力とやらを見せてもらう事にしましょう。」

そう言って私は、バイクの速度を上げる。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

Ｐｈａｓｅ-７　～ファースト・アラート　新たなる力～（後書き）

最近、主人公が活躍して無い様な・・・。

何故こうなったか自分でも分からないと言う有り様です（汗）

次回は、いよいよ初の実戦となります。

無事六課は任務を遂行出来るのか・・・？

質問・指摘等お待ちしておりますので、何かありましたら是非お願いします！！

それでは失礼します。

Ｐｈａｓｅ-８　～星と雷と守護者　Ａ～（前書き）

今回の話はＡパート　Ｂパートに分かれています。

ところどころキャラの性格違くね？と思うかもしれませんがご容赦下さい。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ-８　～星と雷と守護者　Ａ～

―機動六課　ロングアーチ―

「問題の貨物車両、速度７０を維持。依然進行中です。」

「重要貨物室の突破はまだのようですが・・・。」

現在、レリックを乗せていると思われる車両の状況を、通信士の《アルト・クラエッタ》と《ルキノ・リリエ》が伝える。

その言葉に、一時的に指揮権を任されているグリフィスは苦い顔をする。

「時間の問題、か・・・。」

「っ！！」

「これってっ！！」

そんな中、いち早く状況の変化に気付いた者達がいた。

クルツとシャーリーだ。

「アルト、ルキノ、広域スキャンを！！」

「サーチャー空へ！！」

二人は矢継ぎ早に指示を飛ばす。

次にモニターに映し出されたのは、飛行するガジェット群だった。

「ガジェット反応！空から？！」

「航空型、現地観測隊を捕捉！」

的確に状況を伝える彼女達の声には、僅かな動揺を感じる。

慣れない実戦な上に、初任務で既に制空権をとられそうな状況なのだ。

不安を感じるのも無理は無い。

《こちらフェイト。グリフィス！こっちは今パーキングに到着。

市街地での飛行許可をお願い！》

その時、フェイトからの通信が入った。

「了解！市街地個人飛行、承認します！！」

フェイトが来る事に、少しだがアルトとルキノの心配も薄れる。
だが、ここで気を抜いてはいけない。
訓練と違って現場では何が起きても不思議ではないのだから。
「さぁ、これからが本番です。
みんな、気を引き締めて行きましょう！」
今一度、全員に気合を入れなおすようにクルツが言う。
その言葉に、一同は気を引き締める。

―リニアレール付近　上空―

「ヴァイス君、私も出るよ！フェイト隊長と二人で空を抑える！」

「ウッス！了解です、なのはさん！」

現状、航空型のガジェットを抑えられるのは、なのはとフェイトのみ。

その為、現状のこれ以上の悪化を防ぐための動きに出ざるを得ない。

ヘリのパイロットである《ヴァイス・グランセニック》は彼女の求めに応える。

彼もこの状況を打破しなければならないことを理解していた。

ヘリのハッチを開放した彼は、なのはが何時でも出れるようにする。

「それじゃあ、ちょっと行って来るから。」

なのはは、新人達に微笑みながら言う。

「「「はいっ！！」」」

「はいっ！」

彼女達は返事をするも、キャロは一人、返事が遅れてしまう。

ティアナを除く三人、特にキャロは表情が思わしくない。

彼女の不安の原因を感じ取ったなのはは、キャロを励ますように言う。

誰も一人ではないと。　すぐそこに仲間がいると。それに。
「キャロの魔法は、皆を護ってあげられる、優しくて強い力なんだから。ね？」

そう、キャロは何よりも自身の力を恐れていた。

彼女を引き取ったフェイトから、強すぎる力のせいで、一族から距離をおくことになったことを聞いていたなのはは、彼女の不安を取り除くように優しく語りかける。

ヘリから飛び降りたなのはは、ガジェットへと向かう。

～Ｓｉｄｅ　フェイト～

フォワード陣は、初の任務だ。

ガジェットに負けないくらいの実力を持っていても、その場の雰囲気に呑まれるかもしれない。

あの子達の負担を少しでも減らせるように、上空の敵は何としても

抑えないと。
でも、心配なのはそれだけじゃない。
・・・なぜだか分からないけど、酷く胸騒ぎがする。
一刻も早く現場に向かわないと。
「バルディッシュ！！」
《Ｙｅｓ，ｓｉｒ．》
バリアジャケットを纏った私は現場へと向かう。
絶対にあの子達を守ってみせる・・・！！
～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～
－現場上空　ヘリ内部－

現場に降下する前に、フォワード陣は任務内容の最終チェックをしている。

その顔は真剣そのものだ。

だが、初の実戦の雰囲気に呑まれている訳では無い。

程よい緊張感が漂っている。

今回、彼女達に与えられた任務は、全てのガジェットの破壊と、レリックの確保。

リインは彼女達の顔色を伺いながら、説明を続ける。

「スターズ分隊、ライトニング分隊、二人ずつのコンビでガジェットを破壊しながら車両前後から中央に向かうです。」

レリックを乗せた7両目の重要貨物室を目指し、どちらかの分隊が確保すればミッションクリアとなる。

「「「「はいっ！！」」」」

リインの指示に、４人は返事を返す。

そこには、先ほどまでの不安は既に無い。

「で。私も現場に降りて管制を担当するですぅ！」

最後に、リインは笑顔で締めくくる。

―ロングアーチ―

「スターズ1、ライトニング1、エンゲージ。」

モニターには、合流したなのはとフェイトが共に上空のガジェットに攻撃を仕掛けている。

《こっちの空域は私達で抑える。新人達のフォロー、お願い！》

「了解！」

流石はエースと言うべきか。

なのはは、シューターと砲撃による火力を活かした戦いを、フェイトはそのスピードを活かした戦いを。

彼女達は、その圧倒的なまでの動きで次々にガジェットを落としていく。

一方その頃のヘリ内部。

「さーて新人ども。隊長さん達が空を抑えてくれているお陰で、安全無事に降下ポイントに到着だ。

準備はいいか?!」

ヴァイスは、彼女達に最後の確認をする。

それに彼女達ははっきりと答えた。

「スターズ3、スバル・ナカジマ。」

「スターズ4、ティアナ・ランスター」

「「行きますっ!!」」

最初に降りたのはスターズ分隊。

それを確認したヴァイスは、続けてライトニングに確認を取る。

キャロは、少し不安が抜け切らなかったのか、表情があまり良くない。

「一緒に行こうか？」

それに気付いたエリオが優しく声をかける。

一瞬キョトンとするも、すぐに笑顔になり、二人と一匹は飛び降りた。

「ライトニング３、エリオ・モンディアル。」

「ライトニング４、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ」

「キュクー！」

「「行きますっ！！」」

無事着地した彼女達は自身の姿を確認する。

それは、隊長達のバリアジャケットを元にしたものだった。

ただ、ティアナのジャケットだけは少し違った。

「ねえねえ、何かティアのバリアジャケット、少しゴツくない？」

ティアナのジャケットは、足に銀色の足具が付いている。

それは本来、射撃型のティアナには必要の無いもののはずだ。

（兄さんとクルツさん、ここまで考えてくれてたんだ・・・。）

そのジャケットの機能の意味に気付いたティアナは少しだけ顔を綻ばせる。

が、それも束の間。

すぐに、気持ちを切り替え、スバルにも注意を促す。

車両を突き破ってきたガジェットの攻撃を軽々とかわし、二人はそれぞれに内部へ侵入。行動に移る。

スバルは、あまりの威力や性能に、新しい相棒、《マッハキャリバー》を褒める。

そして、共に強くなっていこうと誓いをたてた。

《ティアナ、どうです？》

「ダメです。ケーブルの破壊、効果無しっ！！」

通信の相手はリインだ。

ティアナは、ガジェットを破壊しながら、列車を止めるためにケーブルの切断等を試みるも失敗に終わる。

報告を聞いたリインは、車両停止のために動き出す。

ティアナはレリック確保を優先すべく、スバルとの合流と7両目を目指す。

途中、新たな相棒の《クロスミラージュ》に感心しながら、走り続ける。

「しっかし、流石最新型。色々便利だし弾体生成までサポートしてくれるんだね。」

《はい。不要でしたか？》

その答えにティアナは苦笑する。

優秀な相棒のお陰で、自分の腕が鈍ってしまうと冗談を交えながらも、褒めることも忘れない。

「それから聞きたいんだけど、やっぱりアンタに描かれてる紋章って・・・。」

《はい。その為のものです。ですが、この機能は未だ改良中のものですので、現段階ではマスターに負担がだいぶかかってしまいます。》

「まぁ、それはそれで仕方ないわよね。なんせ、ファーウェルでさえ、完全にあの機能は仕上がって無いんだし。」

《何れ必要になるその時までには、シオンさん達が何とかしてくれるでしょう。》

「それもそうね。まぁ、今は目の前の事に集中しましょう！」

《了解！》

―ロングアーチ―

「スターズ1、ライトニング1、制空権獲得！」

「ガジェット？型、散開開始！追撃サポートに入ります！」

一方ロングアーチでは、現場の状況をしっかりと把握し、サポートを行っている。

「ごめんなぁ、お待たせ！」

「八神部隊長！」

聖王教会にいたはやてが帰ってきた。

これまでの事をグリフィスが説明していると、クルツがある事に気付いた。

「っ！エンカウント！新型ですっ！！」

その言葉で、部隊に緊張が奔る。

―リニアレール―

エリオとキャロは、目の前の新型ガジェット?型に苦戦を強いられている。

その巨大なアームの攻撃を避けながら、反撃のチャンスを伺う。

「うおりゃぁぁぁっ！！」

フリードの攻撃をはじいた時に出来た隙に、エリオはすかさず攻撃に出る。

しかし。

「くっ、硬い・・・！」

これまでのガジェットとは違い、？型はその装甲だけでエリオの攻撃をしのぐ。

そして、魔導師にとって天敵であるＡＭＦを発動させる。

「こんなに遠くまで・・・？！」

その効果範囲は今までの比ではなく、離れたい位置のキャロにまでおよぶ。

魔法が使えなくなったエリオは、防戦一方となり、遂にはリニアレールの外へ放り出されてしまう。

キャロは落ちていくエリオを追って共に崖下へ。

それを見ていたアルトとルキノは驚愕する。

だが、その判断は正しいとなのはは言う。

《発生源から離れれば、ＡＭＦも弱くなる。

使えるよ、フルパフォーマンスの魔法が！》

キャロは自分の力と向き合うことを決心し、その力を発動させる。

キャロの魔法により、フリードは真の姿へと覚醒する。

覚醒したフリードの炎は凄まじく、？型の動きを鈍らせる。

「一閃必中っ！！」

そして、キャロのサポートを受けたエリオの攻撃により、？型は撃破された。

その頃、レリックを確保し終わったティアナ達は二人の様子に安堵する。

―ロングアーチ―

「車両内、及び上空のガジェット反応、全て消滅！」

「スターズF、レリックを無事確保！」

現場の状況の説明に、ロングアーチスタッフは安堵する。

はやては、そのまま車両を送り届けるとともに、レリックの護送を指示する。

これで、初の実戦は成功で幕を閉じる、かの様に思われた。

「っ？！リニアレール前方上空に魔力反応と転送反応！！」

周囲の状況を確認していたクルツが異変に気付く。

再び、六課全員に緊張が奔る。

「何、あの魔法陣？！あんなの見たこと無い・・・！！」

映し出された映像には、見た事の無い陣がいくつか空に描かれていた。

そして、そこから無数の異形が姿を表す。

内、１５体ほどは黒い獣人型－ゴボルドナイト－で、手には槍のようなものを持っている。

そいつ等は転送されるとリニアレールに取り付く。

他は飛行型で、巨大な鎌を持った骸骨のような体をしたもの－アンホーリィテラー－が１３体、そして、フリードより少し小さいくらいの、黒い体色をした飛竜が３匹飛んでいる。

最後に出てきたのは、まさに悪魔と形容するのが相応しいだろう。

青い体色、手は４本生えており、頭からは角が飛び出て、背中には大きな翼を広げている。

そいつは、音を立ててリニアレールに着地する。

「グウォォォォ！！！」

悪魔のような異形ーレッサーデーモンーが雄叫びを上げると、異形たちは一斉に彼女達に襲い掛かる。

「皆、落ち着いて！
ここで私らが慌ててたんじゃ、誰が現場のフォワード達をサポートするん？！」

はやての一喝に、止まっていた時間が動き出した。

他のスタッフが突然の事体に驚いている中、クルツはいち早く他に敵が居ないか探っていた。

「八神部隊長！現在確認できているアンノウン以外、敵影は見当たりません。

新人のフォワード部隊を一度合流させるべきかと。」

クルツは現状と簡単な対応策をはやてに進言する。

それに頷いたはやてはすぐさま指示を飛ばす。

「スターズ、ライトニングは7両目で合流！

なのは隊長とフェイト隊長は再び上空の敵の対応にあたって！！

相手の能力が未知数である以上、無茶はせんように、いいね？！」

《了解！！》

はやてが指示を出したのを聞いたクルツは、改めてモニターを睨み付ける。

（あれが執行者（エクスキューショナー）。ティーダ先輩達を殺したやつらにして、世界を破壊しようとするもの達・・・。）

その瞳に怒りと不安を宿しながら、クルツは自分のやるべき事をする。

―リニアレール―

「エリオ、キャロ、大丈夫ですか?!」

フリードに乗ったエリオとキャロがリイン達と合流する。

そして、二人が来た方向からは執行者(エクスキューショナー)達が迫ってきた。

「リイン曹長、あれっていったい・・・?」

不安げにキャロが聞くが、リインは答えられない。

「アンノウンの正体は現在調査中です。

先ほど部隊長から指示があった通り、あまり深追いはしないように。

囲まれないように、連携をとっていきましょう。

特に、あの悪魔の様なアンノウンには注意してくださいです。」

リインは、先ほどまでと打って変わって、その表情を硬くしている。

(それほど強く無いタイプだけど、それは兄さんと一緒にいたからだ。

・・・今の私じゃ、下手なことは出来ない。)

敵の正体を知っているティアナは、十分な警戒を行っている。

エリオはフリードから降り、スバル達と肩を並べる。

キャロは、フリードと共に上空を牽制しつつ、他のフォワードのサポートをする。

彼女達に追いついたゴボルドナイトは、一斉に攻撃を仕掛ける。

一方上空では、こちらも敵の強さはさほどでは無いが、如何せんガジェットよりも動きが早く、それに連携の取れた動きに苦戦している。

「ハーケンセイヴァー！！」

「ギャァァァァ！！」

（早くこっちを何とかしないと・・・。

あの悪魔みたいなのは一番危険だ。

リインがいるけどフォワード達だけじゃ無理がある。）

三体目のアンホーリィテラーを倒したフェイトは、飛竜の攻撃をか

わしながら、他の相手をしていたなのはと背中合わせになる。
残りは全て合わせて１０体、飛竜は残り2体となっている。
その時、飛竜の一匹が新人達の方へ向かった。

「フェイトちゃん！ここは私が残るからあの子達の所へ！！」
フェイトのスピードなら間に合うと判断したなのはは、フェイトに告げる。
「なのは・・・、ありがとう、気をつけてっ！！」
「フェイトちゃんも！それから皆の事お願い！！」
その言葉に頷いたフェイトは、全力で新人達のもとへ向かう。

―リニアレール―

「スバル！前に出過ぎよ、少し引いて！」

「ご、ゴメンッ！！」

フォワード陣は今、残り１０体の執行者（エクスキューショナー）、ゴボルドナイトと交戦している。

一体一体の強さはそこまでは無いが、先ほどガジェットと交戦したばかりの彼女達は疲労が蓄積している。

その上、ゴボルドの動きは素早く、下手に前に出ると孤立させられてしまう。

その為、彼女達もあまり積極的に攻撃に移れないでいる。

また、積極的な攻撃に出られないのには、他にも理由がある。

それは、ゴボルド達の後ろに控えているレッサーデーモンの存在だ。

どういう訳か今は攻撃してこないが、何時動き出すか分からない以上、必要以上に警戒してしまうのだ。

また、現在一番の戦力であるリインは、フォワード達が傷付かないように動いているため、強力な魔法による撃退も出来ない状況にあった。

「ギャァァァァッ！！」

その時、上空から大きな声が聞こえてきた。

慌てて振り向くと、飛竜が一匹迫ってきていた。

「私とフリードで抑えます！」

リインを除き、現在唯一空中戦が出来るキャロが、必然的に相手をすることになる。

連戦による疲労もあるが、それでも彼女の戦意は未だ失われていない。

二匹の竜による空中戦が始まる。

キャロは、飛竜の攻撃が他のフォワードに当たらないように攻撃する為、多少押され気味だった。

少ない戦力が更に分断されたその時、遂にレッサーデーモンが動き出した。

その翼で空を飛び、一直線にキャロへと向かう。

「っ！キャロッ！！」

「ダメです、エリオッ！！っく！！」

エリオはストラーダの推進力を利用し、レッサーデーモンへ向かう。

慌ててリインが後を追おうとするが、ゴボルドにより妨害を受けて

しまう。

「でやぁぁぁぁ！！」

突進してきたエリオの攻撃を、レッサーデーモンはその腕で掴み取る。

「がっ？！」

動きを封じられたエリオは、レッサーデーモンの拳をもろに受ける。

「ヌゥアァァ！！」

気合と共にレッサーデーモンはエリオを空中へ放り投げた！

「エリオ君！っきゃあ！！」

「ギャアアア！！」

キャロは慌ててリカバリーするも、その隙を付いた飛竜の攻撃をまともにくらってしまう。

更なる追撃を加えようとした飛竜はしかし、後方からの攻撃に一瞬動きを止める。

それに気付いたレッサーデーモンの視線の先には、猛スピードで接近してくるフェイトがいた。

～Ｓｉｄｅ　フェイト～

「どけぇぇぇぇ！！」

私は二人に追い討ちをかける竜に向かってフォトンランサーを放つ。

まともに喰らった竜はその動きを止める。

その隙に二人のもとへ向かいつつ、更にあの悪魔にランサーを叩き込む！

「エリオ、キャロ、大丈夫？！」

二人のもとへたどり着いた私は、二人の無事を確認する。

「ゲホッ、ゲホッ！フェイトさん、・・・何とか。」

「私達も・・・大丈夫、です。」

多少怪我を負ったみたいだけど、命に別状は無いようだ。

・・・私がもっと早くついていれば。

後悔の念から自分を責めたくなるが、今はそれどころでは無い。

あの悪魔はあの程度で倒せたとは思えない。

案の定、煙が晴れるとそこには多少表面に焼け跡を残した悪魔が飛んでいた。

悪魔は再び私達に向かってくる。

私はもう一度二体に向かってフォトンランサーを放ち、動きを止めようとするが。

「っく、止まらない・・・！！」

悪魔はこちらの攻撃に構わず突っ込んでくる。

直接攻撃を入れるしか無いと思った私は悪魔の攻撃を受け止める！

「ぐうっ・・・！」

その攻撃は重く、まともに受けていられない。

攻撃を受け流しつつ、次の攻撃を考えていたその時。

「ギャアァァァ！！」

「っ？！何っ？！」

そんな、まだ動けたの?!

キャロ達の背後から飛竜が叫びながら迫ってきていた。

「はあぁぁぁぁ!!」

悪魔と距離を空けすかさずランサーを叩き込み、視界を奪う。

その隙に全速力で二人の元へ!

ランサーで攻撃しようにも、二人の距離が近すぎて攻撃出来ない・・・!!

私はソニックムーブで間に入り込む。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ!》

プロテクションで直接攻撃を受けるが、元々防御力の高く無いうえに緊急で発動した魔法だったため、簡単に破られてしまった。

「きゃあ!!」

反動でよろけてしまった私とキャロ達に向かって、竜が襲い掛かる。

その光景に思わず目を瞑ってしまうと・・・。

「エリアル・レイド！！」

ドゴォッ！！

「ギャアァァァ！！」

鈍い音と竜の叫び声が聞こえ、目を開けると・・・。

そこには、フードで顔が見えない全身黒尽くめの人がいた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

Ｐｈａｓｅ-８　～星と雷と守護者　Ａ～（後書き）

いかがだったでしょうか？

やっと、やっと六課と絡めた・・・。

次回は後編のＢパートです。

それでは失礼します。

Ｐｈａｓｅ－９　～星と雷と守護者　Ｂ～（前書き）

私生活でやっと落ち着けるようになったアシェーリトです。

さて、今回は前回の続きです。

キャラを扱いきれてなかったり、誤字脱字などあると思いますが、楽しんでいってください！

それではどうぞ！

Ｐｈａｓｅ－９　～星と雷と守護者　Ｂ～

―ロングアーチ―

「ライトニング３、悪魔型のアンノウンの攻撃を直撃、ライトニング４も竜の攻撃を直撃！！」

「命に別状は無いようですがこのままでは・・・！！」

「ライトニング１竜を撃退！ライトニング３、４と合流！」

「スターズ１、竜を撃破！残りのアンノウンへの攻撃を再開！」

「スターズ３、４、共に健在！リイン曹長も無事ですが依然状況は芳しくありません！！」

執行者（エクスキューショナー）の登場により、事体は一変、ロングアーチでは次々に状況を報告する声が上がる。

アルトとルキノにいたっては、悲痛を感じさせる声を上げている。

「っ！！あの竜まだ動けたの？！」

シャーリーは、モニターに映った映像に驚愕する。

その後、フェイトが間に入り込み、竜の攻撃を防ぐもあっさりと破られる。

「フェイトちゃん!!」

再び攻撃しようとする竜に、思わずはやてが立ち上がり叫んだその時。

「っ!!魔力反応感知!場所は・・・竜の真上?!」

新たな魔力反応の報告をしたシャーリーは再び驚愕する。

《エリアル・レイド!!》

モニターには、上空から物凄い勢いを伴ったまま、竜に向かって蹴りを叩き込んだ全身黒尽くめの人物がいた。

（どうやら、間に合ったみたいですね。）

その人物を見たクルツは安堵を覚える。
（後は頼みますよ、シオンさん？）

―リニアレール上空―

《護り屋》の服を着たシオンは、到着と共に飛竜を撃破。

呆然とするフェイト達の前に立っている。

（・・・どうやら間に合った様だな。）

一応誰一人撃墜されていない事を確認したシオンは、息を整える。

「一応確認しておこう。

無事か？」

シオンは、未だ呆然としているフェイト達に声をかける。

その声で我に返ったフェイトはシオンに尋ねる。

「私達を助けてくれたんですか？」

少し落ち着いてきたフェイトは、疑いの眼差しをシオンに向ける。

「どのみち、俺はアイツらを倒す様に依頼されていたからな。
お前達を助ける形になったのは偶然だ。
気にする必要は無い。」

素っ気ない言い方に少しムッとしたフェイトだが、シオンを良く見ている内にあることに気付いた。

「あなた・・・４年前の空港火災の時の！！」

「何だ、今更気付いたのか。

案外抜けてるとこあるんだな。」

今更の様に気付いたフェイトに対し、シオンは鼻で笑う。

シオンがこの様な態度に出るのは、相手を自分のペースに乗せるため、そして自分の正体がバレない様にするためだ。

言い合いをしていると、はやてが通信を開いた。

―ロングアーチ―

～Ｓｉｄｅ　はやて～

「フェイトちゃん、キャロ達も大丈夫？」

《はやて！私達は大丈夫。

・・・この人に助けてもらったから》

報告を聞き安堵する。

それから、一応黒尽くめの人にも礼を言わんと。

「うちの隊員達を助けて下さって有難うございます。
私は時空管理局本局　古代遺失物管理部　機動六課の部隊長、八神はやていいます。
」

《どうやらこの金髪よりは礼儀をわきまえているようだな。》

《ムッ、それはどう言う意味ですか?!》

《どんな形であれ、助けて貰ったんだ。まずは礼を言うべきではないのか?》

《えっ?!あっ、そういえば。
えっと、すみません。助けてくれて有難うございます。》

《・・・冗談で言ったんだが。ホント、どこか抜けてんな。アンタ。》

その言葉には少し同意出来るのは仕方ないなぁ。

思わず笑ってしまいそうになるのを堪え、本題に入る。

この人はあのアンノウンについて何か知っているみたいやからな。

「ところで、貴方は何者であるか教えてもらえません？
それに、さっきの言葉を聞く限りあのアンノウンについて知ってるみたいやし、情報提供して頂きたいんですが。」

《悪いが此方も仕事でな。下手な事は言えん。
それに、俺がお前達に情報提供して何のメリットがある？》

「そちらの目的に協力させて頂きます。
貴方も戦力が多い方がええでしょう？」

《必要無いな。
第一、疲弊している奴等と共闘してたら、逆に此方がやりにくくなる。》

・・・確かにそうやね。でも、こっちかて退くわけにはいかん。

「協力を拒んだ場合は、事件の重要参考人として同行して貰います。

いくら貴方が強くても、何人もの魔導士を相手にするんは骨が折れるんやないですか？」

この人は明らかに戦い慣れてるだけや無く、実力もある。

脅す様で正直いい気はせぇへんけど、今はそんな事言ってる場合や無い。

・・・何としてでも協力してもらわな。

《自発的な協力をしなければ強制、か。

流石は管理局。法と正義の為なら手段を選ばないらしいな。》

「何とでも言うて下さい。此方は大切な部下の命がかかってるんです。

私が罵倒される位で助かる言うんなら幾らでもどうぞ。」

《・・・・・。その言葉に偽りは？》

「ありません。」

そう。これは心からの言葉。皆が助かる言うんやったら、私は幾らでも責めを受ける。

少しの間沈黙していた黒尽くめの人がようやく口を開いた。

《良い目をしている。

・・・アイツの上司もアンタみたいな人間だったら良かったんだがな。》

その言葉には、とても深いやるせなさを感じた。

昔何かあったんかな・・・？

《分かった。お前達には協力しよう。

だが、まずはコイツらを片付ける。話はそれからだ》

「有難うございます！

ところで、貴方の名前教えて頂けません？

何時までも貴方じゃ呼びにくいですし。」

《了解した。俺のことは、そうだな・・・隠者（ハーミット）とどでも呼んでもら

おうか。》

「宜しくお願いします。
皆！聞こえてたね？
もうひと踏ん張り頑張って！！」

《《《了解！！》》》

さぁ、こっからが本番や。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　なのは～

あの黒尽くめの人、ハーミットさんが協力してくれるみたい。

何か知っているみたいだけど、それよりまずはこっちを何とかしないと・・・。

《そこの白い魔導士。聞こえるか？》

「ふぇっ？！」

突然の念話に変な声を出しちゃったよ。

《面白い返事だな。　まぁ今はどうでもいい。》

ムッ、何か少し頭にくる言い方。

「突然何ですか？」

《ソイツら、アンホーリィテラーについての情報だ。
ソイツらには弱点の属性等は特に無いが、はっきり言って大した事は無い。

ついでだが、ソイツらは衝撃に弱い。

少し強めに打ち込んでやるだけで直ぐにのけぞる。

その時が狙い目だ、騙されたと思ってやってみろ》

内容は目の前のアンノウンの情報。

・・・一応試してみる価値はある、よね？

「レイジングハート！」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ａｃｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ．》

「シュート！！」

言われた通り、今までより加速させたシューターをアンノウンの一体に打ち込んでみた。

「ギャァァッ！！」

「効いた？！」

情報通りにのけぞって動きが止まった。これなら・・・！

「レイジングハート！もう一回いくよ！！」

《Ｙｅｓ，　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ．》

ここまで効果があるなら・・・。

シューターを制御してアンノウンを一直線に誘導すれば！

「ディバイィィンバスタァァー！！」

「「「ギャァァッ！！」」」

「やった！これならいける！！

ハーミットさん、情報有難うございます！！」

《礼をする暇があるならさっさと片付けて援護に回ってやれ。

リニアレールにいるやつら、動きからして新米なんだろう？》

素っ気無く言われちゃったけど、新人達の事も事実だ。

・・・もしかして意外と照れ屋なのかな？

そう考えると笑みが零れる。

よし！早くこっちを何とかして、皆を助けなきゃ！！

私は残り４体になったアンノウンに向けて攻撃を再開した。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

どうやら兄さんが来てくれたみたい。

これで一先ず上空のほうは大丈夫みたいね。

今はリイン曹長にゴボルドナイトの情報を教えている。

話が終わった様で、曹長は私達に指示を出す。

「スバル、ティアナ！あのアンノウンは動きは早いですがそれだけです。

私が魔法で逃げる位置を限定しますので、隙が出来たところを攻撃してくださいです！」

「「了解っ！！」」

正直、兄さんが言い出していなければ、私が進言していたところだが、今の私の立場じゃそれは余り得策じゃない。

訓練校での出動とかはあっても、突然出てきたアンノウンに冷静に対処しすぎていたんじゃ、かえって怪しまれるものね。

「スバル！敵が出てきたところで私が怯ませるから、一気に決めなさい！！」

「オッケー！！」

リイン曹長が氷結魔法でコースを限定した。そこから面白いように敵が出てきた。

「狙い通りよ！クロスファイヤー、シュートッ！！」

「ギャッ！！」

何体かのゴボルドを怯ませた。後は。

「スバル！任せたわよ！」

「うおぉぉおっ！！

一撃必倒！

ディバイィィンバスタァァァー！！」

スバルのディバインバスターが決まってゴボルド達は倒れた。

残りは空のレッサーデーモンだけね。

ゴボルドが完全に沈黙したのを確認した後、私達は空で行われている戦いに目を向けた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　シオン～

どうやら、ティアナ達のほうは心配なさそうだな・・・。

とりあえず、目の前のレッサーデーモンに集中するとしよう。

今まで奴は動かなかったことから、何かあると思うんだが・・・。

「そんな、傷が回復している・・・？！」

「何？」

隣にいる金髪魔導士が言った言葉に俺は耳を疑った。

「一つ尋ねるが、あんたは今までどのくらいの攻撃をした？」

「え？ええっと、誘導弾を何発か。

でも、こっちが思っていた以上に効いて無いみたいで・・・。」

「その魔法は何かの属性があるのか？」

「はい。私は魔力変換資質で《電気》をもっているので、電気系統の魔法で攻撃しました。

・・・それが、あのアンノウンの傷の回復に関係あるんですか？」

金髪がその言葉に緊張を混ぜながら聞いてきた。

「あぁ。火属性なら吸収する耐性を持っているんだが、電気、雷系

統なら半減するだけのはずなんだが・・・。」

「ヌォオオオオッ!!」

「「っ!!」」

説明の途中で奴が叫び声をあげたのでそっちを見ると。

「なっ!巨大化した?!」

「おいおい、マジかよ・・・。

あんなの、アイツには無いはずなんだがな。」

レッサーデーモンは傷の回復と共にその体を2倍ほどに巨大化させた。

自己再生といい巨大化といい、スフィア社はどうやらかなりパラメータを弄ったようだな・・・。

だが、あれでは・・・。

「あのままでは、どの道奴は長く無いな。」

「?!どういうことですか?!」

「奴を見てみろ。強化能力に体が追いついていない。

いずれは体組織が崩壊してそれで終わりだ。」

そう。奴はその強化により力は増しているが、同時に肉体が歪になっている。

自滅するのは確実だが、それまでにこっちに被害が出たんじゃ堪らんし、さっさと片付けるか。

後ろのチビ共と下がってろ、と言おうとしたとき、金髪が顔を怒りに歪めているのに気付いた。

「あのアンノウンには、あんな能力は無いんですよね・・・？」

「・・・あぁ。恐らくは奴等の親玉が無理な強化でも行ったんだろう」

「・・・許せない。命を何だと思っているんだ・・・！！」

そいつの表情は怒りから次第に悲しみへと変わっていった。

・・・こいつは優しすぎるな。

「後ろのチビ共と下がっていろ。此処は俺が引き受ける。」

「いえ、私も「二人して奴に向かっていって、万が一抜かれたら誰があの二人を守る？」・・っ、分かりました。お願いします」

かなり納得がいっていないようだが、こんな状態で出られたら逆に危なっかしい。

そんな事を言えば逆に火を付けそうだから言わないが。

「さて、片付けるとするか。」

奴がこっちに来る前に主導権を取る。

今はファーウェルは抜かず、格闘での勝負にでる。

その為、バリアジャケットの篭手と足具のみになるが十分だ。

《Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ！》

一気に間合いを詰め、攻撃を仕掛けるも、流石に身体強化の影響で動きが素早い。

初撃を避けたレッサーデーモンは、その４本の腕で連続で攻撃を仕掛けてくる。

「・・・やはり、少し面倒だな。」

奴の攻撃を捌くたびに、命を削っての力故か、その威力が増していくのが分かる。

捌ききる自信はあるが、あの金髪の為にも早めに終わらせるか。

「ヌァァアッ！！」

再び突っ込んできた奴は、先ほどよりも早くなったその拳で俺を殺そうとする。

「破！」

気合と共に高速で拳を打ち出し、奴の拳を逸らす。

そして、無防備になったその体目掛け拳を叩き込む！

これは紋章術を応用した数少ないおれのオリジナルの技。

左手に力を溜め、最初の一撃を入れる。

「グォォォッ？！」

奴の体に接触した瞬間、面白いようにその巨体が吹き飛ぶ。

だが、これで終わりでは無い。

俺の拳が当たった箇所には紋章が刻まれている。

すぐさま俺は右手に力を溜める。

右手には黒い球体が発生し、その回りに紋章陣が描かれる。

それに共鳴するように、奴に刻んだ紋章にも、同じように黒い球体が発生。

互いの球体が引き寄せあい、奴は吹き飛んだ反動と急激に引き寄せられる反動から身動きが出来ない。

猛スピードで引き寄せられる奴に向けて、拳を打ち抜く！！

「ジオ・ブレイク！！」

これは、重力の紋章術を応用したもので、最初の一撃は斥力で吹き飛ばし、最後に引力で引き寄せ、更なる勢いで相手を吹き飛ばす。

最後は接触した重力球同士が重なり合い対象を取りこみ圧殺、というかなりの力技だ。

「ヌゥアァァァ！！」

ジオ・ブレイクを喰らったレッサーデーモンは、重力球に取りこまれ圧殺された。

「とりあえず、何とかなったか・・・。」

やっと終わった事に安堵した俺は、小さく溜め息をついた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

全ての執行者（エクスキューショナー）を倒したシオン達は、全員無事であることを確認。

そして、一段落ついたところではやてがシオンに切り出す。

《隠者（ハーミット）さん、アンノウン対処に強力いただき感謝します。

ところで、先ほどの約束通り、こちらの質問に答えて貰えます？》

「っち。忘れていれば良いものを」

《そう簡単に忘れる訳にはいきませんから。》

「はぁ。仕方ない。ただし、こちらが答えるのは3つまでだ。

それ以上は認めん。」

《・・・分かりました。それではお聞きします。

あのアンノウンは一体なんなんですか？

少なくとも、管理局のデータベースにはあんな生物のデータは無いようですが。》

「最初に言った通り、仕事柄あまり詳しくは言えん。

だが、奴等は自らの事を《神の執行者》と呼んでいる。」

「神の・・・」「執行者・・・」

近くで聞いていたなのはとフェイトは、その言葉に疑問を持つ。

《つまり、あの存在は神が遣わしたもの。そう言いたいんですか？》

「それは、二つ目の質問ととっても構わないのか？」

《っ。いいえ、今のは取りやめます。

アンノウンを送り込んできた組織は何処にいるか知っていますか？》

シオンの忠告に、はやては慎重に言葉を選び、質問を続ける。

「あぁ。知っている。」

「「！！」」

《その組織は何処にいるんですか？》

「残念だが、それについては今はまだ答える事が出来ない。」

「どういうことですか？」

「あなたは、こちらの質問に答えてくれるのでは？」

なのはとフェイトは、互いのデバイスをシオンへと向ける。

当のシオンは平然としているが。

「こちらも、仕事柄答えられないこともある、と言ったはずだが？

・・・それに、これはそういうレベルの問題では無い。」

《と、言いますと？》

「・・・今のお前達では、確実に殺されるだけだからだ。」

「あまり私達を甘く見ないでください。」

「私達機動六課は、そんなにやわではありません。」

「・・・。俺が言っているのはお前達の部隊の事を言っているんじゃ無い。」

「「「「っ！！」」」」

その言葉に現場のみならず、ロングアーチのスタッフにも緊張が奔る。

目の前で話しているなのは達に対して「殺される」と言っているのでは無いという。

それはつまり・・・。

誰もが驚愕している中、シオンは懐に手を入れ、何かを取り出す。

「さて。そろそろ時間でな。失礼させてもらおう。」

「ま、待ってください！」

「話はまだ・・・！」

「先ほどの質問で三つ目だ。

こちらは約束を守ってやったぞ？後はこちらの自由だ。」

そう言ってその場を去ろうとするシオンを逃がすまいと、彼女達は包囲しようとする。

フェイトが険しい顔でシオンに尋ねる。

「あなたは一体、何物なんですか・・・？」

「なに。俺はたんなる《護り屋》だ。」

「護り屋・・・？」

その言葉に疑問を浮かべているフェイト達にシオンは問いかける。

「そこの金髪と白い服の。こっちは名乗ったんだ。名前くらい教えてくれても良いんじゃ無いか？」

「え？あ、はい。なのは。高町なのはです。」

「フェイト、フェイト・Ｔ・ハラオウンです。」

思わず反射的に二人は答える。

二人の名前を、特にフェイトの名前を聞いたシオンは、少し驚き、そして笑みを零す。

「そうか。なのはにフェイトか。　良い名前だな。」

「「あ、ありがとうございます」」

名前を誉められた二人は照れてしまい、一瞬気が抜けてしまった。

その隙をシオンが見逃すはずもなく、包囲を突破する。

「では俺は失礼するよ。

何れまた会う事もあるだろう」

シオンは懐からフラッシュグレネードの様な物を取り出し、使用する。

「くっ！！」

「しまった・・・！」

その閃光は現場を照らし、サーチャー越しに見ていたロングアーチの目をも眩ます。

再び目を開けた時には、シオンと執行者（エクスキューショナー）の姿は既に無かった。

―ロングアーチ―

「反応ロスト・・・。

すみません、逃げられました。」

アルトが状況をはやてに伝える。

「恐らく、あの閃光にはジャミング効果でもあったのでしょう。」

クルツが他のスタッフ達に言う。

いくら閃光でサーチャーの映像が阻害されても、魔力を追跡する事は出来る。

しかし、それすらも出来なかったという事は、妨害措置が取られていると推測するのが普通だ。

「それにしても、先ほどの彼の言葉、気になりますね・・・。

それだけでなく、何時の間にかアンノウンの死体までが消えているようですし。」

副官であるグリフィスがはやてに言う。

「せやね。さっきの言葉を聞く限り、あれはまるで・・・。」

その先をはやては敢えて口にはしない。

初任務で本物のガジェットに遭遇しただけでなく、未知の勢力との接触。

そしてその未知の存在の突然の消失。

フォワード陣も、そしてバックヤードスタッフも疲労しているなかで、これ以上の不安を煽るような事をするわけにはいかないと判断したからだ。

グリフィスもその意図を読んだのかそれ以上は何も言わない。

その後はやては、フォワード陣にレリックの護送などを命じる。

こうして、多くの謎と不安を残したまま機動六課の初出動任務は幕

を閉じた。

―???―

「刻印ナンバー?、護送体制に入ります。追撃戦力を送りますか?」

そこは何処かの研究施設だろうか。

部屋の壁には巨大なモニターがあり、そこに機動六課の映像と先ほどその部屋にいる人物に問いかけた女性が映っている。

「止めておこう。レリックは惜しいが、彼女達のデータが取れただけでも十分さ。」

その部屋の主は、リニアレールのレリックを盗もうとした犯人のようだ。

しかし彼は、今回のレリックはもう諦めがついたようだ。

「それにしても、この案件はやはり素晴らしい。
私の研究にとって興味深い素材が揃っているうえに・・・」

そう言って一度言葉を区切った男の顔には、怪しい笑みが浮かんでいた。

男が見つめる先には、フェイトとエリオが映し出されていた。

「この子達、生きて動いている《プロジェクトF》の残滓を手に入れるチャンスがあるのだから。そして・・・。」

その次に映ったのは、隠者（ハーミット）ことシオンと執行者（エクスキューショナー）達であった。

その映像を見るたびに、男の目に狂喜の色が浮かぶ。

「未知の魔法陣に謎の生命体、そしてそれすらも軽くあしらう護り屋（ハーミット）。

くくくっ、素晴らしい。実に素晴らしいよ!!あぁ。早く彼等を隅々まで調べ上げたい・・・。

そして、彼等の謎を紐解いた時、どれだけの高揚感を味わうことが出来るだろうか!!

その時を想像するだけで、笑いが止まらないよ!!」

男はそれから暫くの間笑い続け、それをモニター越しに見ていた女性は、少し呆れ顔をしていた。

男の声が部屋に響き続ける・・・。

―？？？―

～？？？～

「ふむ。やはりあの程度のモンスターでは負荷には耐えられなかったか。」

私は先ほどの映像を見て一人呟く。

元々それほど期待はしていなかったとはいえ、あぁも簡単にやられるとは・・・。

しかしそれにしても・・・。

「あの隠者（ハーミット）という男・・・。

ブレアめ。既に《ディメンションスフィア》内にスタッフを送り込んでいたのか？

・・・まぁいい。所詮今回は小手調べ。

時期に改良も済めば、こんな作り物の世界などすぐに壊してくれる。」

嘗て、油断していたとは言え、あんなデータの分際ごときにやられたのだ。

社長も未だに目を覚まさない・・・。

二度とあんなことが起こらないように、今度こそ管理しなければなぁ。

私は《ディメンションスフィア》の住人がもがき苦しみながら消えていく様を想像しながら、改良を続けた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

―クラナガン　シオン宅―

彼女達から逃げてきたシオンは、今日の出来事を思い返しながら自宅で休む準備をしている。

「ティアナもクルツも、どうやら成長している様だな。

それに他のフォワード隊員、彼女達もまだまだ強くなっていけそうだ。」

そう言うシオンは微笑んでいたが、次第にその表情を曇らせる。

「あのレッサーデーモン。あれは明らかに異常だった。

もしあれが上位の奴等に使えるようだったら、こちらもリミッターを解除する必要があるな・・・。

それに、万が一の時は・・・。」

そう言った彼の視線の先には、ファーウェルと普通とは違うカートリッジ、そして赤黒い刀身をした抜き身の西洋剣があった。

Ｐｈａｓｅ－９　～星と雷と守護者　Ｂ～（後書き）

如何だったでしょうか？

ここにきてやっと主人公のオリジナル技が出ました。

つーか出るのが遅いし、ネーミングが最悪・・・。

作者はネーミングセンスが無いので勘弁してください！

感想・質問等がありましたら何でも構いませんので、是非お願いします！

それでは失礼します。

Ｐｈａｓｅ－１０　～予感～（前書き）

お久しぶりです。

更新が以前より遅くなって申し訳ありません。

今後の構想を考えていたら、なかなか投稿できなくて・・・。

とまあ言い訳はこのへんで。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ－１０　～予感～

―機動六課　訓練スペース―

六課が誇る訓練スペースは、前回とは異なり、ステージは森となっている。

そこでは今、フォワード陣達が各ポジション別に訓練をしている。

―スバル・ヴィータ―

「うりゃあぁぁぁぁ！！」

プロテクションを張るスバルに向かって、ヴィータは愛機・グラーフアイゼンを振りかぶり、スバルへ叩き込む。

「うあぁぁぁ・・・！！」

シールドは持ちこたえていたものの、スバル自身の足腰の弱さからか、吹き飛ばされてしまう。

それを見たヴィータは、スバルに自分達のポジションの役割を再度教える。

「受け止めるバリア系。弾いて逸らすシールド系。身に纏って自分を護るフィールド系。

この三種を使いこなしつつ、ポンポン吹っ飛ばされねぇように、下半身の踏ん張りとマッハキャリバーの使いこなしを身に付けろ！」

「頑張ります！！」

《学習します》

スバルとマッハキャリバーは、ヴィータの言葉に答える。

それを聞いたヴィータは、ニヒルな笑みを浮かべたあと。

「グラーフアイゼンにぶったたかれたく無かったら、しっかり守れよ」

スバルにグラーフアイゼンを突き付ける。

その表情は、先ほどとは打って変わって真剣だった。

スバルもまた、その言葉を重く受け止め、返事を返した。

―エリオ・キャロ・フェイト―

そこには、地面には無数の障害物があり、空中には何個かのスフィアが浮いている。

スフィアから放たれる攻撃を避けつつ、フェイトは二人に基礎アクションの重要性を説く。

「これを低速で確実に出来るようになったら、スピードを上げていく！」

スピードを上げるフェイトを追うように、スフィアの攻撃もまた早くなる。

そして、一度動きを止めたフェイトに、無数の光弾が放たれた。

「「あっ！！」」

その光景に思わず二人は声を出してしまうが、後ろからフェイトの声が聞こえた。

振り返り、そしてフェイトが辿って来た痕を確認した二人は、再び驚く。

そんな二人に、フェイトはそれぞれのポジションの役割を話す。

「ガードウィングのエリオは、どの位置からでも攻撃やサポートを

出来るように。

フルバックのキャロは、素早く動いて仲間の支援をしてあげられるように。

確実で有効な回避アクションの基礎、しっかり覚えていこう！」

「「はいっ！！」」

「きゅくる～」

フェイトの言葉に、二人と一匹ははっきりと答える。

―ティアナ・なのは―

ティアナは、なのはが作り出した無数の光弾を射ち落とす訓練をしている。

その足元には無数の空のマガジンが落ちている。

「ティアナみたいな精密射撃型は、一々避けたり受けたりしてたんじゃ、仕事が出来ないからね」

「っ！！バレット！レフトＶ、ライトＲＦ！」

《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．》

素早く指示をしたティアナは迎撃の準備をする。

しかし、その上空からは別の光弾が迫る。

「っく！！」

なんとかそれに気付いたティアナは、細かいステップを踏み何とか回避。

それを見たなのはは、少し驚くもすぐに注意をする。

「ほら、そうやって動いちゃうと、後が続かない！」

二つの色違いの弾は、それぞれが別々の動きをする。

すぐさまティアナはそれに対応する弾で迎撃に出る。

「そう、それっ！

足は止めて視野は広く！射撃型の真髄は・・・」

「あらゆる相手に正確な弾丸をセレクトして命中させる、判断速度と命中精度！！」

《Ｒｅｌｏａｄ．》

素早く空のマガジンを捨てたティアナは、再び迎撃の体制にでる。

「チームの中央に立って、誰より早く中・長距離を制する。
それが、私やティアナのポジション、センターガードの役目だよ！」
「はいっ！！」
（今まで兄さんと実戦に出ていた時は、多対一の動きを中心にしていたけど・・・。
足を止めるだけでもこれだけの動きが出来る！こういう動きも悪く無いかも！）
新しい戦法を知ったティアナは、その喜びから一瞬笑みを作るも、すぐに真剣な顔になり、訓練を続ける。

ー隊舎ー

「いやー、やってますなぁー」
「正直、アンノウンの出現で不安を感じていると思ったが・・・。

どうやら逆に良い刺激になったようだな。」

モニターで訓練の様子を見ているのは、ヴァイスとシグナムだ。

「良いっすね、若い連中は。」

「貴様・・・、そんなにレヴァンティンの錆になりたいか？」

「い、いやっ！そういう意味じゃないっすよ！！」

シグナムの鋭い眼光に、ヴァイスは必死に否定する。

女性と話すとき、「若い」などの発言は、注意して使わなければならない。

「ふっ、冗談だ。

若いだけあって成長も早い。まだ暫くの間は危なっかしいだろうがな。」

「冗談に聞こえないっすよ・・・。

まぁそっすねぇ。シグナム姐さんは参加しないんで？」

バトルジャンキーと言うに相応しいシグナムが参加しないのだ。

ヴァイスが疑問に思うのも無理は無い。

「私は古い騎士だからな。

まぁ、それ以前に私は人に物を教えるという柄では無い。
戦法など、届く距離まで近づいて斬れぐらいしか言えん。」
「へへへ、すげぇ奥義ではあるんですけど・・・」
シグナムの言葉に、ヴァイスは思わず苦笑する。
「・・・確かに、連中にはまだ早いかも知れないっすね。」
あぁ、と返事を返そうとしたシグナムだったが。
「っ！！」
ティアナの動きを見てその目を驚愕に見開く。
（今の動き・・・。あれは接近戦に心得のある者の動きだ。
それも、どちらかと言えば格闘家に近い・・・。）
「？どうかしたんすか？」
急に黙ったシグナムに、ヴァイスは怪訝な表情を向ける。
「いや、何でも無い」
ヴァイスは、少し疑問に思いながらも、姉さんがそう言うなら、と
納得した。

（もう少しアイツ等が成長したら、一度試してみるか・・・）

その時を想像したシグナムは薄く微笑む。

それから暫くの間、訓練は続いた。

訓練を一時終わらせた彼女達は、昼食を取るために隊舎へと向かう。

すると、隊舎からはやて、シャーリー、リインが出てきた。

はやてとリインは、陸士１０８部隊に用があるらしく、少し話をした後、彼女達は隊舎を発った。

―食堂―

「なるほど。スバルさんのお父さんとお姉さんは陸士部隊の方なんですね」

フォワード達とシャーリーは、食事をしながら自分達の事を話題にあげる。

「うん。八神部隊長も一時期、父さんの部隊で研修してたんだって。」

キャロの言葉に、スバルはスパゲティを頬張りながら答える。

スバルとエリオの食べる量は半端では無く、知らない人が見れば確実に驚くだろう。

もっとも、一緒に食事を取る彼女達は慣れているのか、平然と食事を続ける。

話を続けていると、スバルがエリオに尋ねた。

「そういえば、エリオは何処出身だっけ?」

「あ、僕は本局育ちなんで」

それを聞いた瞬間、他の皆の表情が強張る。

しかし、エリオの言葉の意味に気付かないスバルは、更に聞く。

「それって住宅エリアってこと？」

「本局の特別保護施設育ちなんです。８歳まで其処にいました。」

その言葉で、漸くスバルは事体の重さを理解した。

《バカ！》

《うぅ・・・》

ティアナは、スバルを諫め、当の本人は自分の発言に焦っている。

そんなスバルを見て、エリオは慌てて自分は幸せに暮らしていた、と語る。

「そうそう！その頃からずっとフェイトさんがエリオの保護責任者なんだもんね？」

少しでも場の空気を変えようと、シャーリーはエリオの言葉に続く。

「はい！もう物心付いた頃から、色々良くしてもらって、魔法も僕が勉強を始めてからは時々教えて貰ってて。

本当に、いつも優しくしてくれて・・・。」

エリオは、当時と今の事を思い出しながら、嬉しそうに語った。

「そういえば、ティアナは？」

シャーリーがティアナに聞くが、ティアナは少し表情を曇らせ、スバルに至ってはあからさまにオロオロしだした。

それを見た瞬間、シャーリーは地雷を踏んだ事に気付いた。

「あ、無理に話さなくてもいいからね？」

「・・・いえ、大丈夫です。」

ティアナは苦笑しながら、自分の過去を少しだけ話す。

「私には、歳の離れた兄が一人いて、兄は管理局の局員をしていたんです。

でも、ある事件で違法魔導師を追っている最中に・・・。」

そこで一度言葉を区切り、話を続ける。

「でも、兄の親友が私の面倒を見てくれて。訓練校に入る前まではその人に色々と教わったんです。

私にとって、もう一人の兄みたいな存在なんです。」

そう言ったティアナの表情は、とても優しいものだった。

流石に、これ以上空気を重くするのは不味いと思ったティアナは話を切り替え、他の４人も食事を再開した。

―陸士１０８部隊　部隊長室―

１０８部隊に到着したはやては、部隊長であり、スバルの父親でもあるゲンヤと話をしている。

今回、彼女が此処に来たのは、レリックの密輸ルートの調査を頼むためだ。

ゲンヤ自身、自分達の部隊の本業でもある以上断る理由は無いが、その裏があるのでは？と暗に聞く。

当のはやては、

「地上の事はやっぱり地上部隊が一番良く知ってますから」と、言うのみ。

「ふむ・・・。」

勿論、それだけが理由で無い事を見抜いたゲンヤだが、それ以上の追求はしなかった。

ゲンヤは捜査員として、彼の部下である《ラッド・カルタス》ともう一人の娘であるギンガを選抜した。

一方、ギンガはリインから今回の件についての説明を受けていた。

「そうですか、フェイトさんが」

「はいですぅ！六課の捜査主任ですから、一緒に捜査に当たってもらうこともあるかもですよ？」

「これはすごく頑張らないといけませんね！」

「はい！」

二人は笑いながらも、気合を入れていた。

途中、リインが何かを思い出した。

「捜査協力に当たって、六課からギンガにデバイスを一機プレゼントするですよ。
スバル用に作ったのと同型機で、ちゃんとギンガ用に調整するです！」

「それは、あの、すごく嬉しいんですけど・・・。良いんでしょうか？」

それを聞いたギンガは、嬉しさ半分、申し訳なさ半分といった表情を浮かべる。

そんな心配を吹き飛ばすように、リインは笑顔で答える。

「大丈夫ですぅ！フェイトさんと一緒に走り回れるように立派な機体にするですよ♪」

「有難うございます！リイン曹長！」

ギンガはその言葉に嬉しそうに笑った。

―六課　データベース―

なのはとヴィータに訓練を任せたフェイトは、シャーリーと共に、以前回収したガジェットの残骸を調べていた。

フェイトは映像を見ていると、その中の一つに見覚えのあるものを見つけた。

慌ててその映像を見直すと、そこには青い菱形の宝石の様な物があった。

「ジュエルシード・・・」

それを見たフェイトの表情は険しい。

ジュエルシードは、嘗てなのはとフェイトが関わったロストロギアで、今は研究施設に保管されているはずのものだった。

更に、その映像に何かが書いてある。

拡大したそれを見たフェイトは、先程よりも険しく、そして怒りのこもった表情になる。

そこには、《ジェイル・スカリエッティ》と書かれている。

その名前に心当たりのあるフェイトは、急いではやてに連絡を取る

ようにシャーリーに指示を出した。

「分かった。すぐにそっちに戻るから、緊急会議の準備しといてな。」

ゲンヤ、ギンガと食事をしていたはやては、連絡を受けてすぐに隊舎に戻る準備をする。

「何かあったんですか？」

急な通信にギンガは心配そうに尋ねる。

「ちょう事件の事で進展があってな。

そういう事ですのでナカジマ三佐、すみませんが失礼します」

「おう、気ぃつけてな」

返事を返したゲンヤは、はやての手が届く前に伝票を取る。

「早く行ってやりな。お前の帰りを待ってる奴等がいるんだろ？」

「はいっ！有難うございます！」

ゲンヤの気遣いに感謝しつつ、はやてはその場を後にする。

―夜　六課―

訓練場のチェックをしていたなのはとヴィータは、隊舎に向かっている。

先を歩くなのはの背中を見つめるヴィータは、嘗ての事件を思い出していた。

（もう二度とあんなことは起こさせねぇ。なのはの事はアタシが守

る。今度こそ絶対に・・・！）

「ん？なぁにヴィータちゃん？」

その視線に気付いたのか、なのはは振り返りながら尋ねる。

何となく知られるのが恥ずかしくなったヴィータは、「何でもねぇーよ」

と、素っ気なく返した。

それでも追求してくるなのはをあしらいながら、二人は隊舎へと戻っていった。

―同時刻　無限書庫―

（流石は無限書庫と呼ばれるだけの事はありますね。

やはりこれだけの記録の中になら、嘗てこの世界の人々が神の存在に気付いたかどうか、何らかの記録があるかもしれませんね）

以前クロノの紹介で、なのは達とも縁が深い、無限書庫の司書長（ユーノ・スクライア）の協力のもと、この世界について調べていた。

嘗て神の存在に気付いた人々がいるのなら、何かしらの痕跡があるのでは？そして、それに纏わる品の在処の手がかりが掴めるのでは？と考えたからだ。

しかし、無限書庫はその名の通り蔵書は半端ではない。

その為、調査は出だしから難航していた。

「どう、シオン？何か見つかった？」

調査を続けるシオンに声をかけてきたのはユーノだった。

「ユーノ。いえ、これといって特には・・・」

「そっか・・・。でも、何年か勤めている僕でさえ見つけた事が無いんだから、そんなに落ち込む事はないよ」

「有難う。でも、一刻でも早く、何かしらの手がかりを見つけたいんです」

「・・・世界の崩壊、か。シオンやクロノを信用しない訳では無い

けど、今でも半信半疑だよ。

というよりは、認めたく無い、のかな・・・」

そう言ったユーノの表情は暗い。

調査協力の際、ユーノにも事情を話さなければならなかった為、彼もまた、ある程度の事は聞かされている。

「それが当然の反応ですよ。・・・でも、これから起こりうる事もまた事実。

そうならない為にも、私達は出来る事をしなければ」

「うん。そうだね。よし！もうひと踏ん張り頑張ろうか！」

「ええ。その意気です」

二人は調査を再開しながら話を続ける。

そんな時、ふとシオンが思い出した。

「そういえば、ホテルアグスタでしたっけ？そこで今度行われるオークションにユーノは呼ばれているんですよね？」

「そうだよ。そこで出品される物の説明をすることになってるんだ」

ユーノは少し恥ずかしそうに言った。

「なるほど。それで、どんな物が出品されるのですか？」

「ちょっと待っててね。・・・はい、これだよ」

モニターを出したユーノは、シオンに出品される品を見せる。

「これは・・・！！」

「ど、どうしたの？」

シオンは、その中の一つを見て驚愕する。

「・・・ユーノ。このオークション、君と品の護衛として一緒に連れていっては貰えないでしょうか？」

「え、うん。いいけど・・・。もしかして、この品の中に何か重要な物があるの？」

尋ねられたシオンは、少し複雑そうな表情をする。

「はい。もし、見間違いでなければ・・・」

そう言ってシオンが見た映像には、バレーボールくらいの大きさをした、銀色の球体が映し出されていた。

Ｐｈａｓｅ－１０　～予感～（後書き）

如何だったでしょうか？

今回、オリキャラ二人が今まで以上に活躍して無いです。

何でこうなったんだ・・・？

さて、最後に出てきたオークションの出展品。

分かる人にはきっと分かると思います。敢えて言いませんが。

次回は、サウンドステージよりほんの少し前の話です。

六課が派遣任務で向かう世界、地球。

その間にミッドで行えるロストロギアの密輸。

そしてシオンは遂にファーウェルの２ｎｄフォームを・・・！

て、出来ればいいなぁと思っています。

それでは失礼します。

Ｐｈａｓｅ－１０．５　～機械仕掛けの少女達　Ａ～（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

今回の話は、六課が派遣任務で地球に行く前日の話ということにしています。

任務地で出会うのは嘗て救った少女。

そして遂に、あの少女達との邂逅。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ－１０．５　～機械仕掛けの少女達　Ａ～

－ミッドチルダ　某所－

クロノの依頼によりシオンは現在、ロストロギアの密輸についての情報を集めている。

件のロストロギアは、４年前の空港火災を引き起こしたものであるレリックの可能性が高いということ、また、機動六課は現在別任務で地球にいるとのことで、極秘裏にシオンが調査、取引が行われた場合の対処をする事になったのだ。

そんなシオンは今、情報収集のために酒場に来ている。

そこは、人通りも少なく柄の悪い連中が集まるような店だが、逆にその道の人間に出くわすことも出来る。

店の隅のほうの席に座るシオンの隣には、一人の男性が座っている。

男は、少し小太りで黒いスーツを着ている。

彼は今回、シオンに情報提供してくれる人物だ。

「それにしても、相変わらずこの姿はどうも落ち着かんわ」

男は、今の自分の姿に不満があるらしい。

そんな男を、顔を向けないようにしながらもシオンは宥める。

「まぁ、そう言うな。アンタの元の姿は少々刺激が強すぎるし目立つ。我慢してくれ。」

シオンの言葉に男は渋々といった表情で納得した。

どうやら、男の今の姿は魔法によるものらしい。

「・・・ところで、その情報は確かか？」

「あぁ、間違いないで。明日の深夜２：３０に、港付近の貨物置場で執り行われるそうや。

なんやシオンはん。ワシを信用してへんのか？」

男は心外だとばかりの目線をシオンへ向ける。

「いや。アンタの事は信用しているさ。ただ、念のための確認だよ。」

対するシオンは、その視線を受け、苦笑する。

「ならええんや」

そう言って少し機嫌を直した男は、酒を注文する。

それから二人は、嘗ての事を思い出す。

「それにしても・・・。シオンはんと初めて会うたのは、もう6年も前になるんやな・・・。」

酒を呑みながら、男は感慨深げに話し始める。

シオンもまた、当時を思い出に浸っている。

「そういえば、もうそんなに経つんだな・・・。」

シオンと男が始めて出会ったのは、既に6年も前になる。

二人が出会ったのは、とある遺跡の中だった。

男は、情報だけでなく遺跡の宝や貴重な品など、あらゆるものを取り扱う行商人で、当時遺跡にいたのも、珍しいものを探す為であった。

そんな時、偶然にもシオンと出会ったのである。

それ以来、二人は裏社会では互いに持ちつ持たれつの関係を続けている。

時にはシオンは男の護衛を、そして時には男はシオンに商品や情報の提供などをしている。

それは《こちら》に来てからも変わらない。

「アンタを《こっち》で見かけた時は、かなり驚いたよ」

「それはワシかて同じや。いきなり今までと違う世界に来るハメになったんやから」

それから二人は、暫くの間話をしていた。

「さて、俺は先に失礼するよ。あまり長居する訳にもいかないからな」

そういってシオンは懐から封筒を出し、男に渡す。

男もそれを確認すると、周りにばれないように目線だけを向ける。

「おおきに。それじゃ、気ぃつけてな、《護り屋・隠者（ハーミット）》はん」

「あぁ。其方こそ気をつけろよ？《行商星人・惨太》」

互いに軽く挨拶をした後、シオンは店を後にした。

―翌日　市内―

本日行われるであろう取引までにまだ時間があるシオンは、黒のパンツに白のシャツを着て市内をぶらついている。

クラナガンとは少し違った町並みの中、色々な所を見て回っていた。

密輸が行われていた場合、どんな場所を逃走ルートに使用されてもおかしくないので、それらしい所を事前に確認しているのだ。

《しかし、此処はクラナガンに比べて、あまり治安は良くなさそうだな》

《仕方がありません。管理局曰く、万年人手不足らしいですから。少しでも首都に警備を回したいのでしょう。そうなると、自然と治安の悪くなる場所も増えてきます。》

シオンはファーウェルと念話をしている間も、しっかりと町を見ている。

《今回の密輸の受取人だが、この間のリニアレールの機械、ガジェットだったか？

あれの製作者等が関係しているとなると、少々やっかいだな・・・》

《最悪、私を機動しての戦闘も考慮しておくべきでしょうね》

《あぁ。場合によっては１ｓｔフォームだけでなく、２ｎｄフォームも晒す事になるかもしれん。》

ガジェットだけならまだしも、今回も同じように行くとは限らない。

それらの事を考えつつ、シオン達が歩いていると、一人の少女が何人かの男に絡まれていた。

～Ｓｉｄｅ　ギンガ～

私は今、先日入ったロストロギア密輸の情報を集める為に、街に出ている。

今私が居るところは、その街の中でもとりわけ治安が悪い場所だ。

辺りを見回すと、柄の悪そうな人達が結構いる。

正直、少しでも早くこんな所から出たいけれど、有力な情報はまだ掴めていない。

管理局として情報を聞いて回ればいいのかもしれないけれど、それだと警戒されて、最悪取引事体が中止になる危険性もある。

その為、私は私服で聞き込みをしているのだけれど・・・。

（正直気が滅入っちゃいそうだけど・・・。これも立派な任務！

それに、先日八神二佐達に協力することが決まったんだし、出来る限りの事はしないと）

そう思い自分を奮い立たせていると。

「お！可愛い娘発見！」

「おぉ！ねぇねぇ、一人でどうしたの？」

「もし暇なら、俺達と遊ばない？絶対楽しいからさ！」

数人の若い男の人達に声をかけられた。

折角、気合を入れなおした矢先に、こんな事になるなんて。

でも、今はこんな人達に構っている時間は無い。

「すみませんけど、これから用事があるので失礼します。」

こういう時はすぐに場を離れるべきだと考えた私は、その人達の横を素通りしようとする。

「まぁまぁ！ちょっとの間だけでいいからさ！」

すると、そのうちの一人が道を塞いだ。

その顔に厭らしい笑顔を貼り付けて私を見る目は、とても居心地が悪い。

「ですから、私には用事があるんです。失礼します！」

先ほどよりも少しキツイ口調でその場を離れようとすると、別の男の人に腕を掴まれた。

先ほどと違って、その表情は苛立ちが見て取れる。

「あんまり俺達を怒らせないほうがいいぜ？なぁに、きっと君もすぐに気に入るって」

それは、自分達に従わなければ痛い目をみる、という脅しだった。

だけど、そんな脅しに屈するほど私は弱く無い。

腕を振り払った私は、その人達を睨みつける。

その私の行動にその人達は頭に来たのか、鋭い目つきを私に向ける。

「・・・どうやら、少し痛い目をみないと分からないらしいな」

リーダー格の人の発言を合図に、その人達は私の周りを囲む。

・・・この程度の人達なら何とかなるけど。一応一般人だから極力傷つけるわけにもいかない。

「女一人相手に大の男が寄ってたかって。随分情け無い事してるんだな。」

どうやってこの場を切り抜けようかと考えていると、黒のパンツに白のシャツを着込んだ、紅い髪の綺麗な人が現れた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　シオン～

紫がかった青い髪の少女が数人の若い男に絡まれているのを見て、俺はそいつ等に挑発するように声をかけた。

「あぁん?!なんだ、と・・・」

「今こっちは取りこみちゅう・・・」

俺の声に反応した奴等は、一斉に振り返ると同時に、呆然とした表情になる。

何なんだいったい?

何故か知らんが固まっている奴等を素通りし、少女の前に立つ。

「大丈夫か？」

「え？！は、はいっ！もう全然大丈夫です！！」

声をかけられた少女は、顔を赤くしながら少しでかい声で返事をした。

気丈に振舞ってはいたが、やはり怖かったんだろう。

「や、やべぇ。すげぇ好みかも・・・」

「ていうか俺、断然こっちの彼女がいいわ！」

そんな事を考えていると、数秒間固まっていた奴等が、急に騒ぎたて始める。

ちょっと待て。あれか？こいつ等は今、俺を見て《彼女》とかほざいたのか？

《ま、マスター！落ち着いて！》

念話でファーウェルが何か言っているが今はどうでもいい。

さて、どうやってこいつ等をいたぶってやろうか・・・。

「なぁ！君も俺等と遊ばない？」

静かに怒りに震えていると、馬鹿共の一人が俺の肩に手を乗せた。

その瞬間、俺はソイツの腕を取って一本背負いの要領で放り投げた。

「あべしっ！！」

投げられたソイツは、そのまま投げた方向にあったごみ置き場に奇声をあげて頭から突っ込んだ。

「さて、次はどいつだ？」

それを見届けた俺は、再び固まった馬鹿共に向かって振り向きざまに笑いかける。

「ふ、ふざけてんじゃねぇー！！」

リーダー格らしい男の声を合図に、馬鹿共は襲い掛かってきた。

だが、所詮は素人。

動きは単調だし遅いため、俺はそいつ等の側面に素早く回りこみ、足をかけて投げ飛ばしたり、顎を掠らせて脳震盪を起こさせ倒した。

「なんだ。随分とあっけないじゃないか。さて。・・・まだやるか？」

残った奴等に睨みをきかせると、そいつ等は小さく悲鳴をあげて、仲間を連れて逃げていった。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　ギンガ～

その人は、あっという間に男の人達を倒してしまった。

結局、私は何もせずにその光景を見ているだけで終わってしまった。

あまりの出来事に言葉を無くしていると、その人に声をかけられた。

「怪我は無いか？」

その人は、右目に眼帯を付けているけれど、その顔立ちと碧眼、そして燃える様な真紅の髪の毛によって、逆にとても神秘的な雰囲気を醸し出していた。

「は、はいっ！大丈夫です！あの、助けてくださって有難うございます！！」

思わず見惚れていた私は、慌てて返事を返した。

「そうか。なら良かった」

そう言ってふっ、と微笑んだ表情を見て、また見惚れてしまう。

ど、どうしようっ！きっと今の私の顔は真っ赤になってるよ～！

案の定赤くなっていた私は、その人に心配をかけてしまった。

うぅ～。なんか一人で空回りしてるよ・・・。

「それにしても、ふざけた連中だ。人の事を女だと見間違えるとは」

「えぇっ？！」

物凄く不快そうに呟いたのを聞いて私は思わず叫んでしまった。

うそ?!こんなに綺麗な人なのに、男の人なの?!

「・・・ほぅ?君も俺を女だと思っていたのか?」

そう言って私を見るその人は笑顔だった。でも、目だけは笑っていない。それが逆に物凄く怖い。

「す、すみませんっ!!貴方があまりにも綺麗だったので、その、つい・・・」

最後の方は蚊の鳴く様な小さな声で私は弁解した。

「はぁ。まぁいい。それより、早めに此処から離れたほうが良い。また同じ様な目にあうぞ」

そう言ってその人は、私に背を向けて歩き出した。

「あ、あのっ!私はギンガ・ナカジマと言います!あなたのお名前を教えて頂けませんか?」

慌てて呼び止めると、その人は振り返ってくれた。

「ギンガか。良い名だ。

俺はシオン。シオン・C・メザーランスだ。縁があればまた会うこともあるだろう」

その人ーシオンさんーはそのまま何処かへ行ってしまった。

「シオンさん、か・・・」

その背中が見えなくなるまで見ていた私は、一人呟く。

あの人の名前を呟くだけで、顔が熱くなり、鼓動が早くなる。

もしかして、私は・・・・・。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

ー夜　港付近　貨物置場ー

護り屋の服を着込んだシオンは、取引現場で身を潜めている。

すると、１０機のガジェットと共に、三人の人が現れた。

その三人は、一人目は背が高く戦闘者特有の威圧感を放つ女性、二人目は髪を三つ編みにし二つに分け、眼鏡をかけている如何にも参謀といった感じの女性、そして最後の一人は、背は低いがその落ち着いた雰囲気の少女。右目には眼帯をしている。

何れも、同じボディスーツを着込み、明らかに場馴れした雰囲気を醸し出していた。

三人は貨物の一つに近づくと、その扉を開けて小柄の少女が中に入った。

少しすると、その少女の手にはケースが握られていた。

《どうやら、間違い無いようだな。ファーウェル、何時でも機動出来る準備をしておけ。１ｓｔフォームで構わない》

《了解しました。・・・準備完了、何時でもいけます》

ファーウェルの言葉に小さく頷いたシオンは、彼女達の背後へと回った。

～Ｓｉｄｅ　チンク～

私達は、計画通りに貨物の中に紛れ込ませたレリックのケースを回収した。

念のためその場で《クアットロ》が確認したところ、どうやら本物らしい。

管理局には、予め偽の情報を流しておいたから、これで暫くは時間が稼げるだろう。

その間にこちらは撤退させてもらおう。

「な～んか、随分とあっけない任務でしたね～？」

今回の任務がスムーズに済んだ事に、クアットロが愚痴を零してい

る。

「馬鹿な事を言うな、クアットロ。任務が無事遂行出来たのであれば、それに越したことは無い」

「それはそうですけど～。《トーレ》お姉さまだって、本当は誰かと戦いたかったんじゃありませ～ん？」

「ぐ・・・。た、確かにそうだが、それは強者の場合だ。弱者を相手にしても、何の意味も無い。」

そう言ってクアットロの言葉に反論するのは、三番目の姉である《トーレ》。

彼女は、強者との戦闘で生き残り、高みを目指すことを生きがいとしている。

ある意味、私達の中で一番《戦闘機人》らしいとも言える。

とにかく、今はレリックを持って帰還する事が優先事項だ。

「二人とも、話は後でも出来る。先ずはレリックをアジトへ持ち帰ろう。」

「む、そうだな」

「は～い。それじゃあ、行きましょうか？」

「あぁ、そうし・・・！！クアットロッ！！」

そうしよう、と返事を返そうとすると、クアットロに向けて途轍もない威圧感が向けられている事に気付いた。

トーレとクアットロも気付き、すぐにその威圧感の元を探すと、闇の中から全身黒尽くめの男が出てきた。

私達は、前回のガジェットの映像から、ソイツが何者かを知っていた。

ソイツは、突如現れたアンノウンを容易く倒した男。

そして、現在トーレが最も戦う事を望んでいる男。

「《護り屋》隠者（ハーミット）・・・」

Ｐｈａｓｅ－１０．５　～機械仕掛けの少女達　Ａ～（後書き）

一話にまとめるとえらい長さになると思ったので、分割しました。

そして、分かる人には分かる《惨太さん》。

なんとなく好きなんですよ、このサブキャラ。

だから、どうしても出したくて・・・！

と言うわけで、次回は遂にシオンとナンバーズとの戦闘です。

はたしてシオンは、無事に依頼をはたせるのか？

それでは失礼します。

Ｐｈａｓｅ－１０．５　～機械仕掛けの少女達　Ｂ～（前書き）

前回の続きがやっと書き終わりました。

誤字等目立つと思いますがご容赦を。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ－１０．５　～機械仕掛けの少女達　Ｂ～

～Ｓｉｄｅ　シオン～

「《護り屋》隠者（ハーミット）・・・」

俺をその名で呼び、ガジェットを連れている事から、こいつらがガジェットの製作者に関係があることは分かった。

さて、それよりもまずはレリックを奪うことが先だな。

「さて、そのケースを此方に渡してもらおうか」

「ごめんなさ～い？残念ですけど、それは出来ないんです～」

眼鏡をかけた女が気の抜けた返事をする。

・・・恐らくこれがあいつのやり方なのだろう。

その話し方で相手をイラつかせ、自分のペースにのせるという魂胆だろう。

「そうか。ならば力ずくで奪うしか無いようだな・・・」

「そう簡単に出来ると思うか？」

すると、眼鏡の女の前に、長身の女と低身長の女が立った。

更には、１０機のガジェットの内４体は眼鏡の護衛に付いている。

ガジェットは兎も角、この二人は厄介だな・・・。

特に長身の方、こいつからは《あちら》の世界にいた仲間に雰囲気が似ている。

強く成る事、そして強者と戦うことを生きがいとしている者の目をしている。

小さく溜め息を吐いた俺は、構えを取る。

「だろうな。女を殴るのは趣味じゃ無いんだが・・・。これも仕事だ。

多少怪我をしても赦してくれ」

「ふん、何時まで余裕でいられるかな？

クアットロ！先にアジトへ向かえ！私とチンクで抑える！」

「分かりました～。二人とも、気を付けてくださいね～？」

眼鏡がその場を逃げようとするが、そうはさせん！

「そう簡単に逃がすと思うか？」

俺は拳を掲げ、結界を発動する。

この結界は、紋章術と魔法を織り交ぜたもので、そう簡単には破れないうえに、ＡＭＦにも耐性がある。

「・・・やってくれるな」

「言ったろう？こちらも仕事だとな。さぁ、始めようか」

「私達二人を相手に後悔するなよ！」

「お前は強いからな。手加減はしない！」

長身ートーレーが走りだすと共に、低身長ーチンクーが此方にダガーを投げつける。

初撃をかわした俺は、後退しつつトーレとの打ち合いとなる。

奴の手足には、半実体のブレードが付いており、威力が強化してあ

る。

バリアジャケットの篭手と足具に魔力をまわし、強化して応戦する。

（ちっ、こいつはスピード重視か）

その攻撃は早く、見切れないわけでは無いが油断は出来ない。

何度か打ち合っていると、トーレが距離をとる。

俺の死角からチンクがダガーを投げてきた。

それを叩き落そうとして、悪寒を感じ慌てて回避した。

「《ＩＳ，ランブルデトネイター！！》」

チンクの言葉と共に、ダガーが爆発を起こした。

・・・まともに受けていたら危なかったな。

「ほう、今のをかわすか！！」

回避した先、それも俺の背後からくるトーレの攻撃を防ぎ、俺は一気に加速する！

《Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ！》

眼鏡－クアットロ－から意図的に距離が離れるように戦っていた俺は、彼女の回りの全てのガジェットを機破壊しつつ、クアットロに迫る。が、しかし。

「《ＩＳ，ライドインパルス！！》

「早いとは思っていたが、ここまでとはな・・・。」

「嬉しい事を言ってくれるではないか！」

ソニックムーブと同等、あるいはそれ以上のスピードで、トーレは俺に追いつき追撃を仕掛けてきた。

ちっ、残りのガジェットはまたクアットロの護衛か・・・。

「だが、だからこそ気に食わん！貴様、本気を出していないな？」

蹴りを交じらせ距離を取ると同時に、トーレが聞いてくる。

その表情は、何処かイラついていた。

「言っただろう？女に手をあげるのは趣味じゃ無いと」

「そうか・・・。ならば、嫌でも本気を出させてやろう！」

再び高速移動を発動したトーレは、俺の死角を突いて来る。

そして、その隙をついてチンクのダガーが飛んでくる。

・・・思った以上にやっかいだな。

それにこいつ等の動き、恐らく人間では無い。機械の骨格でもしているのか？

人間では多少有り得ない方向・角度からの攻撃は、予想以上に対応しにくい。

今はかわせているから良いが、このままではもたないし、結界を破られる。

「ジオ・ブレイク！！」

俺は地面に向けて技を放つ！

土煙があがり、一瞬だけ二人の視界を奪う。

と同時に、炎系の紋章術を混ぜた魔法を設置した。

もし奴等が全身機械化しているなら、熱源を察知する事ぐらいわけ無いだろう。

時間稼ぎを設置した後、再びクアットロへ向かう。

次は、クアットロを優先して潰す！

ガジェットを無視して強引に攻撃を仕掛ける。

そして、クアットロに一撃いれようとしたが。

「っ！！何っ？！」

攻撃がすり抜けた？！

《マスター！恐らくこれは幻影です！》

くそ、迂闊だった！指揮官が自身の身を守るのに護衛を付けるだけの筈が無い！
それを失念するとは・・・！

「っ！クソッ！！」

正面からのガジェットの攻撃をかろうじて回避。

しかし、側面からダガーが飛来し、直前で爆発する。

直接のダメージは無いがこの状況は不味い！

「もらったぁぁぁっ！！」

「ぐおぉぉっ・・・！！」

トーレの奇襲を受けた俺は、何とか腕で防いだが反動で吹き飛ばされる。

体勢を崩さなかっただけ、儲けものだろう。

「・・・今のでもまともには喰らわないとは。」

チンクが呆れたように呟く。

「こっちもそう簡単にやられる訳にはいかなくてな。

それに、これ以上の修羅場は幾度となく経験している」

さて、そうは言ったものの、この状況はかなり不味い。

俺の目の前には、何人もの、トーレ、クアットロ、チンクがいる。

・・・まさか、此処までの幻術が使えるとはな。

《ファーウェル、予定変更だ。２ｎｄフォームの機動準備を》

《了解！・・・機動準備完了！》

此方も何とか準備が出来た。さて。

「これは仕方が無い、か・・・」

そう呟いた俺は、服の内側にあるファーウェルを手にした。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　トーレ～

「これは仕方が無い、か・・・」

そう呟いた瞬間、隠者（ハーミット）の纏う空気が更に鋭くなった。

隣を見ると、クアットロ、チンクも気付いたようだ。

その顔は、険しい物になっている。

私もそうだが、それ以上に感じているものがある。

「遂に、遂にその気になったか・・・！！」

そう。それは歓喜。

より強く、より優れた力を持つ者との戦い。

私は何よりもそれを望んでいる！

リニアレールでの映像を見た時から、私は奴と戦う事を望んでいた。

その願いはかない、更には奴の本気を見れるかもしれないこの状況。

これが嬉しく無い筈が無い！

「さぁ来い！隠者（ハーミット）！」

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　クアットロ～

これは、ちょっとヤバいかもしれませんわねぇ～。

あの隠者（ハーミット）という男、以前の映像から強いとは思ってましたけど。

訳の分からない結界まで張りますし、想像以上にやっかねぇ。

トーレお姉さまはヤル気みたいですけど、私は直ぐにでも此処から逃げ出したい気分。

それだけの威圧感を目の前の男は放っているのですから。

「無事に帰れるかしら・・・？」

いつの間にかかいていた冷や汗が、頬をつたうのが妙に感じられた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

「出来れば、コイツはもう少し後にしておきたかったんだが・・・。
仕方が無いか。」

シオンはそう呟くと、ゆっくりと立ち上がる。

その手には待機状態のファーウェルが握られている。

「悪いが少し本気を出させてもらう。
多少どころか、ほぼ確実に怪我をするだろう。
俺もまだまだ未熟でな。赦してくれ」

シオンは、ファーウェルを自分の前に突き出す。

「「「なっ！！」」」

それを見た彼女達は驚愕する。

「まさか、今までデバイスを使わず、バリアジャケットのみで戦っていたというのか・・・？！」

チンクの言葉は残る二人の心情を代弁していた。

自分達もまだ力を出せるとはいえ、人間より遥かに強い戦闘機人である彼女達とほぼ互角の戦いをしていたのだ。

驚くのも無理は無い。

「それじゃあ、行かせてもらおう。

ファーウェル、セットアップ！」

ファーウェルが輝き、光に包まれる。

光がおさまると、シオンの手にはクロスミラージュよりも少し大きい、２丁拳銃が握られていた。

銀色の銃身に黒いラインが入っており、蒼いコアが光っている。

機動を確認したシオンは、自身の能力の上昇を確かめるように、その場で軽くステップを踏む。

「それじゃあ、行かせてもらおうか。」

《Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ》

小さく呟いたシオンは、一瞬で間合いを詰める。
カートリッジを使用せず、自身の魔力をそのまま流し込み弾丸を精製。

その弾丸はＡＭＦを突き破り、残るガジェットは全て破壊された。

トーレはクアットロとチンクを抱えてかろうじて回避。

だが。

「遅い！」

再びシオンに間合いを詰められ、トーレは二人を後ろに放り投げ、迎撃する。

（先程よりも早い！これが奴の実力！いや、これですら、まだ本気で無いと見える！！）

トーレは、格段に強くなったシオンを相手にしながらも、その顔は喜びに奮えている。

「良いぞ隠者（ハーミット）！

もっとお前の力を見せてくれっ！！」

トーレはＩＳを使い蹴りを繰り出す。

だが、同じ様に繰り出されたシオンの蹴りに相殺され、即座に腹に突き付けられた銃により吹き飛ばされる。

「ぐあぁぁぁっ！！」

「トーレ！！くっ、《ＩＳ，ランブルデトネイター！！》」

チンクは２０本のダガーを投げつけるが。

「ファーウェル！！」

《プルート・ホーン！！》

ファーウェルより放たれた拡散弾により、全て射ち落とされる。

続けてシオンは、二挺の銃を連結させ、チンクの反対側へ魔力弾を放つ。

「なにっ?!」

誰も居ないはずの場所に、バリアが張られた。

そこには、本物のチンクがいた。

(どういうこと?私のISが見破られた・・・?!)

クアットロは身を潜めながらも、その事態に驚愕する。

幻影を使ってそれほど経っていないというのに、看破されるなど信じられなかったからだ。

「まさか、クアットロの幻影を見破るとはな・・・。

いったい何をしたんだ?」

距離を取ったチンクは、トーレと並びシオンに尋ねる。

「いや、俺は幻影を見破った訳では無い。」

「どういうことだ?」

「いくら幻影を作ったとしても、本物から発せられる殺気までは再現できないからな。

逆にその殺気を辿っているだけだ。」

当然のように言うシオンだが、彼女達はその言葉に何度目になるか、驚愕する。

「まさか、それだけでこの幻影を見破るとは。

くくく、益々面白いぞ！隠者（ハーミット）！！」

トーレは笑っているが、クアットロにすれば冗談では無い。

直接戦闘能力が低い彼女にとっては、下手をすれば気配で自分の居場所がバレてしまうのだから。

チンクとクアットロは、如何にかして結界を破り脱出をしようと念話をしている時、異変が起こった。

シオンと三人の間に赤い魔法陣が展開される。

そして、その魔法陣から出てきたのは、三体のエクスキューショナー。

その三体は同じ姿をしている。

茶色の体色に、三対の翼、その顔は龍に近いが、体はどこか人間にも近い、半獣半人といった異形。

このエクスキューショナーこそ、《執行者》の名を与えられた上位の存在。

「こいつ等は！！」

「まさか、レリックを狙って・・・？！」

「それに、どうやって結界の中に・・・？」

（まさかこんなに早くこいつ等まで出てくるとは・・・）

ナンバーズの三人は突然の事態に混乱しているなか、シオンは内心驚きつつも、冷静に執行者の動きを見ている。

すると、執行者が一斉に、クアットロを、否、クアットロの持つケースを見つめる。

「神の審判はいずれ下され、貴様等人間は滅びを向かえる。

だが、神はより早い世界の浄化を望んでいる。」

三体の執行者は手を合わせると、赤いエネルギー球体が発生。

「よって、貴様等危険因子はここで排除する」

その言葉を切欠に、赤い球体から無数の光線が放たれる！

四人はバラバラに回避した。

尚も続く攻撃をかわしているうちに、シオンとトーレ、チンクとクアットロの二組に分かれていた。

「ちっ！面倒な奴等が出てきたな！」

「お前はアレが何だか知っているのか？」

声を潜めつつ、二人は話す。

「アイツ等の名は《執行者》。神の執行者のなかで、そのままの名をつけられた存在だ。」

「神の執行者・・・？」

「質問は後だ。お互い今は生き残る事を優先すべきだと思うんだが。ここは一つ共同戦線といかないか？」

「・・・已むを得ない、か。いいだろう」

《クアットロ、チンク！隠者（ハーミット）とは一時休戦、共同戦線をはる。いい

な?!》

《・・・了解》

《まぁ、三つ巴よりはいいですしねぇ。分かりました～》

「二人の了解も得た。何時でもいけるぞ」

「了解した。なら、アンタ達の名前を教えてくれないか?

そのほうが、直ぐに指示も出しやすい」

「・・・分かった。私の名はナンバーズＮｏ．３、トーレだ」

《同じくナンバーズＮｏ．４、クアットロです～》

《同じくナンバーズＮｏ．５、チンクだ。宜しく頼む》

「分かった。知ってると思うが、俺は護り屋《隠者（ハーミット）》だ。

・・・よし。俺とトーレが一体ずつ引き受け、クアットロとチンクで残りの一体に当たってくれ」

「「「了解」」」

「よし。ファーウェル１ｓｔフォームに移行」

《Ｙｅｓ，ｍａｓｔｅｒ．　Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．》

シオンは、ファーウェルを刀にし、飛び出る機会を窺う。

「・・・・・・行くぞ！！」

シオンの合図に、四人は一斉に飛び出した。

《奴等は攻撃のモーションがある程度決まっている。

手を合わせる時は、先ほどの攻撃を、腕をクロスする時は、触手を地面に突き刺し、それを地面から突きだして攻撃してくる。これは、リーチが短いため、自分に接近する相手にのみ行う。

奴等の動きに注意しろ！》

素早く指示を飛ばしたシオンは、一体を引き付けつつ周りの状況を確かめる。

（他にエクスキューショナーは来ていない。増援が無いとも限らない以上、早めに片付ける！）

シオンは、一気に勝負をしかける。

素早く動き回り、執行者の死角をとり、紋章術を発動する。

《踊れ焔よ！ファイアボルトッ！！》

シオンの手から出た焔の弾丸は四つに分裂し、執行者に直撃。一瞬その視界を奪う。

それと同時に、闘氣を纏わせ、強力な一撃を放つ！

「鳳孔破！！」

焔の闘氣は、燃え盛る鳳凰の姿となり、執行者を包みこむ。

その隙に、更なる強化を行う。

《焦熱の焔、我に力を！　ブレイズ・ソード！！》

ファーウェルに焔を宿し、執行者に切りかかる！

「はぁぁぁっ！！」

その一撃を執行者はなんとかかわすが、右腕を切り落とされていた。

（出来れば今ので決めておきたかったんだが・・・）

そう思いつつ、シオンは攻撃を再開する。

「ＩＳ（ライドインパルス）！！」

高速移動により、執行者を撹乱するトーレは、連続で攻撃をいれるが、効果はいまいち出ない。

（ちっ！装甲が厚いせいで刃が通りにくい・・・！）

内心苛立ち、更に追撃をしようとするが、相手の動きを見て咄嗟にＩＳで距離をとる。

直後、トーレの居た場所は、無数の触手が突き立っていた。

その光景を見たトーレは、冷や汗をかいた。

（もし、奴の情報を聞いていなければ、私は今頃・・・）

だが、同時に情報が正しかったことから、トーレは気合を入れなおし再び執行者へと向かう。

ランブルデトネイター
「ＩＳ！！」

シルバーカーテン
「ＩＳ！！」

クアットロ、チンクは、その幻影と爆発するダガーを駆使して、攻撃を続ける。

執行者は幻影にはまり、その攻撃は二人には届いていない。

しかし、それでも二人は油断しない。

それほど迄に、目の前の相手は脅威の存在だからだ。

幻影に苛立ったのか、執行者は範囲攻撃を仕掛ける。

手を合わせ赤いエネルギー球体をつくり、解放する！

無数の光線は、幻影を容赦無くかきけしていく。

二人はなんとか回避。

しかし、その一瞬だけ二人の姿が晒されてしまった。

執行者はその隙を見逃さず、猛スピードで接近し、触手を地面に突

き刺さした。

「クアットロッ！！」

チンクは悪寒を感じ、咄嗟にクアットロを突き飛ばす。

「きゃあっ！」

触手の一本がクアットロの腕に当たり、ケースが手から離れた。

「無事か、クアットロ？！」

チンクは、ＩＳで触手をそらしながらクアットロを救出。

その代わり、ケースは取り損ねてしまった。

その隙をついて執行者は、触手をケースに向けて放つ！

触手によって煙が撒き上がり、状況が分からなくなる。

「ガァァッ！！」

突然、レリックを攻撃した執行者が悲鳴をあげる。

煙が晴れると、其処には腕や足から少し血を流したシオンがいた。

シオンは、相手をしていた執行者を倒したあと、三人に加勢しようとしたが、その時にケースが飛ばされるのを見た。

「不味いっ！ファーウェルッ！！」

《Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ！》

ギリギリで間に合ったシオンは自身の急所以外の防御を捨て、ケースを守ったのだ。

ケースの無事を確認し周りを見ると、倒れたクアットロを抱えているチンクの姿があった。

クアットロは先ほどの攻撃で右腕が折れており、チンクもまた、少なからず怪我を負っている。

シオンは、自身の手札を明かすことを覚悟で、今まで以上の力を解

放する。

「今後の事を考えて手加減していたのが間違いだった。

・・・お前等は此処で消えろ」

静かに呟いたシオンは、凄まじい闘氣を放つ。

残った二体の執行者は、シオンの闘氣にあてられ、シオン目掛けて突っ込んできた。

「ファーウェル。カートリッジロード」

《Ｙｅｓ．Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．》

二発のカートリッジをロードし魔力を帯びたファーウェルに、シオンは更に闘氣を纏わせる。

それは、シオンが持つ技の中でも、最強に位置する技の一つ。

七星奥義の一つにして、闘氣と星の力を集約した剣技。

嘗て、シオンの世界を救った英雄、《クロード・Ｃ・ケニー》が使った奥義。

「伏竜七星破！！」

ファーウェルから放たれた強大な竜の姿をした闘氣は、執行者を容易く呑み込んだ。

執行者を撃破したシオンは、トーレ達に振り返る。

「さて。まだ続けるか？」

シオンは、三人にファーウェルを突きつけながら問いかける。

トーレは、クアットロ、チンクの様子を見てから、シオンの様子を確認する。

（あれだけの技を放ちながら、まだ余力があると見える。・・・ここは退くべきか）

「今回は此方が手を退こう。だが、次に会った時は必ず貴様を倒す」

戦いを続けると思っていた二人は、トーレの様子に驚いていた。

「・・・そうしてもらえると、此方も助かる」

シオンは結界を解き、三人の逃げ道を作る。
それを確認した三人は、その場を後にした。

～Ｓｉｄｅ　トーレ～

奴の最後の一撃。
あれを見たからこそ、嫌でも奴との実力差が分かってしまう。
二人が怪我をしていた事も撤退の理由だが、それ以前に今の私では奴と戦う資格は無いと思った。
・・・これほど悔しい思いは始めてだ。
「隠者（ハーミット）。次に会うとき迄に、私は貴様に追いついてみせる・・・！！」
次こそは、必ず・・・！！

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

「行ったか・・・」

三人が去ったのを確認したシオンは、ファーウェルを待機状態に戻す。

すると、何人かの足音が近づいてきた。

「管理局です！そこの貴方、こんなところで何をしているんですか？」

女性の声に振り返ると、そこにはギンガとカルタス、そして数人の局員がいた。

ギンガはシオンを見て驚愕する。

「あなたは、４年前の空港火災で私を助けてくれた・・・！」

「！貴方のその怪我、それにこの場の惨状は関係がありそうですね。

話を聞かせて貰えますか？」

カルタスの言葉に、シオンは小さく溜め息を吐く。

「なに。ちょっとお宝を巡って遊んでいただけさ」

見せびらかすように、シオンはケースを持ち上げる。

「もう用は済んだからな。これはやるよ」

シオンは、レリックの入ったケースをカルタス目掛けて放り投げた。

慌ててキャッチしたのを確認すると、シオンはリニアレールの時と同じように、目眩ましでその場から去った。

あとに残された局員たちは、暫くの間呆然としていた。

～Ｓｉｄｅ　シオン～

あの場から逃げ切った俺は、裏路地で治癒魔法を使った後着替えた。

それから、ホテルを目指している間、今回の事を纏める。

《ついに執行者までが現れたか。この先益々面倒なことになりそうだ》

《そうですね・・・。あと少しでアレも完成するとはいえ、油断は出来ませんね》

ファーウェルの言葉に、俺は内心頷いた。

・・・それにしても。

《昼間に会ったあの少女。何処かで見た事があると思ったら、あの火災の時の少女か》

《しかも、管理局の局員だったとは。先ほど現れた時は驚きましたね》

《あぁ。あの子も、レリックの調査に参加しているとなると、更に面倒だ・・・》

少しだけ先が不安になりながらも、嘗ての少女との再会に、少しだけ心が軽くなるのを感じた。

ホテルに着いた俺は、シャワーを浴びた後、直ぐに眠りについた。

〈Side Out〉

Ｐｈａｓｅ－１０．５　～機械仕掛けの少女達　Ｂ～（後書き）

如何だったでしょうか？

ちょっとシオンが強すぎるかな・・・？

でもまぁ、七星奥義ならこのぐらい出来そうだし。

遂に出ました２ｎｄフォーム。

ストライ○フリー○ムの銃をイメージしてください。

あんな感じでカラーリングが銀になっただけって感じです。

それにしても、戦闘描写は難しいです・・・。

さて、次回はホテル・アグスタの話です。

果たしてティアナは「お話」フラグを叩き折る事は出来るのか・・・？！

ということで、今回はこの辺で。

それでは、失礼します。

Ｐｈａｓｅ-１１　～ぶつかり合う戦士　静かに響く慟哭　Ａ～（前書き）

お久しぶりです。

今回も二部構成となります。

警備任務で来た六課前線メンバーを襲うのは？

そして、隠者（ハーミット）とぶつかり合う戦士とは？

それではどうぞ。

※今回からあとがきが少し変わります。

Ｐｈａｓｅ-１１　～ぶつかり合う戦士　静かに響く慟哭　Ａ～

―ヘリ内部―

地球への派遣任務が終わってから数日後、六課前線メンバーとクルツは、今回の任務地、《ホテル・アグスタ》へと向かっている。

ヘリの中では、今回の任務についての説明が行われている。

「これまで謎やったガジェットドローンの製作者、及びレリックの収集者は現状ではこの男」

すると、モニターに一人の白衣を着た、学者風の男が映し出される。

「違法研究で、広域指名手配されている次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティ。」

「こっちの捜査は主に私が調査するけど、皆も覚えておいてね？」

「「「「はい！」」」」

はやてに続いて説明をしたフェイトの言葉に、四人は返事を返す。

「これから向かう先は此処！ホテル・アグスタ！」

今回の任務は、骨董美術品のオークションの会場警備と人員警護。

「取引許可が出ているロストロギアがいくつか出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出てくる可能性が高い。

そのことから僕達が警備に呼ばれた、と言う訳です。」

リィン、なのはに続き、クルツが説明を補足する。

それから、説明が続く中で、キャロはシャマルの足元にある四つの箱に目がいく。

一通りの説明が終わったところで、キャロがシャマルに尋ねる。

「あのシャマル先生。さっきから気になってたんですけど、その箱って・・・？」

「ん？あぁ、これ？」

尋ねられたシャマルはというと、意味深な笑みを浮かべる。

「隊長達とクルツ君のお仕事着♪」

ーホテル外ー

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

私達フォワード陣は、会場の外を警備する事になっている。

外を巡回している間に、私はスバルに以前から気になっていた質問をする。

《そう言えばアンタ、部隊長達について詳しかったわよね？》

《て言っても、父さんやギン姉から聞いた位だけど。》

そういってスバルが念話で話しかける。

八神部隊長が使っているデバイスが魔導書型で、《夜天の書》と呼ばれている事。

一時期部隊長は、スバルのお父さんの所で研修をしていたこと。

シグナム副隊長、ヴィータ副隊長、シャマル先生にザフィーラは、部隊長が個人で所有している特別戦力であること。

そしてリィン曹長が集まると、無敵の戦力と呼べる程の実力を持っている事。

更には、その出自は特秘事項であること。

私の様子を疑問に思ったのか、スバルが聞いてくるが、私はなんでもないと言って念話をきった。

（六課の戦力はどう考えても異常ね。一体どうやって集めたのかは分からないけど。

・・・恐らく管理局の上層部は、執行者（エクスキューショナー）の存在を知っていると見て間違いなさそうだし。

確かに、私はシオン兄さんと一緒に外の世界を回った事があるけど・・・。）

それでも、あの歳でBランクを取得しているエリオ、竜召喚のレアスキル持ちのキャロ。

そして、才能の塊と言えるスバルは、身内のバックアップがある状態。

「・・・私は、本当にこの部隊に必要なのかな？」

思わず口にして、すぐに否定する。

「たとえ凡人だとしても関係無い。私は立ち止まるわけにはいかないから。」

兄さんの仇を討つためにも。そして、兄さんの汚名を雪ぐためにも・・・。

「私は負けられない・・・・・・！」

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

―ホテル　オークション会場―

フォワード部隊が会場外を警備するなか、隊長陣とクルツは会場内の警備にあたっていた。

「あの、隊長達が内部の警備の為に着替えるのは分かるんですけど、何で僕まで・・・？

ヴァイスさんやグリフィス君とかではダメだったんですか？」

正装したクルツは、どこか疲れたような声ではやて、フェイト、なのはに質問する。

だがそれも仕方が無いだろう。

クルツ同様、正装した彼女達は、その美しさから衆目を集めている。

そんな三人と一緒に一人の男がいるのだ。

クルツに嫉妬と憎しみの篭った視線が集まるのは当然のことといえる。

そんなクルツの気苦労を知ってか知らずか、三人は答える。

「だって、ヴァイス君はヘリのパイロットだし、明らかにこういった場には合わないでしょ？」

「グリフィスは、はやての代わりにロングアーチの指揮をしないといけないし・・・。」

「となると、残るんは必然的にクルツ君になるわけや。

ええやない。こんな美少女三人をエスコート出来るんやで？」

（消去法の結果ですか・・・。ていうかなのは隊長、さり気無くヴァイスさんを貶してません？）

三人は、さも当然といった風にいうが、クルツからすればいい迷惑だ。

「あれ？クルツ？」

そんな落ち込んでいるクルツに、声がかかった。

四人が振り返ると、そこにはクルツと同じように正装をしたシオンがいた。

「シオンさん！どうして此処に・・・？」

途端にクルツは明るくなり、シオンに近づく。

しかし残る三人は、シオンに初めて会うため、その容姿に見惚れてしまう。

「実は、今回のオークションの中で出品される物で、一つ興味が沸いたものがあったので。

出来る事なら手に入れたいな、と思いまして。」

「へぇ～。そうだったんですか。」

クルツの問いににこやかに答えるシオンだが、同時にマルチタスクを使い、クルツに念話をする。

《その品物が、もしかしたらこの世界のＩＤの可能性が高いかもしれないのです。

そのため、狙われる可能性も十分あるので、出来る事なら回収しておきたいと思ったんです。》

《本当ですか?!・・・だとしたら、ガジェットやエクスキューショナーも・・・。》

《可能性は高いでしょう。今回のオークションの解説を行う考古学者が知り合いなので、その人の警護と出展品の警備を理由に無理を言って此処に来たんです。》

なるほど、と頷くクルツに今度はシオンが質問をする。

「そういうクルツこそ。どうしてここへ?」

「僕達は会場の警備でここに来ているんです。」

「なるほど。ところで、後ろのお嬢さん方を紹介してくれませんか?さっきからこちらばかりで話を進めてしまっていますし。」

シオンはクルツの後ろにいる三人に微笑みかけながら、クルツを促す。

「あ、すみません。隊長方、こちらは僕の友人のシオンさんです。」

「初めまして。シオン・C・メザーランスです。宜しくお願いします。」

「シオンさん。こちらが今の僕の所属する部隊の隊長方です。右か

ら・・・」

説明をしようとするクルツの言葉を遮って、彼女達は自己紹介をする。

「管理局本局　古代遺失物捜査部隊　機動六課の部隊長八神はやて言います！

宜しくお願いします！はやてと呼んでください！」

「同じく機動六課スターズ分隊所属、高町なのはです！

宜しくお願いします！私もなのはって呼んでください！」

「お、同じく機動六課ライトニング分隊所属、フェイト・T・ハラオウンです。

えと、宜しくお願いします！あの、私もフェイトで構いません。」

多少顔を赤くしながら自己紹介する三人に、少々驚きながらも、シオンは笑顔で返す。

「こちらこそ、宜しくお願いします。では、こちらもシオンと御呼び下さい。

それにしても凄いですね。まだお若いのに隊長をなさっているとは。」

「「「い、いえ。そんな・・・。」」」

三人は、シオンの笑顔に照れながら答える。

「あの、一つ宜しいでしょうか？」

そんな中、はやてがある質問をする。

「シオンさんはどうして男物の服装をしてらっしゃるんですか？確かに似合ってますけど・・・。」

その言葉を発した瞬間、シオンは複雑そうな表情をし、クルツはまぁ当然の質問だろうといった表情をする。

「クルツ。どうしてもそう見えますか？」

「えぇ。初めて会う人は大抵そうだと思います。」

クルツの返答に、シオンは思わず溜め息を吐く。

それを見たはやて達はオロオロする。

「あの。私は男なんですけど・・・。」

そう言った瞬間、三人の表情が凍りつく。

それを見ていたシオンはまた溜め息をつき、クルツは苦笑していた。

「あの！先ほどは失礼しました！てっきり女性だとばかり・・・。」

はやて達は顔を真っ赤にしながら必死に謝った。

だが、彼女達がそう思ったのも仕方が無い。シオンはそれほどの容姿をしているのだから。

「いえ。もう過ぎたことですから。気にしないで下さい。」

謝る三人に、シオンは苦笑しながら答える。

これまでに何度かあったとはいえ、やはり慣れられるものでは無いが、そこまで気にされては逆に対応に困ってしまう。

暫く話を続けている五人だったが、シオンが会場内の変化に気付いた。

「どうやら、何かあったようですね・・・。」

「「「「えっ？」」」」

声を揃える四人に、シオンはある方向を指差す。

「あちらの会場の役員の方々ですが、先ほどから妙に動き回っています。

となると、恐らく何かあったのでしょう。」

シオンの言葉に四人に緊張が奔り、はやてはすぐにシャマルに連絡をとる。

シオンは、その様子を見て。

《外で動きがあったようですね。クルツ、私は念のために出展品の積んであるトラックを見てきます。》

《分かりました。くれぐれも気を付けてください。》

クルツに念話をしたシオンは、すぐに行動に移る。

「どうやら、其方の仕事関係のようですね。

私は席を外しましょう。四人とも、お気をつけて。」

「「はい。有難うございます！」」

シオンは彼女達の返事を確認した後、静かにその場を離れた。

―ホテル周辺―

その頃、ホテルの外では、六課前線メンバーがガジェットと戦闘を始めていた。

ヴィータ、シグナム、ザフィーラは、新人達の負担を減らすため、より前線へ出て戦闘をしている。

「私が大型を潰す。お前は細かいのを叩いてくれ。」

「おうよ！」

二手に別れたシグナムとヴィータは、それぞれに行動を開始する。

「アイゼン！！」

己のデバイスに命じたヴィータの前には、八つの鉄球が浮かぶ。

「まとめて・・・」

彼女は体をひねり、鉄槌を振り抜く！

「ブチ抜けぇーー！！」

打ち出された鉄球は、ガジェットのＡＭＦをいとも容易く貫き、破壊していく。

シグナムの前に現れたのは数体の大型ガジェットの？型。

「レヴァンティンッ！！」

彼女のデバイス、《炎の魔剣レヴァンティン》は、カートリッジを排出。

鞘から抜き放ったその刀身に炎が宿る。

彼女はガジェット目掛けて飛び上がる！

「紫電！」

ガジェットは彼女に向かってアームを伸ばすが。

「一閃ッ！！」

そのアームごとガジェットを破壊。

すぐさま距離を取り、次のガジェットに備える。

二人とは別の方向にいるザフィーラの前に、数機の?型がジェットが接近する。

ガジェットはビームを放つが、ザフィーラは微動だにせず、その攻撃を防ぐ。

彼の足元にはベルカの魔法陣が浮かび上がる。

「ここは通さん!てぉぁあああああっ!!」

咆哮と共に、地中から幾つもの白い槍が飛び出し、ガジェットを容赦なく破壊していく。

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

「副隊長達すごーい！！」

私は、シャマル先生に繋いでもらった映像を、スバルと見ている。

「これで、能力リミッター付き・・・？！」

これでもまだ本気を出していないなんて・・・。

私は無意識のうちに、拳を握り締めていた。

こんなんじゃダメだ！

こんな気持ちじゃ、普段の力だって出せやしない！

大丈夫。私の、ランスターの銃はどんな敵だって討ち抜ける・・・！

それでもまだ、私の中の不安は晴れない。

ライトニングの二人と合流した私達は、ガジェットの襲撃に備えている。

そんな時、キャロが異変に気付いた。

「遠隔召喚、来ます！」

その言葉の直後に、目の前に魔法陣が現れ、そこからガジェットが出現した。

「あれって、召喚魔法陣・・・？！」

「召喚ってこんな事もできるの・・・！」

「優れた召喚士は、転送魔法のエキスパートでもあるんです。」

キャロが説明をするけど、そんなことは重要じゃない。

「なんでもいいわ。迎撃いくわよっ！」

「「「おぉっ！！」」」

やってみせる。ここで成果をあげれば、私の不安だってなくなる！

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

ーホテル　駐車場ー

～Ｓｉｄｅ　シオン～

護り屋の服に着替えた俺は、すぐに出展品の運搬車がある駐車場へ向かった。

俺の目的の品は既に場内だが、他のものを狙っている可能性も捨てきれない。

駐車場に着いた俺は、不自然にトラックの荷台が開いた。

「っち！」

姿は見えないが何かがいるな。

気配を頼りに、そいつ目掛けて蹴りを入れる。

硬い何かに触れる感触がすると、そいつはこちらを敵と認識したようだ。

意識を集中し、気配を探る。

瞬間的に首を傾け、奴の攻撃をよける。

同時に奴の腕であろう部分を掴み取る。

人間とは違う、まるで虫のような硬さをしたそれの間接らしき部分を固める。

直後に、顔面目掛けての攻撃が飛び、俺はそれを離すことで距離を取り回避した。

すると、何かが落ちる音がした。

それが分かった瞬間、奴はすぐに逃走を謀った。

「逃がすかよ・・・！」

警備員の足音が近づいてくるのを確認した俺は、すぐさまそいつを追いかける。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

急に動きが良くなったガジェットに向けて、私は引き金を引く。

「っく！！」

でも、ＡＭＦの影響で弾丸が通らない。

《防衛ライン、もう少し持ちこたえててね！ヴィータ副隊長がすぐに戻ってくるから！》

シャマル先生が指示を出すけど冗談じゃない！こんなところで弱気になってたんじゃ、何も出来やしない！

「守ってばっかじゃ行き詰まります！ちゃんと全機落とします！」

《ちょ、ちょっとティアナ、大丈夫？！無茶しないで！！》

「大丈夫です！毎日朝晩、練習してきてるんですから。

エリオ、センターに下がって！私とスバルのツートップで行く！」

「は、はいっ！！」

「スバル！クロスシフトＡ！行くわよっ！！」

「おうっ！！」

スバルが囮になっている間に、カートリッジを４発ロードして射撃体勢に入る。

（特別な才能や、すごい魔力が無くたって。

一流の隊長達のいる部隊でだって！

どんな危険な任務だって！！）

魔力を集中し、無数の弾丸を精製する。

「私の、ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ち抜けるんだって・・・！！」

膨大な魔力に、クロスミラージュに電気にも似た衝撃が奔る。

《ティアナ！？４発ロードなんて無茶だよ！それじゃティアナもクロスミラージュも・・・！》

シャーリーさんの心配する声が聞こえるけど、そんなことは無い！

「撃てますっ！」

《Ｙｅｓ！》

私と同じ気持ちなのか、クロスミラージュ答えてくれる。

「クロスファイヤー！」

今だっ！！

「シューートッ！！」

無数の弾丸がガジェット目掛けて殺到する！！

「あぁぁぁぁぁぁっ！！」

いけるっ！あと少しで全機撃墜出来る！！

トリガーを引き続けている中、一発の弾丸が狙いを外れてスバルへと向かう！

（はっ！　スバルッ！！）

スバルに直撃する寸前で、ヴィータ副隊長が弾丸を弾き返した。

ヴィータ副隊長が何か言っているが、私の耳にはうまくはいってこなかった。

（私は、スバルを射ち落としてしまうところだった・・・？）

スバルを撃墜してしまいそうだったことに対する恐怖と、結局自分ではコントロールしきれなかった事の悔しさで、私の頭の中はグチャグチャになっていた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

－森林内－

「っ！ゼスト、ガリューが誰かに邪魔されたって。こっちに向かってきてる。」

「なに・・・？」

森の中にいる一人の大男と紫の髪の少女は、今回の襲撃における召喚と密輸品の強奪をした者達であった。

男の名は《ゼスト・グランガイツ》、少女は《ルーテシア・アルピーノ》という。

ルーテシアの召喚虫である《ガリュー》とは、先ほど駐車場でシオンと交戦した存在だ。

ガリューからの報告に、ゼストは自身の槍型アームドデバイスを起動する。

すると、何かが吹き飛んできた。

その何かこそ、彼女の召喚したガリューであった。

人型をしているが、目は四つあり、所々に虫の特徴が窺える。

「ガリュー！」

少女は、ガリューを心配して近づく。

致命傷は無いが、幾つかの怪我を負っている。

「やっと見つけた・・・。」

「「っ！！」」

ガリューが吹き飛んできたほうへ目を向けると、全身黒尽くめの男が現れた。

二人は、彼が誰であるかを知っている。

「隠者（ハーミット）・・・！」

ゼストはシオンに槍を向ける。

シオンは、ゼスト、そしてガリュートルーテシアを見ると納得した。

「なるほど。そいつと会場付近にガジェットを送り込んだのはそこの嬢ちゃんか。」

やれやれ、といった感じでおどけるが、視線はゼストから外さない。

「ルーテシア。ガリュート共に下がっていろ。」

その言葉に従ったルーテシアは、シオンを睨み付ける。

自身の大切な存在を傷付けられて、彼女は怒りを覚えていた。

「さて、と。アンタは強いみたいだからな。・・・手加減は出来そうに無い。」

シオンとゼストは、互いに構えを取る。

「最初から本気でいかせてもらう。」

体全体を深く落とし、突撃の体勢をとる。

ゼストは、その分かりやす過ぎる体勢に、けれど万全を期して迎撃の体勢をとった。

しかし、それはゼストの予想を遥かに上回るものだった。

「神宮流体術奥伝奥義『朧車（おぼろぐるま）』」

それは、一言で言えば「体当たり」といっていい突撃技。

だが、そのスピードと威力は「ただの体当たり」とは明らかに違っていた。

「ぐうぅぅっ！！」

一瞬の踏み込みでトップスピードにのったその業を受け、ゼストは槍で何とか受け止めるも驚愕する。

（魔力による強化は行っていなかったはず。それでこの威力だと・・・？！）

必死に体勢を維持しているゼストに、シオンは声をかける。

「やっぱり、この程度じゃ倒れてくれないよな。」

数十メートル押し出したシオンはすぐさまゼストから大きく跳んで

離れた。

耐え切ったゼストは、槍を横に振るい、シオンを遠ざける。

「おぉぉぉっ！！」

着地の瞬間を狙ってゼストは槍を突き出す。

空中で体を僅かに捻ったシオンは、同時に限界まで捻りあげた腕を一気に打ち出す！

「『白刃流し』！！」

その拳は、槍の側面を滑るように突き抜け、槍を反らす。

ゼストは再び驚愕するも、すぐに距離をとる。

既にシオンは着地しているからだ。

再び睨み合う二人だったが、ゼストが急に咳き込む。

「ゴホッ！」

その手には僅かだが血が付着していた。

それを見たシオンはゼストに背を向ける。

「・・・どういうことだ？」

ゼストは油断無くシオンを見据える。

「なに。ただ、万全じゃない奴と戦って勝っても何の意味も無いと思ってな。

先ほどの俺の技で、恐らく此処がバレただろう。逃げるなら今のうちだ。」

「なぜ、俺達を捕まえない？」

近寄ってきたルーテシアを守るように前に立ち、ゼストは尋ねる。

「・・・アンタの目が濁っていないからだ。

どうやらアンタ達は、何か訳有りのようだしな。」

「・・・。名を聞かせて貰えないだろうか？」

「俺の名くらい知っているだろう？」

「お前の様な男の名は、本人から聞いておきたい。そう思ったからだ。」

「・・・・・護り屋・隠者（ハーミット）。アンタ達の名は？」

「ゼスト。ゼスト・グランガイツだ。」

「・・・ルーテシア・アルピーノ。この子はガリュー。」

「そうか。ルーテシア、ガリューを傷つけて済まなかったな。」

その言葉に僅かに驚きの表情を浮かべたルーテシアは首を横に振る。

「ありがとう。ガリュー、今度会うまでにもっと強くなってみせろ。

それから、主を守りぬけよ。」

そういった後、シオンは背を向けたまま軽く手を振る。

二人と一匹は、それを確認したあとその場を去った。

「さて。次の相手は誰だろうな・・・。」

そう呟いたシオンが見上げた方向から、桃色の髪を靡かせた女性がやってきた。

Ｐｈａｓｅ-１１　～ぶつかり合う戦士　静かに響く慟哭　Ａ～（後書き）

はいっ！

何とも中途半端なところで終わりました。

てか、ちょっとゼスト戦短過ぎたかな？と思っております。

さて、次回はＢパートです。

姐さんと対決です。

今回から、次回予告が入ります。続くかどうかはわかりませんが。

―ぶつかり合う護り屋と烈火の騎士

「烈火の将シグナム」

「護り屋、隠者（ハーミット）」

―その力の前に、遂に封じられた力を解放する。

「対人戦でコイツを使うのは久しぶりだ。」

「あの威圧感、間近にいなければ分からんさ。」

―果たして勝ち残るのはどちらか？

「後悔するなよ？」

「私に後退の二文字は無いっ！！」

―そして、彼女の嘆きは虚しい響く。

「私は、私は・・・！！」

次回　魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～Ｔｉｌｌ　Ｔｈｅ　Ｅｎｄ　Ｏｆ　Ｔｉｍｅ～

Ｐｈａｓｅ-１０　Ｂ　～ぶつかり合う戦士　静かに響く慟哭～

御期待下さい。

Ｐｈａｓｅ－１２　～ぶつかり合う戦士　静かに響く慟哭　Ｂ～（前書き）

前回の続きです。

少々駆け足で書き上げたので、誤字脱字等目立つかもしれませんが勘弁したってください。

ついに封印を解かれるシオンの武器。

はたしてシグナムは勝つことが出来るのか？

そして、ティアナは・・・？

また、若干ですが後書きを修正しました。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ－１２　～ぶつかり合う戦士　静かに響く慟哭　Ｂ～

―ロングアーチ―

「召喚士一味、反応ロスト。すみません、逃げられました。」

ホテル・アグスタで起きたカジェット襲撃を手引きしたと思われる召喚士の反応を、先程まで追跡していたのだが、彼女達はそれを見失ってしまった。

《味方に被害は出てへんし、任務事態も順調。ええ事にしよう？》

「近隣の観測隊に通達を出しましたから、移動ルートくらいは掴めると思います。」

はやてに報告をする彼女達。

だが、現場にさらなる変化が起きた。

「っ！！エネルギー反応を感知！
これは・・・先程召喚士のいたと思われる場所の近くです！」
《なんやてっ？！現場に一番近い隊員は？》
「シグナム副隊長です！」
《了解！シグナム！至急現場に向かって！もしかしたら、召喚士がまだおるかもしれん！》
《了解しました！》
《シャーリー、現場の映像、こっちにも回せる？》
「直ぐに準備します！」
シャーリーたちは、すぐさま各々のやるべき事にとりかかる。
その中で、グリフィスが疑問を持った。
（しかし、なぜこのタイミングで反応が？・・・まさか、第三者が召喚士と交戦しているのか？）
彼は疑問に思いながらも、すぐにそれを振り払い、どんな状況でも直ぐに指揮出来る様に備えた。

―森林　上空―

～Ｓｉｄｅ　シグナム～

ロングアーチからの通達で、私は一人で現場に向かっている。

先ほど、ティアナがミスをしたらしく、私はヴィータには新人達の側にいるように指示した。

どうやら、ティアナがスバルを撃墜しそうになったらしいが。

・・・あの事件の事を思い出しているのだろう。

そんな状態のヴィータを連れて行く事もまた、危険だと判断したからだ。

こちらにはザフィーラも向かってきている。

到着まで時間はかかるだろうが、最悪足止めくらいはせねばな・・・。

そんな事を考えていると、現場が見える位置まで来た。

「アイツは・・・！！」

そこにいる人物を私は知っている。

実際に会うのはこれが初めてだが、情報通りならかなりの実力だ。

「・・・やはり、ヴィータは置いてきて正解だったかもしれん。」

私は、自然に口元が緩むのを感じた。

任務とは言え、強者と戦えるのだ。これが嬉しくないはずが無い。

「隠者（ハーミット）、貴様の実力、見せてもらうぞ・・・！」

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

―森林内―

～Ｓｉｄｅ　シオン～

「さて。次の相手は誰だろうな・・・。」

そう呟いた俺が見上げた方向から、桃色の髪を靡かせた女がやってきた。

（コイツは、確か空港にいた・・・。

剣士、それも見たところ『騎士』と称されるだけの実力はありそうだな。）

面倒だ、と思いながらも、俺は目の前の騎士から目を離さない。

「此方は管理局機動六課所属、シグナムだ。

先ほど、この辺りでエネルギー反応を感知した。それから、他に誰かいなかったか、詳しく聞かせてもらおう。」

「嫌だと言ったら・・・？」

「抵抗するのであれば、実力行使も已むを得まい。」

そう言って奴は剣を構える。

「良く言うな。最初からヤル気だったくせして。」

そう。俺の前に来る前からこいつは覇気を放っていた。

今更言葉で取り繕う必要もないだろう。

「気付いていたか。」

そう言ったコイツは、笑みをつくる。

あれか。コイツは《アルベル》と、それからこの間のトーレと同じ人種か。

肩を落としながらも、質問に答える。

「あれだけの覇気を放ってたんだ。気付くなってのが無理だろ。」

「ふっ。それもそうだな。」

少しだけ笑った女は、デバイスを構え名を名乗った。

「改めて名乗らせてもらおう。

私の名はシグナム。烈火の将の二つ名を持つ。

そして、これが我が愛剣、炎の魔剣レヴァンティン。」

烈火の将か。恐らく、炎熱系の変換資質でも持ってるんだろうな。

それにしても、レヴァンティンか。

どうやらコイツとはつくづく縁があるようだな。

「まったく。騎士ってのはつくづく律儀な奴等だな。

・・・護り屋・隠者（ハーミット）だ。」

コイツの放つ覇気は、ゼストと同等か少し劣ったといったところだ

ろう。

今日は厄日か何かかよ。

心の中で愚痴を零しつつ、俺は構えをとる。

それは、リニアレールのときとは違う、先ほどゼスト相手に見せた『神宮流体術』の構え。

「「推して参る！！」」

僅かな間睨み合っていた俺達は、瞬間、同時に踏み込んだ。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

「はあぁぁぁっ！！」

シグナムは、右から横薙ぎに剣を振るう。

シオンは身を深く落としてそれをかわし、同時にその反動を利用して更に肉薄する。

対するシグナムは、かわされた瞬間にすぐに後退することで距離を取ろうとする。

しかし、攻撃のモーションからでは十分な距離を取れず、すぐにシオンに捕まる。

シオンは、右手の甲でシグナムの返す剣の石突を止め、左手で拳を放つ。

シグナムは、その攻撃を防がれることを予測していたのか、左手のみで剣を振るい、右手を空けることでシオンの拳を外へ反らす。だが。

「その防ぎ方は間違いだ。」

「っ！！」

シオンはシグナムの右手を掴むと同時に右足を踏み込み、石突を押し、また、同時に足払いをかける。

軸を失い体勢を崩すシグナムに、シオンは右手を掴んだまま回転し、そのまま裏拳を放つ。

「おぉぉぉぉっ！！」

シグナムは咄嗟に判断し、逆にその反動で中に浮き、逆さまの状態となり自身も回転する事で右手の拘束を解き、同時にそのまま剣を振るう。

それに気付いたシオンは、膝を落とし体勢を低くし、手の甲を上に向け、剣を滑らせるように弾く。

両者は一旦距離を取り、呼吸を整える。

シオンは、驚愕半分、呆れ半分といった感じで話しかける。

「まさか、かわすだけでなく、あの体勢から反撃までするとはな・・・。」

当の本人であるシグナムは、逆に目を輝かせている。

「そういうお前こそ。あのタイミングでよく軌道を修正して回避にまわせたものだ。」

そう言ったシグナムの顔を見たシオンは、心底嫌そうな顔をしている。

「そりゃどうも。それよりその顔如何にかしろ。まるで獣だ。」

「む。済まないな。だがそれもお前が強いせいだ。

・・・さて、続きといこうか。」

「たく、面倒くせぇ。」

嬉々とした表情で剣を構えるシグナムに、シオンもまた構えをとる。

「増援を呼ばれても面倒だからな。早めに決めさせてもらう。」

そう言ったシオンは、体全体を深く落とす。

それは先ほどゼストに放った技。

「神宮流体術奥伝奥義『朧車（おぼろぐるま）』

高速で突っ込んでくるシオンに対し、シグナムは僅かに反応が遅れ、正面から受けてしまった。

「くうぅぅぅっ・・・！！」

シグナムは足と腕に魔力を回して何とか体をそらし、シオンを受け流す。

「レヴァンティンッ！！」

背後をとったシグナムはカートリッジを一発使用し、反撃に出る。

「飛竜一閃！！」

刀身が連結刃となり、不規則な動きでシオンを襲う！

自身に刃が迫っているにも関わらずシオンは動かない。

そして、遂に刃がシオンに当たると思われた瞬間。

「神宮流体術奥伝奥義『風車（かざぐるま）』

氣を纏った足で三連続の回し蹴りをすることで、刃を弾き飛ばした。

弾かれたシグナムは流石に驚愕する。

「まさかこれすらも防ぐとは・・・。」

そう言ったシグナムの頬に汗がつたう。

二人の戦いは、まだ終わりそうに無い。

―ロングアーチ―

「あのシグナム副隊長相手に互角に戦うなんて・・・。」

シャーリーの呟きは、ロングアーチスタッフの心を代弁している。

管理局において、剣を使わせれば右に出る者はいないとさえ言われたシグナム相手に、一撃もくらっていないのだ。

彼女達の驚愕も仕方の無いことだろう。

再び距離を取りあった二人だが、シオンにシグナムが話しかける。

《これほど心躍る戦いは久しぶりだ。だからこそ納得がいかない。・・・お前、全力を出していないな?》

「うそっ?!」

「シグナム副隊長と互角に戦っているのに、本気じゃない・・・?!」

アルトとルキノは思わず声に出す。

いくらリミッターをかけているとはいえ、Aランクオーバーの騎士相手に本気を出していないなど、考えられるはずも無い。

《そういうお前こそ、本気を出していないだろう。

本来の実力を出せない云々の前に。なぜもっと魔法を使わない?》

《私は今純粋に剣士としてお前と戦いたいと思っているからだ。

それに、デバイスすら使っていない奴を相手に魔法を使うなど、私の流儀に反する。》

シグナムの言葉に、ロングアーチスタッフの頭の中は混乱していた。
騎士相手にデバイスを使わずに互角に戦うなど、もう訳が分からなかった。

《・・・なら、こちらも武器を使えば本気を出すということか？》

《極端に言えばそうなるな。なんだ？漸くデバイスを使う気になったか？》

シオンの質問にシグナムは嗤う。
生粋の騎士である彼女は、全力の相手に勝ってこそ勝負には価値があると考えているからだ。
しかし、シオンは首を横に振る。

《いや。残念ながらデバイスは使わない。だが代わりにとっておきの武器で相手をしよう。》

その言葉に、再び場に緊張が奔る。
デバイスでは無いが別の武器を使用する。それは、デバイスの代わりになるほどの代物だということだからだ。
そう言ってシオンは、懐から何かを取り出す。

「なに、あれ・・・・・？」

その光景に誰かが呟くが、誰も答えることが出来ない。

シオンの左手には、白い巾着袋のような物が握られていた。

～Ｓｉｄｅ　シオン～

まさかこいつを使うことになるとはな・・・。

シグナムは俺の手の中にあるものを見て、訝しげな表情をする。

「まさか、それがお前のとっておきだと・・・？」

「それこそまさかだ。コイツの名は《うごめくもの》といってな。

コイツの中はどういう原理か、様々なものを仕舞う事が出来たり、

気付いたら物が増えてたりする不思議空間が広がっていてな。

とっておきもこの中にあると言うわけさ。」

紐を緩めて右手をその中に突っ込む。

目的の物を掴んだ感触を確かに感じた。

「まったく・・・。対人戦でコイツを使うのは久しぶりだ。」

俺はそれを引き出しながら呟く。

シグナムも、それの放つ威圧感に気付いたのか身構える。

コイツはファーウェル、レヴァンテインに続く俺のとっておき。

数多の強敵を打ち破ってきた俺の初期の頃からの相棒。

「見せてやるよ。コイツが俺のとっておき・・・。」

一気に引き抜いたそれは、鈍く輝く鋼色。

その形状は先端が少し曲がっているが、それ以外は全てが真直ぐになっている。

余計な装飾などされていない、いや、する必要が無いほどに完成されている。

ソイツは・・・！

「鉄パイプＲ－９９！！！」

俺は右手で持った鉄パイプＲ－９９をシグナムに突き付けた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　シグナム～

なんだ、あれは？

私は目の前のその武器に、驚愕する。

《なんでやねんっ！！なんで鉄パイプやねんっ！！》

主が叫んでいるが、今の私にはそんな事は重要ではなかった。

あれが、鉄パイプだと・・・？

《シグナム副隊長！あんなのただのこけおどしです！さっさと捕まえちゃって下さい！

あんなただの鉄パイプでどうこう出来るわけが無いですよ！！》

・・・ただの鉄パイプ、だと・・・？！

そうか。私以外は気付いていないのだな・・・。

「シャーリー、あれはただの鉄パイプなどでは無い。」

《えっ？》

「ふっ。・・・あれの威圧感、間近に立たなければ分からんさ。」

私は笑っていうが、それはほとんど虚勢に近かった。

一見してただの鉄パイプだが、実際は違う。

あれの放つ威圧感は明らかに異常だ。

なにより、目を凝らして良く見れば、所々に赤黒いシミが付いている。

・・・一体どれだけの数の相手を叩きのめしてきたのだろうか？

ゾクリ、と全身に悪寒が奔る。

「はぁぁぁぁぁあっ！！」

私は思わずその威圧感に呑まれそうになったが、雄叫びをあげてそれをなんとか堪える。

それを見ていた隠者（ハーミット）は、僅かに驚いているようだ。
もっとも、表情など見えないが。

「・・・後悔、するなよ？」

気を入れなおした私は、奴の言葉に真正面から答える。

「私に後退の二文字は無いっ！！」

私はカートリッジを使用し、レヴァンティンに炎を宿す。
・・・ここからが本番だ！

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

互いに得物を構えた二人は、同時に飛び出す。
シオンの動きは先ほどとは違い剣士のそれとなっている。

「はあぁぁぁっ！！」

シグナムの上段からの攻撃に、シオンは刀を振るうようにして受け流す。

逆に攻撃に転じたシオンの一撃は、シグナムに受けられる。

だが、シグナムはその一撃に驚愕する。

（くっ！なんと重い一撃・・・！このままでは不味いっ！！）

鍔迫り合いの状態から抜け出したシグナムは、再び驚愕し、すぐにその場を離れる。

先ほどシグナムが居た場所に、無数の炎弾、氷弾、雷弾等が飛来した。

「・・・なるほど。これがお前がとっておきにする理由か。」

シグナムは、それらがどこから来たのかを瞬時に理解する。

そう。先ほどの弾は鉄パイプから射出されたものだ。

「あぁ。コイツは改良に改良を重ねたものでな。

一定確立で、剣が接触した時に炎弾、氷弾、雷弾、以下省略が出てくるんだ。

だがそれだけじゃないんだよ。」

そういうとシオンは、無造作に鉄パイプを振るう。

「っ！！」

直後、悪寒を感じたシグナムはその場を離れる。

すると、シグナムいた場所の後ろにあった木々が、鋭い刃物で切られたかの様に倒れた。

「コイツは、接触しない状態で振るうと一定確立で真空の衝撃波を飛ばせるんだ。

ここまでにするのに苦労したよ。」

やれやれ、という風に肩をすくめるが、シグナムからすれば冗談では済まない。

再びカートリッジを使用し、炎を纏わせる。

「そっちが炎なら、こっちは氷でいかせてもらおうか。

《鋭利なる氷刃、ここに！アイシクル・エッジ！！》」

それを見たシオンは紋章術の応用により、鉄パイプに氷の刃を纏わりつかせる。

再び駆け出そうとしたその時。

「てぉあぁぁぁぁぁぁっ！！」

漸く到着したザフィーラが、魔法で二人を引き離す。

それを見たシオンは、興醒めしたように鉄パイプを収めた。

「やれやれ、援軍の到着か。・・・悪いが此処で失礼させてもらう。」

「っ！待てっ！！」

シオンは是までと同様の方法で、その場を後にした。

「シグナム！無事かっ？！」

ザフィーラが立ち竦むシグナムに駆け寄る。

「・・・ザフィーラか。あぁ、大丈夫だ。」

そういってレヴァンティンを持つ手を開くと、その手は汗にまみれ

ていた。

こうして、二人の戦いは決着が付かずに終わった。

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

・・・私は今まで何をやってきたんだろう？

あれだけ大口叩いておきながら、やったのは味方の撃墜未遂。

「ティア。向こう、終わったみたいだよ・・・？」

スバルが私を気遣って声をかけてくれるけど、今は誰とも話したくない。

「・・・私は此処の警備を続けてるから、アンタは向こうに行ってなさいよ。」

「あのね?ティア・・・。」

尚も声をかけてくるスバルに、段々と苛立ちが募る。

「・・・いいから行って。」

「ティア、全然悪くないよ!私がもっとちゃんと・・・。」

その言葉に、私は声を荒げた。

「行けって言ってんでしょ?!」

背後でスバルが身を竦めるのを感じるが、今の私にはそれを気にしている余裕は無い。

「・・・ゴメンね?またあとでね、ティア?」

そういって、スバルが離れていった。

一私がもっとちゃんとやっていれば?

それは私の事だ。

―ゴメンね？

それこそ私が言うべき言葉のはず。

勝手に焦って、勝手に判断して、挙句の果てにパートナーを撃墜。

悔しさから、後悔から、私は涙があふれ出るのを止めることが出来ない。

「私は、私は・・・！」

今の私では、ランスターの、兄さんの証明をすることなんて出来ないっ・・・！

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

シグナムとの一戦後、会場に戻ってきたシオンは、何とかオークションの目的の品に間に合った。

他に落札する者も少なかった為、比較的安価で手に入れる事が出来た。

事前に、クロノと話し合っていた為、その品物の管理はシオンがすることになった。

オークション終了後、シオンはユーノにある事を相談された。

「シオン。悪いんだけど、会場の外に行くのに護衛として付いてきてくれないかな?」

「別に構いませんが・・・。ただ外に行くのに私が必要なんですか?」

その言葉に疑問を持ったシオンは、ユーノに尋ねる。

「実は、昔からの友人が会場の警備として来ていてね。
こんな時くらいしか話す機会が無いから話したいんだけど・・・。
今いる場所が、ガジェットの残骸がある場所だから、念をいれてね？」

少し恥ずかしそうに話すユーノに、シオンは思い当たる事があった。

（なるほど。ユーノの友人というのは、恐らくなのはさん達なのでしょうね。）

「分かりました。そういうことでしたら、私も行きましょう。」

「本当?!有難う、助かるよ!」

シオンとユーノは、並びながら外へと向かった。

Ｐｈａｓｅ－１２　～ぶつかり合う戦士　静かに響く慟哭　Ｂ～（後書き）

如何だったでしょうか？

鉄パイプ最強伝説。

単にやりたかっただけです。すみません。

Ｒ－９９というのは・・・。まぁ、気にしないで下さい。

それでは次回予告です。

―折れてしまった少女の心

「ティアナは一人で戦っているんじゃないんだよ？」

「・・・・・はい。」

―再開する《きょうだい》

「ティアナ・・・。」

「兄、さん・・・・・?!」

―少女の叫びが木霊する。

「私は！もう、誰も失いたくないからっ！だからっ！！」

「少し、頭冷やそうか・・・？」

次回　魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｔｉｌｌ　Ｔｈｅ　Ｅｎｄ　Ｏｆ　Ｔｉｍｅ～

Ｐｈａｓｅ－１１　～少女の叫び～

御期待下さい。

Ｐｈａｓｅ－１３　～少女の叫び～（前書き）

更新遅くなってしまってすみません。

キャラクターの内面を表現するのに時間がかかってしまいました。

し、心理描写って難しいっ！！

今回、ティアナがキャラ崩壊していると感じる方もいると思いますが、ご容赦を。

それからサブタイトルですが、一話に纏めると話がえらく長くなってしまう為、ティーダの死の真相は次回に持越しです。

本当にすいません！！

Ｐｈａｓｅ－１３　～少女の叫び～

－ホテル周辺－

隊長達に招集された私達は、現場検証をすることになった。

説明を聞いている間も、さっきの失敗が頭から離れない。

「それからティアナ。」

高町隊長が私を呼ぶ。

「ちょっと、お散歩しよっか？」

隊長に連れられて人気の無い場所に来た。

やっぱり、怒られるのかな・・・？

「私は現場にいなかったし、ヴィータ副隊長に叱られたから、ちゃんと反省してると思うけど。」

「ティアナはさ、ちょっと頑張り過ぎちゃうんだ。

だから、やんちゃしちゃうんだ。」

・・・・何よ、それ。

ちょっと頑張り過ぎちゃう？

凡人なんだから、頑張らなきゃ追い付けるわけ無いじゃない。

やんちゃしちゃう？

少しでも出来る可能性がある事をするのって、そんな言葉で片付け

られるの・・・？

隊長の言葉に私は段々とイラついてくる。

思わず文句を言いそうになったその時。

「自分一人で戦ってるんじゃない。

ティアナや私のポジションは、前後左右に味方がいる。

・・・この言葉の意味、ティアナなら分かるよね？」

その言葉で頭が一気に冷めて行くのを感じた。

そうだ。私のポジションはどんな状況も見ることが出来るだけ無く、味方を援護することの出来る、いや、しなければいけない位置にいる。

それだけじゃない。常に回りを見て行動することが重要視されるんだ。

・・・今回の私の行動は、完全に馬鹿な行為だ。

周りを見ないで一人で突っ走って。

それは、私がしていい行動じゃない。

「・・・はい！」

少し間をおいて、漸く搾り出せた一言。

「約束、したからね？」

隊長は最後にそう言った。

・・・・・それでも、私は自分に出来る努力を止める訳にはいかない。

私は凡人だから、出来ることは何でもやらないと・・・。

「ティアッ！」

隊長と別れた私は、検証をしているスバル達に合流することになった。

そこで、真っ先にスバルが私に声をかけてきた。

もしあの時、ヴィータ副隊長が間に合わなかったら、この子の声も聞けなかったかもしれない・・・。

「・・・・いろいろ、ゴメン。」

こういう時に、もっと素直になれない自分がもどかしい。

ぶっきら棒にいった一言に、スバルは笑って許してくれた。

「やっぱり、なのはさんに怒られた・・・？」

「少し、ね。」

「・・・ティア！向こうで休んでていいよ。検証は私がやるから！」

普段は私の苦労なんて考えないような行動を取るくせに・・・。

スバルの気遣いを嬉しく思いながらも、やんわりと断る。

・・・そこまで甘える訳にはいかないもんね。

「大ミスしておいて、サボりまでしたくないわよ。

一緒にやろ？」

「あ・・・！うんっ！！」

スバルとならんで、私は検証の手伝いを始めた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

流石に、現場に関係者以外が近づくのは許可されないので、ユーノの許可を得たシオンは、少し離れた森の中から、辺りの様子を窺っていた。

「・・・・・どうやら、執行者（エクスキューショナー）の襲撃はなさそうですね。」

今回のオークションの出展品で、シオンが入手した物は、嘗ての世界においてのＩＤであった為、彼等の介入があると警戒していたのだが、もうその心配はなさそうだ。

「それにしても、随分な数のガジェットが送られてきましたね。」

《そうですね。・・・お嬢様は大丈夫でしょうか？》

「あの子なら問題ないでしょう。もっとも、それは怪我をしているかいないかを問うた場合ですが。」

《他にも懸念することがおありで？》

意味深なシオンの発言に、ファーウェルは尋ねる。

「訓練校に入る以前、共に旅をしていた時からですが。

・・・あの子は少し危うい所があります。

何の為に力を求めているのか、何の為の力であるべきなのか。

それを見失っていなければいいのですが・・・。」

そう呟いたシオンの表情は少し暗い。

「昔あの子に言った言葉を忘れてしまっていたとしたら、後はあの子の周りの人達に任せるしかありませんね。」

《それならば問題無いでしょう。クルツからの話によると、仲間に恵まれているようですし。

きっと大丈夫ですよ。》

「・・・そうですね。

今は、あの子とあの子の周りの人達を信じましょう。」

小さく呟いたシオンは、その場を後にした。

前線メンバーが現場検証をしている間、はやてはオークション会場に来ていたカリムの義弟、ヴェロッサと話をしていた。

「部隊、うまくいってるみたいだね。」

「うん。ロッサの義姉さん、カリムに守ってもらってるおかげや。」

彼は、久しぶりにはやてと会えた事から、嬉しそうに笑う。

それに対しはやては、軽口を交えながらもその一時を楽しむ。

彼女もまた、彼との再会は喜ばしいことだからだ。

ふと、はやてはある事を疑問に思った。

「そういえばロッサ、ユーノ君とお友達やったん？」

「あぁ、以前調べ物をしていた時に無限書庫でお世話になってね。」

「へぇ～。あ、それじゃあ、シオンさんの事も知ってるん？」

「シオンの事を知っているのかい？」

はやての質問に、思わずロッサは聞き返す。

「やっぱり知ってるみたいやね。」

「まぁね。ユーノ先生はクロノを通して紹介してもらってね。

その時、偶然シオンもその場にいてね。それでそれからは交友を深めているってわけさ。」

「そうなん？そんならシオンさんって、クロノ君やユーノ君とも知り合いなんや。」

その事に少し驚いた表情を見せたはやては、更に疑問が浮かんだ。

「でも、何でシオンさんはクロノ君と知り合いになったんやろ？」

首を傾げるはやてにロッサは少し困ったような表情をする。

「・・・あまり詳しくは無いんだけど、なんでも、彼等の共通の友人が亡くなった際知りあったらしいんだ。」

「そう、やったんや・・・。」

「はやて・・・。さて！暗い話はここまでにしよう。

それよりも僕は、君の部隊の様子を知りたいな。」

少し重くなった場の空気を和ませるため、ロッサは話題を変える。

そんなロッサの気遣いを有難いと思いつつ、はやては部隊での事を話し始めた。

「ユーノ。そろそろ戻りましょう。」

粗方辺りを見回ったシオンは、なのはと話を終えて戻ってきたユーノに声をかける。

「あれ、もうそんな時間？

ゴメンねなのは、フェイト。もう戻らないといけないみたいだ。」

「ううん。大丈夫。」

「お仕事だもんね、仕方が無いよ。」

申し訳無さそうに謝るユーノに、二人は微笑みながら返事を返す。

「ところで、シオンさんはどうしてここに？」

特にこのメンバーに繋がりの無いと思われるシオンに、フェイトが

声をかける。

「私は個人的にユーノの知り合いでして。

これから彼に用事があったので迎えに来たんです。」

本当の理由を隠しつつ、シオンは二人に説明した。

「あ、すみません。私達が時間を取ってしまって・・・。」

その事を聞いた二人は、逆に申し訳無く思ってしまったが、シオンはやんわりと否定する。

「大丈夫ですよ。寧ろ謝るのはこちらのほうです。

久しぶりの再開に水をさしてしまうようで・・・。」

「ほ、ほらっ！お互い気にしなくていいって言ってるんだし、この話は終わりにしよう？」

見かねたユーノによって、三人は漸く頭を上げた。

「なのはさん。現場検証終わりました。」

「あの、そちらの方は・・・？」

検証の手伝いをしていたヴィータとフォワード四名は、なのは達の

もとへ集まる。

彼女達は、ユーノの事をシャーリーから聞いていたが、シオンについては知らなかったため、疑問に思う。

ただ一人、驚愕するティアナを除いて。

「こちら、スクライア史書長の御友人のシオンさん。」

「初めまして。シオン・C・メザーランスです。

・・・久しぶりだね、ティアナ。」

フェイトに紹介されたシオンは挨拶の後、ティアナの名を呼ぶ。

ティアナの名を呼んだ事から皆の視線が集まる。そこには、どこか青ざめた表情のティアナがいた。

「・・・・兄、さん。」

「えっ・・・?」

「ティアさんの、お兄さん?」

「そういえば、前に話を聞いたそうな・・・。」

シオンを兄と呼ぶティアナに、スバル達は以前昼食で話した事を思い出す。

「ティアナ。訓練校に入る前に言った事、覚えていますか?」

ティアナの様子を見たシオンは、静かに問いかける。
その言葉に、ティアナは答えを出せないでいる。
「・・・余り無茶はしないで下さいね。
なのはさん、フェイトさん。この子の事、宜しくお願いします。
ユーノ、行きましょう。」
「えっ?!あ、うん。
それじゃあ、なのは、フェイト、ヴィータまたね。
フォワードの皆も頑張ってね。」
先に行ってしまったシオンの後を慌てて追いかけるように、ユーノもその場を後にした。
「シオン!良かったの?もっと話す事とか・・・。」
追いついたユーノはシオンの隣に並びながら問いかけるが、その表情を見て言葉を止める。
シオンの表情は、どこか悲しみを感じさせた。

「今のあの子には、どんな言葉をかけても無意味でしょう。・・・どうやら、あまり良くない方に向かってしまったようですね。」

シオンの小さな呟きに、ユーノはそれ以上何も言えなくなってしまった。

一六課　隊舎一

隊舎に戻ってきた一同は、今回の戦闘があったため、午後の訓練は中止となった。

なのは、フェイトの言葉に返事をした四人は、隊舎へと戻っていく。

途中、ティアナは自主練のため、三人と別れた。

その背中を見つめるスバルの表情は、何処か寂しそうだった。

一方、ティアナの今回の失敗、そしてこれまでの訓練への異常なほどの入れ込みようから、ヴィータはなのは、フェイト、シグナム、シャーリーに疑問をぶつける。

それを聞いたなのはとフェイトは、少し躊躇いながらもその理由を話す。

ティーダ達が逃走中の違法魔導師達の逮捕が任務だったこと。

そして、手傷を負わせたが逃げられてしまい、メンバーは全滅してしまった事。

その事に対して、彼等の上官が心無い発言をしたこと。

同じ頃、スバルもエリオ、キャロの二人にティアナの努力の理由を話していた。

そこで聞かされた言葉に、二人は言葉を失う。

三人と別れたティアナは、暗くなても訓練をやめない。

その事に見兼ねたヴァイスが止めに入った。

「ヴァイス陸曹。見てたんですか・・・？」

訓練を中断させられたティアナは、疲労と中断されたことの苛立ちから、キツイ口調で返事を返す。

「ヘリの整備をしている間にスコープでチラチラと、な。」

「・・・・・それ、覗き見って言うんじゃないですか？」

「ば、馬鹿言うんじゃねぇよっ！！ったく。

・・・ミスショットが悔しいのは分かるけどよ、精密射撃ってのはそう上手くなるもんじゃねぇし。」

ティアナの言葉に声を荒げるが、ヴァイスはティアナを諭す。

その言葉に、ティアナは疑問を感じる。

今の発言はまるで、自身も射撃の経験があるような言い方だったからだ。

その視線に気付いたヴァイスは、慌てて言葉を付け加える。

「あと少ししたら上がりますから。」

そう言ってティアナは再び訓練を始める。

（なぁ、ティーダ。お前の妹に俺が出来る事って何だろうな・・・？）

その様子を見つめるヴァイスは、自身の力不足を感じながら心の中で思う。

「ティアナちゃん・・・。」

ヴァイスとは別の場所からその様子を見ていたクルツもまた、ティアナの様子に懸念する。

（このままじゃ、いずれ倒れてしまう。でも、理由が理由だけに僕が言うと逆効果だろうし・・・。）

「僕には何が出来るんでしょうか、シオンさん、ティーダ先輩。」

その瞳に憂いの色を浮かべながら、クルツは自身の無力さに俯く。

ティアナの帰りを待っている間、スバルはリボルバーナックルの手入れをしていた。

ふと時計に目を向けると、既に深夜と呼べる時間帯に入っている。

「あっ、ティア！」

「・・・なんだ。まだ起きてたの？」

部屋に入ったティアナは、スバルを一瞥したあと、直ぐにベッドへ向かう。

「明日四時起きだから、目覚まし五月蝿かったらゴメン。」

「・・・ティア、大丈夫？」

明らかに疲弊しているティアナの様子に、スバルは心配そうに声をかける。

「・・・・・うん。」

なんとか返事を返したティアナは、直ぐに眠りに落ちた。

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

「ティア起きて、もう時間だよ？」

スバルの声で漸く目が醒めた。

・・・最悪、起こさるなんて。

内心自分で起きれなかったことを悔みつつ、なんとかベッドから出る。

体は思いし、頭も全然冴えて無い。

それでも、努力を止める訳にはいかない。

「はい、トレーニング服。」

「ありがと。」

「さて！じゃあ、私も！」

「・・・ん？」

って、ちょっと待って！

「なんでアンタまでっ？！」

スバルの言葉に眠気も吹き飛んでしまった。

「一人より二人の方がいろんな練習出来るしねぇ。私も付き合う。」

「いいわよ、平気だから。私に付き合ってたらまともに休めないわよ？」

無理をするのなんて、私一人で十分よ。

ただでさえこの子は一番キツイ訓練を受けているんだから。

それでもスバルは頑なに拒んだ。

「私とティアはコンビなんだから。一緒に頑張るの！」

その笑顔に、その優しさに思わず赤面してしまう。

・・・ホント、この子には敵わないわね。

「か、勝手にすれば！」

照れてるのがばれない様に、私は背を向けた。

・・・ありがとう、スバル。

それから私達は、朝と通常訓練、その後の午後の自主練を続ける日々を送った。

それから数日経ち、模擬戦の日が決まった。

明日の午前中の訓練の締めに行われるらしい。

「明日の模擬戦が終わったら、クルツさんにフルメンテしてもらうからね。」

《ありがとうございます。》

ホント、この子にも無茶をさせっぱなし。

クロスミラージュを手入れしていると、飲み物を買いに行っていたスバルが戻ってきた。

少し話をしたあと、思い切って疑問をぶつける。

明日の模擬戦前に、どうしても確認しておかないといけないことだから。

「でも、ホントに良いの？

・・・アンタの憧れのなのはさんに、ある意味、逆らうことになるから。」

これが一番気にかかっていたこと。

明日やろうとしている事は、この子まで本格的に巻き込んでしまうこと。

やってしまえば、後には引けないから。今ならまだ、私一人の責任でなんとか済みそうだから。

「逆らってるって言っても、強くなる為の努力だもん！

ちゃんと結果出せばきっと分かってくれるよ！

・・・なのはさん、優しいもん。」

笑顔で語るスバルに唖然としてしまう。

・・・この子が言うんなら、そうなのかもしれない。不思議とそう思えてきた。

それから、明日の作戦の最終確認をしてから、私達は眠りについた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

―翌日―

早朝の訓練をある程度終わらせたフォワード達は、模擬戦の準備に入る。

最初に始めるのは、ティアナ、スバルのスターズ。

ライトニングとヴィータはビルの屋上で観戦することになった。

「やるわよ、スバルッ！」

「うんっ！！」

バリアジャケットを展開した二人は、気合を入れなおす。

「あ、もう模擬戦始まっちゃってる？」

息を少し切らせて現れたのはフェイトだった。

彼女はエリオ達に合流し、これから始まる模擬戦の舞台を見る。

「まずはスターズからだ。

最近なのはも訓練密度濃いからな、少し休ませねーと。」

フェイトの質問に答えたヴィータは、彼女に一瞬顔を向けた後、直ぐに視線をなのは達へと戻す。

「本当は、スターズも私が引き受けるつもりだったんだけど・・・。なのは、部屋に戻ってからもずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ。

訓練メニュー作ったり、ビデオで皆の陣形の確認したり・・・。」

『あの事故』以来、彼女達はなのはが無理をする事に過敏になっている為、心配そうな表情をする。

「なのはさん、訓練中もいつも僕達の事見ててくれるんですねよ。」

「本当に、ずっと・・・。」

エリオとキャロもまた、なのはの世話になっている事に嬉しさ半分、申し訳なさ半分といった表情になる。

「おっ、クロスシフトだな。」

チラリと二人を見たヴィータが視線を戻すと、遂に二人が動きを見せた。

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

「クロスファイアー、シューートッ！！」

隊長目掛けて無数の魔力弾を放つ。

だけどそれもあっさりと避けられる。でも、それで良い。

キレを無くしたのはコントロール重視にする事で、確実に作戦ポイントまで誘導するためだ。

私はそれを確認すると同時に、直ぐに配置に付くため移動する。

幻影じゃないスバルがなのはさんと接触したのを確認した。

「こらスバル！駄目だよ、そんな危ない軌道！」

スバルの攻撃を防ぎ尚且つ吹き飛ばした隊長は、私の魔力弾も避けながら注意する。

「すみません！でも、ちゃんと防ぎますからっ！」

その言葉に疑問を持ったのか、私の姿を探し始める。

そして、ビルの上で砲撃の準備をしている私を見つける。

・・・・・此処までは作戦通り。

《特訓成果クロスシフトB、いくわよスバルッ！》

「おうっ！！」

スバルが再び隊長に突撃をかける。

当然、隊長もそれに応戦してくる。

あともう少しで・・・！

《ティアー・・・！！》

隊長のバリアに拳を打ち込むスバルから念話が来る。

今しか無い！！

私はビルの上に設置した幻影を破棄。

予め用意しておいたウィングロードを使い隊長の頭上へ。

私達が一撃入れるためには、ありえない攻撃で意表をつくこと。

トリガーを二度引いて銃口に魔力刃を形成。

《バリアを切り裂いて、フィールドを突き抜ける！》

「一撃必殺っ！はぁぁぁぁぁっ！！」

接触した瞬間、辺りが煙に包まれた。

煙が晴れ状況を確認し、私は驚愕する。

デバイスを待機モードにした隊長は、素手で私達の攻撃を防いでいた。

「おかしいな。二人ともどうしちゃったのかな・・・？」

そんな・・・。

「頑張ってるのは分かるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ？」

私達の努力は、無意味だったの・・・？

「練習の時だけ言うこと聞いてるフリで、本番でこんな危険な無茶

するんなら・・・。
練習の意味、無いじゃない。」
「っ！！」
違う。
「ちゃんとさ。練習通りやろうよ。」
「あ、あの・・・。」
そうじゃない。
「ねぇ。私の言ってる事、私の訓練、そんなに間違ってる・・・？」
そんなつもりで、私はこの作戦を立てたんじゃない！！
《Ｂｌａｄｅ　Ｅｒａｓｅ.》
魔力刃を消して距離を取る。
「私はっ！！」
トリガーを引いて魔力を流し込む。
「もう誰も傷つけたくないからっ！無くしたくないからっ！！」
もう二度と、あんな思いはしたくないから。

「だから！強くなりたいんですっ！！」

だから私は、自分で強さを手に入れた事を証明をしたかった。

「少し、頭冷やそっか・・・。クロスファイア。」

静かに腕を上げ、指先を私に向ける。

所詮『凡人』の想いなど、『天才』に届きはしない。

「うあぁぁぁ！！ファントムブレイッ・・・！！」

「シュート。」

目の前に迫るのは、視界いっぱいの桃色の閃光。

その直撃を受けた私の意識は次第に遠ざかっていく。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

「ティアっ！・・・・っ、バインド?！」

スバルはなのはの攻撃をまともにくらったティアナに駆け寄ろうとするが、バインドによって動きが封じられていた。

「じっとして、其処で見てなさい。」

無慈悲ななのはの声に振り向くと、次の攻撃の準備をしていた。

「なのはさんっ！！」

必死になのはを止めるべくスバルが叫ぶが、なのははチャージを止めない。

が、そこで異変に気付いた。

ティアナの方を見つめるなのはの表情が次第に驚愕へと変わる。

その視線の先にいるティアナを見たスバルもまた、驚愕した。

「ティ、ア・・・・・？」

煙が晴れた先には、ティアナがなんとか立っていた。

だが、先ほどとは明らかに違っている点があった。

ティアナのバリアジャケットが変化していたのだ。

それは、今までとは真逆といえる黒一色。

胸と腹にはボディアーマーが装着され、腰にはスバルのようなマントが付いている。

手には銀色のフィンガーレスの篭手が装着されている。

そして、クロスミラージュもまた黒く染まっていた。

赤かったコアは青く染まり、銃身も少し大きくなっている。

だが、それが展開されたのはほんの一瞬といえる間のみ。

黒いバリアジャケットは直ぐに消え、元の姿に戻った。

それと同時に、ティアナは意識を失い倒れこむ。

「ティアッ！！」

我に返ったスバルはティアナに駆け寄る。

「・・・今日の模擬戦は二人とも撃墜で終了。」

「・・・くっ！！」

模擬戦終了を告げるなのはを、スバルはその目に涙を浮かべながら睨む。

「「ティアさん・・・。」」

エリオとキャロはティアナの身を案じて悲しそうに呟く。

だが、フェイトとヴィータの反応は違った。

《フェイト、さっきの見たか？》

《うん、一瞬だったから良く分からなかったけど・・・。》

二人はティアナとスバルの無茶、そして先ほどの事を見て、頭の中の整理がつかないでいた。

その後、ライトニングは微妙な空気の中訓練を行い、その日の訓練を終了した。

～Ｓｉｄｅ　クルツ～

「危なかった・・・。」

パネルを消した僕は、緊張を解いて息を吐いた。

先ほど僕の端末が緊急用のものに切り替わったからだ。

「まさか、『アレ』が一瞬でも表に出てくるなんて・・・。」

突然の事体に驚きながらも、なんとか『アレ』を停止させることは出来た。

まだ調整中のはずの『アレ』が出てきたってことは、ティアナちゃんに何かあったのかな・・・？

ただの模擬戦だというのに、妙な胸騒ぎを感じた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

Ｐｈａｓｅ－１３　～少女の叫び～（後書き）

如何だったでしょうか？

ティアナは自身を『凡人』と言って、常に劣等感を感じているようですので、それが上手く表現できたか心配です。

さて、前回の後書きでティーダの死の真相を今回の話に盛りこむ予定でしたが、実現出来ず申し訳ありません！

次回には、ちゃんと明かされます。

それでは次回予告です。

―少女達の思いは、彼女達には届かなかった。

「言う事を聞かない奴は、使えないって事ですか・・・？」

「駄々をこねるだけの馬鹿は、なまじ付き合ってやるからつけ上がる。」

―告げられるのは彼女の教導の理由

「偶然の出会いで魔法を得て偶々魔力が大きかったってだけの、たった9歳の女の子が命がけの実戦を繰り返したの。」

「・・・訓練中のあの技は、一体誰の為の、何の為の技だ?」

―互いに歩み寄る事を決めた二人

「私が絶対、強くするから。」

「私が強さを求めた理由、聞いてくれますか・・・？」

―そして、隠されていた真実が明かされる

「・・・これが、ティーダ先輩達の死の真相です。」

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～Ｔｉｌｌ　Ｔｈｅ　Ｅｎｄ　Ｏｆ　Ｔｉｍｅ～

Ｐｈａｓｅ－１２　～明かされる真実～

御期待下さい。

Ｐｈａｓｅ－１４　～明かされる真実～（前書き）

更新遅くなってしまい申し訳ありませんでした。

今回の話は皆さんツッコミどころ満載だと思いますが、ご容赦下さい。

これが作者の限界なのです。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ－１４　～明かされる真実～

～Ｓｉｄｅ　シオン～

「そうか、ティアナが・・・。」

小型艇に乗っている俺は、クルツから模擬戦の話を聞き、思わず溜め息を漏らす。

あまり良く無い状況だとは思っていたが、まさか其処まで追い込まれていたとは・・・。

「それで、ティアナの容態は？」

《今は医務室でグッスリ寝て居ますよ。これまでの疲労がかなり蓄積していたのでしょう。》

モニター越しのクルツはやり切れない表情になる。

それは俺も同じだが、今は切り替えなければ。

《ところで、シオンさんは今どちらに？》

「あぁ。その事なんだが、俺は今ある惑星に向かっているんだ。

もしかしたら、今後の命運を分けるかもしれないからな。」

《そうですか・・・。分かりました。貴方まで無茶はしないで下さ

いよ？》

苦笑しながらクルツが注意するが、是ばかりは行ってみないことには分からない。

「善処するよ。それじゃあまた今度。」

《えぇ。それでは。》

通信を切った俺はモニターを操作する。

目の前に現れたスクリーンには、ある世界が映っていた。

そこは、どの世界とも異なる不可思議な世界。

管理局ですら解明出来ていない鉱石を採取することが出来る世界。

人を、生き物を歪めてしまうほどの力を持つその鉱石は、膨大な紋章力を秘めている。

その惑星の名は。

「『惑星エクスペル』・・・・。」

惑星の引力圏内に入った俺は衝撃に備えた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

「・・・あれ？」

目を開くと、先ず目に入ったのは何処かの部屋の天井。

とりあえず体を起こしたけど、どうして私が此処にいるのかが分からない。

・・・だめ、まだ頭の中の整理が付かない。

「あらティアナ。起きた？」

すると部屋の扉が開き、シャマル先生が入ってきた。

シャマル先生がいるってことは・・・。

「此処は医務室ですか？でも、どうして私は此処に・・・。」

「昼間の模擬戦で撃墜されたの。覚えて無い？」

心配そうに聞かれて、漸く記憶が戻ってきた。

・・・そうだ、私はあの時高町隊長に。

「・・・・はい。」

シャマル先生は私の記憶に異常が無いのを確認すると、今の状況を説明してくれる。

「なのはちゃんの訓練用魔法弾は優秀だから、体にダメージは無いと思うんだけど。」

言われてみると確かにそうだ。

多少ダルい感じはするけど、体に異常は無いみたいね。

体の状態を確かめていると、そこで一瞬固まってしまった。

ちょ・・・！下履いて無いじゃないっ！

恥ずかしさから思わず赤面してしまう。

それに気付いたのか、先生がズボンを持ってきてくれた。

「何処か痛いところある？」

声をかけられ、少しだけ冷静になった私は、なんだか後ろめたくて目を合わせられない。

「いえ、別に・・・。」

視線を泳がせていると、ふと、ある一点に釘付けになる。

「えぇ？！九時過ぎ・・・？！あ、えぇ？！夜ぅ？」

えっ?!何、どうなってんのよ?!

混乱している私を見た先生が助け舟を出してくれた。

どうやらあれから私はグッスリ寝ていたらしい。

先生曰く、是までの疲労の蓄積も関係しているそうだ。

それから診断を受けた私は、先生の許可を貰い部屋を出た。

・・・先ずはスバルに誤らないと。

「スバル。」

「っ!ティアッ!もう起きて平気なの・・・?」

部屋に戻ると、スバルが心配そうに駆け寄ってくる。

この子にも随分迷惑をかけちゃったわね・・・。

「私は大丈夫よ。それより、アンタの方は大丈夫なの?」

「私は、バインドで動けなくされただけだったから。

ゴメンね?あの時、何も出来なくって・・・。」

スバルは悔しそうに言うけどそれは違う。

「何言ってんのよ。・・・私の方こそゴメンね？

模擬戦での事も、心配かけさせちゃったことも・・・。」

「そ、そんなこと無いよっ！」

「・・・ありがとう。」

手を振って否定するスバルの様子に、私の気持ちは少しだけ楽になった。

「さて、と。私はこれから隊長に謝ってくるわ。」

そう言って部屋を出ようとすると、スバルが腕を掴んで引き止める。

「ま、待って！私も行くよっ！」

「何言ってんのよ。今回のミスは全面的に私が悪いんだから、アンタは部屋で大人しくしてなさい。」

「ヤダッ！私はティアのパートナーなんだよ？だから私も行く。」

はぁ～。そういえばこの子はこう言った事はトコトン頑固になるんだったわね。

でも、その気遣いが嬉しくて、私は苦笑しながら承諾した。

「分かったわ。それじゃあ、一緒に行きましょう？」

「うんっ！」

この時間なら多分ロビーにいるはず。

私達は、言葉も少なく部屋を出てロビーを目指す。

「なのはさん、居なかったね。」

「そうね。・・・ハラオウン隊長も明日にした方が良いって言ってたし、そうするしかないわよ。」

ベッドに寝転がりながら、スバルの言葉に答える。

結局隊長には会えず、明日キチンとした形で謝罪をすることになった。

手持ち無沙汰になった私は、今はこうしてベッドで横になっている。

すると、緊急警報が鳴り響いた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

屋上へリポートに集まったフォワード達は、これから隊長達からの指示を待つところだった。

「今回は空戦だから、出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の三人。」

「皆はロビーで出動待機ね？」

「そっちの指揮はシグナムだ。留守を頼むぞ。」

「「「はいっ！」」」

「はい・・・。」

なのは達の指示に、ティアナは遅れて返事をする。

その様子を見たなのはは、ティアナを出動待機から外した。

それは、事実上の戦力外通告。だがそれも、模擬戦の結果からすれば当然の処置。

なのはからすれば、彼女の身を案じての考えだろう。

だが、そこでも言葉が足りないために、ティアナに要らぬ誤解を生ませてしまう。

「言う事を聞かない奴は、使えないってことですか・・・？」

「自分で言ってて分からない？それ、当たり前の事だよ？」

最早売り言葉に買い言葉だ。

その言葉にティアナは思いをぶつける。

「現場での指示や命令は聞いてます。
教導だって、ちゃんとサボらずやってます。
それ以外の努力まで、教えられた通りじゃ無いと駄目なんですか・・・？！」

ティアナの主張に思わずヴィータは止めに入ろうとするが、なのはがそれを制する。

目に涙を浮かべながらも、ティアナは言葉を止めない。

「少しくらい無茶したって、死ぬ気でやらなきゃ強くなんてなれ無いじゃないですか！！」

その言葉を言い終わるか否か、シグナムに胸倉を掴まれ、ティアナは殴られる。

「「シグナム（さん）！」」

「心配するな。加減はした。」

吹き飛ばされたティアナにスバルが駆け寄る。

だがシグナムはそれを気にも留めない。

「駄々をこねるだけの馬鹿は、なまじ付き合ってやるからつけあがる。」

冷たく言い放った彼女は、ヘリのパイロットであるヴァイスに声をかける。

「ヴァイス！もう出られるな？」

「乗り込んで頂ければ直ぐにでも！」

シグナムの言葉に、ヴァイスはすぐに返事を返す。

「ティアナ！思い詰めちゃってるみたいだけど、戻ってきたらゆっくり話そう？」

「だから付き合うなってのっ！！」

なのはを引っ張りながら、ヴィータはヘリに乗り込む。

三人を乗せたヘリは、直ぐに飛び立った。

ショックによるものか立ち上がれないティアナを見て、シグナムはキツイ言葉を浴びせる。

見兼ねたスバルが自分達の思いを伝える為に反抗する。

「命令違反は絶対に駄目だし、さっきのティアの物言いとか、それを止められなかった私は、確かに駄目だったと思います。」

自分達に非がある事を分かっていながらも、それでもスバルは言葉を止めない。

「自分なりに強くなろうとするのとか！
辛い状況でもなんとかしようと頑張ることって、そんなにいけない事なんでしょうか?！
自分なりの努力とかそういう事も、やっちゃいけないんでしょうか?！」

肩を震わせながらも、スバルは自分達の思いを伝える。

シグナムもまた、それを真正面から受け止める。

するとそこへ、シャーリーが現れた。

持ち場をクルツやリィン達に任せたシャーリーは、シャマルと先ほどの全員をロビーに集める。

そこで話されたのは、ある一人の少女の話。

「昔ね。一人の女の子がいたの。」

モニターに映されたのは高町なのは、その幼き日の映像。

「偶然の出会いで魔法を得て、たまたま魔力が大きかっただけのたった9歳の女の子が、命がけの実戦を繰り返した。」

映し出される映像では、彼女の闘いの記録が流れていく。
そのあまりの光景に、四人は言葉を失う。

なのはは自身の思いを貫き通す為に無茶を続けた。
その結果、二度と空を飛べ無いかもしれないと言われるほどの重傷を負う。

その痛々しい光景に思わず四人は視線を逸らす。

「無茶をしても、命を賭けても譲れぬ闘いの場は確かにある。
だが、お前がミスショットをしたあの場面は、自分の仲間の安全や命を賭けてでも、どうしても撃たなければならない状況だったか？」

シグナムの言葉にティアナは何も言い返せ無い。

「訓練中のあの技は、一体誰のための、何の為の技だ？」

その言葉の意味はとても重く、ティアナの心に響いた。

そして同時に思い出す。
嘗てシオンがティアナに言った言葉を。

『力はただ力でしか無い。その力を何の為に、誰の為に使うのか。
《何の為にあるべきなのか》。
そしてその力が生む結果がどんな事態を招くのか。・・・この事を忘れるな。』

ーーーあの時自分が考えてたのは、ただ自分のため。
ミスした時の事や、其の後の事など、何一つ考えてはいなかった。
その言葉の意味に漸く気付いたティアナは愕然とする。
無茶によって自分のような思いをしてほしく無い。
なのはの教導の意味を知った四人は、最早何も言えなかった。

「えぇ？！」

海上のガジェットを破壊したなのは達は、シャーリーがなのはの過去を話してしまった事を聞いた。

「ご、ゴメンなさいっ！！」

「駄目だよシャーリー、人の過去勝手にバラしちゃ。」

「駄目だぜ、口の軽い女はよ。」

誤るシャーリーになのはとヴァイスは彼女を叱る。

話してしまったものはしょうが無いと思い、なのははティアナが何処にいるかを尋ねた。

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

隊長の話を聞いた私は、一人になりたくて訓練場近くまで来ていた。

私はただ、『力』を求めてきた。

その『力』が生む結果も、その過程も考えずに・・・。

今までの事を後悔していると、ふいに足音が聞こえてくる。

振り向くとそこには、任務から帰ってきた隊長がいた。

私の隣に座った隊長に、隊長の過去を聞いた事を話す。

「なのはさんの失敗の記録？」

「じゃなくてっ！その・・・。」

「無茶すると危ないんだよ、って話だよね？」

「・・・はい。すみませんでした。」

私は何も言うことが出来なくなってしまう。

今までの私のやってきた事が、間違っていた事に気付いてしまったから。

すると隊長が話し出す。

今の私達四人は、原石の状態。
だがそれは同時に、まだ磨く余地があると言うこと。
私達の長所を一つ一つ上げてくれる。

「ティアナの射撃魔法って、ちゃんと使えばあんなに避けにくくって痛いんだよ？」

「あっ・・・。」

そう言われて初めて気付いた。
私はあんな魔法の使い方を、今までしたことが無い。
使い方一つであんなにも化けるなんて・・・。

「一番魅力的なところを蔑ろにして、慌てて他の事をやろうとしちゃうから、だから危なっかしくなっちゃうんだよ。って、教えたかったんだけど。」

それも兄さんに言われていたことだ。

『俺では教える事の出来ない、今のティアナの一番の強み。射撃スキルをしっかりと学ぶためにも、今は他の事に手をださない方が良い。』

結局、私は兄さんに言われた事を何一つ守れていないのかもしれない。

ホント、今まで何してきたんだろう、私は・・・。

「でも、ティアナの考えていた事も、間違ってはいないんだよね。」

「えっ・・・？」

その言葉に隊長を見ると、クロスミラージュを持って何かを呟いた。
そして、クロスミラージュを私に差し出す。

「命令してみて？モード２って。」

「モード、２。」

《Ｓｅｔ　Ｕｐ．Ｄａｇｇｅｒ　Ｍｏｄｅ．》

構えたクロスミラージュが変化し、銃口に魔力の刃が形成された。
これって接近戦闘用の・・・！

驚いている私に、隊長は話続ける。

「ティアナは執務官志望だからね。此処を出て執務官を目指すようになったら、どうしても個人戦が多くなるし、将来を考えて用意はしてたんだ。」

そこまで私達の事を考えてくれてたなんて・・・。
嬉しさと、今までどれだけ隊長達に迷惑をかけてきたのかを考えると、涙が溢れてくる。
私は、こんなにも恵まれている。

声を上げて泣き出す私の肩を、隊長は優しく抱いてくれながら、私に語りかける。

「だけど、私の教導って地味だから、あんまり成果が出て無いように感じて、苦しかったんだよね？」

こんなにも迷惑をかけているのに、それでも私の事を考えてくれる・・・。

「ゴメンなさい、ゴメンなさい・・・！」

堪え切れなくなって、私は隊長に泣き着いてしまう。

そして、胸の内を明ける。

「私は、周りに劣等感を感じていて。

皆は強くなっているのに、私だけ置いていかれてるような気がして！

それが！堪らなく不安で・・・！」

「大丈夫。私が、私達が皆を強くするから。」

優しい眼差しで私の見つめながら、隊長は私が泣き止むまでずっと側に居てくれた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　クルツ～

「グスッ、ティア～。」

「「ティアさん・・・。」

一緒に物陰で二人の様子を見ていた僕達は、一安心した。
フォワードの三人に至っては、涙ぐんでさえいる。
「これならもう、大丈夫そうだね。」
今は泣いているけど、きっと直ぐに立ち直れる。
これまで以上の強さと決意を持って・・・。
（さて。それじゃあ準備をしておかないとね。）
何れは話さなければならないと思っていた僕は、先ほどの戦闘中に三提督に秘匿回線で許可を取っていた。
きっと、今のティアナちゃんなら話すだろうから。
ティアナちゃんがあんなになるまで、強さを求めた理由を。
～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～
「すみません。もう、大丈夫です。
それから、有難う御座います。」
暫くして泣き止んだティアナは、恥ずかしさから顔を赤くしながらもなのはに礼を言う。
その顔は先ほどまでとは違い、憑き物が落ちたような表情だった。

「もう、大丈夫そうだね。
それじゃあ戻ろうか？皆にも心配かけちゃったし。」

「あ、あのっ・・・！」

そう言って立ち上がろうとするが、ティアナが待った呼び止める。

なのはは振り返り、ティアナの表情を見る。
その表情は、何かを決心したようなものだった。
その表情に、なのははティアナの言葉を待つ。

一度呼吸を整えたティアナは、その言葉を口に出す。

「聞いてもらえませんか？私が強さを求めた理由を。」

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

《すみません、クルツさん。皆さんを集めてもらって。》

あの後私は、クルツさんの協力で六課の前線メンバー全員やシャーリーさん達をロビーに呼んだ。
これから話す事は、それだけ重要だから。

《これ位お安い御用です。・・・それから、映像の許可は取ってありますので心配はいりませんよ。》

まさか其処まで準備していてくれたなんて・・・って！

《まさか！さっきの見てたんですか？！》

念話と視線で訴えると、クルツさんは目を逸らす。
どうやら当たりみたいね。

《悪気はなかったんだけどね・・・。》

《はぁ～。まぁ、その事はもう良いです。》

八神部隊長が入って来たので、念話を切った。

「突然お呼び出ししてしまい申し訳ありません。
ですが、皆さんにどうしても聞いて頂きたいことがあります。」

私は気持ちを切り替えて話し出す。
アンノウン、《神の執行者》についての認識を改めてもらうためにも。

「アタシはクルツからティアナが『強さを求めた理由』を話すって聞いたけど。
・・・言っちゃ悪いけどそれって皆を此処に集める必要が「ヴィータちゃん。」・・・なのは。」

ヴィータ副隊長の言葉を高町隊長が遮る。

「ティアナが皆を集めてまで話す事だから、よっぽどの事だと思うの。
だから、先ずは話を聞こう？」

「分かってるよ・・・。」

「さて。それじゃあティアナ、聞かせてくれへん？」

八神部隊長の一言で、皆の視線が私に集まる。
一度頷いて、話始める。

「まず話を始める前に、この内容は他言無用でお願いします。
これから話す内容を知っているのは私を含め、クルツさん、クロノ・ハラオウン提督、リンディ・ハラオウン提督、レティ・ロウラン提督、聖王教会のカリム・グラシア少将、そして伝説の三提督のみです。」

突然の前フリにその場の全員が動揺する。
これだけのビッグネームが出てくれれば当然よね。

「皆静かに。・・・続けて。」
部隊長に促されて、話を続ける。

「知ってる人もいると思いますが、私の兄、ティーダは数名の隊員と共に任務中に亡くなりました。
公式の死亡理由は、当時追っていた違法魔導師達との交戦によるものとされています。」

「ですが、彼等の本当の死の原因は第三者によるものです。
その第三者こそ、初任務時に出現したアンノウン、《神の執行者》

です。」

「「「「なっ！！」」」」

私の言葉を引き継ぎクルツさんが説明をしてくれた。
その言葉にさっき以上に動揺する。

「たしかティーダ一等空尉達が亡くなったのは約6年前だから、その頃から既にあのアンノウンは出現していたの？」

「正確には分かっていませんが、少なくとも、映像として確認されたのはその時が初めてです。」

「映像って・・・。確かデバイスは全て破壊されていて記録は残っていなかったんじゃないの？
それに、どうしてその事をティアナとクルツ君が知っているの？」

隊長達の質問に、私とクルツさんは一瞬躊躇う。
でも、ここまで話たら最後まで説明しないと。

「映像については、その内容から公表を控えるようにとの三提督の指示によるものです。
僕が知っているのは、当時デバイスの映像をサルベージしたからです。
ティアナちゃんが知っているのは、偶然としかいいようがありません。」

「偶然だと？」

シグナム副隊長が疑うような目で私を見る。

「私が真実を知ったのは、執行者を良く知る人物に聞かされたからです。」

「それって・・・。」

「隠者（ハーミット）・・・！」

「そんなら、ティアナとクルツ君は隠者（ハーミット）の正体を知ってるんか？」

顎に手を当てながら八神部隊長が確認してくる。
私達は首を振る事でそれを否定した。
まだ、兄さんの正体を知られるわけにはいかない・・・。

「話を続けます。
これから流す映像は、当時の事件の内容です。
・・・エリオ、キャロ。アンタ達は見ないほうがいいわ。ちょっと外で待ってなさい。」

子どもが見るには凄惨すぎる内容だしね。
この子達まで不快な思いをする必要はないもの。

「いえ、僕達も見ます！」
「私達も、ティアさんの事を知りたいんです。」

ホント、アンタ達は・・・。

「辛くなったらすぐに部屋を出てもいいのよ。
・・・クルツさん、お願いします。」

一度頷いたクルツさんは、モニターを操作する手を一度止める。
準備は出来たみたいね。

「では、これから当時の事件の映像を流します。
・・・これが、ティーダ先輩達の死の真相です。」

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

映像は、犯人達を拘束した所から始まった。
記録していたデバイスは、他の隊員のものが運よく破損していなかったものらしい。
任務を終え、護送準備に入ろうとした時、一人の隊員が異変に気付く。
円形に囲むように陣形を立て直すと、中心に謎の魔法陣が現れる。

「これって、リニアレールの時と同じ・・・！」

シャーリーが気付き呟くが、誰もモニターから目を離さない。
魔法陣から代弁者が出てくる場面に切り替わる。

「これも、アンノウンだというのか？」

「まるで天使やね・・・。」

「見ためはそうでも、実際は悪魔ですよ。」

クルツが歯を食いしばりながら呟く。
ティアナもまた、拳を握り締めていた。

途中、代弁者によって無残に殺された隊員達の映像を見て、シャーリー、ルキノが部屋を出て行った。

スバルとエリオ、キャロは、涙目になりながらも映像を見続けている。

映像も終わりに近づいてきた。

ティーダは、三体目の代弁者と対峙する。
既に満身創痍で、左腕は肘から先が無くなっている。

《いい加減、くたばれってんだよぉー！！》

魔力弾で攻撃しつつ、口に咥えていたもう一丁の銃に魔力刃を作り出す。

《うおぉぉぉっ！！》

後ろに回りこみ、手に持っていた銃を捨て持ち替えることで代弁者の頭部に刃を付き立てる。

こうして全ての代弁者が倒されたかに思われた。

《くそ・・・。体中が痛ぇ。》

デバイスも壊れてしまったため、他の隊員の物を使って連絡を取ろうとする。

が、背後には先ほどの代弁者が迫っていた。

「あれで、動けんのかよ・・・？！」

ヴィータが驚愕を顕にする。

映像のティーダも気付き、悔しそうに顔を歪める。

《くそ、折角帰れると思ったのによ・・・。》

直後、代弁者の腕がティーダを貫く。

キャロやアルトは「ひっ！」と短く悲鳴を上げる。

止めをさそうと、もう一方の手を近づけたその時。

《エリアル・レイドッ！！》

上空から物凄い勢いを伴って、黒衣の男が現れる。

《おいっ！確りしろ！くそっ、待ってろすぐに・・・っ！》

それは、隠者（ハーミット）の格好をしたシオン。

その一撃で代弁者を倒したシオンは、ティーダに駆け寄るが途中で

その足を止める。

そして・・・。

「なに・・・これ？」

「そんな・・・・！」

彼女達が信じられないといった表情をする。

モニターに映ったのは、瀕死の重傷を負ったティーダが、異形へと変化していく様子だった。

《済まない。俺はお前を二度、殺すことになる・・・。》

暫く動かなかった隠者は、構えを取る。

そして一気に距離を詰め、心臓付近を貫いた。

その一撃により、ティーダは口から大量の血を吐き出す。

そして、弱弱しく残った腕をあげ、隠者の肩に回す。

《あり、がと・・よ。俺を、殺し・・・て・くれ・・て。》

ティーダは苦しそうな笑顔を浮かべ、息を引き取った。

映像を見終わった彼女達は、皆青ざめていた。

深まる敵の謎。そして人間が異形へと変化する現象。

「なんなんだよ・・・。何なんだよっ！アイツ等は！」

ヴィータが叫ぶが誰も答えない。否、答えられない。

「映像を見て頂いてお分かり頂けたでしょう。
この映像が公表されなかった理由が。」

クルツが口を開くが、誰も言葉を出せずにいた。

少しした後ティアナが口を開く。

「私が強くなりたかったのは、この真実を知らない人達が兄さん達を侮辱するのが耐えられなかったから。
決して、兄さん達は役立たずなんかじゃなかったって、証明したかったんです・・・！」

泣きそうになりながらも、必死にティアナは思いを伝える。

スバルはティアナを抱きながら、涙を流す。

その思いは、確かに全員に届いていた。

「ティーダ一等空尉と、無念の内に亡くなっていった局員達に黙祷しよう。」

はやての言葉に、皆は静かに目を瞑り、黙祷を捧げる。

再び目を開けたはやては、その目に強い意思を宿し、皆を見る。

「この映像で、アンノウンの危険性が一段と上がった。
皆、これからの戦いでも奴等と遭遇するかもしれん。
決して無茶はしない事、より慎重に対処すること。いいね？」

「「「「了解っ！！」」」」

六課のスタッフは、今まで以上の決意を持つようになる。

Ｐｈａｓｅ－１４　～明かされる真実～（後書き）

如何だったでしょうか？

更新遅かったくせに大した内容でなくてすみません。

ティアナの心理状況とか、その他諸々を書き上げるだけの技量がまだまだないのです。

どうかご容赦を。

？？？「全くですね。親友に親友を殺させるとか。雑な文章とか。」

？？？「何やってんだよ。作者？てか、なんで俺等此処にいんの？しかも、メガネ装着時とそうでないので分かれてるし。」

おや、これはシオンと眼鏡をかけたシオン、略してメガシオンじゃないか。

メガシオン「何だよその名前！もう少しマシなのにしろよ！」

作者がそんな技術があるとでも？

シオン「まぁまぁ。ところで、私達が此処にいる理由は？」

メガシオン「どうせ、他の作家様がやってるのが楽しそうだとか、味気ない後書きだと思ったんだろ？」

・・・仰る通りで。

シオン「そういえば、私達は冒頭でしか出てきてませんよね？」

メガシオン「つーことは、次回は俺等の話って事か？」

そうだね。ＳＯ２以降を知ってる人なら多分知ってるだろうけど、エクスペルにはあれがあるしね。

今後の展開には必要になるだろうし。

シオン「なるほど。」

メガシオン「まぁ精々読者様に見放されないように精進しろ。」

・・・・頑張ります。

それでは次回予告です。

－－－その惑星は、本来ならただの管理外世界。

「やはり、ブレアの仕業か？」

―――未知のエネルギー結晶体が眠る場所

「管理局は、コイツの力を理解していないらしい。」

―――神を打ち砕く希望に成りえるその力

「奴等に気付かれては元も子もない。」

次回　魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～Ｔｉｌｌ　Ｔｈｅ　Ｅｎｄ　Ｏｆ　Ｔｉｍｅ～

Ｐｈａｓｅ－１３　～エクスペル～

後期待下さい。

Ｐｈａｓｅ－１５　～エクスペル～（前書き）

更新遅れて済みません。

何かもうやっちまった感満載の話しになってしまいました。

おかしい。こんなはずでは無かったのに・・・・。

因みに今回の話は、スターオーシャンをやってない人には少し分かりにくい話に成っていると思います。

また、詳しい公式設定とかはこの際考えないで頂けると有難いです。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ－１５　～エクスペル～

「漸く到着か。」

ミッドを出てから数時間後、俺は『エクスペル』に到着した。
今回この惑星（ほし）に来る事は、クロノの許可を得ているので、とりあえず問題は無い。
小型艇から降りた俺は、体を目一杯伸ばす。
窮屈な空間にいたお陰で体中が痛む。
すると骨が音を立てるのが聞こえた。

「さて、と。・・・ここがこの世界の『エクスペル』か。」

俺が降り立った場所は、深い森の一角。
クラナガンでは、先ず見る事は出来ない景色だ。

「空気が濃いな。それにこの匂い。
フィトンチッドが濃いのか・・・。」

こういう所は傷の治りが早くなる。
機会があればティアナを連れてきて鍛えなおすか・・・。

そんな事を考えながら先へと進む。

この世界の『エクスペル』は、第１０８管理世界になるそうだ。

人口はそこまで多くは無く、魔法文明のレベルもミッドより少し劣っている程度らしい。

もっとも、科学レベル自体はそんなに高くないそうだ。

また、この世界は未調査の多くの遺跡がある事でも知られている。

その為、管理局の調査対象となっている。

だが調査対象となっているのは、今回俺がこの世界に来る事になった理由でもある『エナジーストーン』の存在も大きいだろう。

エナジーストーンは強力な紋章エネルギーの結晶体で、ある技術を用いる事で『クリエイションエネルギー』というものを作り出すことが出来る。

このエネルギーは途轍もなく、俺達の世界では戦艦の主砲として使われている。

だがその扱いは細心の注意が必要とされ、嘗てこのエネルギーが暴走、戦艦は惑星一つを呑み込んで完全に消滅したほどだ。

「正直、今の管理局にこのエネルギーを知られる訳にはいかないからな。」

今の管理局は、連邦と同じでどこか世界の支配者を気取っている節がある。

勿論、全ての局員がそうと言うわけでは無い。
だが、そんな組織の手に渡れば、益々取り返しがつかなくなる。
「今はまだ不思議な鉱石程度の扱いで済んでいるが、いずれ気付くかもしれん。
幾つか採取した後、紋章術の結界でも張っておくか・・・。」
一人呟いた俺は、先へと進んだ。

暫くして森を抜けると、大きな道を見つけた。
《マスター。何故エナジーストーンの反応があった付近に船を降ろさなかったんですか?》
ファーウェルが疑問に思ったようで問いかけてくる。
だが、これにはちゃんとした訳がある。
「理由としては、エナジーストーンの発する強力なエネルギーを受けて、船が無事でいられるか分からなかったからだ。
折角来たのに帰れません、なんて洒落にならんだろう?」
《それは分かりました。ですが、何故目的地から離れたこの場所へ?》
「確かに直接行くのもありだが、先ずは情報を集めておくべきだ。

何が起こるか分からんからな。

幸い、この先には街があるみたいだしな。
情報収集にはうってつけだ。
備えあれば憂い無しってやつだよ。」

《なるほど。理解しました。》

「あぁ。さて、それじゃあ行くか。」

暫く歩くと街に着いた。

それなりに賑わっている。此処なら人も多く集まりそうだ。

休憩と情報収集を兼ねて、俺は近くにある酒場に入った。

酒場の中は昼間だというのに、結構な数の客が来ていた。

丁度隅のほうの席が空いていたので、其処に腰掛ける。

軽めの食べ物を注文し届くまでの間、エナジーストーンの反応があった場所を確認する。

地形からして、どうやら河を渡って行く必要がありそうだな・・・。

《その場所は確か遺跡があるのですよね？》

《あぁ。
名前もはっきりと分かっていないうえに、調査もあまり進んでいない。
一儲け考えてそこへ向かう奴等が結構いるらしい。》

確かに、管理局が目を付けるほどの場所だ。

手付かずとなっているうえに一攫千金のチャンスがある。

多少腕に自身のある奴等は喜んで向かうだろう。

「そうまでして稼ぎたいもんなのかねぇ・・・。」

「あら。あなたもその内の一人じゃないの？」

多少呆れ混じりに呟くと、後ろから声をかけられた。

そこにはこの店の店員と思われる女性がいた。

俺より少し短い茶髪をポニーテールで纏めている。
かなり綺麗な顔立ちをしている。

彼女はこんな場所で働いているためか、気軽に話しかけてきた。

「はい、お待たせ。」

手に持っていた料理を置いた彼女は、何故か俺の向かいの席に座る。

「有難う。だが何故俺の前に座る？
それに、『俺もその内の一人』だと何故思った？」

頼んだ料理を食べながら、彼女に尋ねる。

すると、彼女は少し得意げに笑った。

「この店にはあなたが言ったみたいに、冒険者、じゃないけど遺跡の宝を狙ってる人とかが結構来るのよ。
それで、そんな人を何人も見てきたから、多少腕のある人の見分けがつくってわけ。
因みにあなたの前に座ったのは、あなたが場違いだと思ったから。」

「場違い？何故だ？」

意味が分からず思わず聞き返す。

すると彼女は今度は苦笑する。

「だって、あなたみたいな『強い』人がこんな処にくるなんておかしいと思うわ。

あなた程の腕があれば直ぐにでも遺跡とかに行けばいいのに。」

彼女の言葉に思わず食べる手が止まる。

どうやら彼女の観察眼はかなりのもののようだ。

自分でいうのもなんだが、此処にいる奴等に負ける事はないしな。

「どんな事でも最低限の備えはしておくべきだ。
何時何が起こるか分からないからな。」

「なるほど、ねぇ。
ところで、あなたは何処に行くつもり？
このすぐ近くには、目ぼしい場所はないはずだけど。」

テーブルに身を乗り出して聞いてくる。
何故そんなにも目を輝かせているんだ？

若干引きつつ、尋ねたかった事を口にする。

「その事なんだが、一つ聞いていいだろうか？
君は良い情報を持っているようだしな。」

「う～ん、まぁ良いよ。
それで？どんな情報を知りたいのかな？」

「この街を北東に向かった先にある、河を渡らなければいけない所にある遺跡なんだが。
そこについての情報を何か知っているか？」

「あぁ。あそこね・・・。」

すると、彼女は少しだけ困ったような表情をする。

「・・・何かあるのか？」

食事を終えた俺は、水を飲みながら彼女の言葉を待つ。
すると、彼女が少し周りを見てから小さい声で話し始める。
「その遺跡の事なんだけど、ここ二、三日前から変な話を聞いたの。」
「変な話？どんな？」
「その遺跡は、未だに攻略出来た人がいないんだけど、それでもそれなりに進んでる人はいるのよ。
この話をしてくれた人も、その内の一人なんだけどね・・・。」
そこで一度言葉を区切った彼女は、少しだけ表情を曇らせる。
「何があったんだ？」
少し間を置いて、彼女は語り始めた。
「何でも、今まで見た事が無いような生き物がいるらしいの。
その生き物を見た人が震えながら言ったのよ。
『奴が、奴が来る。』とか。
『その袋の中には入れないでくれ。』とか・・・。」
・・・何故だろう。凄く心当たりがある気がするのは・・・。

「そ、それ以外には何か言ってなかったか？
例えば、その生き物の特徴とか。」

「そういえば・・・。
たしか、目がギョロっとしていて、白い体色をしていて。
それから、顔が二つあるって言ってたと思うけど・・・。

うわっ、何か想像したら鳥肌たってきたわ。」

自分で肩を抱きしめる仕草をした彼女は、心底嫌そうな顔をする。
逆に俺はもう心当たりがあるどころでは無い。
最早確信すら持てた。

まぁ、幸か不幸か、ソイツのお陰で遺跡に近づく人間が減るんだ。
此方もやりやすくなる。

「有難う。貴重な話が聞けた。」

俺は立ち上がりテーブルに代金と、少し多めのチップを置く。

「ちょ、良いよこんなに・・・。」

「少なからず今の話で君に不快な思いをさせたんだ。
その分も含めてだよ。」

「そう言われると受け取るしか無いじゃない・・・。
でも、ありがと。」

少し困ったような笑顔で彼女はそう言った。
その直後、何かに気付いたような表情になる。

「そういえば、あなたの名前をまだ聞いてなかったんだけど。
あ、私はエリス。
エリス・ルーカス。エリスでいいから。」

「俺はシオン。シオン・C・メザーランスだ。シオンで構わない。
それじゃあエリス、失礼するよ。」

「気を付けてねシオン。
帰ってきたら、またお店に来てよね！」

それから俺は、河を渡る為に舟が必要なので、その宛を探した。

しかし残念ながら、この町では見つから無かった。

仕方なくもう少し近くの町を目指した。

飛行魔法を使えば簡単だが、流石に無許可で飛行すれば管理局に捕まり、無駄に時間がかかる。

面倒ごとに巻き込まれるよりはマシだろう。

歩き続けて三時間ほどで、漸く町に着くことが出来た。
そこまで船を出してくれる所を探していると、何やら広場のほうが騒がしい。
気になった俺は其処へ向かうと、どうやら女性が数人の男性にからまれているようだ。
女性は気が強いのか、男達に囲まれてもまったく動じていない。
《マスター。》
《あぁ。流石にこのままは不味いな。》
男の一人が手を上げようとしたので、俺は止めに入った。
「その位にしておいたらどうだ?」
男の手を掴んでその動きを止める。
「何だお前は?関係無い奴は引っ込んでぇぇぁぁあ?!」
少し懲らしめるために、その腕を捻り上げる。
男の苦痛に満ちた表情を見た他の男達は、顔を青ざめる。
「さて。どうする?まだやるのか?」
「い、いやっ!俺達が悪かった!だからソイツを離してやってくれ

！」

「賢明な判断だ。」

拘束していた男を仲間の方へ突き飛ばす。

すると男達は尻尾を巻いて逃げていった。

「ねぇ！もしかしてシオン君？」

突然名前を呼ばれて振り向くと其処には先ほどの女性がいた。

俺は彼女の姿を見て言葉を失う。

何故彼女が此処にいるのか？どうやって『こちら』に来たのか？

「ど、どうしたの？そんな変な顔して？」

頭の中が混乱した。

一度落ち着くために俺は深呼吸して、彼女に問いかける。

「聞きたい事は山ほどあるが、一先ず俺に着いて来てくれ。

『ウェルチ・ビンヤード』。」

近くに喫茶店があったので、俺はウェルチと其処へ入る。
俺はコーヒーを、ウェルチはＤＸパフェなるもの注文する。

それから程なく、品が来た。
ウェルチは目を輝かせながらパフェに食いつく。

「さて。先ず聞きたいのだが、何故君が『この世界』にいる？」

もの凄い勢いで頬張る彼女に若干呆れながら、俺は質問する。
すると彼女は食べる手を止め、真剣な表情になる。

「・・・それは私のほうが聞きたいくらいよ。
目が覚めたら森の中で倒れてたみたいだし、漸く町に辿りついたと思ったら変な男達に絡まれるし。
もう訳が分からないわ。
・・・ねぇ。さっきシオン君は『この世界』って言ったよね？
じゃあやっぱり此処はペターニじゃ無いんだよね？」

店に入るまでは気丈に振舞っていたが、やはり突然の環境の変化に戸惑っているのだろう。

その表情には若干の怯えが見て取れた。

「・・・あぁ。
正確には『こちら』はペターニどころか君の住んでいた世界ですらない。
全くの別世界。

そして、俺もまた『こちら』の世界の住人では無い。」

「・・・ゴメン。言ってる意味が良く分からないんだけど?」

俺は彼女に『彼女の』住んでいた惑星(せかい)、そしてその外には幾つもの世界が広がっていること。
俺の出身も、その世界の中の一つであること。
だが、今いる『世界』は全くの別世界で、俺達のいた『世界』ではないことを説明した。

彼女の出身世界である『エリクール2号星』を訪れた時から思っていたが、やはり彼女は頭が良い。
俺の話を大体ではあるが理解してくれた。
もっとも、普段の行動などからはとてもそうは見えないが。

「なるほど。つまり、私のいた世界の外には同じようにいろんな世界がある。
だけどこの世界は私達のいる世界とは空間そのものが違っていて、現状では私達は元の世界には帰れない。
そういう事だよね?」

「概ねそんな所だ。
この世界には管理局という組織がある。
必要以上に俺達の事を話さなければ、彼等が保護してくれ「その必要はないわ!」・・・は?」

彼女は俺の提案を一蹴し、妖しげな笑みを浮かべる。

嫌な予感がしながらも、彼女に尋ねる。

「どういう意味だ？」

「だって、こっちの世界にはあの口うるさい『ギルドマスター』がいないのよ？！
つまり！この世界でなら私がギルドマスターになれるってわけよ！！」

席を立ち上がったウェルチは、片足をテーブルに乗せながら力説する。
正直周りの目がイタイ。

「それなのに保護なんてされたら、私は自由に動けないじゃない！
そんなのはゴメンだわ！」

「そうか。とりあえず足を退かして席につけ。」

俺が注意をするが、今の彼女の耳には入っていないらしい。

その後も彼女は何だか良く分からないが熱弁を続ける。

・・・正直直ぐにでもこの場を離れたい。

「ちょっとシオン君！聞いてるの？！」

ウェルチが何時の間にか身を乗り出していた。

「悪い、聞いていなかった。それで、何だって？」

「だーかーらーっ！私がギルドを設立すｒ「断る」まだ最後まで言ってないでしょ？！」

「悪いがお前を手伝う余裕が無い。
その代わり他の奴を紹介してやるよ。
ソイツは行商人をしているから、何かと力になってくれるだろう。」

その言葉に暫くの間考えた彼女は承諾した。

内心ホッとしたのは秘密だ。

「さて。それじゃあ俺はこれから行くところがある。
着いてくるか？」

「もっちろん！折角異世界に来たんだから冒険の一つはしておかないとね♪」

なんとなく不安になりつつも、俺と彼女は店を後にした

この日はもう遅かった為、出発は明日に延期した。

「ウェルチ、起きろ。遺跡に着いたぞ。」

「んあ？なに、もう着いたの？」

次の日、なんとか船を借りられた俺達は、河を渡り遺跡に到着した。
途中ウェルチは爆睡していた。
それにしても、良く船の上で寝られるな。

借りられたのは5、6人乗りくらいの小さな船なのに。
船を固定し、俺達は上陸する。
遺跡は高い位置にあり、そこまで続く長い急な階段がある。

「や、やっとついた・・・。」

《大丈夫ですか、ウェルチさん?》

「な、なんとかね。でもこれも私の夢への一歩と思えば何ともないわ!」

階段を登りきったときには、ウェルチは息も絶え絶えであった。
ファーウェルは万が一に備え、彼女に貸してある。
彼女が呼吸を整えている間に、俺は遺跡の入り口を調べる。

(なるほど。此処まで古い仕掛けだと、逆に機械では反応しなくなるのか。
そういえば、『カナン』の時もそうだったな・・・。)

カナンとは、ウェルチの出身世界にある聖殿のことだ。
そこにも、様々なトラップが仕掛けてあったが、機械のセンサーに反応しないものも多々あった。
管理局もまた科学に頼りすぎることで、調査が進んでいないのだろう。

「ウェルチ！手を貸してくれ！」

「はいはーい！」

最初の遺跡の入り口は、両側に青い球体が取り付けて合った。
これは回すことが出来るようだ。

「ウェルチ、この球体を同時に右に回してくれ。」

「了解しました！シオン隊長！」

・・・最早気にしたら負けだろうな。

「それじゃあいくぞ？1、2、3！」

すると遺跡の入り口が開き、先に進めるようになった。

それから数々の仕掛けを解きながら、俺達は最深部へと辿り着いた。
そこには、無数の蒼く光る鉱石、『エナジーストーン』があった。
あったのだが・・・・・。

「ね、ねぇシオン君？あれって何なのかなぁ？」

「・・・一応俺の知り合いだ。

ついでに言うと、お前に紹介しようとしていたのはアイツだ。」

その言葉にウェルチの表情が引き攣る。

その視線の先には、頭が瓦礫に埋もれた行商星人の惨太がいた。

「そ、その声はシオンはん?!
丁度えぇ所に!助けてくれへんか?!
ワイと『スティーブン』はんだけやと、どうにもならんのや!」

「「スティーブン??」」

そんな奴の名前は聞いた事が無いな。

「スティーブンとは私の事だ。」

すると、何処からとも無く渋い声がする。

「ひっ!な、何なの?!」

ウェルチが恐怖から俺にしがみついてくる。
だが俺もソイツの正体を確認出来ずにいた。

「ここだ。私は此処にいる。」

ふいに足元から声が聞こえてきたので其方に目線を落とすと、そこにはバスケットボールくらいの大きさをした、真っ黒な生物がいた。

ソイツは手足が無く、奇妙な三輪の花のような触覚が生えている。
そう。例えるなら、古代の地球の映画に出てくる『まっく〇くろす

け』のような姿だ。

惨太、ウェルチと来たから、大抵の事には驚かないと思っていたのだが、これは予測出来なかった。

「お前、スティーブンって名前だったのか・・・。
モンジャラゴラ（父）。」

「いやぁ～。助かったわ。ホンマ、おおきに！」

あの後、何とか惨太を救出した。

惨太の姿を初めて見たウェルチは恐怖に泣き叫んだが、ものの数分で慣れたらしい。
コイツはある意味大物かもしれない・・・。

今は、惨太、モンジャラゴラ（父）ことスティーブンと談笑している。

その間に俺は純度の高いエナジーストーンを採取した。

「うっわぁ～！綺麗だねぇ！ねえねえ、これがこの遺跡のお宝？」

ウェルチが目を輝かせながら聞いてくる。

「せや。これは確かエナジーストーンっちゅう名前だったはずや。」

「ほぅ。中々興味深いな。」

その横では残る二人が説明と感嘆の言葉を述べている。

・・・・なんだろう、この異様に濃いパーティーは。

「あぁ。だがあまり長居はしていられない。」

「えぇ～?!なんでよぉ～?」

「・・・この鉱石はその力が強大でな。
特定の処理をせずに近づくと、精神汚染や肉体が汚染されることがある。」

「そ、それは危なっかしいな。」

「採取は終わったのか?」

「あぁ。後は此処に結界を張っておくだけだ。」

「結界?どうして?」

ウェルチが不思議そうに尋ねてくる。

「先ほど言った通り、この鉱石は危険だ。

無闇に近寄る者を減らすため。・・・違うか？」

俺が答える前にスティーブンが答えた。

「あぁ。その通りだ。
ついでに言うと、管理局に認識されるのを遅らせるためだ。」

「なるほどなぁ～。確かに、管理局がコレに目を付けたら面倒やな。」

ウェルチと惨太は納得したのか、先に出口へと歩き出す。

だがスティーブンだけは俺の後ろを警戒している。

「気付いたか？」

「当然だ。私はプロだからな。」

この際突っ込むのはもう止めよう。

「惨太。ウェルチを頼む。」

「なんや？敵かいな？！」

「そう言う事、だっ！！」

素早く飛びのくと、俺が居た場所に巨大な足が振り下ろされる。

敵の姿は、さながら巨大な蜘蛛のようだった。

「ぎゃぁぁぁーー！！む、虫～？！」

虫が余程嫌いなのかウェルチは奇声をあげて惨太の後ろに隠れる。

「こ、これはまたゴッツイやっちゃな～。
コイツもエナジーストーンの影響っちゅうやつか？」

言葉こそ驚くような素振りを見せるが、その立ち姿に隙は無く、怯えも見えない。
それは、スティーブンも同じのようだ。

それも当然と言えるだろう。
ウェルチを除き、この場にいるのは『試練の遺跡』に足を踏み入れた者なのだから。

「さて、さっさと終わらせて帰るか。」

「そうするとしよう。」

一声かけあった俺とスティーブンは、同時に駆け出す。

ファーウェルは手元に無いが、この程度なら問題は無い。

俺は速さを活かし、巨大蜘蛛の間接を攻撃する。
スティーブンは小柄な体を活かして懐に入り込み、体当たりを仕掛けていた。

彼の攻撃の威力は凄まじく、４m以上もの巨体を一撃で浮かせるほどだ。
だが、なかなかダメージが通らない。
「ふむ。大して強くは無いが、装甲が厚いせいで攻撃が通りにくい。」
「スティーブン。打開策がある、少し時間を稼いでくれ。」
「了解した。ベストを尽くそう。」
彼は再び駆け出し、巨大蜘蛛を翻弄する。
俺はその間に、想像の紋章を発動し、創造する。
手にするのは雷の槍。
蒼き鎧の戦乙女の神槍をベースとしたもの。
「創造完了。『ボルティック＝ランス』。」
創造された紋章術で出来た雷の槍は、全長２m以上になる大型の槍。
「スティーブンッ！！」俺は彼を呼ぶと共にそれを手に蜘蛛へと駆け出す。
俺の意図に気付いた彼は、再び懐へ入り込みその巨体を打ち上げる。
その隙に真下に入り込み、手に持った槍を突き刺す。

「ギュアァァァ?!」

装甲を破った一撃が効いたのか、奇声を上げる蜘蛛。

だがこれで終わりでは無い。

「はぁっ!!」

槍の石突を蹴り上げ、再び蜘蛛を浮かせる。

そこに、俺が攻撃している間に力を溜めていたスティーブンの一撃が炸裂する!

「『モジャブラスト』!!」

彼の触覚から発せられた電撃は槍を通して、内側から蜘蛛を焼き殺した。

スティーブンの攻撃を内部に喰らった蜘蛛は、力なく崩れ落ちた。

「さて、俺は帰るがお前達はどうする?」

遺跡にを出て結界を張り終えた俺は、三人に尋ねる。

「私は惨太さんたちと一緒に行動する事にしたわ。

これから立ち上げるギルドに協力してもらう事になったの!」

「ウェルチちゃんに協力するのも面白そうやしな。」

「私は惨太の護衛の任務が終わっていないのでな。考えるのはその後だ。」

どうやら彼等は彼等でちゃんと考えているようだ。

「スティーブン、一ついいか？」

「何だ？私に答えられる事ならば答えよう。」

「お前はどうやってこの世界に来たのか知っているか？」

ウェルチ、惨太にもした質問だが、一応聞いておいたほうがいいだろう。

「残念ながら私にも分からない。力になれなくて済まないな。」

スティーヴンは申し訳なさそうな表情をする。

「いや、それなら仕方がない。何か思い出したら連絡してくれ。」

ファーウェルを返してもらった俺は、彼女達とその場で別れた。

「シオン！無事だったんだ！」

「あぁ。エリス、水を一杯貰えないか？」

「うん！ちょっと待っててね！」

三人と別れた俺は、最初に訪れた町の酒場に戻ってきた。

俺は彼女に遺跡であった事の一部を話した。

「へぇ～。それじゃあ特に宝みたいなのは無かったんだ。」

「あぁ。それに俺が行った時には、例の白いヤツはもういなかった。」

「そっかぁ。・・・ねぇ、シオンはこれからどうするの？」

「この世界に来たのも用があったからだが、それも済んだ。後はミッドに帰るだけだな。」

すると、彼女はどこかつまらなそうな顔をする。

「な～んだ。それなら仕方ないね。」

「まぁな。さて、俺はもう行くよ。色々と有難う。」

「それじゃあね！もしこの世界に来たらまた寄ってね！」

彼女に見送られながら、俺は小型艇を泊めてある森を目指した。

余談だが、シオンと別れたウェルチ達は、数ヵ月後にミッドを中心に活動を始めたそうだ。

Ｐｈａｓｅ－１５　～エクスペル～（後書き）

後書き前に、作中で紹介仕切れなかったキャラの紹介をさせて頂きます。

ウェルチ・ビンヤード（ＳＯ３より）
『エリクール２号星』という惑星出身。
『ギルド』という、料理・機械等様々な分野の発明家達の商品、その流通のサポート等をする組織の女性。
ＣＶは『半場友恵』さん。

行商星人・惨太（ＳＯ３より）
『試練の遺跡』という、ゲーム本編クリア後のステージに出てくるキャラ。
ＳＯシリーズを通して出てきた彼だが、３でその姿が一変。
化け物のような姿になってしまった。
例えるなら、ナ○トの鬼鮫とワン○ースのモリアを足して二で割ったような顔、というべきか。
腹に二つ目の顔を持つ。どちらが本体かは不明。
イメージＣＶ：正直思いつかない。

モンジャラゴラ（父）（ＳＯ３より）
同じく『試練の遺跡』に出てくるボスキャラ。
その姿はまさしく『となりの○トロ』の○っくろくろすけ、というのがベストか。
因みにスティーブンとは、作者が勝手に付けた名前です。
勝手なイメージＣＶ：『ＭＧＳ』のス○ークの中の人。

エリス・ルーカス

オリキャラ。僅か一分で誕生。
母親はおらず、父と二人暮らし。
酒場の店主が父親。全く似ていない。
まさしく遺伝子の神秘。
イメージＣＶ：『飯塚真弓』さん

如何だったでしょうか？

今回の話はやっちまった感が満載です。

シオン
「スターオーシャン知らない人には分かりにくいですね。」

メガシオン（仮）
「全くだ。てか、惨太に続きエターナルスフィアから出てくるとは。
しかもサブキャラだしよ。」

いいじゃん。好きなんだよ彼等。
因みに、彼等がなのはの世界に来れた理由は、そのうち明かされます
ｗ

シオン
「そのうちですか・・・。」

メガシオン
「そういえば、そろそろＰＶ２０万になるよな。」

そうなんです！皆さんには感謝したりないくらいでせう。
なのに、まだ次のプライベートアクションを考えていないという。

シオン
「そこで、もし要望がありましたら、感想でもなんでも良いのでリクエストをお願いします。」

メガシオン（仮）
「まぁ無くても作るが、主に作者の気合が変わります。
それから！俺の名前も募集中です！
メガシオン（仮）は嫌なんだ！どうか救いの手を！！」

と、いう事で次回予告です。

一一一互いに歩み寄った彼女達

「有難う御座います、『なのは』さん！」

「それじゃあ、今日の訓練もはりきっていこう！」

――その身に滾るは溢れんばかりの闘争心

「ならば私が相手をしよう。」

「む、無理ですよ?!」

――そして壊れゆく彼女達の大切な場所・・・

「そ、そんな・・・。」

次回　魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～Ｔｉｌｌ　Ｔｈｅ　Ｅｎｄ　Ｏｆ　Ｔｉｍｅ～

Ｐｈａｓｅ－１４　～模擬戦　ちょっとやり過ぎました～

御期待下さい。

Ｐｈａｓｅ－１６　～模擬戦　ちょっとやり過ぎました　Ａ～（前書き）

まず最初に、言い訳と言う名の謝罪を。

更新が遅く成ってしまって申し訳ありませんでした。

今回、私生活での事情等があり、中々書き上げることが出来ませんでした。

また、その遅れを取り戻そうと何度か書いたのですが、当初考えていた構想との矛盾やいい加減な設定などが目立ってしまった為、更新する事が出来ませんでした。

更にはどういうわけか、作者の頭の中に色々な案が浮かんできてしまい、本来の物語の終結とは違う形になるわ、まだこの作品が完結していないのに、次回作の構想が浮かんでくるわで、時間がかかってしまいました。

今後は、最低でも一週間に一話は更新出来るように努力いたします。

それからもう一つ謝罪を。

今回の話ですが、前回の予告と若干違ってしまううえに、２話の構成になってしまいました。

そのくせ駄文ですが、どうかご容赦を。

Ｐｈａｓｅ－１６　～模擬戦　ちょっとやり過ぎました　Ａ～

前回の模擬戦の後、ティアナとなのはは互いの思いを打ち明けあい、その距離は縮まった。
同時に、他のフォワード達との距離も一段と近くなった。

だが、ここで一つ問題が起きた。

それは、なのはの教導のやりかた。
ティアナの作戦行動無視。
そして、シグナムの暴力行為についてだ。

当然、これらは見過ごすわけにはいかない。
はやては三人に処分を下した。

彼女達三人は、はやてに説教をされ、反省文を大量に書かされた。
また、それぞれが所属する分隊の書類が多めに渡された。

はやて曰く、「まぁ、流石になんの処分も無しっちゅう訳にはいかんから。
これでも軽いほうなんやから、頑張ってなぁ。」だそうだ。

シグナムにおいては、その行為から二人よりもより大量の書類が渡されることとなった。
因みにどの位の量であるかというと、二日三日では処理仕切れないほどだった。

そのお陰で、暫くの間はシグナムは机からは慣れることが出来ず、日に日にやつれていったそうだ。

ニート侍にデスクワークはキツかったようだ。

そんなこんなで現在夜の9時を回ったところ。

彼女は訓練場近くで一人、黙々と剣を振るっていた。

今日の午前中で地獄の処分生活が漸く終わりを告げ、彼女はそれまでの遅れを取り戻すかのように、剣を振るう。

その眼光は鋭く、虚空を見据えていながらも、確かにその先にある何かを捕らえている。

一度動きを止め、深く呼吸をする。

目を閉じ剣を構えながら、再び目の前に敵を想定する。

相手は前回決着をつける事が叶わなかった相手、隠者（ハーミット）。

イメージが固まった瞬間、目を開き一歩を踏み出す。

と同時に袈裟懸けに一閃。

だが彼女は動きを止めず、更に一歩を踏み出す。

直後、弾かれたように後退し、距離をとる。
しかし彼女はそのまま剣を振るいつつ後退を続ける。
まるで相手を誘い込むかのように。
そんな彼女が突然、動きを止める。
額に汗を滲ませる彼女はしかし、その表情を悔しそうに歪める。
「違う・・・・・。」
一人呟くその言葉には、僅かな苛立ちを感じる。
「ヤツの動きはこんなものでは無い・・・！」
己の愛剣であるレヴァンティンを待機状態に戻した彼女は、空を見上げ立ち竦む。
彼女はあれから更に鍛錬を積んだが、それでも納得が出来ずにいた。
それは、隠者の戦闘スタイルにある。
独特の戦闘法、そして技術力。
剣士としての戦いは自身がそうであるから対処は出来る。
だが、問題なのは格闘戦についてだ。
脳内でシュミレートするだけでは、映像を元に動くのでは、既に満足出来ずにいたのだ。
「ヤツは格闘家であり剣士だ。
ザフィーラは『後の手』を得意とするからかなりイメージが違う。

何処かに良い相手はいないだろうか・・・。」

暫くの間唸っていたシグナムは、ふと思い出す。

そうだ。いるではないか。

まだ未熟ではあるが、攻撃型の挌闘家が。

「しかし、アイツだけでは。

・・・いや、まて。そういえば・・・。」

もう一人挌闘戦が出来そうな奴がいる。

前々から気になっていたし、良い機会だろう。

彼女の頭の中は既にこれから（強制的に）始まる模擬戦の事でいっぱいだった。

その顔に笑みを浮かべ、彼女は六課の隊舎へと戻っていった。

ーーーー翌日　訓練場ーーーー

今日も今日とてフォワード達は訓練に精を出していた。

だが、そんな彼女達に僅かな変化が生まれた。

「ティアナ。さっきの動き何だけど……。」

なのはにマンツーマンで教わっているティアナは、彼女の言葉を一つ一つ理解していく。

「なるほど、確かにそうすれば……。
有難うございます、『なのは』さん！」

ティアナはなのは達の事を名前で呼ぶ事にしたのだ。
もっとも、初めて名前を言う時に顔を赤らめていたが。

動きの確認をした二人が、再び訓練を再開しようとした時。

シグナムがやってきた。

「なのは、少しいいか？」

「シグナムさん？ティアナ、ちょっと待っててくれる？」

「あ、はい。大丈夫です。」

ティアナから少し離れた場所で二人は話し始めた。

（珍しいわね、副隊長が来るなんて。）

クロスミラージュのチェックをしながらそんな事を考えていたティアナは、急に悪寒を感じる。

（な、何今の？）

体を震わせたあと、辺りを見渡すと、ふとシグナムと目が合う。
彼女の目は、何処か猛獣のような輝きを放っている。

隣のなのははというと、少し困ったような表情をしている。

（ま、まさか。シグナム副隊長・・・？）

冷や汗を流すティアナに向けて、なのはは死刑宣告を言い渡す。

「ティアナ。これからスバルと一緒にシグナム副隊長と模擬戦。いいかな？」

（はっきり言って無理です！って言いたいけど・・・。）

「問題無いな？」

シグナムのヤル気満々の表情を見て、彼女は断ることが出来なかった。

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

はぁ。・・・何でこんな事になったんだろう？

なのはさんとの訓練中に、突然スバルと私でシグナム副隊長との模擬戦だなんて。

「てぃ、ティア～。あたし達、何か悪い事しちゃったのかな～？」

「そんなの私が聞きたいわよ。
でも、どうして突然？しかも、私達を指名するだなんて・・・。」

スバルと話している内にステージの準備が終わった用で、副隊長が姿を現す。

流石歴戦の戦士、ってやつね。
『気当たり』が半端じゃないわ・・・。

でも、だからこそ分からない。

「あの、シグナム副隊長。質問しても宜しいでしょうか？」

もう直接聞かないと分からないし、思い切って聞くしかないわね。

「なんだ？」

「如何して突然模擬戦をしようと思ったんですか？
それも、フォワード四人ではなく、私達二人を指名してまで。」

エリオとキャロを除く理由が分かれば、この模擬戦の意味も分かるはず。

副隊長は「ふっ」と笑ったあと、真剣な表情をする。

「前回の出動任務、ホテル・アグスタで私は隠者（ハーミット）と交戦したのは知っているな。」

あの時の私は、ミスのせいで隊長達の言葉があまり頭にはいっていなかった。
だから内心驚いたけど、表情に出さないようになんとか堪える。
そっか。兄さんと戦ったんだ・・・。

「その事とあたし達を呼んだ事って、どんな関係があるんですか？」

スバルが恐る恐る質問する。
何となく予想は付いてきたけど・・・。

「私はその時、ヤツに一撃も入れる事が出来なくてな。
それが堪らなく悔しい。
鍛錬を重ね、ヤツの動きのイメージも何度もしたのだが、どうも納得がいかんのだ。」

もの凄く悔しそうな顔をする副隊長。
あぁ。もうこれは決定ね・・・。

「そこでだ。ヤツと同じく格闘戦を主体とするスバル。
そして、恐らく接近戦の心得があるティアナ。
お前達を選んだというわけだ。」

「そ、そんな～～。」

スバルは泣きそうな表情をしているけど、それよりも気になることがあった。

「副隊長。何故私が接近戦の心得があると思ったのですか？」

「なに。今までの訓練でのお前の動きを見ていてな。
特に回避行動でだが、お前は射撃型にしては妙なくらい足運びが良かった。
時には、足技を使うようなそぶりも見て取れた。
前々から気にはなっていたんだ。私もなのはも、な。」

「はぁ～・・・。」

やっぱり其処かぁ。
ばれないように気を遣ってたつもりだったんだけど・・・。

「・・・まぁ蹴撃系を少しだけ。
スバル。もう此処まで来たなら覚悟を決めるわよ。」

「てぃ、ティアッ?!」

《いいの?!たしか、射撃をしっかりこなせるまでは使わないって・・・。》

「折角副隊長が相手してくれるんだし。
どうせだから、開き直ったほうが気が楽よ。
それに、強くなれるんだしね。」

《確かにそうね。
でも、私自身、今の状態で何処まで出来るか試してみたいのよ。
・・・悪いけど、付き合ってくれる?》

《ティア・・・。うん!分かった!》

さて、後は・・・。

「なのはさん。なのはさんから教わった技術に加えて、私なりの動きを入れてみても良いでしょうか？
私自身、訓練校に入ってからは使ってなかった動きなんですけど。」

《・・・それは無茶な動きじゃないんだね？》

「はい。自分の可能な範囲での動きしかしません。
というか、出来ませんのほうが正しいかも知れませんけど。」

《・・・・・・。》

少しの間、なのはさんは悩んでいた。
今まで使ってなかった動きを突然使い始めるなんて、危険を伴うものね。

でも、副隊長との模擬戦を許可したって事は・・・。

《分かった。その代わり、絶対に無茶な動きだけはしないでね？》

やっぱり。隊長も、私の動きを見てみたいんだろう。

「実はなのはさんも気に成ってたりします？」

《にゃ、にゃははは・・・。
そ、それじゃあ通信切るね！》

あ、逃げた。
やっぱり図星だったみたいね。

「話はもう良いのか？」

「はい。お待たせしました。
行くわよ、スバルッ！」

「おうっ！！」

さて、と。
折角の機会だし、やれるだけやってみますか！

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　なのは～

ティアナとスバル、大丈夫かな？

フォワードの皆とビルの一角から訓練場を見る私は、模擬戦の許可を出しておきながらも少し心配になる。
さっきの二人の目を見る限りでは、前みたいにはならないだろうけど・・・。

「ねぇなのは？どうしてシグナムと二人が模擬戦をすることになったの？
どうせなら、エリオとキャロも一緒にやればいいのに。」

「そうだよな。態々分ける必要なんてねぇーだろ？」

本当なら、フェイトちゃんとヴィータちゃんの質問は当然なんだよね。
でも、今回はちょっと違うんだ。
「その事なんだけどね。
エリオとキャロには出来ない戦闘を、あの二人は出来るからなんだ。」
「？どういうことですか？」
「僕達じゃ出来ない戦闘方法って・・・？」
やっぱり、普通は分からないよね。
私自身、家族が剣術をやっていなければ気付かないほど、微妙な動きだったし。
「えっとね。見ての通りスバルはシューティングアーツを主軸として戦ってるでしょ？
でもね、実はティアナも格闘戦の心得があるみたいなんだ。」
「「「えぇっ？！」」」
「マジかよっ？！」
にゃはは。やっぱり驚くよね。
「で、でもどうしてティアナが格闘戦が出来るって分かったの？」
「実は前から訓練の時に動きに出てたんだよね。

例えばほら。この時の足捌き。」

皆の目の前に出したモニターには、以前の訓練でティアナが背後と上空からの魔力弾を回避するところが映っている。

「確かに結構素早いステップでかわしてるけどよ。
コレだけで分かるもんなのか？」

「よーく見てると分かるよ。」

「・・・・あっ！」

映像を何度か見ている内にフェイトちゃんは気付いたみたい。

「この時！ステップで回避する前に一瞬足が動いてる！」

「あっ・・・・！」

「本当だ・・・。」

「・・・これってまさか、蹴りで魔力弾を射ち落とそうとしたって事か？」

少し顔を引き攣らせたヴィータちゃんが確認するように尋ねてくる。

「多分、ほとんど反射的にね。
それが出来るくらいにティアナは格闘、特に蹴撃系が得意みたい。
まぁ、実際に見てみないと分からないけどね。」

私が視線を訓練場に戻すと、ちょうど模擬戦が始まるところだった

みたい。
他の皆も、食い入るように三人の様子を見ている。
最終確認をとると、どうやら二人は大丈夫みたい。
その時、私も気になっていたことも聞かれちゃったけど。

・・・スバル、ティアナ。
あの時みたいに無茶な事だけはしないでね。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

――喫茶　アクアエリー――

「いらっしゃいませ。
・・・おや、クルツ。いらっしゃい。
こんな時間に珍しいですね。」

「おじゃまします、シオンさん。
実は昨日本局に用がありまして、その帰りなんですよ。
ところで、そちらの方は・・・？」

ティアナ達が模擬戦をしているのと同時刻、いつものように昼の時間帯の準備をしていたシオンの元へ、クルツがやってきた。

店内に入ったクルツの視線の先には、見慣れない女性店員がいた。
その人は、紺のジーパンに清潔感のある白のシャツを着て、その上にエプロンをかけたウェルチだった。

「どうも、初めまして！
私はウェルチ・ビンヤード。ウェルチって呼んでね♪
まぁ、簡単に言うとシオン君達と同じ世界の出身なの。」

「！そうだったんですか。
クルツ・アテンザです。宜しくお願いします。
僕の事もクルツと呼んでください。」

挨拶を済ませたクルツが席に着くと、彼の前に一杯のエスプレッソが出される。
ありがとうございます、と例を言うクルツに、シオンはウェルチが働いている理由を話す。

「彼女は此方に来て間も無いので、資金集めに此処で働いているんですよ。」

因みに、ウェルチ達は安いマンションで暮らしている。

スティーブンは惨太と同居し、ウェルチはその隣の部屋に住んでいる。
そんな彼女は現在、ギルド設立を目指し奮闘中だが、その為の資金が無い。
その為、生活費と資金調達のためシオンの元で働いているのだ。

「なるほど。

ウェルチさんはこっちに来た時の記憶はあるんですか？」

「それがサッパリ！何時どうやってこっちに来たのかぜーんぜん覚えてないのよ。
あ！シオン君、私は紅茶がいいなぁ♪」

大きく溜め息をつきながら椅子に座る彼女は、シオンに紅茶を出すように頼んだ。
仮にも新人である彼女だが、それもまた彼女らしいといえばそうなのだろう。

ウェルチの性格を理解しているシオンは、苦笑しながらも、彼女の分も紅茶を淹れる。

「それを飲んだら、ちゃんと手伝って下さいね？」

カップを彼女の前に置いたシオンは、念を押してから作業に戻った。

「そうですか・・・。
何も手がかりがないと言うのも、悔しいですね。」

「まぁ、今はそんなに深く考えなくても大丈夫だよ！
それに『この世界』でもやらなきゃいけない事も出来ちゃったしね。」

落ち込むクルツを励ますように、ウェルチは明るく振舞った。
それから暫くの間、二人は話をしていた。

「あれ、もうこんな時間だ。

すみませんが、僕はこれで失礼します。」

申し訳なさそうな表情をした彼は、コーヒー代を置いて、店を後にしようとする。

「クルツ、ちょっと待ってください。」

そんな彼の元へ、二つの箱を持ったシオンが来た。

「クルツ。コレを六課の方々に渡していただけますか？
日頃ティアナがお世話になっているお礼に、ケーキを入れたのですが。」

「分かりました。
それでは失礼します。
惨太さん達にも宜しく言っておいてください。」

クルツは一礼したあと、両手にしっかりと箱を掴み、店を出た。

「さて、あと少ししたら営業再開です。
ウェルチ、手伝ってください。」

「了解しました！
さぁーて、頑張りますか！」

ビシっと敬礼したウェルチは、シオンと共に準備を再開した。

Ｐｈａｓｅ－１６　～模擬戦　ちょっとやり過ぎました　Ａ～（後書き）

如何だったでしょうか？

タイトルに模擬戦、と書いてあるのにその模擬戦を書くことが出来ず、申し訳ありません！

一話に纏めようとすると、自分の中ではあまりにも長い文章になってしまうので、２話での構成にさせて頂きました。

ですので、Ｐｈａｓｅ－１４　Ｂ　では、ちゃんと模擬戦の内容を書きます。

さて、今回の話は、原作で休暇を貰う少し前の話ということにしています。

シオン
「それにしても、散々更新遅れておいて二分化ですか。」

メガシオン（仮）
「しかも、たいした内容になってねぇしよ。
そのうえまだ完結してないのに次回作とか。何考えてるんだよ作者。」

いや、それについては本当に申し訳ないです。はい。

私生活でちょっと色々あった上に、その分を取り返そうと必死こい

たら、何故か知らんが次回作の案まで浮かんだんだよ。
お陰で作者の頭の中は現在軽く混乱状態だよ。

シオン
「相変わらずふざけた作者ですね。
この小説を読んでくださっている皆さん。
駄目な作者が申し訳ありませんでした。」

メガシオン（仮）
「今後より精進していきますので、どうか生暖かい目でいいので、
これからも見守ってやってください。」

本当にこの度は大変後迷惑をおかけしました。

それから、この後書きのみとなりますが、メガシオン（仮）の名前
をまだ募集しておりますので、どなたかよい名前をつけて頂けない
でしょうか？

また、感想・指摘等もお待ちしておりますので、ドンドンお願いし
ます！

Ｐｈａｓｅ－１７　～模擬戦　ちょっとやり過ぎました　Ｂ～（前書き）

やっとこさ書き上がりました。

なんかタイトルほどの内容では無いですが、あまり気にしないで下さると助かります。

かなりグダグダ感がありますがご容赦を。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ－１７　～模擬戦　ちょっとやり過ぎました　Ｂ～

――六課　隊舎入口――

「やっぱり六課の隊舎って、他の所に比べて大きいんだなぁ……。」

本局帰りにシオンの所へよってきたクルツは、漸く戻ってきた隊舎を見て、改めて六課の大きさに驚いていた。
だがそれも当然と言えるだろう。
この機動六課は、管理局崩壊、そして世界崩壊の危機を回避する為に作られた部隊。
それ故にその設備や施設の充実度は群を抜いているのだ。

そんな事を考えつつ隊舎内に入ると、シャーリーが慌しく走っていくのを見かけた。
随分と急いでいる様子から声をかけなかったクルツは、彼女の走っていった方向に目を向ける。
その視線の先にあるもの。それは・・・。

「あっちはたしか・・・訓練場だよね？」
ポツリと呟いた彼は、少しの間逡巡する。

「とりあえず、先ずはコレを置いてこないと。」

彼は譲り受けたケーキを、一度食堂に行って預かってもらうことにした。

――訓練場――

「さてと、シャーリーさん達は・・・・あ、いたいた。」

ケーキを預けてきたクルツは、戻ってきた事をはやてに知らせた後、訓練場に足を運んでいた。
そこで行われているだろう、訓練の様子を見るために。
だがクルツの視線の先には、スターズの二人とシグナムを除くメンバーしかいなかった。
疑問に思う彼は彼女達に近づいき、声をかけた。
「今回の訓練はエリオ君とキャロちゃんは休みなんですか?」

彼の声に気付いた彼女達は振り返る。

「あ!クルツ君。」

「戻ってきてたのか。」

「えぇ、つい先ほど。」

「クルツ、お疲れ様。」

「「お疲れ様です!」」

彼女達に労いの言葉をかけられたクルツは、「ありがとうございます。」と答え、先ほどの質問をする。
それに答えたのはヴィータだった。

「あぁ。それなら見たほうが早いな。ほら。」

彼女の言葉でクルツを含むその場のメンバーは、訓練場へと目を向ける。

今回用意されたステージは、特に使われている廃都市型。
無数のビルが乱立する中、ティアナ・スバルのコンビとシグナムによる模擬戦が行われていた。

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

《スバル！一度距離をとって！
今のままだと下手に撃てない！》

《そうしたいんだけど、副隊長の動きが早くて全然距離を取れないよ・・・！》

念話で副隊長と『拮抗』しているスバルに指示を飛ばすけれど、返ってきたのは苦しそうな返事。
こっちも誘導弾で牽制するけど、その度に掻き消されたりして意味をなさない。
しかも最悪なのは、誘導弾を切り落とした勢いのままスバルに肉薄すること。

これじゃあこっちの有利な状況に持っていけない・・・！
それにアレだけ近づかれると、スバルを巻き込みかねない。
（シグナム副隊長はそれを分かっているからこそ、スバルから距離を離さない。管理局に入局してからの長所をこうも簡単に潰されるなんて・・・。）

このままじゃ何れスバルは撃墜されて私は孤立する。
ううん、それ以前にスバルが実質『一人』で副隊長を抑えている状況自体が異常なんだ。
つまりコレは明らかに。

「私が接近戦に持ち込む事を誘ってるって事よね・・・。」

いくら手を抜いてくれている状況だとしても、歴戦の勇士であり『管理局最強の剣士』とさえいわれる副隊長相手に、私達が一人で抑えられるはずがない。
だとすれば理由はただ一つ。
模擬戦前に言っていた通り、私の接近戦がどの程度かを見るためだ。

「・・・なら、覚悟決めるしかないわよね。」

再び援護射撃を無効化されたのを見ながら、呼吸を整える。

久しぶりの接近戦、それも相手は兄と同等といえるだろう剣士。
だけど、此処で退く訳にはいかない。
これから先、更に激しくなるだろう『奴等』との戦いの為にも。
そして、今も一人で副隊長を抑えているあの娘の為にも。

「いくわよ。クロスミラージュ。」

《Ｙｅｓ．》

短い、だけど何処か頼もしい相棒の返事を聞いた私は、魔力弾を生成しながら駆け出した。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

スバルは、今尚距離を取れずにシグナムと肉薄している。
並の魔導師であれば、既に決定打を受けているだろ。
だが訓練の成果が出ている為か、スバルは掠り傷を負いながらも、まだ十分に戦える状態だった。

スバルの成長を喜びつつも、シグナムはティアナの本格的な参戦が無い事に若干の苛立ちも感じていた。
そこで彼女は更にその剣戟の速度を速くしようとした、まさにその時。
駆け出す体を急停止させると同時に、一旦スバルとの間を空けた。

直後、先ほどシグナムの居た位置を１発の魔力弾が通り過ぎて行った。
が、彼女は魔力弾が来た方を見向きもせず、依然スバルのいる場所を見続ける。
そして、それを確認したシグナムは、僅かだが口元を綻ばせる。

彼女の視線の先には、スバルの横に並び二丁の銃を構えたティアナの姿があった。

「ティアッ！」

一度間が空いた事で、スバルは乱れた呼吸を整えつつも、ティアナが隣に立った事の嬉しさから顔を綻ばせる。

対するティアナは、シグナムの様子を窺いつつもスバルを気にかける。

「遅くなって悪かったわね。
まだイケるわよね？」

ティアナはチラリとスバルを見ると、僅かに笑みを浮かべながら、一言だけ口にする。

ソレは確認では無く確信。

長い間コンビを組んでいた二人だからこその、僅かなやり取り。

「応っ！」

そしてソレを分かっているからこそ、スバルもまた、笑みを浮かべつつ一言だけ返した。

「どうやら、準備はいいようだな。」

それまで仕掛けてこなかったシグナムは、構えを取りつつ最終確認をする。

だが彼女は返事を期待などしていない。

なぜなら彼女の視線の先には、ヤル気十分といった眼をしたスバルとティアナが構えていたからだ。

「では・・・・行くぞっ！」

気合の掛け声と共に、シグナムは二人に向かって駆け出した。

《折角こっちは二人いるんだから、この状況を出来る限り利用するわよ！

さっきの作戦、ヤルわよっ！》

《分かった！》

迫り来るシグナムを前に、ティアナは即席の作戦を指示する。

本来であれば決して取る事の無い、無謀とも取れる作戦。

だが、『だからこそ』ティアナは敢えてこの作戦に出た。

「「「「「「えっ？！」」」」」」

その作戦は、離れた位置で見ていたなのは達をも驚愕させた。

二人との距離を残り5メートルほどに詰めたシグナムは、声には出さなかったが、内心驚いていた。

二人は距離を取るのでも無く、散開するのでもなく、あろう事か距離を詰めてきた。

しかも、『ティアナ』を先頭に立たせて。

（ティアナがいる以上、無策と言う訳ではないのは確かだ・・・。）

驚いたのも束の間、直ぐに冷静になったシグナムはしかし、距離を詰め続ける。

それは彼女が騎士であるが故。

（ならばこそ、私は逃げはしない！）

踏み込みを強くし、更に加速しようとしたその瞬間。

「なっ！！」

今度こそ、声に出して驚愕した。

ティアナはシグナムとの距離がある一定になった瞬間、スバルに指示を出した。

と同時に、ティアナは全力で跳び上がる。

「いっけぇぇぇっ！」

そして後ろに控えていたスバルは、体ごと回転しながら気合と共にティアナを『蹴り上げる』。

スバルの馬鹿力によってシグナムの頭上に飛び上がったティアナは、銃口を構える。

当然シグナムは空戦の出来ないティアナの迎撃にあたろうとするが、それは失敗に終わった。

《ウィングロード》

短い電子音と共にシグナムに向かって弧を描きながら伸びてくる青い魔法の道。

本来の使い道ではなく、スバルは一瞬の気を逸らすために力を使った。

「ちぃ！」

シグナムはウィングロードをレヴァンティンで受け流しつつ回転。その勢いを利用し、頭上と左右から飛来する誘導弾を叩き落とす。

が、彼女はそれだけでは止まらず、右手に愛剣を持ち直すと共に左手に鞘を形成。

「「はぁぁぁぁっ！！」」

そして真上と真正面からの攻撃を迎撃する。

シグナムは体を傾けつつ、カートリッジを1発消費。レヴァンティンの刀身に炎を宿す。

「はぁっ！！」

二人よりも更に大きな気合と共に、傾けた体を回転させながら上空の魔力弾を炎の剣戟を飛ばして消滅させる。

直後、着地と同時にスバルのリボルバーナックルによる一撃を鞘で逸らし、そのままスバルを弾き飛ばした。

「うわぁぁっ！」

スバルはシグナムの一撃により、体勢を崩しながら飛ばされる。

本来ならばここは追撃をするべきだが、今回はそうはいかなかった。

背後から先ほどのウィングロードを足場に着地をしていたティアナが既に迫ってきていたからだ。

「でぁぁぁあ！！」

一気に距離を詰めたティアナは、後一歩分距離が足りない位置で右足を引く。

その右足には、魔力が籠められていた。

「クレッセント・ローカス！！」

蹴り上げられた右足は、魔力の波動を纏いながら放たれる！

（これは・・・！）

右足に魔力が集まっていたことを見抜いたシグナムだったが、予

想以上の威力に顔を顰める。
ティアナの蹴りは、ガードをしたにも関わらず、僅かだがシグナムの体を浮かせるほどだった。
シグナムはその勢いを利用し距離を取り、着地後すぐに体勢を立て直す。

しかし、ティアナの攻撃も終わってはいなかった。

着地の瞬間を狙い再び接近したティアナは、蹴撃とデバイスによる攻撃を折り混ぜた攻撃を繰り出す。
そして、シグナムの目がティアナに向いている間に、スバルも距離を詰めていた。

同時に二方向からの攻撃を繰り出すティアナ達だったが、そこは流石は歴戦の勇士というべきか。
剣と鞘による即席の二刀流により、攻撃をいなしながら反撃の隙を窺う。

（ここだ！）

「うわぁっ？！」

「くっ・・・！」

スバルが拳を繰り出すために腕を引いた瞬間に鞘で拳を押す事で体勢を崩し、同時に来たティアナの蹴りを体を深く落としてかわし、同時に足払いを仕掛ける。
スバルはバランスを崩し已む無く距離が空いてしまう。
一方攻撃をかわされ足払いを仕掛けられたティアナは、この攻撃

をかわす為に上に跳ぶ。
が、ここまではシグナムの思い通りだった。

（さぁ、コレは避けられるか？）

僅かな時間だが空中にいるティアナ目掛け、下から掬い上げる様に剣を振るう。
意外な行動を見せ続けるティアナに僅かに期待を持って。
そして、その期待は現実となる。

（どうする？迎撃？いや、ありえない。
なら体を捻ってかわす・・・これも確実性に欠けるから却下！）

その僅かな時間の間に、ティアナは瞬時に考えを巡らせる。
そして覚悟を決め、賭けに出た。

クロスミラージュを使い、鞘を狙い打つ。
シグナムは鞘を取り落とすが、構わず剣を振り上げる。
そして本日何度目になるか、彼女は驚愕した。

（足に魔力を集中している？
・・・まさか！）

「はぁっ！」

「くぅっ・・・！」

振り上げられた剣に合わせる様に、ティアナは足の裏を使って剣を受け止める。
そして振り上げられる勢いを利用して、そのままスバルのいる方向

へと跳躍した。

「ティア！大丈夫?!」

「大丈夫・・・な訳が無いでしょ?
足の裏が痛くて堪らないわよっ・・・。
そういうアンタは大丈夫なの?」

《魔力も体力も結構不味いわね・・・。》

「アタシは何とか。
でも、結構ヤバイかも・・・。」

《アタシも同じ。・・・どうする?》

再び肩を並べた二人は、呼吸を整えつつ互いの状況を確認する。
どちらも疲労とダメージが蓄積していて、なんとか動ける、といった状況だ。

「お前には驚かされるばかりだな。
まさかあんな避け方をするとは。
一体どんな鍛え方をしてきたんだ?」

鞘を破棄したシグナムは振り返り、呆れ半分嬉しさ半分といった様子でティアナに尋ねる。
どうやらまだまだ余裕があるようだ。

「まぁ色々と。」

「ふ・・・。まぁいい。

さて。・・・そろそろ終わりにしようか。」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

二人の状態を確認したシグナムは、一気に勝負を決めるため、カートリッジを消費。
必殺の構えに出る。

《今の状況じゃあ、どっちにしても副隊長の攻撃を避けられるとは思えないわ。
なら、出来る限りの事をやるしかないわね。》

《って事は、何か考えがあるんだよね？》

《一応は、ね・・・。》

「スバル、準備はいい？」

「応っ！」

念話で作戦を立てた二人は覚悟を決め、迎え撃つ体勢に出る。

《Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ！》

「飛竜一閃！！」

形状変化したレヴァンティンは連結刃となり、蛇のように不規則な軌道を描き二人に迫る。

《ここはアンタのクロスレンジが鍵になるわ。

一撃打ち込んできなさい！》

《了解！ティア、サポート宜しく！》

《当然！》

二人はスバルを先頭に、シグナムへと駆け出す。
その間にも、蛇腹剣は包囲を狭めつつ、二人に迫る。

（ここまで来たら、後は私に出来ることは唯一つ。
副隊長の攻撃をスバルに届かせないこと！）

カートリッジを2発消費したティアナは、迫る剣の軌道見極めようと眼を凝らす。
そして。

「そこっ！」

無数の魔力弾は同時に連結刃へと放たれ、レヴァンティンの動きを一瞬だけだが鈍らせる。

「しまっ・・・！」

シグナムは慌てて剣を引くが、スバルはシグナムへと迫り、リボルバーナックルのスピナーを唸らせ、拳を放つ！

「リボルバァァァキャノン！」

解放された魔力が霧散していき、二人を包む。
その様子を、ティアナ、そしてなのは達は固唾を呑んで見守る。
やがて煙が晴れると、其処には・・・・。

「正直レヴァンティンの軌道を逸らされた時は肝を冷やした。
が、油断したな？」

スバルの拳を『鞘』で逸らしながら、通常形態に戻ったレヴァンティンを突きつけるシグナムの姿があった。

その様子を見たティアナは、しまったといった表情をしていた。

「痛っ！」

「さて。スバルはこれで撃墜。
ティアナ、まだ続けるか？」

スバルの頭を軽く叩いたシグナムは、剣の切っ先をティアナへと向ける。

「いえ・・・。降参です。」

はぁ～、と大きく溜め息をついたティアナは降参を宣言した。

こうして、スターズとシグナムによる模擬戦は幕を閉じた。

――六課　食堂――

スターズの模擬戦を終えた後、ライトニングの訓練も終えた一同は、食堂で昼食をとりながら談笑していた。

「それにしても、ティアナがあんなに接近戦が出来るなんて思わなかったよ。」

「確かに。アレは驚いたよね。」

なのはとフェイトは、その時の光景を思い出し苦笑しながらティアナを見つめる。

「いえっ！私なんてまだまだで・・・。」

「ほぅ？ではそのお前に剣の軌道をずらされた私は、更に未熟と言うことだな。」

「えぇ？！い、いえっ！そんな事は決して・・・！」

「まぁあれだ。素直に喜んどけってことだ。」

シグナムのからかいとヴィータの助け舟をうけたティアナは、少し顔を赤くしながらも頷いた。

「でもホント、ティアさんもスバルさんも凄かったです！」

「お二人とも、クロスレンジでも息が合ってましたし。」

エリオとキャロの尊敬の眼差しを受けた二人は、テレながらも「ありがとう」と賛辞を受け取った。

「なんや。今日は皆随分とご機嫌やなぁ。」

「「「「八神部隊長！」」」」

「僕とリイン曹長もいますよ。」

「ですぅ～♪」

話を続けていると、はやてとリインを肩に乗せたクルツがやってきた。

席についた三人は、模擬戦の時の話を聞いた。

「へぇ～、そうやったんか。ほんなら、これからのスターズの訓練密度はもっと濃くしても大丈夫なんやない？」

「「え゛っ！！」」

はやての悪魔の一言に、二人は声を濁らせた。

そして縋るような眼でなのはを見るが・・・。

「う～ん・・・。まぁ、ほんの少しくらい増やすかもね。」

「それにだ。お前達の近接戦闘を錆付かせない為にも、私も時々訓練に参加しよう。
なに、ちゃんと加減はするさ。」
なのはとシグナムは笑みを浮かべるが、二人にとっては死刑宣告でしかなかった。
その様子を見ていたチビッ子二人は、同情しつつも内心安堵していた。

「そうだ。今日はお土産があるんですよ。
今取ってきますね。」
二人の様子を見かねたクルツは、一度席を立つと厨房へと向かって行った。

「お土産ってどんなのかしら?」

「態々厨房にいったってことは、アイスとかケーキとか、食べ物じゃないですか?」

「「アイス?!」」

「「ケーキ?!」」

疑問に思うシャマルに、シャーリーは推測を話す。
すると、先ほどまで沈んでいたスバルとアイス好きのヴィータ、甘いもの好きのはやてとリインは目を輝かせる。
他のメンバーも声には出していないが、期待を膨らませていた。
何時の世も、女性は甘いものには目が無いのだ。

（クルツさんが持ってくるとしたら、多分兄さんからだ。
・・・兄さんのケーキかぁ。）
ただ一人ティアナは、別の意味でも喜んでいた。

「お待たせしました・・・・って、どうしたんですか皆さん？
目が怖いですよ？」

戻ってきたクルツは、目の色の変わった彼女達を見て、若干引き気味になる。

「そんな事よりもケーキ若しくはアイスや！」

「「「そうだそうだ（ですぅ）！」」」

はやての一言に、スバル、ヴィータ、リインは拳を天に突き上げながら声を上げる。
もはや子供のソレである。

「駄目だよはやてちゃん。静かにしないと。」

「そ、そうだよ。スバルとヴィータもリインも。」

なのはとフェイトは四人を諫めるも、目はチラチラとクルツが手に持つ箱を見ている。
他のメンバーもまた然り。

「よく中身がケーキだって分かりましたね。」

苦笑しながら箱を置いたクルツは、フタを開ける。

「「「「「おぉーー！！」」」」」

一つの箱の中には、真っ白な表面に赤いジャムのかかったケーキが入っていた。
そしてもう一つの箱には、対照的に黒いケーキが入っていた。
どちらも見栄えはとても良く、見るからに美味しそうだ。

「これって何ケーキなんですか？」

目を輝かせたスバルがクルツに質問する。

「えっと・・・確かレアチーズケーキって言ってたかな。
上にかかっているのがラズベリージャムって言ってたはずだよ。
それでこっちがガトー・ショコラって言ってたかな。」

ケーキを切り分け一つずつ更に移しケーキを配りながら、クルツは質問に答えた。
最後にクルツが自分の分を移し終えたのを確認したはやては、彼に礼を言った後音頭をとる。

「そんなら、ケーキを持ってきてくれたクルツ君に感謝して、有難く頂きましょう！
いただきます！」

「「「「「いただきます！」」」」」

手を合わせ挨拶をした一同は、一口目を口にする。
直後、ティアナとクルツを除く全員の動きが止まった。

が、直ぐに時間は動き出した。

「何だコレッ！ギガうまじゃねーか！」

「確かに。まさかこれほどの物があろうとは・・・。」

ヴィータとシグナムの感想に、シャーリー達は何度も頷く。

「確かに美味しい。家も味には自身あるけどコレは・・・。」

「う、うん。確かに甲乙付けがたいよね・・・。」

なのはの実家である『喫茶翠屋』の味を知るなのは達は素直に美味いと口に出せない。

もっとも、手は止まらずケーキへと伸びているが。

要するにどっちも美味いのだ。

（なんか、久しぶりに兄さんの味だ、って気がする。

まぁ、実際久しぶりなんだけど。）

ティアナもまた声には出さないが、兄シオンの味に懐かしさと安らぎを感じていた。

皆それぞれに感想を言いながら、綺麗にケーキを完食。

その後一同はヤル気を見せ、残りの仕事にとりかかりに行った。

～Ｓｉｄｅ　クルツ～

「それで部隊長?ご用件は何でしょうか?」

シオンさんから貰ったケーキを食べ終わった直後、僕は部隊長に念話で呼び出され、今はこうして部隊長室にいる。
目の前に座る部隊長の目は真剣そのもの。
きっと重要な話に違いない。

「其の事について、今から話そうと思ってたんや。」

一度ふぅと息を吐いた部隊長は、先ほどよりも更に険しい表情になる。
コレは一体・・・?
思わず生唾を飲み込む。

数瞬の後、部隊長は遂に思い口を開いた。

「クルツ君。さっきのケーキ、何処で手にいれたん?」

「・・・・・・・・・は?」

「だから、あのケーキを何処で手に入れたかって聞いてるんや!」

さっきまでの真剣な表情は何処へいったのか、大きな声を出す部隊長。
何かと思えばそんな事ですか・・・。

「とりあえず落ち着いてください。
それから残念ですが、あのケーキを譲ってくださった方を教える事

は出来ないんです。」

「クルツ君。今『譲ってくださった』ってゆうたよね？
つまりあのケーキは直接クルツ君が買ってきた訳じゃないっちゅう事やね？」

再び鋭い目付きになった部隊長は、僕の様子を窺う。
しまった、墓穴を掘ったかも・・・。

「さぁ！潔く吐かんかい！」

「ですから！僕も教える事は出来ないんです！」

「イヤや！あのケーキをもういっぺん食べたいんや！」

そういって喚き散らす部隊長。
この姿はとても他の隊員には見せられない・・・。
はぁ・・・。まぁ、店の名前くらいならいい、かな？

「部隊長、とりあえず落ち着いてください。
代わりにお店の名前を教えますから。」

「ホンマか？！」

途端に目を輝かせ大人しくなる部隊長。
・・・この人の事が分からなくなってきた。

「どういった経緯で手に入れたのか。
また、僕自身もその店の場所は分かりません。
ですが、たしか店の名前は『喫茶アクアエリー』だったはずですよ。

」

「『喫茶アクアエリー』・・・？」

「えぇ。僕に分かるのはここまでです。
・・・そろそろ失礼しても宜しいでしょうか？
まだやらなければいけない仕事が残っているので。」

そう言うと部隊長は渋々といった表情をしながらも、漸く僕を解放してくれた。

「はぁ・・・。
なんか、妙に疲れたなぁ・・・。」

部隊長室を出た僕は、何となく疲れを感じながらも、仕事をする為にその場を後にした。

～Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

Ｐｈａｓｅ－１７　～模擬戦　ちょっとやり過ぎました　Ｂ～（後書き）

如何だったでしょうか？

ティアナの接近戦。
蹴撃をメインに鍛えた、ということになっています。

そこへ銃を使っての戦闘技術。

シオンが誰を参考にティアナに技術を教えたのかは、分かる人には分かりますね。

シオン
「それにしても、二人とも良く粘ったほうですね。」

まぁ、ティアナは訓練校に入る前の二年間は、シオンと武者修行みたいなことをしていたから。

あのくらいは出来ないとエクスキューショナーには対抗できないし。

シオン
「それはそうですけど・・・。
ところで作者。
最後の最後でなんか面倒な問題を残しましたね。」

いいんだよ。
これも次回の話にちゃんと繋げるためなんだから。

シオン

「この場でそんな事を言っていいんですか・・・。
ところでメガシオン（仮）は何処へ？」

あぁ。彼ならあっちで喜びに浸っているよ。

シオン
「？どういう事ですか？」

実はけっこう前に、この後書きコーナーなどにおけるシオンとメガシオン（仮）を区別する為に、彼の名前を募集したんだが。
とうとう決まってな。

十六夜さん提案の『ハイド』に決定したんだよ。

ハイド
「そういうことだ！
ということで、今回からはメガシオン（仮）改めハイドでいくから宜しく頼む！
そして十六夜さん！俺の名前を有難う！！」

本当に感謝です！
いやぁ有難いねぇ～。

シオン
「本当ですね。
十六夜さん。私からも感謝を。」

ハイド
「それで次回はどうなるんだ？」

次回は原作で言うと、フォワード一同が休暇を貰うところだね。

シオン
「と言う事は遂に『あの娘』が出るのですね？」

まぁね。
君達、というか君も活躍するんじゃないかな？

シオン・ハイド
「「未定なの？！」」

気にしたら負けだ！

最後になりましたが、感想・指摘等御座いましたらドンドンお願いします！
また、プライベートアクションの募集もやっておりますので、「あのキャラクターのＰＡが見たい！」という意見があれば是非！
それでは次回予告です！

――訓練を続ける彼女達に告げられる言葉

「実は今日の訓練は・・・・・。」

――与えられる束の間の休息

「ほんなら、頼んだで？」

「了解です！」

「「行って来ます、フェイトさん！」」

――しかし、それも長くは続かなかった

「意識不明の少女を発見。
謎のケースを持っています。」

「多分、レリックだと思います・・・。」

――地下と、そして空で出会う黒い影

「貴方は、貴方達はいったい・・・？！」

次回　魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｔｉｌｌ　Ｔｈｅ　Ｅｎｄ　Ｏｆ　Ｔｉｍｅ～

Ｐｈａｓｅ－１５　Ａ　～少女と黒い影～

後期待下さい。

Ｐｈａｓｅ－１８　～少女と黒い影　Ａ～（前書き）

漸く更新出来ました。

遅くなって申し訳ありません。

今回もグダグダ感万歳ですが、どうかご容赦を。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ－１８　～少女と黒い影　Ａ～

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

午前中の訓練と模擬戦を終えた私達は、乱れた呼吸を整えながら座り込んでいる。
……まぁようするにバテてるって事ね。

特に私とスバルは、前回の部隊長の有難い発言のお陰か、訓練密度が１．５倍くらいになった。
だからチビッ子二人よりも当然疲労が激しくなる。
現にスバルはまだ呼吸が乱れてるし。

正直、訓練校に入る前の約二年間の修行が無ければ、私もスバルと同じ状態になっているはずだわ。
でも、その修行が原因で訓練がキツくなるっていうのは何だか複雑ね……。

そんな私達の前に立つなのはさん達は、労いの言葉をかけてくれる。
「でね？実は何気に今日の模擬戦が第二段階クリアの見極めテストだったんだけど……。」

「「「「えぇ？！」」」」

まさかそんな大事なテストを抜きうちでやるなんて……。
あぁもうっ！どっか変なミスしてないかしら？
妙に気になっちゃうじゃない！

「どうでした？」

私達が思い悩んでいると、なのはさんはフェイト隊長、ヴィータ副隊長に振り返りながら結果を尋ねる。

「合格！」

するとフェイト隊長はニッコリと笑って、結果を発表した。って！

「「はやっ！！」」

思わずスバルとハモる。

いや、もう少し考えたりはしないんですか？

そりゃあ嬉しいですけど。

「ま、こんだけミッチリやってて問題あるなら大変だってことだ。」

副隊長の言葉に思わず苦笑い。

エリオとキャロも少し引き攣った笑みを浮かべてるし。

確かに、副隊長の言葉には一理あるんだけどね……。

「私も皆良い線いってると思うし。

じゃ！コレにて二段階終了！」

「「「「やったー！！」」」」

なのはさんの言葉に、漸く実感が沸いて来た私達は、声を上げて喜びを表現する。

これで少しは先に進めたんだ。嬉しくないはずが無い。

「デバイスリミッターも一段解除するから、後でシャーリーとクルツの所に行ってきてね？」

「明日からは２ｎｄモードを基本型に訓練していくからな。」

喜びの余韻に浸っている私達に、フェイト隊長とヴィータ副隊長が教えてくれた。

ん？『明日』から……？

気になった私達がその事について尋ねると、どうやら今まで休み無しの勤務状態に、たまには息抜きを、ということで僅かだが午後から休暇を貰えるそうだ。

隊長達の計らいに、どうやって休暇を過ごそうか、思い思いに考えている。

……さて、私はどうしようかな？

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

「はいっ！リミッター解除完了！

本格的な出力調整はまた今度するけど、一応これで２ｎｄモードが使えるから。」

「でも、あくまでリミッターを解除しただけだから。

本当は無いのが一番なんだけど、万が一の時でも２ｎｄモードはなるべく使わないようにしてくださいね？」

「「「「はいっ！」」」」

デバイスのリミッターを解除してもらった四人は、現時点での説明を聞きながらも、やはりステップアップ出来た事、そしてこの後の休暇の喜びからか、少し浮かれていた。
そんな四人を微笑ましく思いながらも、クルツは注意事項を伝える事も忘れない。

「それじゃあ、シャーリーさんにも何かお土産買ってきますね！」

「うん♪期待してるよ～？
あ、そうだ！エリオ、今日のお休みを楽しめるようにプランをストラーダに入れておいたから、後で確認しておいてね？
キャロも、しっかり楽しんでくるんだよ？」

「あ、はい。有難う御座います！」

「有難う御座います、シャーリーさん。」

スバルやシャーリー達が話しこんでいる間、ティアナとクルツは念話によるやりとりをしていた。

「ティア～！そろそろ行かないと時間が無くなっちゃうよ～？」

「ゴメン、先に行ってて。
ちょっとクロスミラージュの事で聞きたい事があるから。」

「しょうがないな～。それじゃあ先に戻ってるね？」

「はいはい。直ぐに行くから待ってなさい。
……ふぅ。やっと行ったわね。」

スバル達がメンテナンスルームを後にしたのを確認すると、ティアナは溜め息を吐く。そんな彼女の様子に苦笑したクルツは、直ぐにその表情を真剣なものへと変える。
「さて。それじゃあ本題に入りましょう。
今回、皆のデバイスのリミッターを解除したのと同時に、クロスミラージュの『あの』機能のリミッターも解除しておきました。」

「！それじゃあ……！」

「えぇ。何とか実用出来るまでには至りました。」

クルツの言葉を聞いたティアナは、顔を綻ばせる。
が、直ぐに表情を引き締める。

「それで、何が問題になっているんですか？」

その言葉に僅かに驚いたような素振りを見せるが、次第にそれは苦笑へと変わる。

「流石ですね。
……現段階では、クロスミラージュの出力の関係及びティアナちゃんの実力から、使えるのは初級くらいですね。中級レベルも使えなくは無いですが、その分消費が悪くなります。」

そう言いながら、クルツは彼女の前に一つのマガジンを差し出す。
少しの間見つめていたが、直ぐにそのマガジンを受け取る。
そんな彼女の様子に満足したのか、クルツは説明を続ける。

「現在そのマガジンの中に入っているのは三種類で、一種類につき2発用意してあります。
コレはティアナちゃんでも十分に扱えるモノをこっちで選別しておきました。
恐らく問題は無いでしょうが、後で確認をしておいて下さい。」

話は以上です、というクルツの一言で、会話を終えた二人。
そこには、先ほどまでの重苦しい空気は最早ない。

「そういえばティアナちゃんは、今日のお休みはどんな風に過ごすか、もう決めていますか？」

「実はまだ……。
でも、久しぶりに兄さんの所に顔を出そうかなって思っています。
アソコなら十分にゆっくり出来ると思いますし。」

少しの間考えるような素振りを見せたティアナだったが、既に答えは決まっていたようだ。
だが、素直に言うのが恥ずかしかったのだろう。
その証拠に、少しだけ頬を赤く染めている。

「それが良いでしょう。
シオンさんも、前の事で随分と心配していたようですし。」

「……はい。
そこでちゃんと謝ってきます。
その上で、お休みを楽しみたいと思っています。」

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

「あ、ティア遅いよ～！」

「悪かったわね。
でも、自分の相棒の事だからどうしても細かい所まで気になっちゃうのよ。」

「あー、それは確かに分かるけど……。」

話を終えた私が部屋に戻ると、既に着替えを済ませていたスバルが文句を言ってきた。
まぁ、確かに言われても仕方が無い立場だけど、アンタももう少し自分のデバイスの事を考えたら？

「そ、それはそうだけど。
でもでも！今は同じ位お休みも大事なんだよ！」

「分かったから。
とりあえず落ち着きなさい。」

妙に力説するスバルを何とか宥める。
すると、何かを思い出したかのような表情をする。
「そういえばティアは今日のお休み、どうやって過ごすか決めてるの？」

「まぁ一応はね。
服とか少し見たりした後に、久しぶりにシオン兄さんに会ってこようと思ってるけど……。
それがどうかしたの？」

「ううん、何でも無いよ。
ただティアはどうするのかなぁ～、って思っただけ。」

スバルは少しだけ残念そうな表情を浮かべた後、直ぐに明るく振舞う。
はぁ……、仕方が無いわね。

「今度休みが取れた時は、アンタに付き合ってあげるから。
今回は我慢して頂戴。」

「あ……。うん！」
直ぐに何時もの元気を取り戻す。
まったく、世話がやけるわね。

「ヴァイス陸曹にバイクを貸してもらえる様に頼んであるけど、途中までなら乗せてってあげるわよ？」

「そうしてくれると助かるよ～。」

「それじゃあ着替えた後バイクを借りてくるから。
連絡するまでちょっと待っててくれる？」

「了解！なるべく早くね～！」

スバルが部屋を出て行ったのを確認した私は、服を取りだして鏡の前に立つ。
今日は久しぶりに兄さんと過ごせる日だ。
どうせならちゃんとした格好をして行かないと。

「さて。さっさと着替えますか。」

――5分後

「とりあえず、服はコレでいいけど。
この服ってこんなにキツかったかしら……？」

鏡の前に立った私は、一番お気に入りの服を着て準備も出来た。
ただ少し問題があるとすれば、それは上半身。特に胸の辺り。

「なんだか嬉しいんだか悲しいんだか。」

体のラインが目立つような服を着ているせいで、余計に胸元が強調される。
ま、まぁコレはコレでありよ、きっと。
とりあえず準備も出来たことだし、バイクを借りに行かないと。

どうでもいい事だけど、バイクを借りにいったらヴァイス陸曹から変な視線を感じた。
だから去り際に「変態……。」と小さく呟くと、「グハァッ！！」とか言いながら血反吐を吐いて倒れこんだ。
ちょっとだけ気分が良くなったのは気のせいではないはず。

兎も角、コレなら兄さんも少しは気にしてくれるわね。
妙な自身を胸に、私はスバルが待つ隊舎入り口へと向かって行った。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

「じゃあ、転ばない様にね。」

スバルとティアナは一緒に街まで出かけて、その後は別行動を取るみたい。
なんにしても、怪我だけはしないでほしい。

～Ｓｉｄｅ　なのは～

「大丈夫です。前の部隊の時はほとんど毎日乗っていましたから。」

「ティア、運転上手なんですよ！」

心なしか声が弾んでいる二人。
やっぱり偶には息抜きは必要だよね。
楽しんできてくれると良いんだけどなぁ。

そんな事を考えていたけれど、やっぱりどうしても気になる事がある。

「ねぇティアナ。
バイクに乗るならジャケットのファスナーちゃんと閉めたほうがいいんじゃない？」

「あー。それはその……、なんて言いますか。」

「三人とも、どうかしたの？」

その事を指摘すると、どういう訳か言いよどむ。
何だろう？と思っているとフェイトちゃんとライトニングの二人もやってきた。

「あ、フェイトちゃん。それにエリオとキャロも。
一緒にお出かけ？」

「あ、はい。」
「スバルさん達もこれからお出かけですか？」

「うん！二人も楽しんできなよ～。」

皆が集まってワイワイ話し始める。
っと、いけない。つい話が逸れちゃった。

「話を戻すけど、ティアナ。
ちゃんとファスナー閉めないと寒いでしょ？」

するとスバルが頬を膨らませながら質問に答えてくれた。

「聞いてくださいよ、なのはさん！
私もその事を言ったんですよ。

そうしたらティア、「全部閉めると息苦しくなるから」って言うんですよ?!」

「ちょ、スバルッ!!」

……。

オーケー。落ち着くの。クールに行くの。

つまりティアナはファスナーを全部閉めると胸が苦しいから、全部閉めてないってことなんだよね?

……う、羨ましくなんかないのっ!

そ、そもそも、大きければいいってものじゃあ……。

「あ、でもそれ分かるかも。

私も時々着る服によっては息苦しく感じるし。」

私が心に大きな傷を負っているというのに、隣で親友が頷いてやがりました。

「フェイトちゃんのバカー!

裏切り者ーー!!」

「え?!裏切り者ってなに?!

ま、待ってよなのはー!」

別に私が小さいわけじゃないもんっ!

寧ろ標準だもん!!

虚しい言い訳を心の中で叫びながら、後ろから聞こえてくる親友の

声から逃げるように隊舎の中に戻って行きました。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

「「なのはさん、フェイトさん……。」」

なのはとフェイトの後ろ姿を見つめたチビッ子二人は、あまりの事に言葉を失う。
そしてその原因を作ったスバルもまた、何ともいえない表情を浮かべる。

「と、とりあえず、お互い楽しんできましょう。
アンタ達は特に、暗くならないうちに帰ってきなさいよ？」

「「はいっ！行ってきます！」」

チビッ子二人が去って行ったのを確認したティアナは、大きな溜め息をつく。
そしてジトっとした目でスバルを見つめる。

「スバル……。」

「あ、アハハハ……。
ご、ごめんなさい！！」
「はぁ～。もういいわよ。
それよりしっかり掴まってなさいよ。
時間を無駄に使っちゃったし、さっさと出発するわよ！」

「はーい！」

呆れたような溜め息をついた後、スバルがしっかりと掴まった事を確認したティアナは、グリップを回す。
チビッ子二人が去って少しした後、漸く彼女達も出発した。

～Ｓｉｄｅ　？？？～

「ククク……。」

ディメンションスフィア内のとある場所にいる私は、目の前のモニターに表示されるデータを見て、嬉しさから思わず声を漏らす。
いや、それも仕方が無いと自分でも思える。

「あと一歩。あと一歩で完全に実用できる……。
ククク、アハハハハッ！！」

今まで苦渋を舐めさせられてきたが、この実験がコレまでの事を覆すだろう。
そして、その事を想像した私は、今度こそ声に出して笑う。

「さて、時期に完成する『アレ』は、いずれ君達に真の絶望を齎すだろう。
その前に『コレ』を送ろう。
『コレ』は私達からのちょっとしたプレゼントだ。気に入ってくれると嬉しいよ。」

私はその視線を、目の前の巨大なポッドの中の存在へと向ける。
そこにいる一人の男は、『死んでいる』かの様に目を閉じている。
この『貴重なサンプル』は、嘗てディメンションスフィア内で『アレ』に感染した存在。
それだけなら、何も特別視する必要は無い。

だが目の前の存在は、死ぬ寸前とはいえ、一瞬でも自我を取り戻した。
その残骸データをサルベージして作り上げた紛い物。
実験台としては十分過ぎる代物だ。

「さぁ、実験体である君の力を見せてくれ。
そして私の研究の礎となってくれたまえ！」

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

Ｐｈａｓｅ－１８　～少女と黒い影　Ａ～（後書き）

如何だったでしょうか？
原作と違い、ティアナの服装は少し刺激的なもの、ということにしてあります。
果たして彼女のアピールはシオンに伝わるのか？！

シオン「それにしても、また変なところで区切りましたね。」

ハイド（旧メガシオン）「まったくだな。そのうえなんだこのグダグダ感は。時間掛かったわりに全然進んでねぇじゃねぇか。」

ちょ、蹴らないで！
僕だって頑張ったんですよ？！
でも文才の無さが此処にきて更に露呈し始めたんだよ！

シオン「そんな事を偉そうに言わないで下さい。」

ハイド「全くだ。さて、こんな終わり方だったが、次回は漸く街につくんだな？」
そうだよ。
原作と違ってスバルとティアナは少しの間別行動をとるんだけどね。

シオン「ほう。何故ですか？」
それは次回のお楽しみってやつさ。
ハイド「まぁいいだろう。
さて、毎回しつこいとは思いますが、感想・誤字脱字・リクエスト等がございましたら、遠慮なく仰ってください。」

作者の励みにもなりますので是非！

それでは次回　Ｐｈａｓｅ－１５　Ｂ　～少女と黒い影～

後期待下さい。

Ｐｈａｓｅ－１９　～少女と黒い影　Ｂ～（前書き）

もう弁明のしようも御座いません。

ホントすみませんでしたーーー！！

ヤバイ、回を追うごとに更新が遅く成っている・・・。
数少ない読者の方々に何と言えばいいのやら。

ホント、申し訳ありませんしか言えない自分の未熟さが情けないです。

今回も誤字・脱字等があると思いますが何卒ご容赦を。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ－１９　～少女と黒い影　Ｂ～

－－－－首都・クラナガン－－－－

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

「あぁ～。やっぱり此処のアイスは見た目から素敵だ～！」

街に着いた私達は、スバルの希望から良く行くアイス屋に立ち寄った。

渡されたアイスを見るスバルの目の輝きは、もの凄い。

どのくらい凄いかと言うと、瞳の中に星が見えるくらいに輝いている。

そんなスバルの様子に、思わず呆れてしまう。

「ホント。アイス好きよね、アンタは。」

「好き好き大好き～！」

「アンタって子は・・・。

・・・そういえば、アンタはこの後どうするのよ？」

受け取ったアイスに舌鼓を打ちながら、この後の事を考える。

私は事前に一緒に行動出来ない事を伝えてあるけど、スバルが如何

するのかは聞いていなかった。

「アタシ？まぁ街の中を色々と見て回ろうと思ってるんだ。
もしかしたら隠れた名店！みたいな処が見つかるかもしれないし。」

「・・・悪いわね。
私も一緒に行けたら良かったんだけど。」

「いいの！久しぶりにお兄さんと会えるんでしょ？
なら、アタシの事は気にしないで。ね？」

申し訳無く思う私に、スバルは優しい表情で背中を押してくれる。
・・・ホント、こういう時だけは鋭いんだから。

言葉には出していないけど、ホテル・アグスタでの任務の時。
あの場所で兄さんに会ってしまった私達。
当然、兄さんはあの時の失敗の事も知っているはず。
そのうえ、私は模擬戦でやってはいけない事をやってしまった。
その事について話そうとしている事を、きっとこのパートナーは感づいている。

なんて言うか、こんな事までこの子に気を遣わせちゃうなんて。
我ながら情けないわね。
でもだからこそ、今回の機会を無駄にしちゃいけないんだと思う。

「・・・ありがと。
そんなに時間はかからないと思うから、話が終わったら連絡するわ。」

「うん、分かった。」

「さて。溶けないうちに食べちゃいましょ。」

「はっ！そうだった！
って、うわぁ！溶けてきてるよぉ～！」

慌てながら五段重ねのアイスに慌てて頬張るスバル。
そんなスバルの様子を横目に見ながら、私も溶け始めているアイスを頬張る。

アイスを食べ終わった私達は、少しだけ服を見たりした後に別行動をとった。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

「う～ん。何処にあるんだろう？」

ティアナと別れたスバルは、雑誌を片手に持ちながら街を歩いている。
流石のスバルでも、目的の場所があるなら其処までの道のり等を調べるのだが。
今回は目的の場所すらがあやふやなのだ。

「それにしても、情報が雑誌に載ってる大体の場所だけなんて。
ホントにこんなお店あるのかな・・・？」

歩き初めて既に１０分近くが経つけど、全然それらしい場所が見つからない。
心中「うあぁ～、疲れてきたよ～！」等と弱音を吐きそうになるが、頭を振り、負けそうに成なる気持ちを振り払う。

「こんなところで諦めちゃ駄目だ！
コレも立派な『任務』なんだから！」

むん！と気合を入れ直したスバルは、もう一度雑誌に書かれている場所を探し始める。

本日は休日なはずの彼女が何故こんなにも真剣なのか？
そして『任務』とはいったいなんなのか？
それは今から二時間ほど前に遡る――――

「あの～、部隊長。話ってなんでしょうか・・・？」

デバイスルームを出て少しした後、スバルは一人、部隊長室に呼び出された。
突然の事で少し、いや、かなり緊張している彼女は、恐る恐る目の前の人物。
八神はやてへと質問をする。
対するはやてはと言うと、先ほどから沈黙を守っている。
その雰囲気は普段スバルたちに見せる柔和なものでは無く、研ぎ澄

まされた刃の如く鋭い。
それまで沈黙を守っていた彼女は、スバルの質問を受け、漸く思い口を開く。

「お休み前に突然呼び出してゴメンな？
でも、どうしてもスバルに頼みたい事があるんや。」

そこで一度言葉を区切る彼女は、真直ぐにスバルを見据える。
と、同時にある雑誌を目の前に差し出す。
既にページが開かれている事から、どうやらそのページの内容を見ろと言う事なのだろう。
スバルはその雑誌の内容、特に丸で囲まれた記事に目をやる。

「あの、えと・・・。この記事が何か・・・？」

困惑する彼女の様子に、しかしはやては勤めて冷静に言い放つ。

「スバル。この間クルツ君が貰ってきたケーキ、覚えてる？」

少しの逡巡の後、あぁ、といった表情を浮かべる。

「はい、覚えてます！
あのケーキは美味しかったですよね～。
って、それがこの記事と何の「そのケーキを売ってる店。名前は『喫茶　アクアエリー』っちゅうらしいんや。」っ？！」

再びのスバルの質問を遮り発せられたはやての言葉に、その表情を強張らせる。
そしてその視線を再び雑誌の記事へと向けた。

「なぁ、スバル。またあのケーキ、食べたくない？」

こうして、はやての指示プラス、己の欲望を満たさんが為、スバルは街で遊ぶのと同時にアクアエリー探しの任務に就いたのだ。
因みにこの時の二人から発せられる雰囲気は、歴戦の戦士のそれに近いものだったと、その様子をコッソリと見ていたリインは後に語ったそうだ。

――――――そして部隊は再び現在へ。

あの時食べたケーキの味を思い出したり、はやての任務を思い出したりと百面相を繰り返しながら、スバルはほとんど当ても無く目的の店を探すのだった。

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

「・・・・・・・・・。」

スバルと別れてから少し経った今。
私は『喫茶　アクアエリー』の前に来た。
いざ入ろうとすると、あまりに久しぶりな為か、僅かに緊張してし

まう。

（大丈夫。落ち着いて。いつも通りに、普通に入ればいいのよ。）

頭の中で念じながら、緊張を少しでも無くすために呼吸を整える。

よし。これで大丈夫・・・な、はず。

だ、大丈夫よね？私、どこか変じゃないわよね？

（って、あぁもう！ウジウジしてたって仕方ない！

女は度胸よ！根性見せなさいっ！）

自分自身に喝を入れた私は、入り口へと向かう。

そして今時珍しく、自動ドアではなく手動―しかも木製の扉―の扉に手をかけた。

僅かに躊躇いながらも何とか扉を開けた私に挨拶をしてくれたのは、ここ暫く会っていなかった兄さん――――

「いらっしゃいませー！『喫茶　アクアエリー』へようこそっ！」

――――ではなく、若い活発な女性だった。

・・・・誰、この女性（ひと）？

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

「君がシオン君の妹ちゃんのティアナちゃんかい？いやぁ～！話には聞いていたけど、確かにしっかりしてそうだね。
それに可愛いしねぇ、グフフ。
おおっと、折角の再会にこれ以上水をさすのは失礼だから私は席を外すよ。
それじゃあごゆっくり～。グフフフフ。」

午前の営業を終え、一度午後の仕込みの為の休みを入れたシオン達。
そんな中ウェルチは、初めて見たティアナに対してマシンガントークで捲し立てたあと、ニヤニヤしながら厨房へと戻っていった。
そうして現在、シオンとティアナは向かい合って座っている。
しかし、ティアナはシオンと目を合わせられないでいた。

「まったくウェルチは。・・・久しぶりですね、ティアナ。」

「うん。・・・全然顔出せなくてゴメン・・・。」

先ほどまで居たウェルチの様子に若干呆れたシオンだったが、直ぐに気を取り直し、柔らかい笑みを浮かべながらティアナへと話しかける。
ティアナもまた、ぎこちないながらも笑みを浮かべ、返事を返した。
が、直ぐに視線を逸らしてしまう。

そこで一度会話が途切れてしまい、なんとも言えない空気が漂う。

優しい眼差しでティアナを見つめるシオン。視線を逸らし、俯くティアナ。
暫くそんな空気が続いたが、ティアナは顔を上げ、シオンと向き合う。

「・・・何て話したらいいのか、うまく整理が出来て無いんだけど。この間の任務、ホテル・アグスタの時の事なんだけど。
・・・あの時私はやっちゃいけないミスをした。その上、そのあとの訓練とか模擬戦でも、なのはさん・・・隊長の教えや考えに背いた無茶をやっちゃったり。兄さんの教えを破ったり・・・。」

一つ一つ。言葉を選びながら。
その時の自分の過ちを、そしてその時に感じた事をゆっくりと語っていく。
ティアナの独白にも似たその言葉を最後まで聞いたシオン。
少しの間を置いた彼は、静かに口を開いた。

「ティアナがその時に感じた事は、決して間違いでは無いと思います。
ただ、そのヤリ方をほんの少しだけ間違えてしまっただけだと。少なくとも私はそう思います。」

「え・・・？」

自身の過ちを咎められると思っていたティアナは、シオンの言葉に俯いていた顔を上げる。

「本来であるなら、『実戦』において次は無い事をティアナも知っているはずです。」

シオンの言葉に、ティアナは胸が苦しくなるのを感じた。
訓練校入学前の二年間。その間に学んだ『命を懸けた実戦』。
それがどれほど過酷で。そして今の管理局のありかたとかけ離れているか。
結局自分は分かっていなかったのではないか？そんな事を考えが頭をよぎる。
しかしシオンの話はまだ終わりではなかった。

「真に愚かなのは、過ちを認めず、思考を止め、視野を狭めてしまうこと。
今回は幸運にもパートナーの子を傷つけずに済みました。
そして失敗の原因。今回においては、自身の我を通すことを考え、その事によってどんなことが起こるのか。自身の行動による全体への影響はどのようなものか。それ等の事を考えられなかった事だと思います。
・・・先ほど言った通り、今回のことは本当に幸運により大事に至らずに済みました。
ですが実戦において、『次』が無いのもまた事実。なら――――」

どうすればいいのか、分かりますよね？

シオンの言葉は、自然とティアナの心の中に落ちていく。
そしてだからこそ、自分が今なさなければならない事。
これからやっていかなければならない事が何なのか。その答えが浮かんできた。
シオンの問いに答えるように、一度だけ、しかし力強く頷いた。
再びシオンへと視線を向けたティアナの瞳には、先ほどまであった

迷いや不安といった色は無い。
その瞳は鋭く、強い決意を秘めていた。

「なら、私から言う事はもうありません。
それでももし、また迷うようなことがあれば、私の所へ来なさい。
出来る限り力になれるよう、最善を尽くしましょう。」

「うん。あ、ありがとう、兄さん。」

そこで漸く、ティアナの顔にも笑顔が戻った。
そんなティアナの様子を見てシオンは席を立つ。

「どういたしまして。さて！少し長い休憩を取ってしまいましたね。
ティアナ。午後の準備、手伝ってくれますか？」

「当然！」

厨房へと向かうシオンの後を追う様にして、ティアナも後に続く。
それから二人はウェルチも交えながら、午後の準備をしつつ話に華を咲かせた。

～Ｓｉｄｅ　？？？～

「――――さて。気分はどうかね、『　　』？」

先ほどまで眠っていた『彼』は、漸く目覚めの時を迎えた。
『彼』は自身の状態を確かめるかのように、手を握ったり閉じたりしている。

「問題ありません。『　　』様。」

「ふむ。それならば良いのだよ。」

今の所問題は無いようだが、『彼』はまだ生まれたての存在。
如何に一部の生前の記憶と力、そして新たな力を持っていても、それを使いこなすだけの技術や経験が圧倒的に少ない。
だからこそ、今回は『あの少女』を迎えに行くついでに、『もう一人』と共に経験と戦闘時のデータを学ばせる為の準備も進めてきたのだ。

「おいおい。急に呼び出しかよ。
ったく、めんどくせぇな。」

彼のデータを確認していると、部屋に件の『もう一人』がやってきた。
相変わらず野蛮な男だ。まぁ所詮は使い捨ての駒の一つだ。このくらいは大目にみてやろう。

「すまないね。だが今回は君にとっても悪い話ではないよ。」

「ぁあ　？」

「今回の頼み事なんだがね。とある『少女』を連れてきてくれないか？」

「はあ?!なんで俺様がそんな事を――――」

「まぁ最後まで聞いてくれ。それははっきり言えば『ついで』なんだ。
今回の目的は『彼』の稼動データを採ることだ。
あぁ、ある程度『彼』にも戦闘を経験させてくれればそれで構わない。後は君が好きなようにやってくれればいいさ。」

「――――!!・・・ッククク、ヒャヒャヒャヒャ!!
マジかよ?!そいつはラッキーだ!いいぜ、引き受けてやるよ!
アンタには俺様を『生き返らせてくれた』借りもあるしなぁ!!」

「ありがとう、助かるよ。
さて、『　　』。今回の目的に支障が出ない程度のものであれば彼の指示に従ってもらう。
分かったね?
あぁ。それから、コレが君の武装だ。持っていきなさい。」

「了解。最善を尽くします。」

「それじゃあちょっくら行ってくるぜ。
おい新入り!着いて来な!」

「・・・・・ふん。やはり所詮はデータの集合体にすぎんな。」

あの男が『彼』を連れて出て行ったのを確認した私は、愚痴を零す。
まぁあの男もまた、嘗てあのバグ共を滅ぼすためにエターナルスフィア内に残っていた残骸データを有効利用しようと、とっておいたものから生まれた『粗悪品』にして『紛い物』。

「さて・・・。『彼』はあの男、隠者相手に何処まで戦えるのか。」

あぁ、今から楽しみでしかたがない！
この戦闘を切欠に、これからより本格的な『神判』が始まるのだ！

「汚らわしい作られし命達よ。
精々残り僅かな時間を楽しむといい。
ククク、ハーハッハッハッ！！」

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

ーーーーー？？？ーーーーー

「さぁて。いい加減吐いてもらうで。
このデータに載っとる女の子は何処や？」

　此処はとある研究施設。
其処のメインコントロールルームに、惨太とスティーブンがいた。
彼等の足元には、数十人の科学者や警備員が転がっている。もっとも、全員が気絶しているだけだが。
　その中で一人だけ意識を刈り取らずにいた学者を問い詰め、今回の目的である『少女』の身柄を保護する為、その所在を聞きだしていた。

「そ、それが・・・。目的の『聖王』のクローンは途中でガジェットに襲われたらしく、此方には到着していないんだ。
ほ、本当だ！信じてくれ！！」

　震える声で科学者の一人が惨太の質問に答える。
その様子から二人は、この男が言っている事が本当であるとみた。

「それでは、肝心のその『少女』を乗せていた車はどの辺りにある？」

「お、恐らくは――――――。」

　それから必要な情報を入手した二人は、男を気絶させ、管理局へと施設の情報を流す。
目的を果たした二人は、『少女』を保護すべく行動にでる。
　施設を出た後も、二人は怒りに満ちていた。
そして同時に決意していた。

何としてでも『少女』を救ってみせると――――――――――――

ーーーーおまけＰＡ　【会話後　厨房にて】ーーーーー

「それにしてもティアナちゃん。
結構大胆な服を着てるねぇ。」

「そ、そうですか？べ、別に普通だと思いますけど。」

「ふ～ん、そうなんだぁ～。へぇ～。
ねぇシオン君！ティアナちゃんを見て如何思う？」

「ちょ、ウェルチさん！」

「ふむ、そうですね・・・・。
うん、十分似合ってると思いますよ。」

「おぉーー！！」

「あ、有難う。兄さん。」

「それにしても、最近の女の子は結構大胆な服装をするのですね。
兄として、ティアナが悪い男に声をかけられないか心配です。」

「・・・・・・・。
ティアナちゃん。道のりは長いだろうけど、頑張って。」

「・・・・・はい。」

「?何故そんな目で私を見るのですか?」

「「・・・・・・はぁ。」」

相変わらずのシオンに、二人は深い溜め息をついた。

Ｐｈａｓｅ－１９　～少女と黒い影　Ｂ～（後書き）

如何だったでしょうか？

はい。最後の方で高笑いしていた『俺様』口調の人。
ええぇ。あの人です。最高な噛ませ犬ですね（笑）。

あ、ＳＯ３知らない人は分からないかな・・・。
因みに分かった人は次回あたりまで何も言わずに待っていてください。
頑張ってあの人を再現出来るよう頑張りますので。

シオン
「誰ですかあの男は。私達も知らないのですが。」

ハイド
「どんなヤツかは知らんが、面倒な相手には違いないだろう。」

正体は次回あたりに明かされる・・・かな？

ハイド
「未定かよっ？！」

私の文才の無さは誰の追随も許さないほどだからな！
纏めきれなかったらそうなるさ！

シオン
「自身満々に言わないで下さい。
というかはやてさんが段々おかしくなってきてますよ。

私の料理には人格破壊のファクターでもあるのですか？」

いあぁ、ただでさえ文才が無いと少しくらいギャグっぽい要素が必要なんだよ。

お笑いといえば関西人という私の偏見から、はやてに白羽の矢がたったのさ。

ハイド

「彼女にはいい迷惑だな。

さて。次回はどうなるんだ？」

詳しくはネタバレになるから話せないけど、遂に聖王様との邂逅です！

ここまで来るのにスゲェ時間掛かった気がするよ。

と言うことですので、次回も楽しみにしていてください！

シオン

「『ＰＶアクセス２０万記念書いてないくせに何言ってんだこの野郎？』と思う方もいらっしゃると思いますが、此処でアンケートです。」

ハイド

「もうすぐ３０万ヒット突破しそうと言う事なので、もし『あのキャラのＰＡ（プライベートアクション）が見たい！』という要望があったら、感想若しくはメッセージにてお送り下さい！」

また、普通の感想等も待ってますので、何かありましたらドンドンお願いします！

最後になりましたが。

ラグナシア先生、錬君。
今回の『少女と黒い影』が終わり次第、後書きでの出演ということでよろしいでしょうか？
メッセージ若しくは感想にて返事をください。

それでは次回予告です。

次回　Ｐｈａｓｅ－１５　Ｃ　～少女と黒い影～

御期待下さい。

Ｐｈａｓｅ－２０　～少女と黒い影　Ｃ～（前書き）

またまた更新が遅くなってしまいました。申し訳ありません。
ここで、言い訳というなの謝罪を。

えー、実はですね、こんなに更新が遅れたのは私生活でちょっとした面倒が起きたんです。いや、自分ではかなり大変だったんですよ、これが。

四月に入って直ぐに、バイトで同期だった子が辞めちゃったんですよ。
よりにもよって少し前に、大学四年だった方が二人も辞めたばかりだったため、人数が減っていたんです。そのため、急遽シフトの組み直しが行われたわけです。

そんなこんなで週６でバイトが入ったのが暫く続き、更には大学の課題を提出しなければならない状況・・・。

そのため執筆に時間を割くことが出来ませんでした。
ゴールデンウィーク中ですが、あまりに疲れたために一日を完全に自分の為に使ってしまい、また、他の日はバイトのため殆ど時間が取れず、何とか進めた結果が、今回の話です。
そのため、かなりグダグダです。無駄に長いです。
あぁ、文才が欲しい・・・。

因みにゴールデンウィーク中に使った一日には、劇場版”文学少女”を観に行きました。
“文学少女“をまだ観ていない方は、若干オリジナルストーリーを観る感覚でみたほうが楽しめるかもしれません。すみません、どう

でもいいことですね。

と言う事で、以上。言い訳と言う名の謝罪でした。

今回も例の如く誤字脱字が多いと思いますがご容赦を。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ－２０　～少女と黒い影　Ｃ～

～Ｓｉｄｅ　ギンガ～

「陸士１０８部隊、ギンガ＝ナカジマ陸曹です。
現場検証のお手伝いに参りました。」

私は、緊急で入った事件の連絡を受け、現場へと着いた。
そこでは、トラックが無残に横転している。
ただの横転事故であるなら、態々私達の所まで連絡はこない。
にも関わらず連絡が来た。つまり、『ただの』事故では無いという事。

「なんでも、トラックが『何か』に襲われたらしく・・・。
更には、中の荷物が勝手に爆発したとか。」

「運んでいた荷物は缶詰や飲料ボトル・・・。
爆発するような物ではありませんよね。」

「それと、下の方に妙な遺留品があってですね・・・。」

妙な遺留品？見識官の人の言葉が引っかかった私は、彼等の視線の先へと足を運ぶ。

「・・・！！」

その光景に思わず息を呑む。
なぜなら、辺りには原型を留めてはいるものの、破壊されたガジェットの残骸があったから。
そしてその先にある物を見て、更に衝撃を受けた。

「これは・・・生体ポッド?!」

ガジェット。そして生体ポッド・・・。
この二つに関係する人物は、今の所一人しかいない。
恐らく今回の事件には・・・・・。

~Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ~

~Ｓｉｄｅ　スカリエッティ~

「有難う、ルーテシア。其方に私の娘達も何人か向かわせるから、安心したまえ。」

《うん。分かった。・・・それじゃあ、またね?》

「あぁ。気を付けるんだよ?優しいルーテシア。
・・・ウーノ。追跡任務に向かわせるメンバーの選出は君に任せるよ。
私は少しやる事があるのでね。少しの間、通信は控えてくれたまえ。」

《分かりました。余り御無理はなさらないように。》

「分かっているよ。それでは、頼んだよ。」

私は先ほどウーノから伝えられた『マテリアル』とレリックを護送していたトラック。
それらを追跡していたガジェットが破壊された報せを聞いて、僅かに胸が躍った。
どうやら破壊したのは、局の魔導師ではないようだからね。
『当たり』であるのなら、これほど嬉しい事は無い。

先ほど、どうやら連絡を聞いていたらしいノーヴェがやってきたが、説得の末、今回は諦めてもらった。これで今の所、然したる問題は無いだろう。
ただ、問題があるとするならば。

「くっ・・・。またか・・・。」

最近、如何いう訳か増えてきた原因不明の頭痛。
コレが現時点での問題点だ。

「一体なんだというのかね、コレは・・・？」

頭の内側から響いてくるような、鈍く、そして断続的なこの痛み。
それと同時に『何か』を思い出しそうになる。

「だが私は『何』を思い出そうというのだ・・・？
私には嘗ての楽園、アルハザードの叡智。それしか無いと言うのに。
」

そう。私の中にある記憶など、研究の果てに掴んだ数々の技術。
そして、様々な分野において、現代においても尚最高と言われるほどの物を有しているにすぎない。
だというのに、これ以上私が『思い出す記憶（モノ）』とは何なのか？
そもそも、本当にそんな『記憶（モノ）』があるのか？

「ぐぅ・・・！今日は、一段と強いな・・・。」

コレまでの中でも一番酷いのではないかと思えるほどの痛みが、私を襲う。
それと同時に、私の頭の中でノイズが奔ったような映像が流れる。

――――何だ、コレは？

嘗ての記憶だろうか。私は誰かと話をしている。
相手は女性のようだ。私と同じく白衣を着ている事から、彼女もまた、科学者なのだろう。
だが――――

――――ありえん。こんな事は、ありえん。
だと言うのに、私は目の前の女性を知っている？

白衣の女性は、愛おしそうに腹をさする。
おそらく子を成しているのだろう。僅かではあるが、膨らみが分かる。

なぜ私は、この光景を懐かしいと感じている？
何故私は！この光景が堪らなく苦しいと感じている――――？！

困惑する私だったが、そこで映像は途切れ、次第に痛みも引いていく。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・。今のはいったい・・・？」

今までに無かった症状。これは一体何なのだろうか？
そしてこの映像（きおく）は、私に何を思いださせようというのだろうか？
結局答えは出なかったが、この問題は一時置いておくとしよう。
今はやらなければならないことがあるのだから。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　シオン～

「それではティアナ、気をつけて。」

「また色々とお話しようねぇ～♪」

「はい。
それじゃあ、兄さん、ウェルチさん。また近いうちに顔を出すから。
」

同僚の子と合流することになっていたティアナを見送った私達は、
午後の営業の準備をする。ある程度準備が出来た私は一度部屋へと
戻り、着替えを済ませる。

「やっぱり、悪い予感は当たっちゃった？」

戻ってきた私の姿を見て、先程まで明るかったウェルチは、表情を暗くする。

「……残念ながら。つい先程、惨太からファーウェルにメッセージが送られていました。

以前から調査していた人造魔導師の実験。その被験者たる存在が、どうやら運び出されたそうです。

……しかも最悪な事に、被験者を乗せたトラックをガジェットが襲撃、被験者は行方不明だそうです。」

「その被験者って、もしかして子供・・・？」

ウェルチの問いに、私は沈黙を肯定として返す。

彼女は怒りと悲しみに顔を歪ませ、拳を固く握り締める。

「心配しないでください。対象の子供は、私達が保護、最悪の場合でも奴等には渡しません。

ですから、貴女は店をお願いします。」

「・・・まったく、しょうが無いなぁ～！

よぉし！店は私にまかせなさ～い！その代わり、被験者（その子）の事、お願いね？」

目に涙を浮かべた彼女はしかし、努めて明るく振舞う。

・・・彼女の気持ちを無駄にしてはいけない。その為にも。そして被験者の子の為にも、絶対に保護しなくては。

『俺』は店を出て、焦る気持ちを抑えながら予測地点へと向かった。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

結論から言ってしまうと、シオンは被験者の子供を誰の目にも留めずに保護する事は出来なかった。
それは偶然か、それとも必然か。
図らずも同じ境遇にあるエリオと、共に休暇を楽しんでいたキャロは、路地裏で被験者たる少女と出会う。
事体を重く見た二人は全体通信で救援を呼ぶ。そして、救援を呼んでから数分後の現在――――

「エリオ！キャロ！」

「っ！スバルさん、ティアさん！」

発見した少女の応急手当とレリックの封印処理をし終えた二人のもとへ、スバルと途中で合流したティアナが到着した。

「この子か・・・。また随分ボロボロに・・・。」

「地下水路を通って、かなり長い距離を歩いてきたんだと思います・・・。」

キャロの言うとおり、　少女の状態は一目見ただけでも酷いものだ。
そして更に、封印処理を終えたケースを見た二人は、他にもケースがある可能性に表情を険しくする。

（普通じゃありえないこの子の状態。それにレリックを持っている事・・・。
多分この子は何かの事件に巻き込まれたか・・・。いや、寧ろ中心人物といっても過言じゃなさそうね。
それにしても、厄介な事になったわね・・・。）

エリオ達から説明を聞きながらも、ティアナは素早く状況を分析する。
先ほど確認した通り、恐らくレリックは最低でももう一つある。つまり、確実に残るレリックを狙ってスカリエッティ一味も動きを見せるだろう。
そして推測ではあるが、この事を兄であるシオンも情報を得ているだろう事。

（最悪の場合、スカリエッティ一味に加え、兄さんとも戦わないといけなくなるし、執行者達とも戦わないといけなくなる。ホント、洒落にならないわね・・・。）

これから起こるだろう戦闘を想定したティアナは、人知れず溜め息をつく。

それから少し経ったあと、なのは達隊長陣も合流した。
ヴァイスの操縦するヘリに乗ってきたシャマルは、すぐさま少女の容態を確認。異常が無い事を確認する。
なのは達隊長陣は素早く指示を出し、フォワードの四人は地下を

目指した。

彼女達が地下へ向かい駆け出した後、シャマルはなのはに少女をヘリへ運ぶように頼んだ。

その時、なのはの少女を見つめる目は、何処か悲しげであった。

その事にフェイトやシャマルは気付く事はなかった。

なのは達が少女を保護している頃、ロングアーチでは現場周辺の状況確認と平行して、演習に行っていたヴィータ、そして別件捜査中であったギンガとの通信を行っていた。

高速でキーを叩き続けながら、クルツは緊張感が漂うその場の様子を見て思う。

（前回の戦闘や地球への派遣任務、そしてティーダ先輩の死の真相。これらの事から、皆しっかりとしてきたようですね。）

そう。コレまでの少ないながらも中々に濃い経験を積んできた六課一同は、発足当時よりも大分部隊として機能するようになってきた。もっとも、クルツを含めまだまだ成長過程である事は変わりの無い事だが。

それよりも、とクルツはチラリと視線を後ろに向ける。

その視線の先には、ギンガからの説明を聞きながらも、いつも異常に険しい表情を浮かべるはやての姿があった。

（部隊長・・・。きっとスカリエッティの事や執行者（エクスキューショナー）の事で色々と考えているんだろうな・・・。僕も頑張らないと！）

そんな彼女の様子を見たクルツは、気合を入れ直し、周辺の捜索にあたるのだった。
そして、当のはやてはと言うと――――

（ギンガの話や現場にガジェットが出てきたことから、十中八九スカリエッティが関係している。
・・・よくもこんな大事な時に面倒事を運んできよったなぁ。
折角・・・。折角あのケーキの手がかりが掴めるかもしれへんって時に・・・。
スカリエッティ、許さへんでぇ・・・！いずれとっ捕まえて合法的に地獄を見せたるわ・・・！！）

違う理由でも怒りを感じているのであった。

～Ｓｉｄｅ　シオン～

「惨太。詳しい状況説明をしてくれ。」

店を出た俺は、クラナガンの路地裏に入りながら、もう一度情報を整理する為に惨太と連絡をとる。
アイツの事だ。恐らく被験者の居場所について何かしら見当がついているだろう。

《了解や。ついさっき、例の被験者を乗せたトラックの所へスティーブンはんが向かってくれたんや。まずは現場の状況から説明するで。》

「あぁ。頼む。」

《現場には被験者の女の子の入っていたとされる生体ポッドが残されておったみたいや。
更には調査中の局員の話しによると、『何か』を引き摺った痕が残されていたらしいんや。
因みに痕跡は地下水路に続いとるみたいや。
それから、その『何か』なんやけど。それについてはもうこっちで調べてある。
中身はどうやら少女と一緒に運ばれる予定やったレリックらしいで。
数は二つ。
少女とレリックに関して言えば、その痕跡を追って行けば探し出せるはずや。》

「そうか。それにしても、流石は情報屋だな。もうそこまで調べているとは。」

《当然や！こっちはこれで食ってるんやからな。》

「本業は行商人じゃなかったのか？」

《そこはツッコまんといてっ！悲しくなってくるやんか！》

「悪かったよ。ちょっとした冗談《割り込み失礼する》っ！スティーブンか」

惨太の情報を聞き、いざ地下水路に入ろうとした時に、スティーブンから連絡が入った。
随分唐突な連絡の仕方から、何かしら面倒な事になったのは想像がつく。

《現在地下水路を捜索中なんだが、少々面倒な事になった。
どうやら既に例の少女（ターゲット）は管理局に保護されたらしい。
更にはレリックの一つが何処かに置き去りにされたらしく、その捜索に局員が数名降りてきたようだ。
何度か爆発音が聞こえていてな。既に戦闘中のようだ。恐らくはガジェットだろう》

彼の情報を聞いて、思わず舌打ちをしてしまう。
こんな時に後手に回ってしまうとはな・・・。
僅かに後悔した後、すぐさま気持ちを切り替えた俺の耳に、独特の音が聞こえてきた。
発生源だろう方角を見ると、一機のヘリが飛んで行くのが見えた。

「たった今、ヘリが飛んでいくのを確認した。
恐らく少女はあのヘリにて搬送されたのだろう」

《今回はちょっとばかり遅かったみたいやな・・・》

《悔んでもどうにもならん。今は出来る事をするしかない。
シオン。私はレリックの捜索の為に地下に残る。君は――》

「分かっている。俺はヘリの護衛に回る。
このまま奴等が引き下がるとは思えんからな」

《了解した。では通信を切る。また後で会おう》

《そんならワイは、現場周辺の状況確認と通信でも傍受しとるわ。
重要そうな事があった場合、直ぐに連絡するで》

「頼む。・・・あまりやりすぎるなよ？」

《大丈夫やって！それよりもシオンはんの方が心配や。
・・・アレ、なるべく使わんようにな？》

「・・・・・あぁ」

分かっているよ、と答えた後、俺達は通信を切った。
さて。地下はスティーブンがいれば取り敢えずは問題ないだろう。
先ほど決めた通り、俺はヘリの護衛と周辺の警戒だな。
・・・スカリエッティだけでなく、この状況を利用して執行者達も動く可能性は十分あるだろう。

「ファーウェル。今回は最初から１ｓｔモードを起動した状態で行くぞ」

《了解しました。Ｓｅｔ　Ｕｐ.》

やるべき事が決まった俺は、ファーウェルを起動させバリアジャケットを身に纏う。その上に『護り屋』としてのコートを着込み、俺は人目に付かないように街を駆け抜け、ヘリの方向を目指す。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

途中でガジェットとの遭遇をした後、ギンガさんと合流した私達は、今は最下層だろう広い空間に出た。レリックの反応はこの辺り

から出てるのは間違いないみたいね。となれば手分けして探すしかないんだけど。

（それよりも――――）

僅かに視線をスバルに。それからエリオに向ける。

ギンガさんと合流する最中に聞いた説明から、さっきの少女は人造魔導師素体である可能性が出てきた。

その話している時のスバルは、何時もの明るさは無く、何処か辛そうな空気を纏っていた。

・・・無理も無い、か。あの子の、そしてギンガさんの事を知っている私は、私ではどうにも出来ない歯がゆさに苛立ちを募らせる。

そしてエリオも、ほんの僅かな変化だったけど、何処か辛そうにしていた。

この子にもきっと、何か言えない事があるんだろう事は想像がついた。でも『今』はまだそれを聞く時じゃないんだと思う。

この子が話そうと思う時まで、私は、私達は待つしかないのだから――――

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

フォワード四名が地下水路でレリックの捜索している中、その上空ではなのは、フェイトが幻影が混在したガジェットの掃討に当たっていた。その数は尋常ではなく、空を覆いつくすのではないかと思わんばかりの数が、彼女達の行く手を阻んでいた。

この状況から、スカリエッティの狙いが地下のレリック若しくはヘリの少女であると考えたはやては、遂に限定解除に踏み切り、自身がガジェット掃討にあたり二人をヘリに向かわせることにした。

一方――――

「よしっ！さっさと片付けて他のフォローに回るぞ！」

「はいです！」

演習場から直接現場に向かっていたヴィータは、途中でリインと合流。近くのガジェットを破壊しながら、地下の新人達の元を目指していた。

「あんだけのガジェットが出てきてるんだ。多分狙いは地下かヘリのどっちかだろうな。ヘリにはなのは達が向かってるから大丈夫だろうけど・・・」

「問題は地下の新人達、ですね」

「あぁ。いくらアイツ等が強くなってきたとはいえ、また何時あのアンノウンが出てくるか分からねぇからな。その事も考えると、なるべく早く着かねぇとな・・・」

普段は新人達に対して厳しい態度でいる彼女だが、それは本当に彼女達の事を考えているからこそである。そして今も、アンノウン一執行者（エクスキューショナー）一の危険性から、焦る気持ちを抑えながら地下を目指していた。

隣のリインもまた、普段の明るい表情は無く、険しい顔つきをしている。最悪の事態を想定しつつ、暫く飛行を続けていた彼女達は、漸く地下へと続く入り口を見つけた。更に速度を上げ、入り口に入ろうとしたその時――――

「――――っ！くそっ！！」

突如飛来して来た無数の魔力弾に気付いた彼女は、咄嗟にシールドを展開する。着弾による爆煙と霧散して行く魔力弾により、辺りが包まれる。そして煙が晴れると、流石歴戦の勇士というべきか。突然の奇襲を防ぎきった二人の姿があった。元々の防御力の高い彼女のシールドはその役目を果たし、彼女とリインを守りぬいた。だが、そんな事よりも、彼女には気になる点があった。

「今のは魔力弾?!って事はガジェットじゃなくて魔導師の仲間がいるのか・・・?」

「ヴィータちゃん、あそこですっ！」

リインが指差す方向に目を向けると、其処には隠者と同じような黒いコートに身を包み、二丁の銃型デバイスを握った人物が居た。

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

何処かで油断していたのかもしれない。

レリックを発見した私達だったけど、其処へ紫の髪をしたキャロと同じくらいの女の子、そしてその子の使い魔か何かだろうか。その子を守る異形の存在がいた。一度回収したレリックを奪われた私達だったけど、私はオプティックハイドで姿を消して彼女に近づき、ケースを奪取、形勢逆転。かと思った。

しかし直後に眩い光と轟音が鳴り響き、少女に距離を取られてし

まった。そして少女とその守護者の側には、融合騎だろう存在がいた。

（最悪ね。ケースはこっちにあるとはいえ、さっきの攻撃をしたのは、恐らく融合騎だろう存在。数ではこっちが有利だけど、戦力的には五分か、僅かにこっちが劣るかってところね・・・）

失敗を悔いてもしょうがない。ましてや自棄になるなんて以ての外だ。前みたいなことは絶対にしちゃいけない。だからこそ私は、出来る限りの情報分析を行う。そして結論が出た。

《皆、良く聞いて。・・・正直、数ではこっちが有利だけど、実力的には僅かにあっちが上手だと思う。私達の任務はあくまでケースの回収。此処は無理をせず、撤退しつつ相手を惹き付ける事を最優先にして。そうすれば――》

《こっちに向かってきてくれてる副隊長とリイン曹長と合流！だよね？》

《えぇ。今はソレが一番だと思うわ。だから絶対に無茶はしないこと！いいわねっ？》

《了解！！》

私達は頷きあい、いざ行動に出ようとしたその時だった。

「フリーズ！！」

男の声と共に、私達と、そして少女達の元に無数の光弾が降り注いだ。その攻撃に私は驚愕した。

一つは、私達だけでなく少女達にも攻撃をしたこと。この事から、今の攻撃をしたのは恐らく第三勢力で間違いないからだ。そしてもう一つは、威嚇射撃と呼ぶにはあまりにも威力が強力だった。降り注いだ光弾は、地面や柱を容赦なく抉り取っていった。そう、これはまるで――――

（まさか今の、殺傷設定?!いや、それだけじゃないはず。この威力から見て、もしかしたら質量兵器かもしれない――――!!）

「俺様は寛大だからな！一応警告をしてやったんだぜ、有難く思えよ?

っとまぁそんな事は今はいいとして、だ。そのレリック、とかいうのはなかなかのお宝らしいな。と、言う訳でだ、大人しく渡してもらおうか。素直に従えば、楽に殺してやるぜぇ?」

私達は、互いに警戒しながらも、声のした方へと視線を移す。するとそこには、マシンガンのような銃を持った男がいた。男は灰色に近い髪を逆立てており、服装は体にフィットするようなもので、胸から腹の辺りにはボディアーマーが装着してある。そしてその顔は、何がそんなに可笑しいのか、厭らしい笑みを浮かべていた。だけど私は、その表情に見覚えがあった。

（コイツの表情。何処までも他者を見下すような、そして恐怖を感じる表情を見る事に喜びを感じる表情。これは――――）

――――人を殺すことを楽しんでいる者のものだ。

訓練校入学前の二年間で、裏社会の事をある程度知った私は、裏の人間にはどんな人間がいるのかを少しではあるが分かるようになっていった。そして目の前の男はその中でも最悪な、人を殺すことを何とも思わない。寧ろ楽しむ傾向にある人間であることが分かった。

（コイツは危険だ。まともに相手をしちゃいけない。性格もそうだろうけど、何よりこの男――強い・・・！）

頬を冷や汗が伝うのを感じる。目の前の男はそれだけの威圧感を放っている。可笑しな話だけど、キャロが気絶していて良かったわ。こんなヤツを見たんじゃ、泣き出しかねないわね・・・。

どうにかしてこの状況を切り抜けようと考えを巡らしていると、痺れを切らせたのか。男はもう一度私達に向かって威嚇射撃を行った。

「おいおい、俺様が話しかけてるんだぜ？ちゃんと答えろよなぁ。まぁ今の俺様は久しぶりに自由に動けて機嫌が良いし、お前達は中々の上玉だしなぁ・・・。決めたぜ！殺すのはヤメだ！お前達を俺様の奴隷にしてやる！有難く思えよ？今回はそれで特別に許してやるよ！」

「・・・貴方は何者ですか？私達は時空管理局です。詳しい事情を――」

男のふざけた言葉を無視してギンガさんが男に対して質問をするが、男はその言葉を遮るように発砲した。弾丸はギンガさんの顔を掠めるのではないか、と思うぐらいギリギリ横を通っていった。そして発砲した時の男の表情は、先ほどまでとは打って変わって、凍えるように暗く、鋭かった。

「俺様に命令するんじゃねぇよ。まぁ、さっきも言ったが、今の俺様は機嫌がいい。それにこれからご主人様になる俺様の名前を知らないのは確かに困るなぁ」

再び厭らしい笑みを貼り付けた男は、一人で唸りだす。だが対照的に私達は戦々恐々としていた。先ほどのギンガさんに対する行動から、この男はただの気まぐれで今は私達に攻撃をしていないだけだということ。そして、その気になれば、一瞬の躊躇いも無く、私達を殺すだろう事を――――

「よぅし、決めたぜ！お前達はこれから俺様の奴隷になるんだ。ご主人様の名前を知らなきゃいけねぇからな、特別に教えてやる！いいか、良く聞けよ？
俺様の名は＜ノートン＞様だ！！Ｄｏ　ｙｏｕ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ？」

こうしてこの男―ノートン―との邂逅を果たした私達。私はこれから起こるだろう戦いを想像して、無意識の内にケースを強く抱き寄せていた。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

【おまけＰＡ　～その頃のはやては？～】

「雑魚が！かかってこんかい！まとめて消し飛ばしたるわ、ボケェ！！」

《や、八神部隊長！落ち着いて下さい！》

「ケーキが！あたしの、あたしのケーキがぁぁ！！死に晒せやぁぁ！！（何言うとんねん！あんないたいけな少女を利用しようとしてるんやで？コレが落ち着いていられるかい！！）」

《ちょ、本音と建前が逆になってますよ！てか、まだケーキの事諦めて無かったんですか？！》

「当たり前や！食べ物の恨みは恐ろしいんやで？！それよかシャーリー！さっさと次弾照準準備せんかいっ！！（人を馬鹿にするんも大概にしいよ、クルツ君！あたしがそんな理由で怒るわけないやろっ？！さぁ、シャーリー！次の目標、照準お願いなっ！！）」

《は、はいぃぃぃっ！！》

《・・・・・誰かこの人止めてください》

《・・・・・出来たら苦労しませんよ》

「しゃあぁぁっ！フレースヴェルグー！！（しゃあぁぁっ！フレースヴェルグー！！）」

Ｐｈａｓｅ－２０　～少女と黒い影　Ｃ～（後書き）

如何だったでしょうか？
えぇグダグダです。申し訳ありません。
今回も誤字脱字等多々あったと思いますが、ご容赦を。
そして指摘等ございましたら、遠慮なくおっしゃってください。

シオン
「まったくですね。そして最後のあれはなんですか？もはやはやてさんの名を語る何者かですよ」

ごめん、何かシリアスに疲れたっていうか、なんていうか・・・

ハイド
「ところで作者、一つ聞きたいんだが。何時にも増して今回の後書きは駆け足だな。どういうことだ？」

よくぞ聞いてくれた！実は今回！
祝！初後書きゲストが来てくださいました！

シオン＆ａｍｐ；ハイド
「な、なんだってー？！」

大丈夫、僕が一番驚いているから（笑）
それでは御呼びしましょう！
『魔法少女リリカルなのは　光を継ぐもの』より、主人公の御門錬君です！！

錬

「どうも、御門錬です」

シオン&ハイド
「初めまして、錬（君）」

ありがとう！来てくれてありがとう！！

錬
「うわっ！ちょ、近いんですけどっ？！」

ハイド
「落ち着け作者」（鳩尾に鋭い一撃）

ぶるぅぁぁぁあっ！！

錬
「だ、大丈夫なのか・・・？」

シオン
「気にしなくて大丈夫です。さぁ、どうぞこちらへ。
それからこちらをどうぞ召し上がってください」（紅茶とお茶菓子）

錬
「あぁ、ありがとう。
・・・おぉ！俺はお茶に五月蝿いほうだが、これはなかなか。こっちのお菓子も美味いな。流石、喫茶店を開いているだけのことはある。申し分ない実力だ」

ハイド
「そういってくれると助かる。遠慮なく食べてくれ」

錬
「そうさせてもらうよ。
ところで、今回の話でまさかの咬ませ犬（笑）。ノートンが出てきたな。
しかもゲームと違って少し強そうな雰囲気だし」

シオン
「そうですねぇ・・・。作者、なぜ彼を出したのですか？」

ゲェッ、ゲハァッ！！・・・え？なぜって・・・、咬ませ犬だから。
うん、それだけだな。

ハイド
「それだけかよ？！」

錬
「何かこの勢いだと、他にも死んだキャラが出てきそうだな。主にスターオーシャンから。
それに、スカリエッティも原作とは随分と違うみたいだが」

あぁー・・・。まぁ、一応出すつもりだよ。良い具合に強そうで弱いキャラが序盤には出てくるからね。逆に中版以降は下手するとこっちがヤバイ事になる相手ばかりだけど（笑）

スカさんについては、なんていうか。ほら、原作でも彼って最高評議会が作った（？）っぽいことは言ってるけど、今の彼の『元になった彼』って描かれてないでしょ？
だから、独自の設定を加えて、彼の過去を作ろうと思ってさ。過去の無い人間なんていないわけだし。

シオン
「なるほど。そういえば、ヴィータさんのところにも何者かが現れましたよね。彼もスターオーシャンからですか？」

う～ん、そこは黙秘ってことで。つまらなくなるから、ってか。もう誰だか分かったかもしれないけど、そこは黙っておいてくれると助かります、はい。

ハイド
「自ら墓穴を掘っている様な気もするが・・・まぁいいか。ところで、錬の世界では俺達の世界の他に、色々な作品の技とかが出てるよな」

錬
「そうだな。やっぱさ、ゲームとかの技って意外と出来そうなやつがあるだろ？で、実際やると意外と使えるという」

なるほど。これからも色々と技も増えそうで楽しみだね。
勿論、物語の内容も楽しみだけど

ハイド
「あぁ。一味違った転生者、御門錬。その物語が今後どんな展開を向かえるのか・・・。目が離せないな」

僕がヴァカだからかもしれんが、今後の展開が読めないっていうのはやっぱり楽しみの要素になるよね。
っと、そろそろ時間ですので、錬君。最後に番宣をどうぞ。

錬

「もうそんな時間か・・・。それじゃあ始めるか。
俺が出ているのは『魔法少女リリカルなのは　光を継ぐもの』という作品だ。

遥か昔……気が遠くなるほど遙かな昔……かのアルハザードのあった時代……大きな戦いがあった。　それは、後に黒王と呼ばれるものが起こした幾度も続く悲しき戦い。　そして、遙か未来……伝説は語る……黒き王が蘇りしとき、白銀の戦神が舞い降りる……と……　時は、「闇の書」事件から4年後……第97管理外世界現地惑星名「地球」海鳴の地にて戦いを宿命づけられた悲しき運命を背負いし戦士の物語が幕を開ける　繰り返される戦いに果たして終わりはあるのだろうか

今後の俺の戦いに期待していてくれ」

錬君、今回はどうも有難う御座いました!
お土産にこちらをどうぞ

＜アクアエリー　クッキー詰め合わせ&ケーキ等のレシピ＞

錬
「レシピは公開しても大丈夫なのか?!」

シオン
「まぁ、あくまで一部を載せているだけですから」

ハイド
「後は欠けている部分は自力で見つけてくれ。もしかしたら、レシピとは違った新しいレシピが生まれるかもしれんがな。
錬の腕なら問題ないだろう」

是非とも元の世界で皆さんに振舞ってください。

錬
「あぁ、そうさせてもらうよ。それじゃあシオン、ハイド。お前達も頑張ってくれ」

シオン&ハイド
「当然！」

それじゃあ転送するよー。転送！！

シオン
「さて！彼に負けてはいられませんね。私達も頑張らねば」

ハイド
「そうだな。とりあえずは、帰ったら明日の店の準備だな」

がんばれー。
それでは、今回はこのへんで失礼します！

最後に次回予告を

次回　魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～Ｔｉｌｌ　Ｔｈｅ　Ｅｎｄ　Ｏｆ　Ｔｉｍｅ～
Ｐｈａｓｅ－１６　Ａ　～傭兵　護り屋　情報屋～
御期待下さい

ラグナシア先生！こんな感じになってしまいましたが、どうでしょうか？

錬君の口調とか、大丈夫だったでしょうか？
やはり他作者様のキャラを表現するのは難しいです・・・。

Ｐｈａｓｅ－２１　～傭兵　護り屋　情報屋　Ａ～（前書き）

お久しぶりです、アシェーリトです。
本当に久しぶりの本編更新となります。

そのわりには、相変わらず遅々とした進行具合となってしまっているのが情けないです。

ですが、今後も出来るだけ更新出来るよう頑張りたいと思いますので、どうか生暖かい目で見守ってやってください。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ－２１　～傭兵　護り屋　情報屋　Ａ～

――――地下水道――――――――

今は廃れてしまった廃墟が並び立つビル群。その真下にある地下水道では、絶え間なく轟音が鳴り響いている。それは、終わりなど無いかのような勢いで吐き出され続ける銃の炸裂音と、その弾丸が周囲を容赦なく抉り、砕き、破壊していく音だった。

そして、その原因たる銃を乱射し続ける男は、其の様子に全く悪びれる様子は。戸惑う様子は欠片もない。それどころか、その顔を見るものに恐怖を与えるような歪んだ笑みを浮かべている。

「良いよなぁ、飛び道具ってのはよぉー！！」

この男――ノートン――の出現により、先ほどまでレリック回収の任務を果たそうとしていた六課前線メンバー四人と一匹。そして、彼女達と対峙していた少女と一匹の召喚虫、そして融合騎は。どちらも物陰に身を潜め、その銃弾の雨を凌いでいた。

そんな彼女達の様子に更に興奮したのか、ノートンはまるで狩りを楽しむかのように銃弾の雨を降り注ぎ続ける。

ノートンのこの行為は、一見すればただの精神が狂った男の奇怪な行動と思えるのだが、実際はそうではなかった。いや、ノートン本人は半分ほど本来の任務を忘れかけていたのだが。結果としてこうして彼女達を仲間と合流させないという【妨害】と、彼の【上にいる存在】が望んだデータ収集の役目を見事やってのけていた。も

っとも、この場で襲われている彼女達には知り得ないことではあるのだが。

～Ｓｉｄｅ　ティアナ～

《皆無事？！》

絶え間なく続く銃撃音で声が届かないと判断した私は、即座に念話で無事を確認する。
この状況下で正確な連絡を取るにはこの方法しか無い。

《私は大丈夫！隣にスバルもいるわ！この子も平気よ！》

《僕とキャロ、それからフリードも無事です！》

直ぐに返って来た返事に、内心ホッとする。

あの時直ぐに散開を支持した私達は、それぞれがバラバラな方向へと逃げ続けた。結果、何時の間にかスバルはギンガさんと。エリオはキャロと合流出来たみたい。

それから念話で互いの位置を確認し合うが、どうやら全員が離れた位置に居ることが分かった。けれど、この状況ではとても合流な

んて出来はしないでしょうけど。

先ほどから続く銃弾の雨。その結果、周囲は激しく破壊され、それと同時に起こる煙が視界を悪くする。これほどの銃弾を撃つことが出来るだけの男を相手に、こんな悪状況の中を突っ走るなど、それこそ自殺行為に等しい。

《レリックの回収が最優先とは言え、この状況じゃ簡単には逃げられそうにないわね……。ティアナ、何か考えはある？》

ギンガさんの問いかけに、少しだけ逡巡する。……多少のリスクは止むを得ない、か。

《一応、あるにはあります。でも、正直推奨は出来ません》

《でも、それが今考え付く最善の策なんだよね？なら、このまま何もしないでいるよりも、少しでも可能性のある事をした方が、私は良いと思う》

《僕もそう思います！》

《スバル、エリオ……》

二人の決意に満ちた声に、思わず言葉が出なくなる。本当にいいのだろうか？

これは訓練じゃなく、実戦。それも、人数ではこっちが勝ってても、相手はかなりの実力者。一つのミスが、全体の崩壊に繋がりかねない。

直接見る事は出来ないけれど、きっと皆は覚悟を決めて私の言葉

を待っているはず。
私は、一度大きく深呼吸して、乱れる心を落ち着かせる。――――
覚悟は、決まった。

《……分かった。作戦ってほど大したものじゃないけど、今から話す事を良く聞いて！》

絶対に誰一人失わない！必ず生き残ってみせる！！

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

同時刻：廃都市区画上空

其処では、一人の騎士と謎の黒衣の男が戦いを繰り広げていた。

騎士――ヴィーター――は既にリインとのユニゾンをした状態で戦闘に臨んでいる。
理由として、まず第一に。先ほどロングアーチからフォワード達と連絡がつかないと聞いたため、目の前の障害を速やかに排除する為であった。

そしてもう一つの理由。それは――――――

《くそっ！リミッターを解除してねぇとはいえ、こっちはユニゾンしてんだぞ？！
なのに押しきれねぇ……！！》

《それに、最初は動きにムラがあったのに、今は殆どなくなってきてるです！
早くフォワードの皆と合流しなきゃですのに……！！》

そう。戦闘開始当初こそ、黒衣の男の動きはそれほどの脅威とは言えなかった。
しかし、それが今ではユニゾンしなければいけないほどのレベルにまで跳ね上がっている。
それは成長、というよりも。二人には寧ろ、【嘗ての動きを取り戻し始めている】かのように思えた。

何故。と聞かれれば答える術は無い。
強いていうのならば、それはコレまでの彼女達の経験からくる一種の【勘】というべきか。
如何に成長が早い【天才】と呼ばれる者達であろうとも、僅か数十分の戦闘でこれほどまでの成長はありえないということを、彼女達は知っているからだ。

（だとすると、コイツは一体何なんだよ！まさか、死人が生き返ったとでもいうんじゃねぇだろうな？！）

内心愚痴を零しつつ、はやる気持ちを抑えながら彼女は体制を立て直す。

幸い、というべきか。彼女にあって、男に無いものがある。

それは、空戦適正。

そう。彼女は自在に空を飛びまわれるが、男は地を駆けるしか術は無い。

だが、その異常なまでの身体能力を駆使し、男は廃墟を足場に空中のヴィータに襲い掛かる。

一度、直接攻撃が届かない距離まで上昇しようとしたが、直ぐにその案は頭の中から消し去った。理由は二つ。

一つ目は、自身が接近戦主体であるが故に射程が短い事。

接近戦を主体とするヴィータにも、一応は遠距離攻撃がある。が、それは本職では無いため、リインによる弾道補正などをしても、些か決定打に欠ける。

二つ目は、相手の戦闘スタイル。

相手は、二丁の銃を駆使しての中・遠距離型。ヴィータとの相性自体も悪い。

下手に距離をとろうとすれば、狙い撃ちにされるのは目に見えていた。

その為、彼女は下手に高度を上げて離脱することを早々に諦めた。

ならば接近戦に持ち込み、最悪怯んだ隙にその場を離脱しようと考えたのだが。そう簡単に事は進まなかった。

男はあろう事か懐に飛び込んできたヴィータに対して、不完全ながらも格闘戦でもって応戦してきたのだ。そこへ、銃による攻撃も加わり、中々攻めきれずにいた。

男は銃と格闘による変則的なオールラウンダーだった。

結果、ヴィータは男と着かず離れずの距離での戦闘を余儀なくされた。

「うりゃあぁぁぁ！」

長年連れ添ってきた愛機であるグラーフアイゼンを振りかぶるが、男はヒラリとコレをかわす。

だが、驚異的な身体能力を持っていたとしても、流石のヴィータの猛攻に男にも疲れが見え始める。

《流石に体力には限界があるみてぇだな……》

《それなら！》

男の様子に、気合を入れ直したヴィータとリインは、ヴィータとリインは男へと向かって行った――――

「はぁ、はぁ、はぁ……。シャーリー！今ので残りいくつや？！」

《ちょっと待ってください！……残り１１……いえ！１０編隊です

！≫

ヘリの護衛に向かったなのはとフェイトの代わりに、六課総部隊長であるはやては、騎士甲冑をその身に纏い、海上を飛行する実機と幻影のガジェットの群れを掃討していく。

先に述べた通り、ガジェットは実機だけでなく幻影も混ざっている為、思うように数が減らない。

如何にオーバーSランク魔導師のはやてであろうとも、連続で。しかも超長距離に砲撃を叩きこみ続けるのだ。疲れるなというほうが無理だ。

だがそれでも、彼女は尚も気丈に振舞う。それには理由があった。

先ほどフォワードとは突如通信が途絶え、応援に来てくれたヴィータは、謎の黒衣の男と戦闘しているという。

これ等の事から、彼女はある一つの結論に至った。

それは、【神の執行者（エクスキューショナー）】による介入。

最初はスカリエッティによる戦力の分断かと考えたのだが、それならばコチラの足止めにガジェットだけ送り込むほど相手も馬鹿ではないと考えたのだ。

確かに、物量でしかけられればこちらも不利になるが、それでもガジェット如きに遅れをとるほど、彼女達は柔ではない。それは無論、スカリエッティも理解しているはずだ。

それに、ここにきて【魔導師】の出現。

確かに、レリック回収は奴等の目的だろうが、態々その為に隊長クラスのヴィータに単騎で魔導師をぶつけてくるとは考えられないし、万全を期すならば最初からレリックの回収に向かわせているだろう。
にも関わらず、件の魔導師が行っているのは【ヴィータの足止め】に過ぎない。

彼女を足止め出来るような戦力を有しているならば、たとえこれまでが手の内を明かしたく無かったが故だとしても、今回にかんして言えば、自分ならばやはりレリックの回収に向かわせ、早期回収を謀るだろうと考えた。

しかし、実際はそうではない。しかも、出現したタイミングが明らかにヴィータの妨害を目的としたものだった。
そこから考えられたのは、第三勢力。すなわち【神の執行者】による介入、という考えに至ったのだ。

それに、もし連中もフォワード達の元へ戦力を送っているのだとしたら、ヴィータの足止めも考えられない事ではない。
そして、連中の目的がレリックだけでなく、他にもあるとしたら――

――――

はやては頭を振り、一度思考を止める。先ずは現状をなんとかしなければこの後に起こるであろう戦闘など、とてもではないが対処出来ない。
デバイス：【シュベルトクロイツ】を真横に一閃。再び目の前のガジェットをなぎ払うべく、彼女は魔法を唱える――――――

海上のガジェットを掃討するはやての命により、なのはとフェイトは今出せる可能な限りの速度でヘリを目指す。

「思ってたよりも距離が開いちゃったみたいだね……」

はやてが来るまでの間にガジェットを破壊していた時間が思っていたよりも長かったのか、はたまた、ヴァイスの操縦の腕によるものか。

理由は何にせよ、自身が考えていた以上に距離が開いていたことに、なのはは歯がゆい思いを感じる。

「なら今は、少しでも早くヘリに追いつくことを考えよう。……スカリエッティがこの程度で終わらせるはずはないと思う」

なのはの隣を飛ぶフェイトもまた、同じように不安と焦りを感じていた。

ある理由から、彼女はジェイル＝スカリエッティという科学者を追っていた。

そしてその過程で、如何に彼が危険な人物であるかを認識しているフェイトは、なのはや他の隊員達よりも彼の行動を警戒しているのである。

更に、今回に限っては問題はそれだけではない。

「それに……」

「フォワード達の所とヴィータちゃんの所に現れた謎の男の人達、だよね？」

「うん。フォワード達の所に現れた男の狙いは、多分レリック。ヴィータの所に現れたのは、皆に合流するのを妨害する為……。だとすれば――――」

「ヘリに誰かが現れても、不思議じゃない」

フェイトの言葉を引き継ぐなのは。その声音は、いつもの優しさに満ちたものではなく、強く重いものであった。

ガジェットだけでなく、更なる勢力の介入。それも、能力限定をしているとはいえ、歴戦の騎士であるヴィータを相手に一人で足止めを出来るだけの戦力を保有しているのだ。だとすれば、フォワード達の元に現れた男も又、同程度の実力を持っている可能性がある。もしそうだったとしたら――――

この事態がどれほど危険なことであるか分からないほど、彼女達は愚かではない。

はやる気持ちを抑えつつ、二人は今自分達がなすべき事を成すために、桃色と金色の軌跡を引きながら空を翔るのだった――――

Ｐｈａｓｅ－２１　～傭兵　護り屋　情報屋　Ａ～（後書き）

最近になって、「あれ？この小説オリ主なのに全然出て無くない？」と、書いている自分が疑問に思うようになってきました、アシェーリトです。

シオン「最近本編での活躍がめっきり減った主人公、シオンです」

ハイド「同じく、他作者様の感想等にしか出られなくなった、この場ではハイドと名乗らせてもらっているものだ」

シオン・ハイド「さて、理由を聞かせてもらおうか？」

実はですね、日常生活の忙しさによる執筆速度の低下。そして、それにより書くこと事体が減ってしまったため、現在軽いスランプ状態です、はい。

シオン「なるほど……。遂にこの駄目作者にもこの時期に突入しましたか」

ハイド「しかし、何と言う体たらく。他の文才溢れる作者様方がスランプならまだ分かるが、よもやお前の様な阿呆がスランプとは……」

ちくしょう！好きでスランプ気味に陥ってるわけじゃないやい！！

シオン「あ、こらっ！」

ハイド「ちっ、逃げやがったか」

シオン「さて、作者が逃走を謀ったため、今回はこの辺りで失礼します」

ハイド「出来る事なら、スランプ脱出の方法、若しくはその間になにをしているのか。等の意見を聞けると幸いだ。何でも良いので是非教えてくれ」

シオン・ハイド「それでは次回予告。

次回　魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～Ｔｉｌｌ　Ｔｈｅ　Ｅｎｄ　Ｏｆ　Ｔｉｍｅ～

Ｐｈａｓｅ－１６　Ｂ　～傭兵　護り屋　情報屋～

御期待下さい。

特別出演！　ＰＡ《プライベートアクション》　王佐の刃　海月のヴァッサー編

久しぶりの投稿で申し訳ありません。
一応生きております、アシェーリトです。

今回は、十六夜先生が連載中の【魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ　～禁断の刃～】から、【王佐の刃】の一人が出演してくれました！

なお、今回予想以上に作者の妄想が爆発したため、前編・後編の二部構成となりました。

それではどうぞ！

８／１４　一部修正しました。

特別出演！　ＰＡ《プライベートアクション》　王佐の刃　海月のヴァッサー編

――――――とある管理外世界――――――

　此処はとある管理外世界、その一つ。
管理局の調査によれば、この世界には知的生命体は存在しないらしい。

　生息する生物は、現在確認できる限りでは。最大級のものでも全長８ｍほどの恐竜のような生物がせいぜい。また、この世界の生物のほとんどが、好戦的な種がほとんどいないらしい。

　人の手が加えられていない、豊かな自然が溢れるこの世界。
その一画。森の中に、本来いるはずのない【人間】が確かに存在していた。

　その人物は、はっきりいって目立ちすぎるほどのものだった。
否、あまりにも【異常】であるというべきか。

　件の人物は、それほど背は高くない。精々平均的な女子高校生程度の身長しかなかった。
そのあまり大きくない全身に纏っているのは、黒地に赤雲の模様が描かれた外套の様な物。
　だが此処は４０度を超すであろう森の中。にも関わらず、少女は平然と腕さえもすっぽりと覆うほどの暑苦しいものを着ているのだ。

　次に挙げるとすれば、それは少女の容姿だろう。
肩にかかる程度の長さの艶のある黒髪は、眩しすぎる陽光に照らさ

れ、一層美しく煌いている。
そして、右腕の人差し指には、『青』の一文字が刻まれた指輪が光っていた。
更に、右目には縦に大きく一本の切り傷が生々しく刻まれている。
額には、まるで何かを消すかのように、大きな十字が刻まれた銀色の額当てをしている。
まるで、遥か昔から現代に迷い込んだ忍者のような風貌だった。
これだけでも、例え人が大勢いる場所でも彼女がどれだけ目立つ存在かが分かるが、それだけではなかった。

それはその人物が醸し出す威圧感。

その『気』に当てられた生き物たちは、その悉くが背を向け、全力で逃げていくほどのものだ。
しかもこの人物。どうやらかなり機嫌が悪いらしく、先ほどからブツブツと誰に言うでもなく悪態をついていた。

だがそれもどうやら終わりのようだ。
とうとう限界を迎えたのか、その人物は【魔力とは違う何か】をその身から放出し、怒声を上げる。

「何なんだよ此処は?!人っ子一人いねぇじゃねぇか!!
これじゃあ管理局の屑共を血祭りにあげられねぇ!!」

【力】と共に怒りを放出したことで少しだけ気分を落ち着かせた少女は、肩で息をしながらも冷静になろうとつとめた。

暫くして、はぁ、と小さく溜め息を漏らした彼女は、イライラしながらも再び歩みを進める。
と、直ぐに足を止める。

彼女は自身の持つ並外れた感覚を持って感じ取った。近くに原生生物【以外】の存在が現れた事を。
その瞬間。先ほどまでの不機嫌さが嘘であるかのように、口元を綻ばせる。
彼女にして見ればそうなのだが、実際は他の人間からすれば、それは見るものを恐怖させる歪んだ笑みだった。
彼女は迷うことなく、気配を感じた方向を目指す。

だが彼女―【王佐の刃：海月のヴァッサー】―はまだ知らない。
此処が元居た【世界】では無い事を。
そしてこの世界に来た理由が、彼女がちょっとしたうっかりで【平行世界の壁】をブチ破って転移してしまったためであるということを。

そしてこの【世界】には、彼女と同様に【異なる能力（ちから）】を持つ存在がいることを――――

偶然、この世界の近くを通っていたとある管理局の次元航行艦。
彼等は、この世界に転送反応があったことを確認し、急遽現地に降り立つことを決定した。

管理外世界に指定されている世界に、突如転送反応があったのだ。
それも、微弱ながらも次元震を伴って。ともなれば、彼等が見過ご

すことなど出来ようはずもない。
単なる次元漂流者であれば保護をすれば良し。しかしもし、次元犯罪者であるならば……。

この艦の艦長は、すぐに特別チームを編成した。彼は思慮深く堅実であり、能力もそれなりに優れていた。なによりも、彼は他者の実力を見抜くことに長けていたのだ。
そんな彼は、万が一も想定して、最高のチームを編成する。Aランク魔導師が一人に、Bランク魔導師が6人。それからCランクが3人のメンバーだ。抜擢されたメンバー、否。この艦の乗組員は皆艦長に信頼を置いているので、彼の組んだチームがこの艦の現状最高であることを理解した。
そしてだからこそ、彼等は万全の状態と気持ちをもって任務についた。

反応があった森の中へと入った彼等は、注意深く辺りを見回して警戒する。
動きも悪くない。皆が自分が取るべき役割をしっかりと理解しているからこそだ。

だが、【その程度】では全くの無意味だと彼等が知るには遅すぎた。

「よぉ。漸く人間（エモノ）に会えて嬉しいぜ」

「「「「？！」」」」

突如。【背後】から聞こえてきた声に一同が振り返る。そして、彼等は互いにデバイスを突きつけるような形になる。

なぜなら、彼等が組んでいた円形の陣の【中心】に、突然人が現れたからだ。

本来入る事など出来るはずも無い、そのもっとも進入が困難で、そしてもっとも警戒が薄い場所に。

デバイスを構える彼等だったが、急に糸が切れたかのようにその場に力無く崩れ落ちた。謎の人物は、一瞬の隙をついて彼等のデバイスを細切れにし、そして彼等の体を容赦なく切り刻んだ。

だが更に不幸な事に、彼等はまだ生きていた。否、【生かされていた】。

謎の人物―ヴァッサー―は、この数十分間の内にたまった鬱憤を晴らすために、一瞬で彼等の命を刈り取るのではなく、少しずつ絶望と迫り来る死の恐怖を与えながら殺すことに決めてしまったからだ。

彼は何が起こったのか、全く理解できなかった。

Aランク魔導師にしてこのチームの隊長である彼は、自身の才能に驕ることなく、努力を続ける人だった。当然、どんな状況にも対応できるように、細心の注意を払っていた。

にも関わらず。あろうことか【それ】は彼らの陣形の中心。即ち互いが背を預けあう中に現れたのだ。

瞬間、彼は背筋が凍りつくような感覚を感じ、デバイスを向けると

同時に防御をした。
だがそれも、あっけなく破壊された。いや、【通り抜けた】というべきか。

彼は、彼を含め目の前で倒れこむ仲間の姿を見る。
誰もが何がおきたのか理解できない表情をしていた。

「よぉ。ちょっと聞きたい事があるんだけどよ」

自身を見下しながら楽しそうに笑う少女の声に、彼はこれまでに無い恐怖を感じた。
その様子を見て、ヴァッサーは更に楽しそうに笑いまるで世間話をするような気軽さで話しかける。

「私はここが何処だか知らないんだ。死ぬ前に教えてくれない？素直に教えてくれれば楽に殺してやるよ。もし教えてくれないんだったら、そうだなぁ……」

右手をあごにあてながら考えるような素振りを見せるヴァッサー。
見た目こそ美しいものであったが、今の彼らには今まさに死刑宣告を告げようとする死神のように見えた。
そして、答えなど最初から決まっているのに。狂喜に顔を歪めながら、ヴァッサーはその言葉を口にした。

「一人ずつゆっくりと痛めつけながら殺してやるよ！すぐにでも死んだほうがマシってほどの苦痛を与えてなぁ！アッハハハハハハ！！あぁ、それからついでに教えておいてやるよ。ここら一帯には転送妨害の結界を張ってあってなぁ！ついでに通信も出来ないようにしてあるから、助けなんて期待するだけ無駄だぜぇ？！」

腹を抱えながら笑うヴァッサーを前に、もはや自分達に選択肢は残っていないと悟った。
目の前の少女は、本気で自分たちを殺そうとしている。そしてそれを楽しんでいると――――――

瞬間。彼の中で今まで感じたことも無いほどの怒りが込み上げて来た。

こんな危険人物を逃していいのか？このまま自分は、自分たちは。このまま言いなりになって殺される。それで良いのか？！

「私は――――」

「……ぁあん？」

――――否。断じて否である。

彼が管理局に入ったのは、全ての次元世界の平和を護るため。ならば、ここで屈する訳にはいかない！！
そしてその思いは彼だけでは無く、ほかの隊員達も同様であった。

「私達は！貴様のような者の言葉など聞き入れはしない！
次元世界の平和のためにも、貴様を此処で止めてみせる……！！」

地に這い蹲りながらも、局員達は自分達を見下ろすヴァッサーを睨み付ける。
その視線を受けたヴァッサーは、顔を伏せる。

「……いいねぇ、そうでなくっちゃ。流石は管理局様だ。
お前達のそういうとこ。ホント――――」

次の瞬間。顔を上げたヴァッサーはこれまで以上の狂喜の笑顔を。
そして瞳には地獄の業火の如き怒りが宿っていた。

「虫唾が走るんだよぉぉぉっ！！」

空気中から掻き集めた水分を操り、ヴァッサーは隊長目掛けて其の手を振り降ろそうとした。その時。

「っ？！チィッ！！」

ヴァッサーはその水を自身の目の前に集め、盾と幾つかの水竜を作り出し、その場を飛び退いた。
直後。彼女の居た場所に魔力を帯びた雷が落ちる。そして同時に、彼女目掛けて幾条の雷の矢が飛来する！！

即座に水竜で相殺した彼女は、顔を顰める。

目の前の管理局（エモノ）に夢中になっていたとはいえ、周囲への警戒を怠っていたわけではない。
しかし、現実には何者かの奇襲を受ける寸前までいったのだ。これは本来であれば忌々しき事態である。

だがそれでも。彼女は嗤う。

なぜなら、この時彼女が感じていたのは、先ほどの管理局（クズ）ではなく、とびきり上等な相手（エモノ）であることは先ず間違いではないと確信したからだ。

再び狂喜の笑みを浮かべた彼女は、爆発しそうになる感情を押さえつけながら。

【さきほどまで自分が居た場所にいる人物】に声をかける。

「よぉ。てめぇ……何者だ？」

地に伏す管理局員を護るかのように立ちふさがる黒衣の男は、チラリと局員たちを見やった後、ヴァッサーへと向き合う。

「何。只の通りすがりの【護り屋】さ」

「くくくっ、そうかい……。じゃあ、護り屋さんよぉ」

彼女は外套に手を突っ込み、そこから彼女の相棒。

ブーメラン型のデバイス【聖霊デバイス：オボロ】を取り出し、ゆらりと自然な動作で構えを取る。そして――――

「それじゃあ私と死合おうぜぇぇぇぇ！！」

狂喜と歓喜の雄叫びを上げて、護り屋―シオン―へと猛然と駆け出した――――

特別出演！　ＰＡ《プライベートアクション》　王佐の刃　海月のヴァッサー編

如何だったでしょうか？

先生の魅力あるキャラクターを再現できているのか心配です。

次回の後編では、ヴァッサーさんとの戦闘シーンです。

がんばります。

ではでは。

Ｐｈａｓｅ－２２　～傭兵　護り屋　情報屋　Ｂ～（前書き）

ふっ、試験期間だってのに投稿してしまったぜ……。

すみません、調子にのりました（土下座

お待たせしました、最新話が漸く完成して気が楽になったアシェーリトです。

今回、めちゃくちゃ長いです、グダグダです。ええそりゃあもう。

誤字等あると思いますが、寛大な心で許してやってください。

それではどうぞ。

Ｐｈａｓｅ－２２　～傭兵　護り屋　情報屋　Ｂ～

　此処は廃都市区画の地下に位置する地下水道。
先ほどまで絶えず鳴り響いていた銃声は、今はなりを潜めていた。
だがそれは、弾切れをおこした訳でも。ましてやその銃を撃ち続けていた存在が倒れた訳でも無い。

「おい、嬢ちゃん達！テメェ等まだくたばった訳じゃねぇんだろ？」

　声の主―ノートン―は、その顔を狂喜に歪めながら喋り続ける。
もとより、始めから返事など期待していないのだから。

「あんまりにも俺様が強すぎてテメェ等は何も出来ねぇ。まぁ一方的なのもいいんだが、少し飽きてきてな。だからよぉ――――手加減してやるよ」

　ノートンは狂ったように笑い、尚も喋り続ける。

「て、訳だ！少なくとも、テメェ等が姿を見せるまでこっちは何もしないでやるよ！ついでに威力も加減してやる！だからよぉ！
少しは俺を楽しませてくれよなぁ！！ヒャヒャヒャヒャヒャッ！！」

　ノートンは笑い続ける。

　如何に訓練を受けているとはいえ、所詮は子供。
例え手加減をしたところで、今の自分に敗北などありえないと信じているから。

　だが彼は侮っていた。

彼女達の中に、死線を掻い潜ってきた存在がいることに。
その中で学んできた事を、今まで見せていなかったことに、彼は気づけなかった。

それが、自身にどんな結果を齎すかも知らずに――――――

～Ｓｉｄｅ　スバル～

「はぁ、はぁ、はぁ……」

緊張と疲労によって乱れた呼吸を、なんとか整える。
今、私の目の前にはあの男の人―ノートン―がいる。
もっとも、その姿は【瓦礫に埋もれていて】確認できないけど。

正直、私たちだけで倒せたのが奇跡だと私は思っている。
だってそれ位、この人との実力差があったから。

「とりあえず、何とかなったみたいね」

「！ティア！皆も大丈夫？！」

声の方に振り返ると、私と同じように疲労困憊といった様子の皆がいた。
多少の傷はあるみたいだけど、皆無事みたい。思わず涙がこぼれそうになるのをグッと堪えた。

「でも驚いたわ。まさか本当に倒せたなんて……」

ギン姉がそういって呟くけど、それは【ティアを除く】皆が思ったことだ。

なぜなら、この作戦を立てたのはティアだったから。

あたしは、先ほどまでやっていた動きとティアの作戦を思い出す

――――――

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

あたしは、柱のひとつに身を息を潜めながら隠れている。

ノートンとの距離は約１０ｍほどまで近づいた。それでも何の反応もしないってことは、まさかとは思うけど、あのデバイスにはこっちの魔力を感知することが出来ないみたい。

これならもしかしたら――――とそこまで考えて、慌ててその考えを消した。

相手は殺傷設定での攻撃をしてきているんだ。少しでも気を抜いちゃいけない。

それはあたしが死んじゃうかもしれないことだけじゃなく、皆も危険にさらすことになるから。

「それだけは、絶対にダメ……」

この作戦には、あたしとギン姉の力が絶対に必要。

少しでも間違えたら、それはあたし達の全滅につながる。

リニアレールの時とかホテル・アグスタの事件で、少しは実戦になれたつもりだったけど。やっぱり怖いものは怖い。
特に今回の相手は、今までと違って人間で。それも明確な【殺意】をもっていて――――

《相棒》

「マッハキャリバー……？」

普段滅多に自分から話しかけて来ない相棒の突然の呼びかけに、少しだけ戸惑ってしまう。
いったいどうしたんだろう？

《相棒は以前言ってくれました。【私は貴女と共に走るために生まれてきた】と。私はまだその答えを見つけた訳ではありません。ですが――――》

何でか分からないけど、この言葉をしっかりと聞かないといけない。そう思ったあたしは、マッハキャリバーの言葉に耳を傾ける。

《――――ですが、貴女が何のために魔法の力を手にすることを決めたのか。それだけはハッキリと理解しているつもりです。
だからこそ言わせて頂きます。相棒。あんな男を野放しにして良いのですか？貴女の力は何の為にあるのですか？そして貴女は、誰と共に戦っているのですか？》

その言葉にハッとする。
そうだ。あたしが魔法の力を手に入れたのは――――――！！

一度大きく息を吸い込んで、ゆっくりと吐き出す。

大丈夫。もうさっきまでの不安も、恐怖も無い。

「ありがと、マッハキャリバー。元気出たよ」

《礼には及びません。準備はいいですか？》

頼りになるマッハキャリバー（相棒）の返事は短い一言だったけど。

それがとても嬉しくて。これで、十分過ぎるほどに気合は入った。

後は――――

「うん！行くよ、相棒！！」

《了解》

あたしは。あたし達は、自分の役割を果たすだけだ！

柱の影から飛び出したあたしは、自分がやるべきことをやるために駆け出した。

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

「ぁん？」

ノートンは、微かに聞こえた足音に、狂喜の笑みを浮かべる。

逃げたわけではないのは分かっていたが、何のアクションも無く退屈していた今の彼は、漸く餌にありつけた飢えた猛獣のようだ。

だが、直ぐに倒してしまっては、折角待った意味が無い。

ギリギリまで相手を惹きつけ、そこを圧倒的な強さで屈服させる。
それがこの男の考えだった。

――そろそろか。
十分な距離まで近づかせたと考えたノートンは振り向き様に銃を構える！
そして――――

「なぁっ？！何だこりゃぁ、どうなってやがる？！」

彼が銃口を向けた先には、無数の人影。
何十人ものフォワードメンバーが、其処にはいた。

僅かに怯んだノートンだったが、直ぐに気を持ち直す。

「ハッ！舐めたマネしてくれるじゃねぇか。こんなもん！」

無数に存在するフォワード達に、銃弾の雨を浴びせる。

「全部ぶっ飛ばして残ったヤツが本物だろうがよぉぉぉぉ！！」

雄たけびを上げながら、幻影を打ち抜いていく。その銃弾は幻影を掻き消し、同時に周囲を破壊していく。
引き金を引くのをやめたのは、あたりが土煙に覆われた頃だった。
己の失態に内心毒づきながらも、彼なりに周囲への警戒を始める。

煙が晴れ、視界が良好となった時、ノートンは再び驚愕する。
なぜなら、目の前には幾条もの青と紫の【道】が地下水道内に張り巡らされていたからだ。

だが、唖然とする彼を待っているほど、彼女達は優しくは無い。

「うおっ?!」

直後、背後からその身を揺さぶるほどの衝撃が襲い掛かる。
彼にとって幸運だったのは、彼の持つデバイスが高性能だったため、他のデバイスよりも遥かに早く攻撃に反応し、シールドを展開したことだ。

ノートンはすぐ様振り向き、構える。だがそこには、誰の気配も無かった。

すると、今度は右側面に一人の人影が現れる。スバルだ。
先ほどまでと違い、完全に頭に血が上ったノートンは、怒りに任せて乱射する。
だがその行為も虚しく、最初と同じく標的の姿は霞みのように掻き消えた。

その様子に悪態を付く暇も無く、今度は左側面と上方から気配を感じた。
右側面にはエリオが、上方はギンガが共に張り巡らされたウィングロードを駆け抜ける。

「ちょこまかとするんじゃねぇーーー!!」

雄叫びと共に再び乱射するも、やはりその姿は掻き消えるのみ。
そして直後に、再び衝撃が彼を襲う。その繰り返しが幾らか続いた。

いよいよ焦りが生まれてきたノートンは、血走った目で周囲を睨み付ける。

だが当然ながら、彼に索敵能力などは無く、ただ見るだけで終わってしまう。
それでも彼はしきりに周囲を見る。そこには先ほどまでの余裕は欠片も存在しなかった。

彼の中に生まれた感情は、焦りだけではなかった。

彼の中に芽生えた感情。それは【恐怖】。

先ほどまで自分が追い詰める側だった。しかし今はどうだろうか？
いくら攻撃を放とうとも、その悉くが幻影であり、徒労に終わる。
対して、あちらからの攻撃はシールドに防がれているとは言え、面白いように当たっている。
何時の間にか、捕食者と被捕食者の立場は逆転していた。

そして、遂にその時が来た。

「！」

先ほどから続いていたように、幾人ものフォワード達がノートン目掛けて駆け出す。
そしてノートンもまた、これまで通りにそれ等を打ち抜く。いや、打ち抜こうとした。
此処に来て、遂にノートンは自分の取るべき行動を見失ってしまった。

（どうする?!コイツ等はさっきと同じで幻だ。いや、幻のはずだ!……だがコレで攻撃をしかけて、また外れたら?……またどっからか俺様を狙っていたら?!）

その瞬間、ノートンは引き金を引くことを躊躇ってしまった。
そして、其処を見逃すほど、【彼女】の目は節穴では無い!

ノートンの裏側から現れたティアナは、問答無用でクロスファイアを叩きこむ!
だが当然、ノートンのデバイスは桁筈れな速度で防御をしてのけた。

「!そこかぁぁぁぁ!!」

攻撃後に無防備となったティアナに報復をすべく、ノートンは勢い良く振り向きデバイスを構えた。
が、次の瞬間。

「はぁぁぁぁぁ!」

「でりゃぁぁぁぁぁ!」

一瞬の隙を突き、【無数の幻影の中に紛れ込んでいた】本物のギンガとエリオが、爆発的な加速を伴いノートンへと襲い掛かる!

当然、振り返る途中だったノートンに彼等二人を対処することなど出来はしない。
だからこそ彼は、【これまで通り】デバイスのオートガードに頼ってしまった。
しかしその瞬間こそ、フォワード達が待ち望んでいた瞬間であっ

たのだ。

「?!おい、なにやってやがる?!」

ノートンのデバイスは、【辛うじて】シールドを張る事に成功した。

だがその反応はコレまでとは段違いに遅く、そして強度の低いシールドだった。

（凄い……ティアさんの言った通りだ！）

（これなら……いける！）

シールドに愛機ストラーダの先端を突き立てつつ、エリオは作戦が順調に進んでいる事を肌で感じた。

そしてそれは、隣で拳を打ち込むギンガも同様であった。

二人はティアナから伝えられた作戦を思い出す。

（『いい？あのノートンって男。アイツは典型的な快楽主義者だわ。自分の欲求のためなら、人を殺す事だって躊躇わない』）

ティアの言葉を聞いたフォワード達は、思わず体が強張るのを感じた。

そんな様子を察しつつ、でも、と言葉を続ける。

（『逆にそれがこっちにとっては逆転の一手に繋がる。あぁいう奴は結構飽きっぽいものよ。

自分が優位にたったと感じながらある程度楽しんだら、今度は次の

楽しみ方を考える。
多分次に考えるのは、私達に攻撃のチャンスを与えることね』）

（『それってどういうことですか？有利な立場に立っているのに、どうして態々自分を追い込むような――――』）

彼女の言葉に疑問を思ったエリオ。当然だろう。態々自分から窮地に立とうなどと考える馬鹿はそうはいるはずがない。しかし、ティアナは首を横に振る。

（『それこそ、アイツの狙いよ。通信妨害がされていることから、まず援軍は呼べない。それに、罠と分かっていても、万が一の可能性が目の前にある。当然、私達にはそれにすがるしかないわ。アイツはそんな私達を、手加減をしながらも圧倒的な実力差を見せ付けることで絶望に追いやる。そんな私達の様子を楽しみながら、なぶり殺しにするってところかしら』）

（『それじゃあ何の解決にもならないじゃん！』）

思わずスバルが不安そうな声を上げる。無理も無い。作戦と言いながら伝えられたのは自分達が如何に絶望的な立場にあるかを再確認させられただけなのだから。
だがそれでもなお。ティアナは余裕の笑みを崩さない。

（『そうね。アイツも当然そう思っているでしょう。でもね、アンタ達はアイツの強さが【何にあるか】を勘違いしているのよ。分からない？』）

ティアナの問いに、一同は考え込む。すると少しの後、ギンガがハッと気がついた。

驚いた表情でティアナを見つめる。その表情を見て、ティアナはしっかりと頷いた。

「くっ……あと、少し……！」

「届けぇぇ……！！」

ストラーダの槍先とギンガの拳は、徐々にノートンの障壁を侵食していく。

が、やはりデバイスの処理能力が高いためか、あと一歩の所で破ることが出来ない。

対するノートンは、なんとか持ちなおしはじめた戦況に、僅かに余裕を取り戻す。

「は、ハハハッ！惜しかったじゃねぇか！ちょっとばかし焦ったぜ……。

だが、どうやら俺様に運が向いているらしいなぁ！」

二人は魔力の火花を散らせながらもなお、攻撃の手を緩めない。

それどころか、更にカートリッジをロードし、果敢に攻め続ける。

「おいおい、いくらやっても無駄だってことが分からねえのか？

そんなことしたってこの障壁は――――」

「……貴方は勘違いをしている」

「――――なに？」

なおも攻撃の手を休めないギンガは、呟く様に語りかける。
そしてそれに続くように、エリオも口を開いた。

「確かに、僕たちは貴方の攻撃に苦戦していました。でもそれは、【デバイスの性能】が桁外れだったから」

「……何が言いてぇ」

彼らの真意が分からないノートンは、僅かな疑問と不安を感じながら二人に尋ねる。
そうする間にも、ギンガとエリオの頭の中には、ティアナの言葉が響いていた。

（『何度か攻撃して分かったけど、あのデバイスの性能は桁外れだわ。
……でもね、それでも欠点があるのよ』）

「貴方のデバイスは確かに高性能です。でも――」

「それでも、欠点があった。一つは、攻撃と防御を両立出来ない事。そしてもう一つは――――」

次第に障壁に亀裂が入り始める。もう間も無くで、障壁も破れるだろう。
そこへ更に――――

「攻撃と防御を切り替えた瞬間、僅かに動きが鈍ることよっ！！」

【先ほどから控えていた】ティアナが、無数の魔力弾を放つ！！
カートリッジをロードしたその攻撃に、ついに障壁は突破された。

「ぐ、うぉあぁぁぁぁ……！」

「うわぁぁっ！」

「きゃあっ！」

魔力同士のぶつかり合いによって起きた爆発で、エリオとギンガはその衝撃に吹き飛ばされた。
だがノートンは、僅かに体勢を崩した程度であった。

「（さっきのこいつらの攻撃からして、コイツが幻術使いなのは間違いねぇ……。なら！）てめぇを先に潰してやるよぉぉぉ！！」

何とか体勢を立て直したノートンは、ティアナに銃口を向ける。
だが、当のティアナは臆するどころか不適な笑みを浮かべていた。

「馬鹿ね。【もう一人】を忘れてるわよ？」

「な――――」

に？と続けようとしたが、その攻撃は横からきた衝撃によりかきけされる。
その衝撃の正体は、【青い道】であった。

「がっ！……く、そぉ……！！」

そのまま壁に縫い付けられたノートンに、もはや脱出の術は残されていなかった。
そして【青い道】、ウィングロードの上を全速力で駆ける【スバル】は、カートリッジを二発ロード。

「一撃……必倒！」

「なっ！」

迫りくるスバルを見たノートンは、次の瞬間に自分がどうなるかを考え恐怖する。
だがスバルは容赦無く、前進を続ける。そして――――

「ディバイーン……バスターーー！！」

「がぁぁぁぁぁぁ！！」

必倒の一撃を放つ！

スバルの一撃により、ノートンは瓦礫の下に埋もれることとなった。

◆◆◆

たようすだった。
今は、先ほどまで気絶していたキャロに簡単な治療を施されているところだった。

特に、エリオとギンガは限界ギリギリ近くまで体力と魔力を消耗していたため、座り込むほどだった。
スバルやティアナも、二人に比べれば程度はましではあるが、消耗しているのは見て取れた。
そのせいだろうか。彼女たちが【気づくことが出来なかったのは】。

「そういえば……。あの召喚師の女の子がいませんね」

「たしかに……」

「……多分、私たちが戦っている隙に撤退したんじゃないかしら。レリックも大事だろうけど、それ以前に面倒ごとには首を突っ込みたくなかったんじゃないかしら」

（もっとも、だからといってそう簡単に諦めるとも思えないけどね）

最後の一言を胸にしまいながらも、ティアナは地震の推測を話す。
ほかのメンバーもこれ以上戦闘が続く状況を考えたくないのか、特に意見を言ってはこなかった。

（どっちにしても、まずはあの男を拘束。それから隊長たちと合流ね）

次にどうこうどうするかをすぐに考えたティアナは、ふと視線を

瓦礫の方へと向ける。
すると、僅かな違和感を感じた。では、果たしてその違和感の正体とはなんなのか？
そう考えた瞬間、体中に怖気が走るのを感じた。

（――――不味い！）

自身が犯した失態を悔やむよりも早く、指示を出そうとしたティアナだったが、僅かに【遅かった】。

「――――動くな」

低く唸る様な声が背後から聞こえてくるのと同時に、後頭部に硬い何かが押し当てられるのを感じた。
それはどこまでも冷たく、嫌でも自身の置かれている状況を認識させられた。

「――――ティア！」

「「ティアさん！」」

「ガタガタ喚くんじゃねぇ！！」

漸く事態を飲み込んだフォワード達が思わず声を上げるが、ノートンの怒号に遮られた。

声を荒げるノートンには、先ほどまでの余裕はすでに欠片もなく、今まで以上の狂気を孕んだ目をしていた。その表情に、思わずフォワードたちは息を呑んだ。

「くそ…。くそ、くそくそくそっ！この俺様をコケにしやがって！……おい、てめぇら全員武器を捨てろ」

「！」

《皆、絶対に言うことを聞いちゃだめよ！》

ノートンの要求を聞いたティアナは、全員に念話を飛ばす。だが当然、彼らがそれを承諾するはずも無かった。

《っ！でもっ！》

《スバルッ！》

反論しようとするスバルの言葉を無理やりに遮る。ティアナはこの状況になった時点で、既に主導権はノートンに渡っていることを理解していた。

そして、デバイスを手放せばどうなるのかも――――

《いい？これは訓練じゃ無い。降参すればそれで助かるようなものじゃないのよ》

《……分かってるよ。分かってるけど、でもっ！》

涙目になりながらも訴えるスバルだが、ノートンにはそんなことは関係無い。

未だにデバイスを手放さないことに業を煮やしたのか、はたまた本気であることを示すためか。

「ぐっ……！」

「！ティアッ！！」

銃のグリップでティアナの後頭部を殴りつけた。その一撃はかなり力が込められていたのか、僅かに血が滴り落ちた。

どうすることも出来ない状況に、スバル達は悔しさと怒りで顔を歪める。

その様子を見たノートンは、優越に顔を歪める。

だが、それでも。

これだけの絶望的な状況であるにも関わらず、一人の少女の目は死んでいなかった。

「　　」

「……あ？おい、何て言いやがった？」

ノートンは、自身の目の前で銃を突きつけられ跪く少女―ティアナに問いかける。

このメンバーの頭脳（ブレイン）であることを理解していたノートンは、彼女の言葉を特に危険視していた。いつ逆転の手を打たれてもおかしくないと考えていたからだ。

「――――って、言ったのよ」

「っ！何だ、何て言いやがった！ハッキリと答えろ！！」

「騒ぐんじゃねぇって言ってんだろうが！

……次はこんなもんじゃ済ませねぇ。さっさと武器を捨てろォ！！」

――何故銃を突きつけられているのに、目の前の少女はこうまで余裕を保てるのか？

ノートンにはそれが堪らなく恐ろしく感じた。そして同時に、この言葉を聞かなければいけない。聞いてはいけないという相反する感情に襲われた。

そして問いかけられたティアナは首を少し動かしてノートンを見る。

――瞬間。これまでで一番の恐怖を感じた。

振り返ったティアナの目は、まるで隙あらば自身の首を食いちぎる獣のようにギラついていた。

「聞こえなかったのならもう一度言ってあげるわ」

そして――

ノートンにとって、破滅の破滅の言葉を紡ぎ出す。

「――油断大敵って言ったのよ！！」

その言葉を聞いた次の瞬間。

眩いばかりの雷光が目の前を通り過ぎた。

そして気がつけば

ノートンの視界からティアナと【自身の右腕】が消えていた――

――

「――――――――!!」

突然腕が消滅したことか。またはその痛みによるものか。理由はどうであれ、先ほどまでの絶対的脅威であった存在。ノートンは今。唖然とするフォワード一同の目の前で叫び声を上げていた。

「ふむ。……どうやら間一髪、間に合ったようだ」

突然聞こえてきた声に、漸く現実に戻ってきた一同は、声の主を

探す。
するとそこには、黒いスーツに身を包み、手にはスバルやギンガのリボルバーナックルに近い機械的なガントレットをつけた男がいた。その渋みのある顔は幾つかの傷が刻まれており、彼が只者ではないことを如実に現していた。
そしてその男が纏う空気は、まさに戦場を駆け抜けてきた者特有のものであることを、彼らは直感的に理解した。

「ぐっ……！俺様の腕をよくも……！！テメェ、何者だぁ？！」

苦痛と憤激に顔を歪めたノートンは、突如現れた男に怒鳴り散らす。
そして尋ねられた男はというと、【腕に抱えていた】ティアナをゆっくりとおろしながら、その質問に答えた。

「何、私は名乗るほどの者でもないさ。ただ、名乗るとすれば……そうだな。
――――【傭兵】、とでも名乗っておこう」

立ち上がった男―【黒き傭兵：スティーブン】は、額に巻いたバンダナを直しながら答えた。

Ｐｈａｓｅ－２２　～傭兵　護り屋　情報屋　Ｂ～（後書き）

如何だったでしょうか？

なんか張り切って書いた割には消化不良で終わった感が否めないですｏｒｚ

……何でこんなにグダグダになったんだろう？

しかもこんなことで自分を追い込んでいるとは……。

あ、決して私は蔑まされて喜ぶ人ではありませんよ。……本当ですよ？！

まぁ、何はともあれ、今月を乗り切れば書きたい放題の日々！

何とか試験がんばりつつ、休憩と称した堕落時間を利用して細々と執筆を続けます。

毎回のことですが、感想・意見等ございましたら是非お願いします。

それでは今回はこの辺で失礼します。

特別出演！ＰＡ《プライベートアクション》　王佐の刃　海月のヴァッサー編

お久しぶりです、アシェーリトです。
ムーギネーター先生の作品のキャラクターが登場する特別編。その後編です。

それではどうぞ。

「あ、あなたたちは……いったい？」

傷ついた体を僅かに起こしながら、強襲を受けた臨時部隊の隊長は、震える声で目の前の男に声をかける。

もっとも、彼の声が震えているのは、怪我からくるものだけでは無い。理由は、今まさに自分たちに治療を施そうとしている目の前の男にあった。

一言で言うとこの男。顔が異常に怖いのである。

全身は真っ白な体色をしており、中肉中背の体躯。大きく自己主張をしている腹が目立つ。

肩から赤いマントを羽織り、その体を包み込んでいる。

これだけ聞くと、十分に奇妙な存在であることが伺えるが、問題は先ほど述べたとおり、その【顔】にあった。

鮫のように開いた瞳孔とギラリと輝く白い歯。どういうわけか、その口は常に歯を見せ付けるような形を崩さない。更にはこの男、鼻がないのである。

この生き物は一体何なのだろうか？そもそも、これを人とよんでいいのだろうか？

的確な治療を受けつつも、隊長はそう思わずにはいられない。

対して、問いかけられた件の化け物。もとい【情報屋：惨太】は、世間話をするかのような軽い口ぶりで答える。

「ワイ等の事は別に気にせんでええよ。単にワイ等も【アレ】に用があっただけやさかい」

もっとも、彼からすれば微笑しただけなのだが、それを見ていた局員たちには残虐な笑みを浮かべるようにしか見えない。皆一様に目に涙を浮かべ、恐怖に耐えていた。

どういう訳か、その涙を安堵からくるものと勘違いした惨太は、未だ鳴り止まない轟音のする場所へと視線を向けた。

其処では、全てを破壊せんとするかの如く、巨大な力と力がぶつかり合っていた。
その衝撃は凄まじく、辺りに轟音を轟かせ、周囲の木々を切り裂き。吹き飛ばし。粉砕していく。だがそれを成す当事者たちは、そんなことを一切歯牙にかけない。
なぜならその光景など、彼らにとっては当然の結果でしかないのだから。

互いの攻撃の反動をもって距離をとった二人―【王佐の刃・海月のヴァッサー】と【護り屋・隠者（ハーミット）、シオン】。片や相対する相手の実力に歓喜し、片やその実力に面倒だと、両極端の思考を巡らせていた。

「一つ聞いておきたいんだけど、構わないかい？」

「なんだ？俺に答えられることならば、答えるが」

「あんた。【王佐の刃】って知ってるかい？」

「……いや。初耳だな」

「あ、そう。私たちのこと、知らないんだ。
――――――でもおかしいね。管理局員や裏に関係する連中なら、私たちのことを知らないはずはないんだけど」

「……ふむ。恐らく、お前は【この世界】の住人では無い、ということだろう」

「……へぇ。詳しく聞かせてくれると助かるんだけどねぇ」

まるで世間話をするかのような口調で話す二人だが、その間にも互いの獲物で攻撃を繰り出し、互いをねじ伏せようとしている。傍から見ればなんとも奇妙な光景だ。

互いが持つ得物がぶつかり合い、その反動を利用して両者は一度距離を取る。
そこでシオンは、先ほどの説明の続きをした。

「つまりだ。【ここ】はお前のいた【世界】では無い、ということだ。
お前から見れば【この世界】は俗に言う、【平行世界】に該当するということだ」

「……私のいた世界じゃ……ない……？」

シオンの言葉を聞いたヴァッサーは一瞬目を見開き、俯く。

傍目から見れば、突然の事体に混乱し、絶望しているかのように見える姿であったが、シオンは彼女を油断無く警戒し続ける。そう。シオンは感じ取ったのだ。彼女は【そんな感情を抱いていない】と。

そしてそれは、現実のものとなる――――

「……く、…ククク……。アーハッハッハッ！！」

徐々に体を揺らしていたヴァッサーは遂に堪えきれなくなったのか、腹を抱え、声をあげて狂喜に、歓喜に酔う。

一通り嗤ったところで落ち着いたのか。それでも笑みを浮かべたまま、彼女は先ほどよりも警戒を強めたシオンへと視線を移す。

「何が可笑しい？って顔をしてるんだろうね。まぁ、顔見えないから分かんねぇけど。

理由は簡単さ。だってさ、私の居た【世界】とは【違う世界】にも管理局は存在してるってことが分かったんだ。

つまり――――」

一度言葉を区切ったヴァッサーは、目元を手で覆う。そして其の手をどかした瞬間――――

「！！お前、その【眼】は……？！」

「――――【無限に存在するかもしれないほどの管理局員共（ゴミクズ共）】を【無限に狩り続けられる】かもしれねぇってことだろ？！

これほどまでに嬉しいことはねぇよなぁぁぁぁ！！」

雄叫びをあげ、駆け出した。

【勾玉が三つ円を作るようにして並んだ、奇妙な模様を浮かべた真紅の左目】に殺気と狂喜を宿して――――

「【水遁・水龍弾の術】！！」

空気中の水分という水分を根こそぎ掻き集めたヴァッサーは、【チャクラ】というエネルギーをもって集めた水を操り水龍を作り出す。巨大な水龍はその身を躍らせながら、その顎（アギト）を開き、隠者（シオン）へと襲い掛かる。その速度はかなりのもので、一瞬の隙をつかれたシオンは咄嗟に防御にまわる。が――――

（これは……魔法の障壁を侵食、いや。【すり抜けている】……？！）

デバイス―【ファーウェル】―が発動した魔法障壁は数瞬のうちに突破され、その身を今度こそ水龍が襲う！！

咄嗟にバリアバーストの衝撃とソニックムーブを利用し、かする程度ですんだものの、その威力は先ほどまでの戦闘とは段違いのものであった。

「くっ……？！くそっ！！」

吹き飛ばされながらも何とか体勢を立て直すシオンだったが、そこへまるで予測していたかのようにヴァッサーがデバイス―【オボロ】―を振りかぶり強襲をしかけてくる。

「やるねぇ！！まさかあんな方法であの術から抜け出すなんてさぁ！

でも……安心するのはまだ早いぜ！！」

【オボロ】を振るい、隠者（シオン）を再び吹き飛ばしたヴァッサーは、【オボロ】本来の利用方法を使う。振りぬいた反動を利用し、その手から【オボロ】を手放す。ブーメラン型である【オボロ】は、隠者（シオン）目掛けて襲い掛かった。

だが、ヴァッサーの真の狙いは、【オボロ】による強襲では無い。

「【水遁・大瀑布の術】！！」

素早く【印】を結んだ彼女は、周囲の水を再び収束。やがてそれはその名の如く、巨大なうねりをあげた滝となり、周囲の木々諸共（シ）隠者（オン）を洗い流す！！

【オボロ】の対応をしていた時から危険を感じていた隠者（シオン）だったが間に合わず、そのまま水の奔流に飲み込まれた。だがヴァッサーはまだ追撃の手を休めない。

これまでよりも長い【印】を結んだ彼女は、己の【チャクラ】と先ほどの水を利用し、これまで以上の術を作り出した。

「これでお前はもう逃げられねぇ！【水遁・大瀑水衝波】！！」

彼女の口から放たれた大量の水は、先ほどの水を巻き込みながら、次第に巨大なドーム状のフィールドを形成したその大きさはまさに規格外のもので、かなり離れた位置に居た惨太たちの目に映るほどのものだった。そしてそれは正しく、水の【檻】といえるほどのものだった。

連続で大技を放ったヴァッサーは、僅かに肩で息を切らしながらも笑みを浮かべる。これで狩りの場は整った。水中戦は彼女にとっ

てはお手の物。後は――――

「残りの【チャクラ】が少ないから、悪いが一気にけりをつけさせてもらう。
精々足掻いてみろよ、隠者（ハーミット）」

彼女は真紅の瞳【写輪眼】の能力で隠者（シオン）の位置を見つけ出すと、止めを刺すべく動き出した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

水の檻に閉じ込められた隠者（シオン）は、一瞬飛びかけた意識を痛みで取り戻す。次に感じたのは妙な息苦しさだった。そこで漸く、自分が置かれている状況を理解した。

《思っていたよりも、ダメージがあるな……。ファーウェル、無事か？》

《問題ありません。それよりも申し訳ありません、マスター。私は貴方を守ることが出来なかった》

ファーウェルは、自身の障壁が全く役に立たず、隠者に傷を負わせた事に後悔と苛立ちを感じていた。だが無理も無い。魔法障壁を【すり抜ける】ような攻撃など、これまでは無かったのだから。だからこそ隠者は、そのことを気にはしない。

《いや、あれは想定外のことだ、仕方が無い》

それよりも、と言葉を区切った隠者は、彼女と遭遇した時から構築していた【ある術式】を確認する。既に9割ほど完成しており、あと少しの時間とタイミングがあれば完全に発動出来る状態だった。

《しかしそのためにも、今度こそヤツを足止めする必要がある。……ファーウェル》

《了解。【３ｒｄフォーム】開放》

水中に居ながらも、そしてかなりの距離がありながらも伝わってくる殺気を感じた隠者は、３ｒｄフォーム開放。と、ともに解放されるリミッターにより、身体能力が変化する。

だがそれでも、成功するかは分からない、謂わば【賭け】に近い事をこれからするのだ。それ故に、隠者（かれ）と隠者のデバイスに慢心も隙も無い。

準備が整った隠者は、迫り来る強敵に視線を移す。

その目は彼等に向かって襲い掛かる強敵を射抜かんばかりの、鋭い目付きをしていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ヴァッサーは隠者の姿を見つけ、笑みを浮かべる。彼女は、既に目視出来るまでの距離に近づいていたのだ。

無駄に時間を取られたことによる苛立ちと、久々に手ごたえのあ

る相手と戦えた事による喜び。それ故に楽しみがなくなることの喪失感。

相反する感情を自覚した彼女は、僅かに顔を顰める。

その瞬間。隠者を覆うように氷の球体が形成される。

彼女はそれを見て失笑する。【魔法で出来た】障壁など自分の前では無意味だというのに、と。

もしこの時、彼女が良くその【氷】を眼で解析していれば。そうすれば気付けただろう。その氷が【魔力とは別の力で出来たもの】だと。

普段はしないはずの、ほんの少しの【油断】。

それ故の行動がどんな結果を齎すのか、彼女は真の意味で理解していなかった――――

「今更そんなことしても意味ねぇんだよ！喰らいな！【黒鷹旋】――――――！！」

【オボロ】に黒いオーラのようなものを纏わせたヴァッサーは、それを投げ飛ばそうと振りかぶったその瞬間。

氷の球体が【爆発】した。

大量の水泡を生み出しながら爆発したそれは、同時に無数のつぶてを作り出した。

水中とはいえ鋭く尖った氷はまさに凶器そのものとなった。

攻撃のモーションに入っていたヴァッサーだったが、流石という

べきだろう。直ぐに防御の姿勢にまわり、自身目掛けて飛来する氷を破壊する。

不意打ちとはいえ、彼女にとってはこの程度の攻撃はどうということはない。無論、それは隠者も理解しているはずだ。だからこそ、彼女は解せず、そして同時に落胆した。

かといって水泡に包まれ、隠者（エモノ）の姿は未だ見えない。逃げていないのはハッキリとしているが姿が見えないのは状況を不利にする。だがそれも、彼女の前では無意味。なぜなら、彼女は魔力の流れを見抜く【眼】があるのだから。

【写輪眼】をもってして彼女は未だ消えない水泡に眼を向ける。次の瞬間。彼女は驚愕に眼を見開く。

「んだよこれは――――?!」

彼女の眼に映し出されたのは、魔力とは似て非なる別の【何か】。しかもそれは、隠者のいるだろう場所だけではなかった。その【何か】は今や、彼女が作り出したフィールドのあらゆる所から感じ取れる。だからこそ、彼女は驚愕したのだ。

（一体何なんだよ、この力の波動は?!こんなもん見た事がねぇ……!それだけじゃねぇ。
一体何時の間にこのフィールドに配置しったてー――――）

そこでふと、視界に入ってきたのは先ほど爆発した氷の破片。
そしてその正体に気付いた。

（この氷、【魔力で出来ていない】……?!
まさかさっき見たときに魔力を視認できたのは、表面を魔力でコー

ティングしてたってのか?!）

そこまで気付いたヴァッサーは、自身の感が激しい警鐘を鳴らしているのを感じた。

ヴァッサーは咄嗟に防御の体勢に入った。

それとほぼ同時に、未だ消えない水泡の中から天に向けて光の奔流が放たれた。

ヴァッサーが作り出した巨大な水のドームを突き破った光の進行上に、ミッドともベルカとも違う陣を形成する。その陣に光が到達した瞬間、今度はその陣から数えるのも億劫になるほどの無数の光が放たれる。

その無数の光は轟音を伴い、水のドームへと降り注いだ。

その威力は途轍もなく、周囲を更地に変えるほどのものだった。

光の雨が降り終わり、周囲に土煙が立ち込める。そしてそれも、次第に薄れていった。

薄れていく土煙の向こうに、二つの人影が見える。

一人はたったままだが、もう一人はどうやら膝を付いているようだ。

漸く晴れた土煙の向こう側。膝を着いていたのは――――隠者（シオン）だった。

彼の黒衣はボロボロになっており、何とかその原型を保っているのが不思議なほどだった。そしてそれを着込んでいる彼は、片膝を着き息を荒くしている。既に戦闘の続行は不可能に近いほどに、疲弊していた。

そしてそんな彼を見下ろすように立っているのが、先ほどまで彼と対峙していたヴァッサーだ。

今の状況は、彼女からすれば隠者（シオン）を仕留める絶好の機会。しかし彼女は手を出さない。

――――否。【出せずにいた】。

「……やってくれるじゃないか、クソ野郎！！」

彼女は今、何本もの光の鎖によって拘束されている。

その鎖の色は、先ほどまで降り注いでいた光の雨と同じと波動をしていた。

そう。隠者（シオン）が先ほど放った光には攻撃だけではなく、戦闘開始時から構築していた捕縛様の術式も含まれていたのだ。

そしてそれは、水中に配置された氷の破片に当たる事で発動する仕組みになっていた。それ故に、ヴァッサーは拘束されているのだ。

しかし、これには問題もあった。

「けどよぉ。結局アンタがその様じゃあ、わたしを捕まえたところで無意味だ。

それだけじゃねぇ。確かにこの鎖の原理は分からねぇが、破れない訳じゃない。

どっちにしろ、アンタはゲームオーバーって訳さ」

拘束されていても尚、余裕の笑みを浮かべる彼女は、その戒めを解くべく力を込める。
既に満身創痍の体である隠者（シオン）に対し、疲弊しているとはいえ、目の前の存在（隠者）を殺すには十分な余力を残しているヴァッサー。

一つ。又一つと、彼女を拘束している戒めは散っていく。
それらが全て破られた先にある未来。それは――――隠者の死。
故に彼女は嗤う。自身の絶対の勝利を確信して。

「残念だったなぁ！アンタはここで終わりだ！
さぁ、刻一刻と迫る自分の命の終わりを感じ、絶望しな！！」

そういう間にも、また一つ、鎖は硝子が割れるような音を立てて砕け散る。
するとその時、これまで沈黙を守っていた隠者が口を開いた。

「……確かに……このまま、では……俺は死ぬ…だろう」

掠れる声で呟く彼の言葉に、ヴァッサーは耳を傾ける。だが、何かがおかしい。
とても、死の間際に立たされた者の言葉には聞こえない。彼女は何故かそう感じた。

「…だが……俺の役目は、もともと…お前、を…倒すこと、じゃな……い」

掠れる声の筈なのに、何処か力の篭った言葉。そんな言葉を発した隠者は、ふいに顔を上げる。
擦り切れたフードの隙間から垣間見れた彼の瞳は、未だ死んではいなかった。

「そしてその目的は見事、果たされたっちゅう訳ですわ」

突如、第三者の声が聞こえてきた瞬間。
ヴァッサーの足元に、先ほど天に描かれたものと同種の陣が浮かび上がった。

自身の足元に突如浮かび上がった謎の陣を目にした彼女は悟った。
自分の目の前で膝を着くこの男は、自分を殺すことなど、ましてや倒すことなど最初から考えてはいなかったのだと。
その事を悟った彼女は、自身の中で急速に怒りが込み上げてくるのを感じる。

「――――――テメェ!!私を侮辱するのか!!」

「あぁ、別にそういう訳やあらへんよ。只あんさんはまともに相手するには骨が折れる相手やさかい。
こんな手を打たせてもろただけですわ」

彼女の声に答えたのは、隠者ではなく森から姿を現した異形――惨太であった。
その声にヴァッサーは惨太を睨む。鋭い視線を向けられた惨太はというと、ほとんど堪えてはいないようだった。

「たく。……遅いぞ、惨太」

「いや～、すんまへん。【空間の痕跡】を解析するのに予想以上に時間がかかってもうて。
……ホンマ、間一髪ってとこでしたわ」

惨太の言葉に思わず地面に座り込んだ隠者は、最後にしくじらない様ヴァッサーを拘束する鎖に力を送り込む。
それにより、残り僅かとなっていた鎖は再び息を吹き返したように持ち直した。
それと同時に発動し続ける、彼女の足元に展開される陣。それは次第に輝きを増していく。

「くっ！この……！！」

「残念だが、もう時間切れだ」

鎖から逃れようともがくヴァッサーに、隠者は声をかける。
そうする間にも、陣は輝きを増していく。
最早どうにもならないと悟ったのか、ヴァッサーは鋭い目つきを隠者と惨太に向ける。

「……おい、テメェ等の名は？」

ギリギリと音が聞こえそうなほどに歯を食いしばりながら、彼女は問いかける。
流石の二人も彼女の様子を見て、真剣な表情に戻す。

「……【護り屋・隠者（ハーミット）】」

「【情報屋・惨太】や」

名を聞いたヴァッサーは、その名を自身の中に刻みつける。
そして再び二人を鋭い視線を向けた。

「テメェ等の名は覚えた……。

必ずここへ戻ってきて、その時こそテメェ等を。そして【この世界】の管理局共をぶっ殺してやるよ……！！」

呪詛の様に呟いた彼女は、やがて光に包まれ【この世界】から姿を消した。

「……あ、アカン。ホンマ死ぬかと思ったわ」

ヴァッサーが【この世界】から姿を消した数秒後、惨太は力が抜けたようにその場に座り込んでしまった。その表情は相変わらず恐ろしいが、よく見るとうっすらと冷や汗をかいている。

膝をついていた隠者は殺気に慣れているとはいえ、それでも漸く気を抜けるといった状態だった。

「……二度と奴とは戦りたくはないな」

「……同感や」

「「……はぁ」」

揃って溜め息を零した二人は、管理局が来る前にその場から姿を消した。

それから暫くの間、管理局内ではヴァッサーの事が噂になったが、結局その行方は分からず仕舞い。
管理局はその事実を隠そうとするが、当然完全にもみ消すことなど出来る筈もなく。
やがてヴァッサーの事は【魔法の通じない謎の女】として裏社会で語り継がれることとなる。

特別出演！ＰＡ《プライベートアクション》　王佐の刃　海月のヴァッサー編

如何だったでしょうか？

更新が遅くなってしまった理由は活動報告をどうぞご覧ください。

ムーギ先生。更新遅くなってしまい、本当に申し訳ありませんでした！

Ｐｈａｓｅ－２３　～傭兵　護り屋　情報屋　Ｃ～（前書き）

えらく遅くなってしまい申し訳ありません。

私情により執筆が遅れてしまった事に加え、あまりにも期間が空いてしまったために、作品の再確認と推敲に時間がかかってしまいました。

これからも更新は不定期となってしまいますが、今後とも宜しくお願いします。

Ｐｈａｓｅ－２３　～傭兵　護り屋　情報屋　Ｃ～

「なに、只の【傭兵】さ」

颯爽と姿を現したのは、この世界では傭兵家業を営むことになったスティーブンだった。

彼は右腕を失い呻き声を上げて蹲るノートンを視界に収めつつ、ティアナを庇う様にして彼女の前に立つ。

だがティアナは幾ら自分を助けたからといってそう簡単に警戒を解くはずもなく。油断無くスティーブンとノートンに視線を向ける。

《聞こえるか、ティアナ＝ランスター》

そんな時、突然スティーブンからの念話が彼女に届く。

どのような意図があってそのような行動に出るのか。頭の中で瞬時に幾つもの可能性を思案しつつ、ティアナは念話に応じた。

《貴方は一体何者ですか？この状況下と過去の事例から推察するに、恐らくは”隠者”の仲間なのでしょうが……》

《理解が早くて助かる。私は”同郷の者”の依頼を受けて参上したスティーブンと言う。以後、宜しく頼む》

やはり、とティアナは内心安堵の息を吐く。

彼―スティーブンはティアナの”隠者の仲間か”という問いに対し、”同郷の者”と応えた。

この世界において、隠者―シオンの素性を知る者は極僅かだ。そんな彼と”同郷”であると応える。それはつまり、目の前の男も又、シオンと同様”エターナルスフィア”出身の者と言うことだ。

加えて、ノートンの言動や所持する武器などから考慮した結果、スティーブンがノートンと同じ”神の尖兵”では無いという可能性が高まる。

だが、あくまで可能性の話でしかない。確たる証拠が無い以上、必要以上に信用をする事は命取りであると言う事をティアナは理解していた。

《こちらの仲間への説得は何とかします。その間、足止めをお願いしても？》

《無論だ。その為に私は此処へ来たのだからな。それとも、まだ私の事が信用できないかね？》

《確たる証拠が無い以上、初対面で素性の知れない相手を必要以上に信用する事は出来ませんので》

《……これは手厳しい》

やれやれ、と内心で呟いたスティーブンは、意識を完全にノートンへと向ける。

「さて……。私が此処へ来たのはこの男に用があるからでね。君達はさっさと帰りたまえ。仕事の邪魔だ」

「っ！？」

「……」

《ギンガさん》

《？ティアナ……？》

スバル達はその言葉に意表を突かれ、判断しかねる。が、この中で”ティアナに次いで”経験のあるギンガだけは油断無くスティーブンを見据え身構える。

同時に少しでもノートンとスティーブンの手がかりを得ようと会話を試みようとしたその時、ティアナが彼女を制止した。

《この場は大人しく引いたほうが得策です》

《でも、あのノートンと言う人も含めて何かしら情報が手に入るかもしれないわ。……正直、こんな機会は滅多に無いもの》

アイコンタクトを交えつつ、この場に留まる事を主張するギンガ。だがティアナは僅かに首を横に振る。

《ギンガさんの言う事はもっともです。ですが私達の任務はあくまでも”レリックの確保”です。加えてあの自称”傭兵”です》

チラリと横目に見やると、吊られてギンガも視線をスティーブンに向ける。

その背中には一部の隙も無く、只者でない事は一目瞭然。

《不意打ちとはいえ、私達が五人がかりでやっと動きを止めた相手に意図も容易く一撃を加えた。……悔しいですが、戦力的なことも考慮すると、この場は引くべきかと。

それに、今は蹲っているとはいえ、ノートンの戦闘力も見過ごせるものではありません。全員無事に離脱するには、今をおいて他に時期は無いかと》

《……》

淡々と現実を話すティアナだったが、その言葉の端々から悔しさが滲み出ているのはギンガにも感じ取れた。そして、ティアナの言うとおり現状を考慮した場合の最善の策は――――

《……分かったわ。悔しいけど、今は離脱及びレリックの護送。それとあの女の子達の追跡を最優先しましょう》

《有難う御座います。それと、すみません》

《気にしないで、とは言えないけど。……悔しいのは私も一緒だもの》

ギンガが軽く頷いたのを確認したティアナは、スバル達にも方針を伝えることにした。

そして彼女達は、スティーブン達を警戒しつつ、ルーテシア達を追うために動き始めた。

《全く……よくもまぁそこまで”演技”が出来るものだ》

一連の流れをティアナあらの念話を介して聞いていたスティーブンは、ティアナが如何にも悔しそうにしているのを見て呆れとも感心ともつかない言葉を送る。

《この位の事が出来ないと、”裏”ではやっていけませんから》

ニヤリと笑みを浮かべながら、ティアナはそう答えその場を後にした。

Ｐｈａｓｅ－２３　～傭兵　護り屋　情報屋　Ｃ～

「ルールー！これ以上は不味いって！！」

アギトはルーテシアに向かって進言するも、当のルーテシアは取り合おうとはしない。

そんな彼女の視線の先に葉は大型のカブトムシのような召喚虫”地雷王”が、電気を放電していた。

この地雷王は、巨大な振動を起こす事が出来る。ルーテシアはその力を利用して元々脆い建物を崩壊、ティアナ達を一掃しようと考えたのだ。

だがこれはかなり危険な手段だ。何故ならティアナ達は未だ建物の中。つまり、建物が崩壊すると言う事は、彼女達を瓦礫の下敷きにすると言うことだ。

如何に魔導師といえど、そんなことになれば只ではすまない。最悪、命を落とす事だってある。

アギトと現在アギトの”ロード”であるゼストは、可能な限りルーテシアには危険な事をさせたくは無かった。だが今彼女がやろうとしている事は、人の命を奪う危険性がある行為。彼女に”一線”を超えて欲しくないアギトからすれば、止めねばならない行為なのだ。それにレリックはティアナ達が所持しているのだ。その回収は一体如何するのか？

何度もその事を話し聞かせてはいるものの、返ってくる返事は「あのレベルの魔導師なら大丈夫」、「後で【クアットロ】と【セイン】に探してもらう」の一点張り。意外と頑固なところがある彼女をどうやって止めようかと必死に考えていたその時――――

ズシンッ、という大きな地響きが鳴り響く。

慌てて視線を音のした方へと向けると、其処には僅かに陥没した地面の上に立つ地雷王の姿があった。

「あ～ぁ、やっちまったよ……」

アギトの説得も虚しく地面は陥没。見た目には何とも言えないが、恐らく地下は目も当てられない状況となっているだろう事は容易に想像が出来た。

そんなアギトの心境を知ってか知らずか。ルーテシアは傷を負ったガリューを案じる。それほど深い傷ではないのだろう、”彼”は一つ頷いて見せるが、ルーテシアの不安は残る。

「戻っていいよ。アギトが居てくれるから……」

感情の起伏が少ない彼女にしては珍しく、その声色には”彼”を労わり、心配していることが感じ取れた。

本来であれば、主である彼女の側を離れたくはない。だが同時に、彼女を心配させたくもなかったガリューは僅かに悩んだ挙句、彼女の言葉に従い”還って”いった。

そんな”彼”を見送ったルーテシアは、力を貸してくれたもう地雷王にも声をかけようとした、その時――――。

「ッ！」

「な、何だ……？」

桃色の魔法陣が輝き、そこから伸びる鎖が地雷王の動きを堅く封じ込める。それを合図に、二人を取り囲むように魔力の反応が感じ取れた。

――――不味い。そう思った時には既に遅く、先ほどまで対峙していた局員の一人である銃使い――ティアナからの奇襲を受ける。

「こっんのーー！」

「っ！」

初撃を避け反撃をするも、あっさりとかわされる。

そもそもティアナの攻撃は二人の体勢を崩すための布石に過ぎなかったのだろう。その証拠に二人は分断され、アギトはスバルとギンガに。ルーテシアはエリオに捕らえられることとなった。

バインドで捕まえられた二人は、現状を打破出来る術がないため、大人しく捕まった。何とかレリック事件の関係者であるルーテシアとアギトを捕まえたティアナ達は、思わず安堵の息を吐く。

つい先ほどまでは高威力の質量兵器を持った男との死闘を演じていたのだ。僅かばかりとはいえ、緊張の糸が緩んでしまう彼女達を誰が責められよう。

だが何時までも気を抜いているわけにもいかない。気持ちを切り替えたティアナ達が、二人に職務質問をしようとした、その時。

『こちらスターズ2。フォワード一同、無事か!?』

「「「ヴィータ副隊長!?」」」

『私もいるですよ～』

別行動をとっていたヴィータとリインから通信が入った。どうやらティアナ達のほうへ向かっているらしく、段々と魔力を感じ取れる距離にまできているようだった。

メンバーを代表して簡単に状況説明をするティアナの言葉に、現状維持と周囲の警戒を怠らないようにと指示をする。

それから程なくして現れたヴィータとリイン。頼れる上司の登場に安堵したのも束の間――――。

「ふ、副隊長にリイン曹長!?」

「ど、どうしたんですか!?」

所々に損傷を負ったバリアジャケット姿の二人にスバル、エリオ、キャロは驚愕を。ティアナ、ギンガは緊張と警戒心を表情にして表した。

二人の実力は局内の噂を、何よりその身に染みて理解している。そんな二人が手傷を負わされた。この事実は新人――特にスバル達三人には大きな衝撃を与える事になった。

だが驚いてばかりもいられない。ティアナはスバルとエリオにルーテシア達の監視を、キャロには二人の治療を指示する。と同時に、自身はこれから起こるだろう不測の事態に少しでも備えるために、ヴィータ達に何があったのかを尋ねる。

思いのほか冷静に、且つ迅速に指揮を執るティアナに感心しつつ、二人は自分達の身に何が起こったのかを説明しようとするが、まず確かめなければならないことがあった。

「おい。お前等の仲間に銃使いの魔導師はいるか?」

そう言ってルーテシアとアギトに尋ねる。二人は始め、何も言うつもりはなかったのだが、ヴィータの視線に含まれる尋常では無い気配を感じ、いぶかしみながらもアギトが答えた。

「……いねぇよ、そんなヤツ。大体、銃を使う奴で管理局の仲間じゃないってんなら、あの隠者ってやつがそうなんじゃねぇのか?アイツだって銃使うんだし」

「嘘を言ってもためにならねぇぞ？」

「ハッ！こんな状況で嘘なんか言ってどうするんだよ！」

と、ぶっきらぼうに答えたアギト。ここでヴィータ達管理局側に自分達しか知らない情報（隠者が銃のデバイスを使っての戦闘が出来、また、隠者と敵対するような状況があったこと）を漏らしてしまうのも、彼女らしいといえるだろう。

内心、隠者について新しい情報が手に入ったと喜ぶヴィータだったが、今はそれどころではなかった。

「ヴィータちゃん……」

「あぁ、最悪の状況かもしんねぇ」

リィンの不安そうな声に、思案顔をするヴィータ。その様子に、スバル達フォワード陣は僅かに不安を募らせる。と、同時に、ティアナとギンガは先ほどの会話からヴィータが何を言おうとしているのかを推測していた。

（ここで銃使いの魔導師の存在を確認すること。それから副隊長の言う【最悪の状況】……）

（今の私達にとっての【最悪の状況】といえば……。いや、もしもこれが【管理局全体にとって】の【最悪の状況】だとしたら――――）

「……神の執行者（エクスキューショナー）の側に魔導師が現れた――――――――？」

その言葉にティアナを見る一同。ついで、その審議を確かめるようにヴィータとリィンを見ると、驚いたような表情をしたあとに、まるで苦虫を潰したような表情をした。

「厭くまで、こいつらの言葉が本当だったと仮定した場合の話だが、な……。兎に角、今のアタシらがするべき事は、レリックの確実な確保だ。今回はこうして事件の関係者を捕まえる事も出来たんだ。これで間違いなく、事件は解決に進展する。

そんな今だからこそ、警戒を怠るなよ。安心した時こそ、何が起きても可笑しくねぇんだからな！」

それと、と言葉を繋げるヴィータ。

「今回お前達はアタシ等がいなくてもここまでやってのけたんだ。なら、例え何が起こっても、訓練と同じで仲間を信じて動けばどうとでもなる。自信を持て！！」

『はいっ！！』

見るものに力を与えるような笑みを浮かべて語るヴィータ。その言葉に、フォワード陣は自然と肩の力が抜け気合が入るのを感じた。

だが、そんな彼女達を嘲笑うかのように、事態は急展開を向かえる。

『こちらロングアーチ！広範囲に渡って魔力反応を感知！場所は…
…ヘリ周辺！それにこのパターンは――――神の執行者（エクスキューショナー）！？』

通信越しに届いたシャーリーの悲痛な声に、ヴィータ達は一斉にヘリが飛んでいるであろう場所へと視線を向けた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

――同時刻　ヘリ周辺――

『こちらロングアーチ！広範囲に渡って魔力反応を感知！場所は…！ヘリ周辺！それにこのパターンは――――神の執行者（エクスキューショナー）！？』

シャーリーからの突然の通信に、二人は立ち止り周囲を警戒する。すると二人の視線の先には、複数の深紅の魔法陣のようなものが現れる。

そしてその魔方陣から、複数のエクスキューショナーたちが現れる。その数は三十体ほど。現れたのは全て前回の任務で遭遇した個体――【アンホーリーテラー】。どうやら新種の個体はいないようだった。

「……私がここで何体か足止めするからなのはは先に行って」

「フェイトちゃん?!」

フェイトの提案に、なのはは驚愕する。確かに彼女の戦力ならそれも可能だろうが、かなりの危険が伴うのだ。なのははフェイトを止めようとするが、フェイトはエクスキューショナーを睨みつけながら呟く。

「ここに現れたってことは、ヘリの近くにも現れるかもしれない。それなら、多少リスクはあるけど戦力を分散したほうがいいと思うんだ」

「でも、それなら足の速いフェイトちゃんのほうが――――――」

「確かに私のほうが早さはあるけど、防御力はなのはの方が上だよ。万が一ヘリが狙われることを考えたら、なのはが行くべきだ。それに――――――何だか胸騒ぎがする」

そう言いながら、フェイトは無意識の内にバルディッシュを握る手の力を強める。それを見たなのはは、意を決した。

「フェイトちゃん……。――――――分かった。でも絶対に無茶だけはしないでね?」

「大丈夫。なのはも気を付けて!」

そういって笑顔を浮かべたフェイトは、表情をキッっと引き締め先行する。

と、同時に自身の周囲には複数の魔力弾を精製。発射体勢に移っていた。

「フォトンランサー――――ファイアッ！！」

フェイトの命令に従い、複数の魔力弾はエクスキューショナー達目掛けて殺到する。その内何発かは命中するも、当然打ち漏らしもあった。しかしそれも彼女の計算の内。フェイトは避けられたフォトンランサーを直ぐに操作し、エクスキューショナー達をなのはの進行ルート上から退ける。

そしてそこへ駄目押しとばかりに――――――――

「ディバイーン――――バスタァーー！！」

――――――――なのはが砲撃を打ち込む。

なのはの攻撃は、何体かのモンスターを飲み込み、或いは退けさせる。そうして更に大きくなった道を、なのはは振り返ることなく全速力で翔け抜ける。

彼女の後を追おうとするモンスター達だったが、バルディッシュをハーケンモードに切り替えたフェイトが斬り刻み、立ちふさがる。

「……此処から先には、行かせない！」

静かに告げたフェイトは、閃光の如き速さを伴いモンスター達へと斬りかかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

――同時刻　ビル屋上――

なのは達六課のメンバーがガジェットやモンスターと交戦している頃、一際高い廃ビルに二つの人影があった。

一人は、ガジェットの操作と幻術による錯乱をしかけている人物――クアットロ。そしてもう一人は布で包みこんだ巨大な【何か】を持つもう一人の戦闘機人―ディエチだ。

「あれが神の執行者（エクスキューショナー）……。映像で見るよりも気持ち悪いね」

そう呟いたディエチの目は、本来肉眼では捉えられない距離にあるはずのヘリと、その周辺に現れた化け物たちを捉えていた。

「そうね。そのうえ相手にするのは面倒だから、さっさと目的を果たしましょ～」

ディエチの言葉に言葉とは裏腹に余裕そうに返すクアットロ。だがそんなクアットロの反応に、ディエチは違和感を感じた。

（クアットロ、口で言う以上に警戒している？でも一体どうして……）

とそこまで考えて、ディエチは一度考える事を止める。無駄な雑念にとらわれる必要はない。それでミスをするつもりはないが、万が一があっては戦闘機人の名折れだ。

「でもいいのか、クアットロ？あのヘリを落としちゃって。ケースは平気だろうけど、【マテリアル】の方は破壊しちゃう事になる」

「大丈夫よ。ドクターやウーノお姉さま曰く、あの【マテリアル】が本物なら――――【聖王の器】なら、砲撃程度じゃ死なないもの。それに――――あの化け物どもが邪魔をする前に仕事を終わらせてさっさと帰りたいもの～」

「……了解。（なんだからしくないね……そういえば）ねぇクアットロ、お嬢様たちのほうはどうするの？」

「そっちは大丈夫よ～。ヘリへの攻撃と同時にセインちゃんに動いてもらうようにいってあるから。今はあの化け物共も動いているし、その混乱に乗じて、てね」

「そう……。分かった」

ディエチは短く返事を返すと、抱えていた荷物の布を取る。中から出てきた彼女の固有武装である巨大な砲――【イノーメスカノン】を構える。

「良かった……ヘリは無事『市街地にエネルギー反応――――なのはさん！』――――！？」

ヘリを視界におさめられる距離にまで近づき、安心したのも束の間。シャーリーからの報告になのはは身を強張らせる。

神の執行者（エクスキューショナー）の別動隊か、それともスバル達フォワード陣が捕まえたといっていた少女達の仲間か――――。どちらにしても、このタイミングで狙いを付けるとしたらほぼ間違いなく

（あのヘリを狙っている……！！）

「（砲撃を物理破壊モードへ移行。チャージ完了まで残り僅か……）インフューレントスキル【ヘヴィバレル】発動」

――――十

呼吸を整え、狙いを定めるディエチには焦りも不安も無い。既に砲撃の威力はSランクに届くほどにまで準備が整っている。あと数秒の後に引き金を引く。ただ、それだけ。

――九

――翔る。

――八

ただ、その身の出せる最高速度を持ってして空を翔る。

――七

今、この場で護れなくて、何の為の力か。

――六

そう自分に言い聞かせるように、なのはは全身に魔力を巡らせ、ヘリを目指す。

――五

手を伸ばせば届きそうな距離。

――四

すぐ其処に、ヘリ（自分が護るべき人達）がある（いる）。

――――三

大切な仲間が。不幸な目にあった少女がいるのだ。

――――二

急げ。急げ急げ急げ急げ急げ――――――！

――――一

腕を命一杯伸ばす。届け。届け。届け、と――――

そして――――

「――――発射！」

ヘリは、光の奔流に飲み込まれた――――――――

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

『砲撃、ヘリに直撃……？――――そんなはずないっ！状況確認！』

『っ、ジャミングが酷い。データ来ませんっ！！』

ロングアーチから届く全体通信。その言葉に、フォワード陣はおろか、ヴィータやリィン。はやてやフェイトまでもが息を呑む。

まさか、なのはが間に合わなかったのか？

そんな考えが脳裏を過ぎる。必死になってその考えを振り払おうとするも、そうするだけの情報があまりにも少なすぎる。

「――――てめぇ！」

ヴィータはルーテシアの肩を掴み、問いただす。他に仲間はいるか、何処に潜んでいるのか、と。

本来一番冷静であるべき人物が取り乱していたためか、皮肉にも表面上だけとは言え冷静さを取り戻したのはスバル達新人フォワード陣だった。

取り乱すヴィータを宥め様とするスバルやリィン、それを心配そうに見つめるエリオとキャロ。そんな彼女達を見て、ティアナとギンガは先ほど以上に周囲を警戒する。

敵がつけいるとしたら、混乱しているこの状況をおいて他に無い。これまでの経験則と、先ほどヴィータが言った言葉が胸に残っていた二人は、この場で正しい判断を取る事が出来た。

「っ！はぁっ！」

「うわっ！？」

エリオの背後――正確には地面から伸びる手に気付いたギンガは、そこから現れた本体――戦闘機人の一人である少女セインを殴りつける。

まさか気付かれるとは思っていなかったセインは、受身すら取れずに地面を転がり、吹き飛ばされる方向を予測して先回りしていたティアナにあっさりと捕まってしまう。

その鮮やかな手際に、ヴィータ達は漸く正気に戻り、ルーテシアとアギトはこの場からは逃れられないと悟った。

「まさかセインちゃんまで捕まっちゃうなんて……正直予想外だったわね。ところでディエチちゃん、ヘリの様子はどうかしら？」

「……少し待って。今確認しているところ」

ウーノから届けられた報告に思わず目を見張るも、今更作戦の変更など出来るはずも無く、クアットロはこの場をどう切り抜けるかを模索し始める。当然、ヘリの状況を確認することも忘れない。

そんな切り捨てるようなクアットロの考えに思うところがあったディエチではあったが、作戦参謀である彼女が見切った時点で手は無いのだろう。そう悟ったディエチは心の中で三人に謝罪をしつつ、未だ晴れない煙の向こうを見つめる。

「……あれ、まだ飛んでいる？」

ディエチの呟きと同時に、耳に届いてくるノイズ混じりの声。

『ス――ーズ2とロ――グアー――へ』

僅かに眉を吊り上げるクアットロ。そして内心呟く。

（どうやら、こちらが思っていた以上の実力だったようね。……全く、厄介な存在ね――――不屈の魔導師（エースオブエース）は）

「こちらスターズ1、ギリギリセーフでヘリの防御成功！」

煙が晴れると同時に全体通信で無事を伝えるなのは。その手に持つ愛機レイジングハートを、味方を力付けるように振るう。

見れば彼女のバリアジャケットは僅かではあるが、その形状を変えていた。

エクシードモード。

限定的にランクを下げているなのはが用意した、切り札の一つ。これにより、本来とまでは行かないにしても幾分か力を取り戻すことが出来る。

通信越しに聞こえてくる仲間の歓声に、安堵の溜め息を吐く。自

分で言ったように、正直ギリギリであった。この状況を作り出せたのは、ほんの僅かな運も含まれているだろう。

だがそれでも、自分は仲間を護った。運を勝ち取ったのだ。ならばその幸運を引き連れたまま、親友が食い止めてくれている化け物を蹴散らし、ヘリを狙撃してきた犯人を捕まえようではないか。

僅かに緩んだ緊張感。そこに喝を入れる。この事件を無事に終わらせれば、この先にあるだろう大きな事件の解決にも繋がるだろう。

そう信じたなのはは、砲撃が飛んできた方向を目指そうとして

自分を覆う影に気付いた。

「――――え？」

そこにきて漸く、自身の背後に【何か】がいるのを感じた。まるでスローモーションのように流れていく景色の中でなのはが見たものは。

全身を黒いコートで覆った人間が、全身のバネを使い、その右足に魔力を込め、振り抜こうとしていた――――

Ｐｈａｓｅ－２３　～傭兵　護り屋　情報屋　Ｃ～（後書き）

感想・指摘等お待ちしております。

Ｐｈａｓｅ－２４　ファースト・コンタクト（前書き）

これまでのインターバルは何だったのかという。
色々急展開かもですが、どうぞ。

Ｐｈａｓｅ－２４　ファースト・コンタクト

目に映る景色が、まるで時間に取り残されたようにゆっくりと進んで見える。

でも、そんな中唯一時を進めているもの――――それは、全身を黒いコートで包んでいる人影。

その人影は両手に銃型のデバイスらしき物を握っているけど、今は使うつもりはないらしい。その証拠に、私に迫っているのは全身を余すところ無く使って振り抜かれた右足。そこに込められている魔力量もまさに必殺と呼べる程のもので、今からバリアを張ったとしても殆ど意味をなさないだろう。

――――いや。どのみち全てが遅い。

どうやったのかは分からないけど、この距離に近づかれるまで――否。この距離に近づかれても長年連れ添ってきた愛機であるレイジングハートが反応しなかった。ロングアーチからの報告もない。

つまり、この人影はそれほどのステルス能力を持っているのだろう。

――――ならば仕方ない。

自慢の愛機が気付けなかったのだとすれば、それはもうどうしようもなかったんだ。なら悪いのは他でも無い。気付けなかった私自身だ。

自分の至らなさに呆れると同時に、脳裏に過ぎるのはこれまでの

人生、その思い出たち。

（あぁ、これが走馬灯ってやつなんだ……）

自分自身の事なのに、何処か他人事のように感じてしまう。それだけ、今の状況が実感出来ていないということなのかな。それでも、【死】はすぐそこまで迫ってきている。

――――まだまだやらなければならない事がある。

新人達の教導。親友達と共に解決すると決意した事件。それが解決した先の、管理局での自分がするべき事、なさねばならない事。

それだけじゃない。もう直ぐ成人だというのに、まともな恋の一つもしていない。もし魔法と出会っていなければ、普通の女の子のように青春を送れたのかもしれない。

でもそれは既に諦めた道。それでも、恋愛というものには憧れもある。なにせ、こういうと歳を取っているように感じるが、私だってまだまだ若いんだ。

彼女にはこれから幾らだって、これまで出来なかった事を取り返す時間はある。――――否、あったはずなのだ。

――――そう。これからだ。まだまだ私の――――高町なのはの人生は続いて行くはずなのに。それがあと数瞬の後に失われてしまう。

それが、堪らなく怖く。堪らなく、悔しい。

（あぁ、神様。もし本当にいるのなら……。どうか、どうか私を助けてください）

らしくない、と思いつつも、そう願わずにはいられなかった。

そうして祈るように。或いは恐怖から目を背けるように、なのは
は硬く目を閉じる。

――――【神は人を救わない】とは、誰が言った言葉だったろうか
おかしい。

――――なぜならば

何時まで経っても、痛みを感じない。

――――何時だって人を救うのは

ゆっくりと瞼を開く。

――――何時だって【奇跡】を起こすのは

其処には……

『もう一人』の黒い人影――隠者（ハーミット）の背中があった

――――他ならぬ【人】なのだから

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～Ｔｉｌｌ　Ｔｈｅ　Ｅｎｄ　Ｏｆ　Ｔｉｍｅ～

Ｐｈａｓｅ－２４　ファースト・コンタクト

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「……え？　隠者（ハーミット）……さん？」

「……」

なのはは気の抜けた声を発してしまう。だが無理もないだろう。ほんの数瞬前までは、自分の死を覚悟していたというのに、このような形で助けられたのだ。それも――こういっては何だか犯罪者予備軍に。

だが、そんなのはに振り返ることなく、隠者は視線を一点に向ける。

彼と同じように視線を向けると、そこには先ほどまで自分の命を刈り取ろうとしていた人物――もう一人の黒い人影が、廃ビルの上にまるで幽鬼のようにユラリと立っていた。

「――――っ」

その姿に、しらず息をのむ。心が恐怖に支配されそうになる。足が竦みそうになる。そんな彼女を護るように前に出る隠者。しかしその間も、黒い人影から注意を逸らさない。

数分か、それとも数時間か。僅か数秒の睨み合いだというのに、なのはには二人の対峙が長く感じた。それほどまでにこの二人の殺気は凄まじい。それこそ、数々の事件を経験してきたなのはが慄くほどに。

やがて黒い人影は、懐から小さな機械を取り出し、起動させる。

【『――――愚かな人間共よ。聞くがいい』】

そこから聞こえてくるのは加工された音声。それは目の前にいる隠者、なのはだけではなく、六課の通信に介入し戦闘区域にいる全員に届けられた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

【『――――愚かな人間共よ。聞くがいい』】

突然の通信介入に驚く六課一同、そしてクアットロ、ディエチ。皆固唾を飲んでその続きを待つ。何故ならそれは、これまで多くの謎に包まれてきた神の執行者を名乗る存在とのコンタクト。故に、可能な限りの情報を引き出したかったのだ。

【『我らは貴様らを駆除する』】

――――駆除。人間をまるで害虫のように扱うその言葉に誰もが憤る。だがそれでも、相手は管理局の技術ですら解明できない未知の技術を使う存在。それ故にはやては、その真意を探るべく会話を試みる。

『駆除、とは穏やかやないね。……アンタ等は一体なんの目的があってこんなことをするん？』

普段の穏やかな様子はなりを潜め、努めて冷静であろうとするもはやての言葉は荒れ、その端々から怒りが滲み出ている。だがそんな彼女の様子など歯牙にもかけず、言葉は続く。

【『貴様ら人間は、我らが創りし世界を汚染する汚物。故に、駆除するのだ。この美しき世界を護るために――――』】

……我らが創りし世界？何だそれは。それではまるで――――

『……自分達が神だとでも言いたいんか？』

【『然り。我らは一。我らは全。我らは神。我らは――――世界そのもの』】

はやての言葉に間髪いれずに答える、自称【神】。これまでの会話から読み取れるのは、相手は超技術を持つ文明を築く存在。そして何を思ったのか、自分達が世界を支配する存在であり、自分達の世界を汚す存在――――即ち自分達の支配権を脅かそうとする存在である管理局とそれに属する人類を滅ぼそうとする知的生命体。

はやては彼らを、その様な存在だと認識した。

もっとも彼女は、【支配】という一点に関しては、【次元世界の守護】を名目に活動している管理局もさほど大差ないと考えてはいるのだが。

――――一方的な正義は悪と同義であり、行き過ぎた正義は暴力でしかない。

だがそれでも、他人を省みない独善的な行動をする犯罪者（世間一般的に言う）を取り締まり、人々の安全を護るのもまた、管理局なのだ。

そういった側面を理解しつつも、彼女は戦う道を選んだのだが。

『――――随分と自分本位な考えやね。これだけの大規模犯罪、許されると思っているん？』

【『許す許さないは我らが決めること。貴様らはただ、我らによって駆除される存在にすぎない』】

『そう簡単にいくと、本気でおもっているのか？』

そんな時通信に割り込んできたのは、六課設立に大いに関係を持つ存在――時空管理局において若き提督としての実力と権力を持つクロノ＝ハラオウンだった。モニターには聖王教会騎士であるカリム＝グラシアの姿もある。

今回の事件を聞きつけた彼らは、はやての限定解除後もその推移を見届けるべく、戦闘を見ていたのだ。そんな時に現れたのは、これまでなんの手掛かりもなかった【神の執行者】――しかも、人間が現れコンタクト（と呼ぶには一方的なものだが）を取ってきたのだ。

事件進展のためにも、この期を逃すわけにはいかない。故に彼らも、通信に割り込んできたのだ。

『我々管理局は、数々の世界と同盟を結んでいる。これ以上数多くの次元世界への「侵略行為」を行うというのであれば、こちらも相応の対応を取らざるを得ない』

『そして我々聖王教会も同意見です。ですが、それでも我々には対話という手段が残されています。ですから――――』

「――――ヒャヒャヒャヒャヒャッ！！」

暗に実力行使に出ると告げつつも、交渉の余地があると告げるクロノとカリム。もっともこんなものは「法と正義」の名のもとに動いているからこそ言わなければならない口上に過ぎないのだが。

だがそんな彼らの言葉を遮る、不快な声。

その場の全ての人間の視線が、サーチャーがそちらを向く。

罅割れた大地にいるのは、先ほどまでフォワード達が戦っていた相手――――ノートンだった。失われた右腕は止血されているようで

はあるが、その苦痛は言うまでもなく、全身で息をするほどに疲弊している。

『（すまん隠者、油断した）』

そんな時、隠者へと傭兵（スティーブン）からの念話が届く。彼ほどの実力者がそう易々と手負いの獲物を逃すとは思えない。考えられるとすれば――

『（そちらにも出たのか）』

『（あぁ。雑魚ばかりであったが、如何せん数が……いや、言い訳は言うまい。一応、ティアナ達のほうへ向かっているが……）』

『（あぁ、それで構わない。……奴らが態々会話のためだけに出てくるとは思えないからな）』

『（同感だ）』

短いやりとりをしたのち、隠者は意識を再びノートンへと向ける。すると、視線がノートンへ向いた瞬間をついたのだろう、黒い人影が彼の隣りにいた。

「っ、しまった……！」

『何時の間に……』

何時の間にか距離を取られたことに己の不覚を悟るなのはとはやて。だが、すぐに気持ちを切り替えられる辺りは流石というべきか。

そんな彼女達を余所に、人影はノートンへと歩み寄る。

【『神の使徒、ノートンよ』】

「……アンタか」

【『汝に力を授けよう。その力をもって、神の敵を屠るのだ』】

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「ソイツはいいぜ！俺もあの餓鬼共に『礼』をしてやりたいと思ってたからなぁ……！！」

口角を釣り上げ、ニヤリと醜悪な笑みを浮かべるノートン。人影はそんな彼の首筋に何かを押し当てる。パシュッ、という音と共に撃ち込まれる『何か』は、瞬く間にノートンの体内を駆け巡る。

自身の中を駆け巡る『何か』の存在に、彼は言いようのない高揚

感を感じた。

「は……ハハハッ！！
良いねぇ……ビンビン来てるぜぇ！力が沸き上がってくる！
溢れちまいそうな位によぉっ！！」

『エネルギー反応増大、なに…これ……！？』

通信越しに聞こえてくるシャーリーの声は震えている。それはまるで、得体の知れないものに怯えるようで。

「なのは――――！」

「フェイトちゃん……」

アンホーリィテラーを全て倒したフェイトは、なのはの隣に並び立つ。
通信を聞いていたとはいえ、戦闘中だったために状況を上手く把握できていない彼女は一瞬、なのはの傍にいる隠者に警戒心を露にするも、なのはがそれを諫め状況を説明する。
そうしている間にも、ノートンの変化は止まらない。

失われたはずの彼の右腕。その細胞が活性化し歪にボコボコと音を立てながら再生していく。
やがてすっかり再生し、ドクドクと脈打つ自身の右腕を見たノートンは更に笑みを深める。

「見ろよ！腕が、俺の腕が元に戻った！ヒャハハハ、スゲェ……スゲぇよっ！！」

狂喜し、歓喜するノートン。一瞬にして人体を再生するような有り得ない能力を手に入れた彼を相手に、しかしそれだけが能力とは思えないためにう迂闊に手が出せない。危険は承知のうえ、だがそれでもノートンの出方を伺うしかない。

――――そんな時だった

ノートンを中心の巨大な深紅の魔法陣が形成され、次いでその陣を囲むように計三十の小さな同型の魔法陣が浮かび上がる。そこから出てくるのは、先ほどまでフェイトが戦っていたアンホーリィテラーと、五体の飛竜。

ノートンにはそれが、自分を守る存在のようにも、自分の手駒のようにも見えた。

「これだけの数だ。形勢逆転ってやつだなぁ……。だがそう簡単には殺さねぇ。この俺様をコケにしやがったんだ、死ぬほうがマシってほどの苦痛を味わわせてやるよ……！

おいお前ら！やっちま――――――」

――――肉が拉(ひしゃ)げ、骨の砕ける音が響く。

「――――あ？」

ノートンの間の抜けた声が、不自然なほどに聞こえてくる。

見れば、彼の腕を貪る様に咬み付いているのは――一体のアンホーリィテラー。呆然とその様子を見ているノートンやなのは達を余所に、まるで死肉に群がるハイエナのように我先にと次々にノートンを貪り始めた。

「お……ああアアアアッ！？て、テメェ等！何してやがっ……！くそっ……この化け物どもがあああっ！！」

叫び声を上げ、銃を乱射しながら怒り狂い、逃げまどうノートン。腕のみならず喰われた部分は、瞬く間に再生していくが、如何せん体中を喰われたのだ。その様は見ていて吐き気がするほどだ。

だが、その変化は既にノートンだけのものではなかった。

「うそっ……！」

「あの化け物達、さっき倒されたはずじゃ……」

ノートンの血肉を喰らったもの達もまた、再生していく。そしてまた、ノートンに貪りつく。その繰り返しだった。みすみす情報源を殺されるわけにもいかず、なのは達がノートンを助けようとするが、それを隠者が手で制した。

「なっ！どいてください！」

「早くしないとあの人が……「……既に手遅れだ」……！？」

どういうことだ？と問いただそうとする彼女たちだったが、それを遮るように叫び声が木霊した。慌てて視線を向けると――――

「ひっ……！？」

その光景に、フェイトは思わず悲鳴を上げる。なのはは悲鳴こそ上げないものの、顔面蒼白といった状態だった。

「な、何だっ。どうなってやがるんだっ……！？」

再生と損傷を急速な速度で繰り返したノートンの細胞は、異常な活性化を始め、人の質量ではありえないほどに膨張を続けている。そんな彼をお構いなしに、化け物達はノートンを喰らい続ける。異常活性を続ける細胞に飲み込まれても、尚。

「あ……が、ぁ。……た、すけ――――」

断末魔の叫び声すら上げられずに、ノートンは化け物達を全て飲み込み、物言わぬ巨大な肉塊と化した。優に１０ｍを超す歪で巨大な肉塊は、脈動を繰り返しながら赤黒くその身を染め、取り敢えずの落ち着きをみせる。

隠者が、なのは達が、そして遥かに離れた場所にいるはやて、クアットロ、ディエチですらが、固唾を呑んで成り行きを見守る。本来であれば、結界に閉じ込めるなりするところだが、先ほど化け物

とはいえ近づくものを呑み込み成長するする様を見せつけられては、それも出来ずにいた。

やがて肉塊は、再び膨張と変貌を始める。段々と形を取り始めたそれを見た彼等は、恐怖に屈し震えそうになる心を奮い立たせ、己の得物を構える。

完全に変貌を遂げた肉塊。それは巨大な鳥のような姿をしていた。幾何学模様の描かれた魔法陣のようなものを背負い、巨大な一対の羽を広げ孔雀のような尾を靡かせる様はいっそ優雅でさえあった。

だが、その色は先ほどと変わらぬ死肉を思わせる、赤黒い色をしている。生理的な嫌悪感を呼び起こすその存在は、小さく身震いをする。

――――ゾクリ、と隠者と傭兵の背筋が凍る。

赤黒い鳥は甲高い泣き声を上げる。

――瞬間。一切の予備動作も無く、赤黒い鳥を基点に黒い雷の嵐が巻き起こった。

Ｐｈａｓｅ－２４　ファースト・コンタクト（後書き）

家のノートンは咬ませ犬ですらなかったという。

感想・指摘等お待ちしております。

Ｐｈａｓｅ－２５　黒き死鳥（前書き）

約一ヶ月ぶりの更新で申し訳ありません。
どうぞお楽しみ下さい。

Ｐｈａｓｅ－２５　黒き死鳥

――Ｓｉｄｅ　ティアナ――

「――――うっ」

体中を走る痛みに目を覚ます。視界に入ってきたのは、ちょうど世界が９０度横に傾いたような景色だった。それと同時に感じる、ヒンヤリとした冷たい感触。

ボーッとする頭で考えて、あぁ、私は今横たわっているんだと、まるで他人事の様に理解した。でも分からない。そもそも私は何でこんな所で寝ているのか？それに、私は何をしていたんだ？

そこまで考えた瞬間、急速に頭が冷める。そうだ、私達は――――！

「っ、痛っ……」

慌てて身を起こしたせいか、再び全身が苦痛に苛まれる。同時に、頭に酷い頭痛を感じた。どうやら倒れた拍子に頭を打ったのだろう。触れた手には、僅かではあるがヌルリとした血が付着していた。

――――落ち着け。私の中の理性的な部分が働く。呼吸を整える。まずすべき事は状況の確認だ。

私達は、突如現れた巨大な黒い鳥のような化け物が放った、雷の嵐に巻き込まれた。そんな私達を護るように、ヴィータ副隊長とリィン曹長がシールドを張る。

更に、地下で私達を助けてくれた傭兵――たしかスティーブンと

名乗っていたか――が現れ、彼も又、私達を庇うようにシールドを張っていた。

一通り思い出した私は、辺りを見回す。そこには、倒れ伏すフォワードメンバー。そして、私達が捕まえた、今回の事件の関係者であろう少女とユニゾンデバイスらしき存在。それから、随分と体にフィットとしたスーツ（これを考えた奴はきっと変態に違い無い）を着た少女。

安否を確かめるために脈と呼吸を確認する。……良かった。どうやら気絶しているだけのようだ。

だが、そこで感じる違和感。――――そう、副隊長と曹長。それと、あの男が居ない。

まさか、いやそんな筈はない、とは言えなかった。頭の中の冷静な私が、実戦ではどんな事が起きても不思議では無いと、希望的観測を論理的な考えと実戦経験で否定する。だが同時に、あの人達がそう簡単にやられるはずもない、と感情的な考えをする私もいる。

せめて何か手がかりになるものを――――そんな時、どこかから聞こえてくる爆発にも似た音。慌てて振り向き、不規則に鳴り響くその音の発信源を探して――――絶句する。

廃都市だったその場所は、瓦礫の山と化していた。いや、寧ろ更地になっていたといったほうがいいのかもしれない。それだけで、あの雷の威力が知れる。

もし、副隊長たちが庇ってくれなかったら、私達が居る場所も同じようになっていたかもしれない。そう考えると、背筋が凍る思いだ。

そんな僅かに身動ぎした私の手に、コツリと何かが触れる。そちらに視線を向けると、そこにはレリックケースよりも少し小さなケースと、その上に親指ほどの小さな機械が乗っていた。

この機械には見覚えがあった。確か……映像記録用の機械だったはずだ。以前兄さんと闇市に行った時、出回っているのを見て、その時に教えってもらった。

この手の機械は、盗撮等の危険性もあるために、取り扱いには厳重な制限がある。恐らく傭兵のものだろう。

私は機械を起動させた。浮かび上がる立体映像（ホログラム）には、合流した時よりもボロボロのバリアジャケット姿の副隊長。

『よぉ。……誰でもいい、これから言う事を良く聞け。あたしとリィンそれから……傭兵とであのデカブツをぶっ潰しにいく。お前等の任務はレリックの確保だ。ヴァイスにはあたしから連絡しておいたから、お前等は捕まえた奴等と一緒に先に隊舎へ戻れ。

あぁ。それと、目の前にあるケース……そう、それだ。それを開けてみろ』

言われるがまま、ケースを開ける。圧縮された空気が抜ける音と共にケースは開いた。中を覗きこむと、妙に機械化された試験管のようなものが全部で十二個。青と緑のものが半分ずつ入っていた。これにも見覚えがある。

『ソイツは即効性の治療薬らしい。青が魔力回復用で、緑が傷を治す。……あぁ、安心しろよ？既にあたしとリィンで試してあるからな。効き始めるのに少し時間がかかるが、かなり役に立つ。ソイツがあれば、少しはマシになるだろうよ』

言われるまでも無い。私は何度もこれに厄介になっているのだから。説明を効きながら蓋を開け、私は躊躇なく青い液体を口に流し込む。何とも言え無い薬品の味が口内に広がる中、体の内側から温かくなるのを感じた。続けて、緑の液体を。……やっぱり何とも言え無い味だ。

『今回の映像と戦闘経験は、今後必ず役に立つ。それは今回の一連の事件のことでもあり、お前等自身の今後の事でもある。

……まぁ、なんだ。湿っぽいのは苦手なんだよ、あたしは。兎に角！お前等はそのガキ共とレリック持って無事に隊舎に戻る事！これは命令だかんな。命令違反したら後でアイゼンの頑固な汚れにしてやるから覚悟しろよ？そんじゃあ連絡終わり！』

そこで映像は終わった。先ほどから続いている爆音が何なのか、今ならば分かる。

戦っているんだ。私達を護るため、そして犠牲者を出させないために、命がけで……。

「スバル。起きなさい、スバル」

「――――う……。ティ、ア……？」

「……一体、なに、が……？」

何にしても、このままじっとしているほうが危険だ。私は皆を起こし、状況を説明した。

「そんな……！」

「でも、任務を考えれば指示に従うべきね」

感情的になるスバルやエリオを宥める様に、ギンガさんは堅い口調で諭す。縋るようにスバルが私を見つめるが、こればかりはどうしようもない。

「ハッキリ言って、今の私達じゃ足手まといにしかならないわ。だからこそ、今は私達に出来る事をしましょう」

悔しそうにキュッと口を結ぶスバルやエリオ。

次第にヘリのプロペラが作る独特の音が近づいてくる。だけど今の私は、それを素直に喜ぶ事は出来なかった。

――ティアナ　Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ――

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～Ｔｉｌｌ　Ｔｈｅ　Ｅｎｄ　Ｏｆ　Ｔｉｍｅ～

Ｐｈａｓｅ－２５　黒い死鳥

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「おりゃあぁぁっ！！」

リィンとユニゾンしたヴィータは、ラケーテンフォームのグラーフアイゼンを気合いと共に黒い巨鳥の頭部目掛けて振りかぶる。どれほど強固なものをも破壊することの出来るその一撃は、しかしその体を護る赤黒い幾何学模様の障壁に遮られた。

己の一撃が通じなかったことに舌打ちを打つも、すぐさまその場を離脱する。

そして、先程までヴィータがいた場所に打ち込まれる、桃色と金色の砲撃。なのはとフェイトだ。膨大な魔力の込められたその一撃は、ヴィータが攻撃していたこともあり、障壁を突き抜ける。

着弾とともに霧散した魔力が煙となって巻き上がる。倒せないまでも、手傷の一つは与えられたと確信した二人だったが、直ぐにその考えを改める。

今は限定的にリミッターが掛っているとはいえ、オーバーSランク魔導師として名を馳せるなのはとフェイト。その二人の一撃を受けて尚、大した傷は見受けられない。

「くそっ！今のも殆ど効果無しかよっ」

「でも情報が確かなら、全然聞いていないわけじゃない、はず……」

「にしたってコレはねえだろ……」

戦闘を開始してから既に三分は経っているが、なのは達は未だに決定打を与えられずにいた。事前に聞いていた事とは言え、やるせなさと歯がゆさで苛立ちが募る。ヴィータとフェイトが思わず愚痴を零すのも無理らしからぬことだ。そしてそれは、なのはも同じだった。だがそれでも、今はこの場であの巨鳥を足止めしなければならない。なのはは首だけ後ろに振り返る。その視線の先には膝をつきながらも回復に努めている隠者と傭兵の姿があった。

なのはは巨鳥に意識を向けたまま、先ほどのやりとりを思い浮かべる。

◇

――――Ｓｉｄｅ　なのは――――

（衝撃が……こない……？）

私は、顔を覆うようにしていた腕を下げる。口ぶりから恐らく、神の執行者（エクスキューショナー）の関係者だったであろう隻腕の男性は、突如周囲のモンスターにその身を食われ、巨大な肉塊へと変貌。そしてそれは、やがて巨大な赤黒い巨鳥へと変化した。

驚く私達に、その巨鳥は容赦なく黒い雷撃を周囲に降らせた。私は、フェイトちゃんやヘリを護るために全力で障壁をはったはず。なのに、何時までたっても来るべき衝撃が来ない。

「なのは、大丈夫！？」

「フェイトちゃん！うん、私は何とか。って言うよりも、全然なんともない……」

「私も。あれだけの大規模攻撃だったのに、どうして……？」

少しすると、フェイトちゃんが近くまで飛んできた。どうやらフェイトちゃんも無事みたいだけど、疑問が尽きない。何故、ここまで負傷が少ないのか？

やがて、周囲を覆う砂埃が晴れだす。漸く視界が確保出来るようになったその時、私は目を見開いた。

「っ、隠者さん……！？」

そこには、両手を前に突き出す格好で立ち尽くす、隠者さんの姿があった。その姿はまるで、私達を庇うようで――――

「無事、か……」

彼は、掠れた声で私達の安否を尋ねる。やはり彼が私達を護ってくれたみたい。だけど、流石の彼も無傷ではいかなかったようで、全身を覆う黒いコートは、肩の辺りまで吹き飛び、顔は未だに見えないけれど、全身のいたるところがボロボロになっていた。でも、どうしてこんなになってまで私達を？

「と、兎に角応急処置を……「それよりも、話さなければならない事が、ある」……え？」

彼を案じたフェイトちゃんが声をかけるが、彼はそれを手で制した。次いで、その手をスッと動かす。その先にあるものは、あの巨鳥。

「今ヤツは先ほどの攻撃で、少し動きが鈍くなっている。今の内にヘリを此処から遠ざけろ」

その口ぶりから、彼はヘリをも護ってみせたらしい。その証拠に、先ほどまで通信が繋がらなかったヴァイス君から通信が届いた。どうやらヴァイス君もシャマル先生も、そしてあの女の子も無事みたい。私は直ぐに、この空域から脱出するように指示した。

「行ったか……。さて、話しておきたい事なんだが。俺は少しの間、動けそうも無い」

先ほどの影響でな、と続ける彼の言葉に当然だと思った。あれほどの攻撃を、たった一人で防いだのだ、無理も無い。

「それと、これから話す事が重要だ。もし”アレ”が俺の考える通りのヤツなら、打撃系の攻撃はあまり効果を出さない。更にいって

しまうと、お前達”魔導師”の攻撃は、殆どヤツに通じないと考えるべきだろう……」

「なっ……！？」

「ど、どういうことですか！？」

その言葉に思わず声を荒げてしまう。”魔導師”の攻撃が殆ど通じないなど、では一体どうすれば”アレ”を止められるというのか。

「……落ち着け。何も無効化されるわけではない。ただ、”俺達”の攻撃より効き難いだけの話だ」

それは、どういうことだろうか。彼は、”俺”ではなく”俺達”と言った。この事から、他の場所に隠者さんの仲間がいるのは確かだろう、それは分かる。でも”私達”と”彼等”の違い。それが何なのか理解できない。

「……口で説明するのは難しい。兎に角、そういうものだと理解してくれ。その上で『隠者、無事か？』――――アンタか」

彼の説明に和って入るような形で通信が繋がった。モニターに映っているのは、迷彩服のようなスーツに、同じ色のバンダナを頭に巻いた渋い男性。それと。

「ヴィータ！リィン！」

「良かった、二人とも無事だったんだね！」

『あぁ。この傭兵に助けて貰ってな。ティアナ達も無事だ』

『先ほどの攻撃で、気を失っていました。危険とは思いましたが、彼女達はあの場に残してきました。念のため、結界は張っておいたですが……』

『それと、アイツ等だけでレリックの関係者らしいヤツらを捕まえてな。良くやるぜ。……一応、魔法と物理的に拘束しているから、手出しは出来ないと思う』

それとソイツらも気絶しているみたいだけどな、と続けたヴィータちゃん。本来なら、犯人を置いたままにするなんて危険極まりないんだけど、あの巨鳥を前にそんな事を言っていられる余裕は無い。少しでも戦力が必要だと判断した結果なんだろう。私はヴィータちゃんにこっちの状況も伝えた。

あとあと危険行為として反省文とか色々書く事になるだろうけど、それも全てはこの場を乗り切ってからだ。

「説明を続けるが、構わないか？」

「あ、はい。お願いします」

「俺と傭兵が、恐らくこの場を切り抜ける鍵になるだろう。その為にも、出来るだけ万全の状態にしておきたい。

……無茶を承知で言うが、三分、いや。五分で良い。その間だけ、ヤツの足止めをしていて欲しい。其の間に、俺達は回復に努める。現状確実にダメージを与えられるのは、恐らく俺達だけだろうからな」

隠者さんの提案に、思わず顔を顰めてしまう。確かに、彼はこれまで何度と無く私達を助けてくれた。かといって、彼等を信用出来

るわけでは無いし、寧ろ立場上私達は彼等を拘束して職務質問しなければならない。そんな曖昧な立場にある彼等二人に協力など簡単に承諾出来るはずもない。フェイトちゃんも同じ事を考えていたのだろう。判断をつけかねていた、その時。

『こちらは時空管理局本局所属、クロノ＝ハラオウン提督だ』

『私は聖王教会騎士カリム＝グラシアです。今回の申し出、受けさせて頂きます。宜しいですね、八神部隊長？』

『お二方が宜しいのであれば、わたしからは何も言う事はありません。寧ろ、こちらから申請するところやったんですから』

開口一番、クロノ君とカリムさん、そしてはやてちゃんはハッキリとそう告げた。

『なのはちゃん、フェイトちゃん、ヴィータ、リィン。今は極めて危険な状況や。正直、猫の手もかりたい位に、な。せやから、この際、彼等と全面協力する事を許可します。……責任はわたしが取るから、思いっきり頼むで！』

「はやてちゃん……。了解しました」

「これより、隠者及び傭兵との共同戦線をはり、事態に対処します！」

『了解。私もそっちに向かってるから、出来るだけ無茶はしないようにな』

『了解！』

◇

私は、巨鳥が突進をしてきたことで、一度思考を止め、その巨体をかわす。あれから四分、はやてちゃんはまだ来る気配はなく、隠者さんと傭兵さんもまだ動けないみたい。頭の隅で状況を整理しながら、駄目もとで巨鳥にバスターを放つ。

確かに速度はあるけれどあれだけの巨体だ、そう簡単には外さない。吸い込まれるようにして直撃するバスター、けれどやはり、目だったダメージは見られない。正確にいえば、ダメージを与えたそばから回復している。

何度も繰り返していることとはいえ、流石にこれだけやっても決定打が決められないのと自信を無くしそうになる。それでも、やるしかない。そう思った時だった。

「っ、気をつけて！何か仕掛けてくる！」

ゾクリと背筋に悪寒が走った。私は声をあげて二人に警戒を呼び掛ける。巨鳥は身震いをし、その巨大な羽を広げる。その羽に纏い付く様に、黒い雷がバチバチと音を立てている。――――まさか、

最初の時と同じ攻撃！？

『っ、マズイ！』

『マジかよ！？』

二人も気付いたようで、急いで距離をとる。最初の時よりも魔力反応は低いこと、そして帯電時間が短いことから、あれほど大規模な攻撃じゃないようだけど、それでも十分に脅威だった。

溜め込まれた雷が解放されるのは先ほどよりも早く、僅かに回避は間に合わない。

「く、うぅっ……！」

展開した障壁越しに、途轍もない衝撃が伝わる。油断なんてしていないからこそ、驚きを隠せ無い。障壁が機能していないわけでは無い。だというのに、十分に防げていないような、そんな矛盾した感覚を覚える。これが、隠者さん達が言っていた言葉の意味なのだろうか？

「はぁ、はぁ、っ……」

ホンの数秒の攻防だったと言うのに、まるで全力で走った後のような疲労を感じる。それは、フェイトちゃんとヴィータちゃんも同じようで……。何とか防げたからいいものの、もし第二波がきたりしたら――――

『なっ……』

『嘘、だろオイ……』

悪い予感は見事に的中し、再びその巨体を震わせている巨鳥。出だしを潰せれば何とかなるかもしれないけど、今の私達にそんな余裕は無い。――――キツイけど、耐えるしか無い……！そう、覚悟した時、ふと視界に入った黒い人影。

「エリアル・レイド！」

上空から一気に急降下した隠者さんの蹴りが、吸い込まれるように巨鳥の首に直撃した。障壁すら容易く突破したその蹴りは凄まじく、その巨体を揺らすほどだ。

「――――ふっ！」

傭兵さんが何かを投げたかと思えば、それは巨鳥の目の前で爆発を起こした。恐らくは、手榴弾かなにかだろうけど、その威力もまた半端では無い。甲高い奇声を上げながら廃ビルに突っ込んで行く巨鳥を見れば、それは一目瞭然だった。

「高町」

「え？――っ、これは？」

一度距離をあけた隠者さんは、ピッと何かを投げてよこす。慌ててそれを受け取ると、何かの薬品らしきものが入った試験管だ。

「飲め。少しは魔力と体力が回復する」

「しかし……」

「あー、なのは。大丈夫だから飲んどいたほうがいいぜ、テスタロッサも」

「ヴィータ？」

「こっちに来る前に一度飲んでるからな。効果は保証するぜ」

味は微妙だけどなと、私達の側にやってきたヴィータちゃんは、その手に持っていた薬品をグイと豪快に飲み干し、何とも言え無い顔をする。

ならうように私とフェイトちゃんもそれを飲む。……本当に何とも言え無い味がする。でも確かに効果はあったんだろう。体の内側が温かくなる感覚がしてくる。だからこそ、尚更この人達の正体が気になる。はっきり言って、管理局からすればこれは喉から手が出るほど欲しいものだ。これがあれば、多少の効果とはいえ、魔導師にとって最高の手助けとなる。そんなものを平然と用意出来るこの人達は、一体なんなのだろうか。

「ところで、今更だけどあれは何なんだ？」

目をやられたのだろうか、未だもがいている巨鳥から目を逸らさず、ヴィータちゃんが問う。

「恐らく元は【アーリーサイナード】だろう。”俺達の世界”でも、もう殆どいない種なんだが……。ああも原型を留めていないと、正直答え難い」

と、答えたのは隠者さん。だけど、私はそんな生物に聞き覚えは無い。フェイトちゃん達も同じみたい。

「基本ヤツは物理攻撃より術によるダメージが通りやすい。が、”魔法は”通じ難いようだな」

「……どういうことですか？」

「言っても分からんだろうし説明する時間がないから省くが、あれは紋章生命体だ。”元が同じ”でも正確には別物だから、俺達の攻撃は通っても、お前達の攻撃は通り難いのだろう」

「つまり、私達の攻撃では倒せないって事なんですか？」

言っている事の殆どが要領を得ないけど、要約するとこんな感じなのだろう。でも、もしそうだとしたら、管理局には手も足もだせないと言うことだ。内心不安に思っていると、隠者さんはいや、と答える。

「方法はある。だがそれには――――」

そこで突然言葉を切る、隠者さん。彼は、ある一点を見つめて動こうとしない。何事かとそちらを向けば、そこには――――

―なのは　Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ―

◇

Ｐｈａｓｅ－２５　黒き死鳥（後書き）

相変わらずのスローペースで申し訳無いです。もうちょいこの回は続いてしまいますが、宜しくお願いします。

感想・指摘等お待ちしております。

１１／２　誤字修正

Ｐｈａｓｅ－２６　一つの終わり（前書き）

更新遅くなってしまって申し訳ありません。

Ｐｈａｓｅ－２６　一つの終わり

「なのは隊長、ヴィータ副隊長！そのまま引き付けて！合図を送ったら直ぐに左右に別れて！」

『スターズ１、了解！』

『スターズ２、こっちも了解だ！』

「了解。カウント開始……三……二……今！」

私が出した合図と同時に、なのはちゃんとヴィータが左右に分かれ廃ビルの陰に身を潜める。二人を追っていた巨鳥――アーリーサイナードは、一瞬どちらを追うべきか戸惑いを見せた。瞬間、金色と白の魔法陣が展開。バインドでその動きを封じ込める。私とフェイトちゃんが予め設置しておいたバインドだ。

暴れだすサイナードの力は凄まじく、徐々に亀裂が入っていく。せやけど、こっちかてそう易々と見逃す訳にはいかへん。

「詠唱破棄……石化の槍（ミストルティン）！！」

更に動きを封じるために、石化魔法を打ち込む。抗魔力が高いのかそれともあの障壁のせいか。石化の進行は遅いが、それでも更に動きは遅くなる。

そしてそこへ叩き込まれる、四つの鉄球と桃色と金色の砲撃。

【『――――ッ！』】

甲高い悲鳴を上げるサイナードの翼は、石化の効果もあり砕け落ちる。が――――

「くそっ！またかよ！」

その先から再生を始める。ヴィータが悪態を吐くのも無理は無い。その光景はまるで、あの雪の日を思わせるようだったから、尚更だろう。と、一瞬気が逸れてしまったその時。

「しまっ――――！」

まるで狙いすましたかのように、再生中の翼の部分から幾条もの赤黒い触手が飛び出してくる。一瞬の判断を誤った私の元へ殺到する触手。避けなければ、と思うが間に合わない。

来るだろう衝撃に備えて障壁を張ろうとするが、目の前を通り過ぎた砲撃によって蒸発した。

『気を抜かないで。……此処で死なれたら、こっちが迷惑だから』

「……聞こえとるよ。――――状況確認」

砲撃手が通信越しに平坦な声で呟く声に思わず突っ込み、即座に全体に通信を繋げる。

開いたモニターの数は全部で『七つ』。内一つは答える気配は無い。

『スターズ1、2。共に健在』

『ライトニング1、こっちも問題ありません』

うん、と頷いて、残る四つからの返答を待つ。

『……ナンバーズ3、問題ない』

『ナンバーズ4、こっちも問題ありませ～ん。それよりも部隊長さん、気を抜かないでくれませ～ん？今死なれちゃうと、私達にも迷惑なんで～』

『ナンバーズ10、問題なし。それとクアットロ、それさっき僕が言ったよ』

『……八神、あまり気にするな。それと、こちらはもう少し時間がかかりそうだ』

「えぇ、分かってます。それと了解しました」

三者三様に飛び交う声に、頬が引き攣るのを感じる。だけどここは冷静にならないといけない。傭兵さんの言葉で幾分か冷静さを取り戻した私は、一度大きく深呼吸。再び作戦の確認をする。

「どうやら、まだあの化け物は堕ちそうにない。私達の攻撃が決定打を与えられない以上、今は隠者さんの魔法に頼るほかありません。ですから私達の役目は、彼に攻撃が届かないよう、注意を惹き付けること。ええね？」

『了解』

なのはちゃん達と傭兵さんからは、即座に応答が帰る。それに頷いた私は、残る三人――――スカリエッティ陣営の戦闘機人達に声をかける。

「……正直、犯罪者達の力なんて借りたくはないんやけど、そうも言ってられへん。せやからここはもう少し協力してもらいますよ？戦闘機人の皆さん」

『それはこちらの台詞だ。……しかしドクターの命令だ。一時的に、そちらの指示に従う』

渋々といった表情で答えるのは、彼女達のリーダー格である【トーレ】と名乗る女性。

そう。私達は今、目の前の化け物を倒すために、異例中の異例である犯罪者との共闘をしているのだ。

◇

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｔｉｌｌ　Ｔｈｅ　Ｅｎｄ　Ｏｆ　Ｔｉｍｅ～

Ｐｈａｓｅ－２６　一つの終わり

◇

「久しいな、隠者（ハーミット）。そこにいる男は貴様の連れか？」

未だビルに突っ込んだまま抜け出せないアーリーサイナードを尻目に、腕を組みながら俺に尋ねるのは、以前戦った事のある女――トーレだった。その後ろにはクアットロと名乗っていた女ともう一人。こちらは初めて見る顔の二人が控えている。突然の来訪者に、高町達が警戒する。が、俺はそれを無視し彼女に尋ねる。

「この場でお前が出てくるメリットが考えられんな。……スカリエッティだったか、奴は何を考えている。それとも、これはお前達の独断か？」

『それは私から話そう』

答えなど返ってこないと思いながらも、形だけ確認する。だが俺の予想とは裏腹に、答えが返ってきた。他ならぬ、スカリエッティ本人から。

「っ！？」

「スカリエッティ……！！」

高町達は驚愕を顕にする。無理も無い。広域指名手配犯であり、彼女達機動六課が調査する事件の中枢にいる人物からの直接のコンタクト。これを驚かずにはいられない。

「レリックは良いのか？あれはお前が探しているのだろう？それに、あっちには召喚師の少女が居たはずだが……まさか見捨てるのか？」

『結論から言ってしまえば、そうなるだろうね』

この言葉に、思考する。コレまでのコイツの行動から、仲間――というよりも駒――を安易に見捨てるような行動をとるような男とは思えなかった。何故なら、彼女達がどこまでスカリエッティ（この男）と通じているか定かでは無いが、それなりの情報を持っているはずだ。何より優秀で貴重な戦力だ。だというのに、そんな彼女達を管理局の手に渡そうと考えているなど……。此処にきて全く正反対の行動に出るとは……。何か裏があると考えるのが普通だろう。

『何、簡単なことだよ隠者。現在目の前の障害足り得る存在。そこな化け物は、管理局が誇るエースの攻撃を幾度受けようとも再生を繰り返す。そんな生命体が存在するんだ！自称”神”が造り出した生命体――――そのデータを確保出来るのなら、多少の”損失”など取るに足らないさ！！』

マッドサイエンティストの異名を持つ男ならではの発言としては申し分ない。だというのに、何故か言葉の端々から違和感を感じる。……どういうことだ？

「スカリエッティ……！お前はそんな事の為に……！！」

奴の言葉にハラオウンが語気を荒げる。まるで親の仇を睨み付けるようなその必死の形相に、思わず顔を顰める。……コイツはコイツで、何かしらの過去を背負っているのだろう。そしてその原因が、スカリエッティなのだろう。故に、奴の行動その全てに、怒りを感じている、と言ったところか……。

『少ない損失で大きな利益を得る。誰もがやってきたことであり、それは管理局も同じだろう？フェイト＝Ｔ＝ハラオウン。そうでない、とは言わせないよ』

「……っ、」

だが、スカリエッティの言い分も理解できないわけでは無い。九の利益を得るために一を切り捨てることなどザラだ。ただその対象が、人か物かの違いに過ぎない。戦場ではそれが顕著だと言うのに。理解して、そして知っていると言うのに……この少女は優しすぎる。そしてそれ故に愚かでもある。

『やれやれ……。君では話にならんよ。八神はやて。そして隠者。君達に提案がある』

「……」

「言ってみろ」

『私はあの化け物のデータが欲しい。そして君達は、あの化け物を倒したい。ならここは、互いの利害の一致から、共闘を申し出たいのだが……どうかね？』

「そうする事に意味があるとは思えへんな。それに、管理局が犯罪者と共闘なんて、出来ると――――いや、すると思っているんか？」

『尤もな意見だね。だが……果たして君達だけで”それ”を止める事が出来るのかい？ならばいっそ、ここは猫の手ならぬ犯罪者の手でも借りてみてはどうかな？

それに言ってしまえば、そこな隠者とて”準”犯罪者と言っても過言では無いだろう？ならば、今更体面を気にする余裕などないのではないかね？』

ニアリと口角を吊り上げて嗤うスカリエッティの言葉に、八神は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「……そうする事のメリットが見つからんよ」

それでも、あくまで事務的な対応をする八神に、スカリエッティはふむ、と顎に手を当てて考え込む動作をする。

『そうかい。ならば……そうだね。ガジェットの製造プラント二ヵ所と違法研究施設三か所の所在データも付けてあげようじゃないか。どうだい、お得だろう？』

――――ここに来てとんでもないカードを切ってきやがる。八神達はおろか、モニター越しのクロノとグラシアと名乗った女までもが目を丸くしている。それほどまでして、コイツは奴等のデータが欲しいのか。今ヤツが提示した情報だけで、どれほど事件解決に進展することか。そんなもの、馬鹿でも分かる。

『（シオン）』

『（……どうした）』

正直、聞くまでもないのだが一応その問いかけに答える。

『（この男は危険だ。下手を打てば最悪、世界の一つは滅びかねん）』

『（……）』

言われるまでも無い。この男が本心から研究目的でデータを欲し

たとしても、この世界の住人にとってはそれ”そのもの”が危険な行為となる。

流石に現場の指揮権を与えられているとはいえ、八神もこの提案には困り果てているようで、視線をクロノとグラシアに向けている。そしてその二人すらも、返事を出せずにいた

『――――悪いが承服しかねる』

ややあって、クロノが苦々しげに言葉を紡ぐ。

『……ほう。この後に及んでも尚、君達は愚かな選択をするというのかい？』

『貴様がその申し出を守るという保証はどこにも無い。そもそも――――』

と、そこで突然言葉を止めるクロノ。見ればアチラ側でなんらかのやり取りをしているようで、クロノは慌ててモニターを閉じた。そんな上官の突然の行動に驚きを隠せない八神達。

数十秒後、再びモニターが開かれると、そこには苦汁を舐めさせられたかのような表情をする二人の姿がある。やがてクロノは、重々しくその口を開いた。

『……機動六課はこれより、隠者一味及びスカリエッティ一味と協力して事体の収拾に当たる事を命じる』

「なっ……！？」

「そんな……！！」

『これは最高評議会の決定だ。……異論は認められない』

先ほどと同じように、しかしそこに先ほどまでなかった絶望を感じさせる表情を浮かべる彼女達は、二の句を告げない。それは、命令を出したクロノ本人も同じだった。

そんな彼女達とは対照的に、スカリエッティは優越の表情を浮かべた。

『なるほど。頭の固い君達と違って、管理局の御偉い様方は現状を理解していらっしゃるようだ。――――と、言うわけだ。トーレ、クアットロ、ディエチ。君達は彼女達にある程度協力して、可能な限りあの化け物の細胞を採取。同時に潰してくれたまえ。

あぁ、だからと言って無理をする必要は無いよ？君達まで失うとなると、流石の私にとっても痛手だからね』

『了解（しました～）』

三者三様といった様子ではあるが、主（生みの親）の言葉に従うナンバーズ。彼女達の返答に満足そうに頷いたスカリエッティは、再び気味の悪い笑みを浮かべる。

『と、言うことだ。隠者とその連れの者、そして機動六課の諸君。くれぐれも、私の娘たちの足を引っ張るようなまねだけはしないでくれたまえ』

その言葉を最後に、ヤツは通信を閉じた。未だ八神達は苦渋を舐めさせられたような表情をしているが、今はそんな事をしている暇は無い。サイナードは再び自身に電撃を纏って、廃ビルをまとめて吹き飛ばそうともがき始めていた。

「時間が無い。手短に話す」

重苦しい空気を破るように、俺は口を開く。バチバチと迸る電撃の音に、流石に言い争っている時間は無いと判断した八神達も、不本意ながらも耳を傾ける事にしたようだ。一度面々を確認した俺は、作戦を語る。

◇

舞台は再び現在へ。

彼――隠者が語った作戦は、正直とても作戦と言えるようなものではなかった。彼が要求した事は三つ。一つは目は『呪文詠唱までの時間を稼いで欲しいと言う事』。二つ目は呪文詠唱中、身動きが取れなくなる隠者のバックアップに傭兵を付け、それ以外は彼等二人に攻撃が届かないように撹乱、及び呪文発動時に動きを封じるためのバインドを各所に設置して欲しいと言う事だ。この際、ナンバーズが主に撹乱を担当、六課メンバーがバインド設置を担当する事となった。

そして、三つ目は――――

（『呪文完成１５秒前に指示を出した後は全力で退避しろ』、か……。恐らく、私と同じで広域空間攻撃を放つつもり何やろうけど……）

はやては、戦闘機人側の指揮者であるクアットロと連携して、全体に支持を飛ばしながらそんな事を考える。彼の言葉の裏から読み取れるのは、恐らく自身が考えた通りの事だろう。しかしだとすると、彼は一体どれほどの魔法を放つつもりだというのか……。問題はそこにあった。

『（こちらスターズ1。C－7ポイントにバインド設置完了）』

『（スターズ2も完了だ）』

『（ライトニング1、同じく完了。部隊長他の設置箇所はまだありますか？）』

思考の海に埋没しそうになる彼女を、部下達の言葉が現実に呼び戻す。マルチタスクを利用していたとはいえ、注意力が疎かになっていた事に反省しつつ、直ぐに確認を取る。見たところ、彼女達が設置すべきポイントは全て完了していた。

「（了解、ちょっと待ってて）こっちは全配置完了や。そっちはどうなっとる？」

『あらあら随分遅いですわねぇ？こっちはさっきから頑張っていますのに』

『クアットロ。今は口を慎め。……妹がすまなかった。今の所大した被害は無い』

クアットロを諫めたトーレが、簡潔に答える。はやては了解と答え、なのは達にも連絡をした。ここまでくれば、彼女達に出来る事は殆どない。彼女達は、自分達の魔法が殆ど効果を齎さないことを、

これまでの時間稼ぎの間に悟っていた。
例えどれほどその身を穿とうと、どれほど大威力魔法で傷つけようと、瞬く間に再生を行うのだ。そう、隠者や傭兵の時の傷の治りは遅いというのに。

彼女達は感情では不甲斐無さを感じつつも、冷静にその事体を受け止め、時間稼ぎに徹した。そしてついに、その時が来た。

『こちら傭兵。準備があと数秒で準備が整う。バインドを発動後、速やかに退避しろ』

淡々と告げた傭兵の言葉に無言の内に頷いたはやて達は、バインドを一斉に発動させる。彼女達の思惑にあっさりとひっかかったサイナードは、何重ものバインドに絡め取られその動きを封じられた。
苦しそうにもがくサイナードを一瞥した彼女達は、一目散に安全エリア目指して退避を始めた。

◇

「全員退避を始めたようだ。バインド崩壊まであと十秒といったところか……。いけるか？」

傭兵の言葉に、無言のまま頷く。精神力を極限まで高め詠唱するのは、古代級呪文。それに更に手を加えたもの。只でさえ威力のあるそれを、確実にあの化け物を消滅させるため、自身の中の紋章を使うことを決意した俺は、愛機であるファーウェルを第二形態の【双銃】から第三形態である【弓】へと変形させる。

手に集まる紋章力の結晶である光の球体を、創造の紋章（イマジネーション）の力で矢へと形状変化させる。ただでさえ苦痛を伴う特殊紋章の発動に加え、古代級呪文の詠唱を並行。体が軋みをあげるが、構わず詠唱を続け紋章力を集める。

「退避完了を確認。隠者！」

――――矢を番える

傭兵の言葉と同時に詠唱が終わる。矢の先端に、真紅の五重の幾何学模様の陣が浮かぶ。

――――弓を引き絞る

ファーウェルのサポートを受け、目標の姿をはっきりと捕らえた瞬間。

「【エクスプロージョン】改式――――【火之迦具土（ヒノカグツチ）】

――――一切の躊躇なく、矢を放った

それと同時に、視界が暗転。俺は意識を手放した。

◇

「――――んだよ、あれは……」

誰もが言葉を失う中、シンと静まり返ったヘリの中にヴァイス陸曹の言葉が響く。呟き程度でしかないほどの小さな声だったというのに、その声はやけに大きく聞こえた。

それは文字通り、一瞬の出来事だった。

目では到底追えぬ速度で放たれた破壊の矢は、サイナードに着弾と同時に巨大な爆発を起こした。まるで太陽を思わせる巨大な炎の球体は、やがて渦を巻くように収束していき――――音も無く消滅した。

既にかなりの距離をとっていたというのに、それでも目視出来るほどの大規模な爆発。その爆心地には、何一つ残されていなかった。

あれほどの相手を只の一撃で消滅させたことに、シャマル先生ですら驚きを隠せずにいた。スバル達に至っては、何が起きたのかさえ理解できていないようだった。だけど私には、あれが何だったのか理解出来た。

元々火属性でも上位に入る紋章術、エクスプロージョン。それを隠者――兄さんの持つ紋章の力で変化させたものが火之迦具土（ヒノカグツチ）だ。ただでさえ高威力の爆発に指向性と範囲を限定させることで、より高密度の破壊力を生み出す、オリジナルの技。だけどその威力故に、精神力の消耗が大きい事も知っている。

「……」

キュッと唇を強く結ぶ。結局何も出来ず、兄に頼ってしまった事

に苛立ちを。そして悲しさを感じた。何も出来ない。足手まといでしか無い。

今の私はまだ――――無力な少女（ガキ）だ。

◇

「トーレからの通信を確認。全員無事のようです」

薄暗い室内をモニターの明りだけが妖しく照らす中、スカリエッティの助手とも言える立場にある戦闘機人――ウーノは、簡潔に状況を報告した。だが常に冷静な流石の彼女も、今回は肝が冷える思いだったようで、言葉には心底安心したという感情が読み取れた。

「――――ご苦労、ウーノ」

椅子に深く座り込んだスカリエッティは、先ほどとは違い余裕の欠片すら見えなかった。そして同時に、その顔は酷く憔悴しているようだった。それは長年彼と行動を共にしてきたウーノですら見た事の無いほどの、まるで別人のような姿だった。

「しかし、本当に良かったのですか？セインはおろか、ルーテシアお嬢様にアギト様までをも管理局の手に渡してしまって……」

「……恐らく問題はないさ。起動六課なら、彼女達を無碍に扱う事も無いだろう」

その返答に、ウーノは思わず言葉を失う。彼女はこの時、今後の作戦に支障が出ないのかを危惧しての質問をしたのだ。だというのに、彼が答えたのは普段の彼ではありえない、誰かを案ずるような言葉。何よりも自身の目的のために動く男とは思えない発言。

そんな彼を見たウーノは、如何するべきか判断を付けられず、暫くの間無言の時が続いた。

「トーレ達が帰ってきたら、直ぐに検査をしてやってくれ」

「承知しました。あの、ドクターはどちらへ……？」

それから幾らか経った後、徐に立ち上がったスカリエッティは、フラフラと覚束無い足取りで部屋を出て行こうとする。そんな彼の普通ではない様子に、言いようの無い不安を覚えた彼女は恐る恐る尋ねた。そこでピタリと足を停めた彼は、掠れるような声で返事を返す。

「少し考えたい事があってね。それと……やらなくてはいけないことがある。しばらく一人にしてくれ」

夢遊病者のようにフラフラとした足取りで出て行くスカリエッティの後ろ姿を、ウーノはただただ見送るしかなかった。

◇

こうして、謎の少女を見つけた事から始まった事件は、終息を向

かえた。多くの疑問や蟠りといった、大きな傷跡を各陣営に残しながら――――

Ｐｈａｓｅ－２６　一つの終わり（後書き）

感想・指摘等お待ちしております。

１１／９　誤字修正しました。

Ｅｘｔｒａ　Ｐｈａｓｅ　観測者にして傍観者達（前書き）

更新が遅くなってしまい、申し訳ありません。

Ｅｘｔｒａ　Ｐｈａｓｅ　観測者にして傍観者達

そこは、陰鬱とした部屋だった。
まるで其処に居る事を悟られぬようにしているかのように、その部屋は暗く、近寄りがたい空気を醸し出していた。それを更に強調するように、部屋の中を無数のディスプレイが妖しく照らす。

そしてその部屋の住人である三人の男。その内の二人は、ディスプレイに映し出されるリアルタイムの映像を見て、その口を醜く不気味に歪めて嗤う。が、数分後、彼等は酷く退屈したように愚痴を零し始める。

「あ～あ、やられちゃったよ」

その内の一人、スキンヘッド頭の男が椅子の背もたれに体重を預けながら大きく伸びをする。長時間座りっぱなしだったためか、その体は凝り固まっていた。そんな彼とは別に、残るボサボサの金髪を長く伸ばしたひょろ長い男と、茶髪に眼鏡をかけた小太りの男は、画面に映るある一部の映像に釘付けになっている。

「つうか何だよアレ。やっぱり”あの人”が言ってたようにバグか？」

「でもよ……。これ、もうバグってレベルじゃ済まされないぜ？」

空間投射パネルを操作し、問題の場面をリピートする。そこには、赤黒い巨大な鳥のような生物が、一筋の光に貫かれた直後、巨大な爆発が起こる場面が繰り返し映されていた。

スキンヘッドの男も、二人と同じように画面を見つめる。同時にパネルを操作し、幾つものウィンドウを展開してくと、やがて彼は大きな溜め息を吐いた。

「だな。第一、この攻撃の威力が問題だ。明らかに個人が持てるレベルを逸脱し過ぎている」

「だけど、それよりも問題があんだろう？」

ボサボサの金髪男は、愚痴りながらパネルを操作すると、一つのウィンドウを展開する。そこには、先ほどの映像にあった巨大な鳥の詳細なデータが記されている。

「時間が無かったから急造したとは言え、俺等特別製の【神の執行者（エクスキューショナー）】がやられちまったんだ。幾ら屑データを集積して、モデルが一昔前の【アーリーサイナード】だったとはいえ、一撃でやられるなんてどう考えてもおかしいっての。

”アレ”の自己修復機能なら、”魔法”じゃそう簡単にはやられるはずねぇって」

「じゃあ――――何でよ？」

「そんなもん俺に聞くなよ。つーか俺が聞きてぇし」

「てか、それ調べて対策とるのが俺達だろう」

それまで沈黙を保っていた眼鏡の男が冷静に告げた言葉に、互いに顔を見合わせたスキンヘッドと金髪は「違いねぇ」と言いゲラゲラと嗤う。一頻り嗤った彼等は、無駄口を叩きながらもパネルを操作していく。やがて金髪が、ニヤリと気味の悪い笑みを浮かべる。

「まぁでも?今回のサイナードのお陰でそれなりの稼動データも取れたわけだし……。そろそろ本格的に”アレ”の製作、いっちゃいますか?」

「お!いいねぇ!」

金髪の言葉に賛同するスキンヘッド。だがそんな二人を、メガネは冷静に二人を諫める。

「……一応、”あの人”に連絡入れてからにしろよ。あくまで俺達は、”あの人”の指示でこの特務についてんだ。それなりに好き勝手家やらせてもらえるとはいっても、上司の指示を待たねぇと」

「わぁってるって。でも、結局許可貰えるだろ?第一、このプロジェクトだって”あの人”の独断だし」

「そうそう!それに、万が一問題が起こっても、俺等には責任は取らせないって言ってるわけだし」

(それが問題だろうが……)

そういって再びゲラゲラと嗤い始める二人を、メガネの男は冷めた目で見ていた。

このメガネの男は、他の二人とは違い純粋にこの事態の対処に乗り込んでいた。それは、ほんの少し前に起きた”ある事件”が切欠であった。彼等が”調整(にんぎょう)”する世界、いや。正確には調整”していた”世界で起こった、人間達の反逆。

彼は調整者の一人として、その事態に純粋な疑問を持った。
何故彼等は、創造主たる我々に逆らうような道を選んだのだろう？
何故彼等は、我々の持つ圧倒的な力を目の前にして、あれほどまでに”生きて”いたのだろう？

しかし、幾ら考えても、彼に答えは出る事はなかった。

完璧な環境の元に管理され、平和な世界を謳歌する。その本来の目的は、我々を楽しませるためではあるものの、それでも彼等人間とて、十分に幸せな人生を歩めたはずだ。
それに、例え”削除”されたとしても、それでどうこうなるわけではない。

一度データを初期化されるとしても、彼等はその時の記憶の一切を失い、今度こそ安全な世界を満喫する事が出来る。我々にとって、偽りの感情しか持たないはずの彼等は、そんな事を気にする事などないはずだ。だというのに

（彼等は反逆の道を選んだ。他ならぬ”自分達が自分達であるために”……）

そして彼は見たのだ。何より、画面の向こう側にいる彼等は、創造主よりも人間らしく生きていたという事実を――――

彼は”事件”終結後、その事について悩み続けた。そして、一人の上司の言葉を思い出す。『住む世界こそ違えど、彼等も又我々と変わらない、同じ人間なのだ』という言葉。

ほんの少し前までは鼻で笑っていたその言葉はしかし、今彼の胸の中に小さなしこりとなって残っている。そしてそのしこりが、彼

を不快にさせていた。

だからこそ、彼は選択した。最悪、自分は犯罪者として逮捕されるだろう危ない橋を渡る事になったとしても、その答えを見つけなければならなかった。

（そう。その為に俺は此処にいるんだ）

その答えを得るために、自分は再び彼等（にんぎょうたち）の世界を壊す。今の自分にはそうすることでしか答えを得られないと思うから。

――――しかし、ならば何故。化け物や巨鳥を相手に命がけで戦う少女達を見て、こうも胸が痛むのだろうか？

その感情が。そのしこりの正体がなんであるのか……。彼は未だ気が付けないでいた。

Ｅｘｔｒａ　Ｐｈａｓｅ　観測者にして傍観者達（後書き）

感想・指摘等お待ちしております。

実は今回の話、ちゃっかり伏線をはっていたりしちゃったりしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3784j/

魔法少女リリカルなのはStrikerS〜Till The End Of Time〜

2011年11月25日09時59分発行